

文學博士井上哲次郎著

日本陽明學派哲學

東京

合資
會社
富山房
發行

M5
B3125
1



3 2285 9760 9

日本陽明學派之哲學序

東洋哲學史は余が明治十三年の頃より編著を企圖せし所にして支那哲學に關するもの印度哲學に關するもの、哀然冊を成し、已に書笥に滿つと雖も、未だ整備せざるもの多く、之れを世に公にせんこと、尙ほ十年内外を要せざるを得ず、然れども久しき歲月に涉りて何等の研究の結果をも出ださざれば、人或は余が業の荒廢を疑はん、是れを遺憾となすのみ、

明治三十年余官命を蒙り、佛國巴里府開會の萬國東洋學會に赴き、日本に於ける哲學思想の發達を講述し、歸朝以來益、日本哲學に關する史的研究の必要を感じ、聊か徳教の淵源を闡明し、學派の關係を尋繹せんことを

務めたり、其稿亦積んで、篋底に充つるに至る。就中陽明學に關するものは、別に自ら一部を成す、因りて之れを「日本陽明學派之哲學」と名づけ、姑く稿本のまゝ、之れを世に公にし、現今に於ける社會的病根を醫するの資となさんと欲す、

凡そ國民的道德心は發達進歩するものにて、又發達進歩せしむべきものなるは言ふまでもなし、然れども亦決して一代の產物にあらず、其由りて來たる所極めて遠く、實に千世萬世の遺傳なり、匹夫にして之れを覆さんこと、思ひも寄らざるなり、若し我邦に於ける國民的道德心のいかんを知らんと欲せば、其國民の心性を鏝鑄陶冶し來たれる徳教の精神を領悟するを要す、即ち

此書叙述する所の日本陽明學派の哲學の如き、豈に此に資する所なしとせんや、

維新以來世の學者、或は功利主義を唱道し、或は利己主義を主張し、其結果の及ぶ所、或は遂に我國民的道德心を破壊せんとす、是れ固より其學の徹底せざるに出づと雖も、亦國家の元氣を挫折し、風教の精髓を蠹毒するものならずんば、あらず、功利主義の如き、國家經濟の主義としては固より可なり、但、之れを個人に關する唯一の道德主義とするは不可なり、何んとなれば、其場合に道德は他律的となりて、毫も心徳を養成するに効なればなり、蓋し功利主義は人を私慾に導くの教にして、我邦の從來神聖とする心徳を汚穢するものなり、功

利主義は巧に考へ出だされたる理論なれども、徳教として
は取るに足らず、又彼の利己主義に至りては、眞に
有害無益の詭辯に過ぎざるなり、

近來道德頹敗の呼ぶ聲次第に高く、國民の前途、洵に憂
慮すべきものあり、是れ余が此書を訂正するの目を竣
たず、姑く稿本のまゝ、之れを發行する所以なり、我國民
的道德心は、即ち心徳の普遍なるものにして、心徳は實
に東洋道德の精粹と謂ふべきなり、此書東洋哲學史中
にありては、纔に大鼎の一臠に過ぎずと雖も、庶幾くば
心徳の何たるかを世界萬國に發揚するの一具たらん
ことを、

明治三十三年九月廿四日

井上哲次郎識

日本陽明學派之哲學三版序

道德は外界に顯現すと雖も、若し其始めを言へば、人の胸中に萌すものなり、一たび人の胸中に萌すあらんか、内外一致の實、斯に擧がり、仰いて天に恥ぢず、俯して地に愧ぢず、獨往獨來、宇宙の大も、己れを中心として旋轉するの感なくんばあらざるなり、然れども世俗の常として道德を胸中に養ふことを知らず、己れが靈臺を荒廢に付し、魑魅魍魎をして此に宿らしめ、唯、外貌をのみ修飾して、儼然一個の紳士に擬し、以て巧に人を瞞着して、世途の風波を涉らんとす、是を以て内外相違の弊を生ずるに至れるなり、今や文明と云ひ、開化と云ふと雖も、収賄、詐偽、竊盜及び其他の罪惡益、多く、識者或は其醜

を見聞するに耐へず、乃ち之れを隠蔽せよと勸告する
あり、然れども罪惡を隠蔽して相共に世に處せんか、社
會は實に一大假面舞踏會のみ、豈に之れを文明と云ひ、
開化と云ふを得んや、且つ夫れ罪惡は如何なる瞬間に
も發覺するの恐れあり、是を以て罪惡を隠蔽せば、猶ほ
薄氷を履み、深淵に臨むが如く、其身の危難は、刹那刹那
に逼り來たらん、此の如き危難を侵さんよりは、寧ろ危
難の原因其物を除き去るに若くはなし、即ち道徳を胸
中に養ひ、内外一致を期するに若くはなし、苟も内外一
致の實を擧ぐるを得んか、如何なる自由發展もなし能
はずといふことなし、人生最大の幸福、唯、此の如くにし
て實現するを得べきのみ、蓋し陽明學は理論に疎にし

て、認識に缺くる所ありと雖も、亦内外一致を期し、修徳の工夫として實行に適切なるものあること疑なし、若し世の學者此書に由りて之れを學はゞ、豈に欄柄手に入るの希望なしとせんや、昨年十月此書を發行してより已に二版を重ね、今又將に三版を發行せんとす、因りて多少の訂正を加へ、併せて讀者に陽明學の修徳上如何なる價值あるものなるかを諗ぐといふ、

明治三十四年二月廿四日

井上哲次郎識

日本陽明學派之哲學

目次

叙論	一
第一篇 中江藤樹及び藤樹學派	七
第一章 中江藤樹	七
第一 事蹟	七
第二 善行及び徳化	二三
第三 著書	三〇
第四 文藻	三八
第五 學説	四三
第一 叙論	四三
第二 宇宙論	四三
第三 神靈論	五〇

第四	人類論	五五
第五	心理論	六〇
第六	倫理論	八八
	(一) 理論的方面	八八
	(二) 實際的方面	一〇五
第七	政治論	一二四
第八	學問論	一二七
第九	教育論	一三四
第十	異端論	一三八
第六	批判	一五〇
第七	藤樹門人	一六六
第八	藤樹關係書類	一七〇
第九	藤樹學派	一七九
第二章	熊澤蕃山	一八八

第一	事蹟	一八八
第二	文藻	二〇四
第三	著書	二〇八
第四	學說	二一五
第一	藤樹と蕃山の關係	二一五
第二	陽明と蕃山の關係	二三二
第三	宗教論	二三〇
第五	批判	二四三
第六	蕃山關係書類	二四八
第二篇	藤樹蕃山以後の陽明學派	二五五
第一章	北島雪山	二五五
	附細井廣澤	二五五
第二章	三重松菴	二五九
第三章	三宅石菴	二六二

第四章	三輪執齋	二六八
	附繁伯	二六八
第一	事蹟	二六八
第二	著書	二八七
第三	學說	二九〇
第四	執齋關係書類	三一三
第五章	川田雄琴	三一五
	附氏家伯壽	三一五
第六章	中根東里	三二三
第一	事蹟	三二三
第二	學說	三三三
第七章	林子平	三五二
第八章	佐藤一齋	三五四
第一	事蹟	三五四

第二	著書	三六七
第三	學說	三七一
第九章	梁川星巖	四〇四
第三篇	大鹽中齋及び中齋學派	四一一
第一章	大鹽中齋	四一一
第一	事蹟	四一一
第二	著書	四五四
第三	學風	四五九
第四	學說	四七五
第一	總論	四七五
第二	歸太虛の說	四八〇
第三	致良知の說	四八六
第四	理氣合一の說	四九二
第五	氣質變化の說	四九四

目次

五

第六	死生の説	四九七
第七	虚偽を去るの説	五〇一
第八	學問の目的の説	五〇三
第五	批判	五一〇
第六	中齋門人	五一九
第七	中齋關係書類	五二一
第二章	宇津木靜區	五二四
第三章	林良齋	五三一
第四篇	中齋以後の陽明學派	五三五
第一章	吉村秋陽	五三六
	附吉村斐山	五三六
第二章	山田方谷	五四四
	附河井繼之助	五四四
第三章	横井小楠	五五二

第四章	奧宮髓齋	五五九
	附岡本寧齋市川彬齋	五五九
第五章	佐久間象山	五六四
第六章	春日潛菴	五七〇
第七章	池田草菴	五八七
第八章	柳澤芝陵	五九五
第九章	西郷南洲	五九八
第十章	吉田松陰	六〇六
	附高杉東行	六〇六
第十一章	東澤瀉	六一四
第十二章	眞木保臣、鍋島閑叟等	六一七
結論		六二三
附錄一	陽明學派系統	六三三
附錄二	陽明學派生卒年表	六三七

人。生。而。不。學。與。不。生。同。學。而。不。知。道。與。不。
學。同。知。而。不。能。行。與。不。知。同。故。爲。人。者。必。
不。可。不。學。爲。學。者。必。不。可。不。知。道。知。道。者。
必。不。可。不。行。知。道。至。難。自。古。英。才。敦。行。之。
士。不。爲。不。多。然。知。道。者。鮮。矣。學。問。思。辯。之。
功。所。以。不。可。闕。也。

貝原益軒

日本陽明學派之哲學

文學博士 井上哲次郎著

叙論

十七世紀の初め、徳川氏の海内を平定するや、我邦の文運頓に旺盛となり、藤原愷窩主として朱子學を唱道し、林羅山之れを承けて起り、亦朱子學を鼓吹す。是を以て天下靡然として其風に従ひ、朱子學は建瓴の勢を以て次第に其根柢を鞏うせんとせり。此時に當りて若し之れと抗衡して並馳するものなかりせば、我邦の儒教哲學は滔々として唯此一方にのみ傾注し、忽ち結晶して偏固となり、頑強となり、迷妄となり、全く活氣を失へる。死學となり、了はりしならん。然るに恰も好し朱子學の勃興に伴ひて、之れに反せる古學の大に氣籛を揚ぐるあるのみならず、又紫

陽〇と〇其〇軌〇を〇異〇に〇せ〇る〇陽〇明〇學〇も〇亦〇意〇外〇の〇地〇方〇よ〇り〇閃〇と〇し〇て〇其〇曙〇光〇を〇洩〇し〇單〇調〇一〇趣〇の〇弊〇を〇打〇破〇す〇る〇を〇得〇た〇り〇、

然れども陽明學は忽ち災厄に遇へり、朱子學を崇奉せる林羅山徳川氏に聘せられてより、朱子學は三百年間官府の教育主義となれり、是故に陽明學は初めより林家の猜疑を受け、寛政以後は益々抑壓せられたり、是を以て官府にあるもの公然姚江の説を唱ふると能はず、甚しきは陽明學を以て謀叛の學なりとして之れを蛇蝎視するに至れり、然れども陽明學の謀叛の學にあらざるは辯ずるまでもなきことなり、但し朱子學が官府の教育主義なるが故に陽明學は主として民間の學者によりて主張せられ、自ら官民の別を成し、陽明學は殆んど平民主義の如くになり、朱王二氏の學本ど其主義を異にせるに、又併せて官民の別を成す豈に軌轢なくして止むべけんや、事實は果して之れを證せり、陽明學は官府の權勢によりて排斥せられ、鬱屈して伸ぶること能はざりき、今や吾人は相互に自由の思想界に突進せり、此時に當りて陽明學の史的發達

を研究し、其二百五十年の鬱屈を解くこと、豈に亦學術界に於ける一大快事ならざとせんや、

然れども先づ陽明學とは抑、如何なるものなりやを一瞥せん、陽明學は明代の偉人王陽明（一四七二—一五二八）の主張せし所に係り、朱子學と相容れ難きものあり、今左に其差異點の顯著なるものを擧げん、

第一、朱子は博く學問をなし、此れによりて徳行の法を得んことを期し、陽明は其祖述せる陸子と同じく徳行を先きんじ、學問を後にせり、否、徳行、其れ自身が即ち唯一の學問なり、朱子の爲學の工夫は歸納法に比すべく、陽明のは演繹法に比すべし、

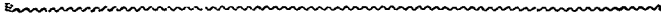
第二、朱子は理と氣とを以て世界の根本主義とし、此れに由りて世界の解釋を試みたり、故に彼れの世界觀は二元的にして、理氣併存論と稱すべし、之れに反して陽明は分ちて二となすべからずとし、其同軌不離を主張せり、故に彼れの世界觀は、一元的にして、之れを理氣合一論と稱すべし、

第三、朱子は心と理とを辨別して、心は氣に屬するものとし、陽明は此心即ち是れ理と説いて、唯、此心さへ明かにすれば、理は自ら分るものとせり、是故に陽明にありては、博く外界の事を研究して理を明かにするを用ひず、要する所は、唯、此心を明かにするにあるのみ、

第四、朱子學は、此理を明かにするには、幾多の經驗を経ざるべからずとするが故に、其傾向する所は、經驗論なり、之れに反して、陽明は眞正の知識は唯、此心に存すとするが故に、其傾向する所は、唯心論なり、第五、朱子は先づ知りて後、行ふべしとすれども、陽明は知行の先後を言はずして、知行一致を主張せり、故に朱子は學理を重んじ、陽明は實行を尙ぶの異同あり、

此れに由りて之れを觀れば、朱子學と陽明學とは、一長一短、何づれを其れども定め難し、然れども、朱子學は、能く博學多識の士を出だせども、動もすれば、輒ち人をして、固陋迂腐ならしむるの弊あり之に反して、陽明學は、往々淺薄の譽を死れざれども、學者をして、短刀直入、其正鵠を得せ

しむるの一點に至りては、確に朱子學に優れり。試に徳川時代の儒教史を考察せよ。朱子學派の中時に偉人なきにあらざるも、固陋迂腐の人亦少しとせず之れに反して、陽明學派は其人比較的、僅少なりと雖も、人物は割合に多く、眞に固陋迂腐といふべきもの殆んど之れあらざるが如し。即ち中江藤樹の如き、三輪執齋の如き、中根東里の如き、春日潜庵の如き、皆行爲の觀るべきものあり、又熊澤蕃山の如き、大鹽中齋の如き、佐久間象山、吉田松陰若くは西郷南洲の如き、皆事功の觀るべきものあり、苟も姚江の學派に接したるものを見れば、其人物の多き實に顯著なる事實なりといふべきなり。果して然らば、陽明學の人物陶冶に功あること決して疑なきなり。是れ其良的發達を敘述し、其脈絡の存する所を指示し、其精神の真相いかにを尋繹するの必要ある所以なり。今や道義地を拂ひ、滔々たる世人、殆んど岐路に迷ふの看なしとせず、此時に當りて若し試に先輩の行爲心術等に鑑みるあらば、豈に時に志を立つるの權柄を得るものなしとせんや、



觀
論



第一篇 中江藤樹及び藤樹學派

第一章 中江藤樹

第一 專 蹟

藤樹姓は中江氏、名は原字は惟命（五五）、通稱は與右衛門、藤樹は其號なり、又西江、馱軒、隨軒と號す、慶長十三年即ち千六百八年を以て近江國高島郡小川村に生まる、小川村は江州大溝分部侯の領地なり、祖父吉長（上五）、米子侯（上六）、即ち加藤侯に仕ふ、父吉次、小川村に農たり、藤樹農家に生まると雖も、幼にして穎敏、嶄然頭角を露はす、九歳の時祖父小川村に來りて藤樹を養ひて以て嗣とせんと欲す、父母其一男なるを以て之れを辭す、然れども祖父荐りに之れを請ひて已まざ、藤樹遂に祖父に従ひて伯耆に至り、始めて文字を學ぶ、祖父本と文字に拙きを以て毎に之れを悔ゆ、故に藤樹をして務めて之れを學ばしめ、己れに代はりて書東を作らしむ、人皆其幼にして文字を能くするとを驚嘆せり、幾くもなく米子侯豫州大洲に轉任し、祖父風早郡の宰となる、藤樹従ひて先づ大洲に往き、次いで風早郡

に至り、始めて師に就いて學を修め、大學を讀み、自天子以至於庶人、豈是皆以修身爲本に至り、嘆じて曰く、幸哉。此經之存、聖人豈不可學而至焉乎。と因りて涙下たり、其衣を沾すに至る、又一日食するるとき、熟思へらく、此是誰所賜也。一則父母、二則祖父、三則君三者之恩、不可以須臾忘と、十三歳の時、祖父に従ひて大洲に還る、然るに一星霜を経て祖母を失ひ、二星霜を経て祖父を失へり、藤樹の不幸想ふべし、藤樹は祖父を失へるも、尙ほ大洲に滞在せり、然るに寛永元年夏に至り、一個の禪師、醫師の招きによりて大洲に來たり、論語を講ず、此時に當り大洲の風俗武を尙び文を賤む、往いて之れを聽く者なし、藤樹獨り就いて學べり、居る幾くもなく禪師京に歸る、藤樹是に於て師とすべき者なし、乃ち四書大全を購求して之れを讀む、然れども深く物議を恐れ、書は諸士と武を講む、夜は竊に音を讀み、多少造詣する所あり、然るに翌年正月に至り、父吉次を失ふ、是れ藤樹十八歳の時なり、藤樹父の訃を得て、慟哭すると甚しく、歸りて之れを葬らんと欲す、然れども故ありて果さず、尙ほ大洲に留まり、益々學業を

勵み専ら朱子學を奉じ、嚴に禮法を以て自ら持し、頗る形式に拘泥し、氣象動もすれば、輒ち峻厲にして、圭角を露はすの痕迹あり、彼れ曾て見玉某を訪ふ會、荒木某座にあり、孔子來たると云ひて、差、嘲笑の語氣を帶ぶ、彼れ即ち怫然として曰く、孔子卒二千有餘載於此、今汝目我以孔子者、豈以我學文而嘲之乎、學文士之常耳、士而無文、與奴僕何異と、某愧ぢて去る、彼れ又曾て某氏と兵を談ず、某氏世に防箭法あるを言ふ、彼れ乃ち曰く、余亦有防箭法、只在其直進無避而已、夫中吾身、是命分之箭、千萬中唯有一枝耳、若有避之心、則非命之箭、亦中者也、云云と、其言此の如く、鋒鏗發露、人の心胸を刺衝するものあり、然れども、又反りて彼れが學に志すと、愈々篤く、自ら信するとも、亦從ひて深く、其操行を重んずる精神、秋霜烈日の如くなるものあるを知るべきなり、

藤樹二十七歳に至るまで、大洲に留まれり、其間母を江西に歸省すると前後二回、彼れ孝養を盡さんと欲するの念、強大なるを以て、其後、回大洲に還るに當り、母を伴ひ行かんと欲す、然れども、母老いて、故郷を離れ、遠

方に起くことを欲せざるを以て獨り豫州に遷る、歸路船中に哮喘を患ひ、極めて甚し、哮喘は蓋し俗に所謂喘息 Asthma bronchiale にて、全く一種の神經症なり、藤樹が如何にして此の如き困難なる病に嬰りしや、其原因は固より究明し難し、然れども彼れが口常の舉動盡く禮法を以て之れを律し、甚しき克己主義に偏し、幾んど餘裕あらざる状態に陥りたるを以て之れを觀れば、二豎の災此に胚胎せるにあらざるか、此時に當りて母益、老いて獨り江西に住し、左右に侍する子孫なく、深く同情を惹くものありしや疑なし、然るに藤樹の心を以て之れを思念す、如何んぞ久しく耐ふべけんや、時に大洲侯其弟を分封して新谷侯とし、藤樹をして之れに仕へしむ、藤樹是に於てか歸りて母に孝事すると能はず、癸酉の元旦偶、臯魚が傳を讀み、樹欲靜而風不止、子欲養而親不待に至りて母を思ひて已まず、乃ち詩を賦して云く、

羈旅逢春遠耐哀、緙蠻黃鳥止斯梅、樹欲靜兮風不止、來者可追歸去來、屢致仕を請ふも許されざるを以て遂に官を棄て、小川村に歸る、是れ

實に寛永十一年にして藤樹二十七歳の時なりき、乙亥歲旦の詩は蓋し其郷里に於ける真情を述ぶるものなり、云く、

紅、黨、元、旦、會、九、族、和、氣、油、然、相、親、睦、昔、日、雖、知、非、真、知、舟、可、行、水、車、則、陸、

これよりして藤樹母に事へて孝養を盡くし、又た自ら奮勵して益、力を學業に致せり、藤樹二十歳の時より以來熱心に四書を愛讀講究し、殊に大學論語の二書を金科玉條として信奉し、聖人の格式態度盡く之れを實踐躬行せんとし、恰も桎梏せられたるが如く、極めて窮窟なる動作を爲すの已むを得ざるに至れり、然れども間、時宜に合はずして凝滯多きを以て漸く疑ふて以爲らく、聖人の道果して此の如くならば、今の世にありて吾輩の及ぶ所にあらずと、是に於て五經を取りて熟讀するに頗る觸發感得する所あり、乃ち持敬圖說并に原人説を作爲せり、是れ彼れが三十一歳の時なりき、蓋し彼れ専ら先聖の精神を取ること、を努めずして痛く外面の形式に拘泥せるが爲めに、自ら己れの行爲を疑訝するに至れるなり、然るに持敬圖說并に原人説も亦實行に適せず、甚だ人情に

戻り物理に逆ふ所あるが故に、彼れ自ら之れを數年間舁驗せんとしたれども、又遂に其琴柱に膠するの弊あるを覺れり、已にして又性理會通を讀み深く感ずる所あり、乃ち太乙神(即ち皇上帝)を祭る、幾もなく又深く孝經を尊信し、斷々乎として以て孔子の遺書となし、毎朝之れを拜誦するを例とせり、孝經は藤樹の家學に於ける福音書と稱するも不可なきなり、其著翁問答は蓋し此時の思想を叙述するものなり、寛永十七年の冬即ち藤樹三十三歳の時に當り、王龍溪語錄を得て之れを讀み、始めて姚江の流派に接するを得たり、龍溪は陽明門下の人にして、其見解頗る禪に近似し、語錄の如きも往々佛語を交ゆるもの、是故に藤樹之れが爲めに觸發感悟する所多きを喜ぶと雖も、其佛語を間雜し、差禪に類するを怪訝せり、後三十七歳の時に至りて始めて陽明全書を購求して之れを讀むに及んで乃ち釋然として曰く、聖人一貫之學以太虛爲舁、異端外道皆在吾範圍中、吾安忌言語之相同哉と、此に至りて幾んど一

〔以下に引用せる池田子に與ふる書に陽明全集とあれども、其實陽明全書なり、此書久しく江西書院にあり〕

切の教養を貫穿して之れを融合するの勢あるを見るなり、何づれにせよ、藤樹は三十三歳に至るまでは全く朱子の學を尊崇し、堅く其格法を守ることを務めたり、其間或は其實行し難きを疑へりと雖も、尙ほ紫陽の圈套中に

たるを、大監中齋強ひて村民に請ひ受け、携へ歸りて之れを精讀し、朱を以て盤外に評語を記入せり、京都の宇田栗岡今に其書を珍蔵せり、

困苦するの狀ありき、然るに姚江の流派に接するに及んで、漸く拘泥の非を悟れり、乃ち諸生に謂ひて曰く、余嘗信朱學、命汝輩專以小學爲準、則今始知其拘泥之甚矣、蓋守格法之與求名利、雖不可同日而論、至其害眞性活潑之弊、則一也、汝輩讀聖賢書、宜師其意、勿泥其跡、と、又池田子に與ふる書に云く、

私事深く朱學を信じ、久く工夫を用申し候得共、入徳の効無覺、東御座候て、學術に疑出來、憤り啓け難き折節、天道の恵にや、陽明全集と申書渡り、買取熟讀仕候得者、拙子疑の如く發明御座候て、憤り啓け、ちと入徳の樞柄手に入申様に覺え、一生の大幸言語同斷、若し此一助御座な

く候得者、此生を空く可仕にと難有奉存候、

又三輪執齋が藤樹先生全書の序に云く、

其はじめ朱子を尊信して、心を集註にひそめ、大全を合せて是れを暗誦す、然れども未だ心に得る所なきを以て、疑ひ止むこと能はず、廣く書肆をさぐりて陽明全書のはじめて我邦に渡りぬるを得たり、詳覽熟讀して、數年の疑惑、盡く解釋す、こゝに於て聖門階梯の適路を、陽明夫子致良知の學に得て、其教に従ふこと、數年超然として默會し、其心傳を本邦百年の後に接せり、

是れ實に藤樹の學問に於て急轉直下の處なり、然れども其餘命の甚だ長からざりしは眞に惜むべしとなす、

藤樹は大木月峰が草する所の行狀にも、四體豊肥とあり、又先哲像傳に載する所の肖像を見るに、頗る肥滿の狀あり、此れに由りて之れを考ふるに、彼れは當に常人に勝れて健康なるべきに、實際に於ては甚だ多病なりき、殊に三十歳以後、屢一豎の侵す所となれり、是れ彼れが勵精刻苦

其度に過ぎたるに由るならん、慶安元年(即ち千六百四十八年)八月廿五日病革なるに及んで藤樹几に隠りて端坐し、盡く婦女を遠け、門人を召し、謂ひて曰く、吾去矣、誰能任斯文者也、言ひ畢りて溘焉として永眠せり、或は云ふ、藤樹常に痰咳を患ふ、疾起る毎に敷枕を累ねて臥し、癒ゆるに從ひて之を去る、病已に革なる時、其母今如何(口)綴近世談語卷一の初と問ふ、藤樹母の憂ふるを懼れ、強ひて手づからめを参考せよ、

一枕を去りて曰く、少しく癒ゆと、母曰く、然らば不日必ず起きんと、悦んで出づ、出づれば藤樹已に遠逝せりと、果して然らば藤樹は一たび哮喘を患へてより、遂に胸部の病を惹起せしか、固より今日となりては専門の名醫と雖も、之れを確定すると能はざるべし、然れども其呼吸器病の爲めに斃れたるや疑なきなり、門人文公の家禮を用ひ、之れを小川村の東北玉林寺に葬る、隣里郷黨皆涕泣して柩を送る、其狀恰も親戚を喪するが如し、後、村民其家を修して祠堂となし、徳本堂と云ふ、今に至りて祭祀を絶たざるなり、世に所謂藤樹書院即ち是れなり、

藤樹卒する時、年僅に四十一、夭折とは謂ふべからざるも、頗る早逝と謂ふべし、然れども其後人の模範とすべき赫々の成跡を遺せるは、餘人の決して及ぶ所にあらざるなり、藤井懶齋が撰ぶ所の本朝孝子傳卷下に、贊あり、云く、

淡海吹起、陸王儒風、豈翅善身、誨人有忠爲母、顛祿旋鄉、色愉于嗟、篤孝性乎學乎、

藤樹は朴直誠實にして又温恭謙退、一舉一動、規矩に中らざるなく、人を感化するの力尋常ならず、是を以て村民の之れを尊信する事神の如く、世遂に近江聖人と稱するに至る、今其著書を讀んで其人を想見するに、是れ決して虚褒濫賞にあらざるなり、門人西川季格其著はす所の集義和書顯非中に藤樹を評して曰く、

其日用行住坐臥の躰を見るに、苟に平人の及ぶべきものにあらず、其徳容尊んで親まらずといふ者なし、是れ實に扶桑古今一君子なり、

是れ其目撃する所を敘述するものなるを以て、此れに由りて藤樹の人

物性行を想見するを得べきなり、

藤樹は常に光陰を惜んで、力を學問思辨に用ひ、孜孜として怠らず、毎夜諸生と會講して夜半を過ぎ、或は五更即ち午前四時に及ぶとあり、圍棋の如き、曾て之れを習ひしも、學問に従事するに及んで、全く之れを廢せりと云ふ、藤樹の學問は孔子の聖を學ぶにありと雖も、亦博く儒教以外に及べり、其母深く佛敎を信ずるを以て、彼れ自らは之れを好まざと雖も、母の爲めに屢佛書を講ぜり、孟蘭盆會の時の如きは母と共に家廟を祭ると甚だ慇懃なりき、其意蓋し母の意思に逆はざらんと欲するなり、藤樹が餘力を以て佛書を講ぜしが如きは、深く怪むに足らざれども、彼れは亦醫書を講じ、醫學を敎へ、自ら數部の醫書を著はせり、是れ實に意外の事なりとす、藤樹曾て大洲にあり、大野某と友とし善し、其子了佐性甚だ魯鈍にして士となりて後を繼ぐと能はざるを以て、父之れをして賤業を營ましめんと欲す、了佐心に之れを恥ぢ、竊に藤樹に就きて醫を學ばんとを請ふ、藤樹其志を憫み、乃ち之れに大成論を授けて讀ましむ、

先づ二三句を教ふると幾んど二百返、午前十時より午後四時に及んで漸く之れを記す、食後復た之れを讀ましむるに、皆己に之れを忘る、此れより以後日に就きて之れを讀み、年を経て得る所なし、藤樹小川村に歸るに及んで丁又來りて醫を學ぶ、藤樹其醫術を曉得し難きを憂ひ、特に之れが爲めに醫筌を作りて之れを授け、又之れを講じて其意に通せしむ、丁佐遂に醫を業とするに至れり、藤樹一夕諸生に謂ひて曰く、余於了佐、竭吾精力了矣、然非彼勉勵之功、吾亦未如之何也、二三子天資非了佐之比、苟有志焉、何患不成、特缺一勉字耳、と、其後山田權伊豫より來たりて醫を學ぶ、之れと前後して森村某亦來たりて醫を學ぶ、藤樹此二氏の爲めに小醫南針及び神方奇術を著はせり、其後仲條太來たりて亦醫を學ぶ、世人が此の如く藤樹を醫師の如くに見倣し、藤樹自ら醫師の如くに思惟し、醫書を講じ、自ら醫書を著はし、幾多の人に刀圭の術を授けたると亦甚だ奇ならずや、然れども原坦山曾て解剖學を講ぜしとあるを思へば、古今其類例なきにあらざるなり、

藤樹の感化力は甚だ偉大なりき、是れ其天性に出づべけれども、亦其徳
行の致す所にあらずんばあらず、或は盜賊を訓戒して忽ち良民に變せ
しめ、或は大小神祇組をして順に節を折かしめしと云ふが如きは恐く
ば後人の附託に過ぎざらん、然れども村民一同深く彼れに感化せられ
て彼れを尊信すると神の如く、今日にありても尙ほ此遺風の存するあ
るを見る、前に擧げたる徳本堂、即ち所謂藤樹書院は藤樹死後村民永く
之れを保存せり、明治十三年九月火災に罹り、一旦烏有に歸せしも、有志
者相謀り、一字を再築して之れを藤樹書院と稱せり、世の學者往々之れ
を訪ふて藤樹の學問徳行を追想せり、伊藤東涯が藤樹書院に題する詩
に云く、

江西書院聞名久、五十年前訓義方、今日始來茲、誦地古藤影、掩舊茅堂、
大鹽中齋が藤樹先生の遺跡を吊ふ詩に云く、

院、畔、古、藤、花、盡、時、泛、湖、來、拜、昔、賢、碑、餘、風、有、似、此、良、雲、流、滅、無、人、致、此、知、
藤樹は其論著によりて其人を想見するに、眞に聖人と謂ふべし、但、彼れ

近江の一小村に整居し、直接に感化する區域の甚だ狹隘なりしを以て「近江聖人」の名を得たり、若し彼れをして廣く都會に出で、群儒の間に角逐せしめば、豈に「近江聖人」と云ふに止まらんや、杉浦重剛氏作る所の「祭藤樹先生文」に云く、

近江聖人歟、日本聖人歟、東洋聖人歟、抑亦宇内聖人歟、聖之所以爲聖、古今東西蓋一其揆已爲近江聖人、所以爲宇内之聖人、

洵に然り、藤樹は確に聖域に達せるもの、豈に近江の局處に限るもの、とすべけんや、室鳩巢曰く、

百年來人の間然せざるは、只藤樹一人なり、然れども其學術の謬あるに至りては、又明辯して少しも隱さず、

三輪執齋も我邦の先修中獨り、藤樹を以て姚江の後第一頭の人物とせり、諸家の推尊至れりといふべし、

藤樹門人に乏しからず、然れども多くは大儒となるに至らず、但一個の人傑を出だせり、即ち熊澤蕃山是れなり、己に蕃山の在るあり、藤樹の門

寂寞たりと謂ふを得ざるなり、蕃山の外尚ほ間接に藤樹に開發せられたる碩學あり、誰ぞや、新井白石、是れなり、折たく柴の記卷上に云く、

十七歳の時に至て、同じやうにめしつかはれし、おが侍のもとにゆきしに、長谷川なみのなり案の上△に書あるを見れば、翁問答△と題せしものなり、いかなる事をやしむしぬらむと思ひて、借ることを得て、家に携歸りて見けるに、こそ初て聖人の道○といふものある事をはしりけれこれより道にこそ○ろざし切なりけれと師とすべき人もあらず、

是れに由りて之れを觀れば、白石が志を立てしは、全く少年の時、藤樹の翁問答を讀みたるが爲めなり、又徂徠門下の太宰春臺も、藤樹の影響を受けたり、春臺の父言辰、武人なりと雖も、性、聖人の道を聞くことを樂み、殊に藤樹の學を好み、是を以て春臺少小より家庭に於て其學に與り聞く所ありて、深く江西派の風を欽慕せり、是れ其徂徠門下に於て餘人と其選を異にする所以なり、復備前湯淺之祥書に云く、

純先君子嘗好中江氏學、亟爲純等稱、熊澤子之賢、純自鄙、亂習聞其語云

云、

と以て徵すべきなり、其他三輪執齋、川田雄琴、佐藤一齋、大鹽中齋等皆多少藤樹の影響を受けずといふことなし、果して然らば藤樹の世道人心に關係ある、豈に鮮少なりとせんや、

人○苟○有○一○片○之○誠○存○於○胸○中○
則○雖○若○甚○微○不○可○見○而○實○爲○
萬○事○之○根○源○可○以○修○藝○事○可○
以○植○學○誠○可○以○治○民○人○可○以○
交○神○明○

中村 敬宇

第二 善行及び徳化

中江藤樹の善行一々列擧するに違あらず、又其徳化に關する美譚頗る多く、悉く網羅し易からず、且つ本書の目的は、本と哲學の變遷を敘述するにあるが故に、如何に有益の事なりと雖も、餘事に涉るは適切ならず、然りと雖も、藤樹の如きは、其學問と行爲は、全く分離すべからず、其行爲は即ち其學問の實行にして、其學問は即ち其行爲の研究なり、其行爲にして、其學問に本づかざるなく、其學問にして、其行爲に關せざるなく、所謂知行一致の旨意に合するものなり、是故に、藤樹の善行及び徳化は、其學問の結果にして、此れを外にしては、其學問の價値を了知すること能はざるなり、是故に、今茲に藤樹の善行及び徳化を記載するもの、決して餘事に涉るにあらざるを知るべきなり、

藤樹全書卷一に逸事十八件を掲載せり、今左に其二件を擧げん、

大溝侯の臣別府某は小川村の令たり、一日小川村に來りて事ふるに當

り、村民某過ちて法に觸れ、繚練に罹る。村民等藤樹に請ひ、別府某に説き彼れが罪を免されんことを求む。藤樹其夜別府某の寓舎に往き、談話して夜半に至る。一言罪人の事に及ばずして歸る。因りて村民大に之れを異む。藤樹曰く、別府某の顔色解けたり、汝等憂ふること勿れど、翌日果して彼の者赦免となれり、或人別府某に其故を問ふ。別府某曰く、前夜、先生の來たられしは、彼れの罪を謝せんが爲めなるべし、然るに一言其事に及ばざりしは、我が令たるを敬し玉ひてなるべし、先生禮儀を重んじ玉ふこと、斯の如し、謝するに堪へず、故に彼れを放免せしなりと語れり。

藤樹曾て門人中川某が莊子の大簡飛揚論を悦びて、狂見に走れるを憂ひ、或時門人中西某に向ひ、中川子の狂見に走りしは、甚だ憂ふべきとなり、假令ひ我子を失ふとも、斯くは憂ふまじきなりと云ひしを、中川某傳へ聞きて大に驚き懼れて先生に見へ、怨言しけるは、私幼年より先生を信じ、身を先生に委ぬ、是れ敢て名利を求むるの意あるにあらず、只正脩を求むるのみ、先生御異見の事あらば、何ぞ亟かに正し玉はずして、此過

ちに陥らしめ玉ひしやと藤樹之れを聞き顔色を正うして曰く然り君子は人の非を言ふに忍びず我れ不肖なりと雖も亦君子を學ぶものなり故に妄に言はざりしのみ今にして之れを言ひしは是れ實に已むを得ざるの良心なり吾子之れを思へよと中川某慷慨として其過を謝せり

閑散餘録に又左の記事あり云く

藤樹はもと近江の人なり京都叟屋町一條邊に今にその宅地ありある時竹轎に乗りて江州より京に到る其道中にて竹轎に乗りながら轎夫に向ひて性善良知真能の事を説話せられければ心なき轎夫も落涙して悦びしどなん實徳の物を感動せしむる此の如きに至る實嘆に堪へたり

言苟も至誠より出づれば車夫馬丁も感動せずといふことなし藤樹の事蹟證して餘りありといふべきなり

藤樹徳化の影響は永く小川村及び其附近に残れり三輪執齋曰く

其、没、已、に、八、十、年、に、し、て、其、郷、の、民、父、母、を、慕、ふ、が、如、く、に、し、て、其、流、を、汲、
む、者、は、又、か、の、忠、孝、の、徳、敬、信、の、實、を、一、念、感、通、の、真、知、に、試、み、ご、る、こ、と、
な、け、れ、ば、先、師、の、治、績、從、ひ、て、知、る、べ、し、(拔本塞源論私抄序)

又曰く、

江州小川は藤樹先生の隠れ住み給ふ所にて、其書院今に存す。方五、六、
里の間は、其化を慕ふもの父母を思ふが如し、先生去れるより七十餘、
年面を知れる人だになけれども、愚夫愚婦までも慕ふが故に、校舎の、
廢せんことを憂ひて、葺理をなすことあまたいびにして、これを守る、

又橋南谿の東遊記卷四に左の如き記事あり、

尾州の一士人用事ありて此邊(江州)を過ぎ、先生の墓所、小川村に在り
と聞きて、畑うつ農夫に尋ねしに、畑道なれば知れ申まじ、案内して奉
らんとて、先きに立ちて行く程なく、小き藁屋に至りしは、し待たせ給
へど、て内に入り、やがて出づるを見るに、木綿の新しきひとへ物に布
の小紋の羽織を着けたり、彼士人驚きて、扱々丁寧なる男かな、墓だに

教へ得ますれば満足なるにと思ひもて行くうち墓所にいたりぬ、彼農夫竹垣の戸を聞き、いざ入りて拜し給へど、いひて其身は戸外に拜伏せり、士人大に驚き、扱は衣服を改め、着せしは我爲めにはあらで、先生を敬するにてありけると心付き、扱も汝は藤樹の家來筋の者にてやあると問へば、左には候はず、されど此村の者は一人として先生の御恩を蒙らざるなし、親をうやまい子をしたしむ事をわきまへしりたるは先生の御蔭なれば、必ずあるそかに思ふべからずと、我父母も常々教へ候ひぬと、語る、士人も初は只なほざりに一見の心にて來たりしが、此農夫がやうすを見聞するに、今更に心もあらたまりぬ、んごるに拜して歸りぬとなり。

此事は先哲叢談にも見ゆ、南谿又自ら村井氏より聞きし事を叙述して左の如く云へり、

其後余肥後にて村井氏に親しく交りしに、ある日村外より歸り語りしは、扱も今日は珍しき墨跡を見たり、此國の家老何某の方へ近き頃

江州より舞養子に見えしあり、其方へ用事ありて行きて、物語の序にふと思ひ出で、その御里方の御領分に中江藤樹といひし人ありしよし、御存知にもや、其手跡などは所持し玉はずやと語り出しに、彼人座を改め、藤樹先生の御事は我父祖以來尊敬いたし候ひて、老父我を愛するのあまり遠方へかく参るに付きて、兼ねて秘藏の一軸を出だして得させぬ、御所望ならば見せ申すべしとて、與に入り、禮服に改め一軸を携へ、出で床にかけ遙に引きさがりて拜せられぬ、其尊敬かくばかりなれば、我も手あらひ、口そゝぎなどして拜してやみぬ云云、

南谿は藤樹より百有餘年後れたり、今其記事によりて後人が如何に藤樹を尊重せしかは推して知るべし、藤樹の郷里にありては、商賈と雖も義を知りて利に走らず、旅舎茗肆の如きも、客の遺す所のものあれば、必ず之れを閣上に置きて遺者の復た來たるを俟つ、歴年の後煙管煙包の類塵土に蔽はるゝと雖も敢て收用せずと云ふ、此事たる、亦藤樹より百有餘年後れたる原念齋が先哲叢談中に記する所なり、明治三十二年(即

ち藤樹歿後二百五十二年余自ら小川村の江西書院を訪ひ、親しく藤樹の遺蹟を探りしに、尙ほ其教化の繇々として存するものあるを感ぜり、是れに由りて之れを觀れば、藤樹徳化の功豈に亦偉大ならずとせんや、



第三 著書

翁問答五卷

此書は藤樹が隣里に住せる天君と稱する逸民を訪ひ其門人體充が之れと問答せるを傍より聽取して筆記せるものなり然れども是れ全く其假託する所にして、盡く自家の説を叙述せるものに外ならず此書は藤樹が未だ王學に轉せざる時に成るものにて主として孝の大道を説き併せて佛敎を排すること切なり、後多少の修正を加へしものと見え、末卷に良知を説破せり、此書は平假名を以て記せるとゆゑ、何人も能く理會し得る所なり、世事百談卷三に、心學の書くさく、多かる中にこの翁問答にあよぶものなしといへるは洵に當れり然れども藤樹は此書を著はしたる後、學識次第に進歩したるを以て、之れを以て其心に満たずとなし、將に修正せんとするの志あり、此時に當りて京師の書肆、之れが稿本を得て梓に上げせて之れを世に公に

せり、藤樹之れを聞いて大に驚き、乃ち其版を毀たしむ、然るに書肆其損失を歎訴するによりて、其曾て著はせる鑑草を授け其損失の償に充てしむ、

鑑草六卷

此書は廻吉録の跋書に批評を書き添へたるものにて、是れ亦平假名を以て之れを記し、行文平易なり、廻吉録は顔茂猷の著はす所にして、明の崇禎年間の刊行に係る、凡そ八卷あり、此書載する所は女子の訓戒にして、女子の教育上裨補なしとせざるなり、

孝經啓蒙一卷

甘雨亭叢書第五集に此書を収集せり、藤樹真蹟の原稿は今尙に藤樹書院に存せり、

論語鄉黨翼傳三卷

此書の首に云く、鄉黨、一篇、畫、出、夫、子、德、光、之、影、迹、以、開、示、所、以、后、學、求、得、聖、心、之、筌、蹄、と、藤樹は此の如く、鄉黨篇を以て聖人の行狀を學ぶべき

偏強の文字なりとし、之れに丁寧親切なる注解を加へたるなり、然れども藤樹生前之れを上木せざりしと見え、寛保二年に至りて京師の石川惟之始めて胡嗣氏に附して此傳を廣めたり、伴蒿蹊、晴人傳を著はし、劈頭第一に藤樹の傳を擧げ、論じて曰く、論語も郷黨の篇より先進二三章に及びて業を終へずとぞ、今傳ふるものすくなした、いし、御黨の解は刻本なるを予少年の時、骨董舖にて見しことありしが、書林も知る人少し、購はざりしこと思へば、悔やしと、然れども此書尙ほ單行本として世に存す、今の藤樹全書にも收載せり、

大學解一卷

中庸解一卷

首經考一卷 寫本

岡田季誠の藤樹全書中に收載せり、

春風一卷

此書は春風、辨惑、立志、陰陽之解、親々仁民愛物の四篇を合刻せるもの

なり、後寛政四年に至り、浪花の書肆私に標題を勸善録と改めて再刻せり、

日用要方一卷

小醫南針三卷

神方奇術一卷

松下伯季の家には藤樹真蹟の書を存せり、

捷徑醫筌六卷

右四種の書は皆醫書なるが故に、藤樹の道德に關する學説を知るには必要なし、

藤樹先生家集一卷寫本

藤樹餘稿一卷寫本

卷末に藤樹先生年譜を附載す、

藤樹文錄一卷寫本

卷末に安昌弒玄同論及び林氏剃髮受位辨二篇を載す、其他は藤樹先

生家集と異なる所なし、

藤樹遺稿二卷

此書は寛政七年の刊行にして、初めに西希顔の序を載せ終りに橘春暉の跋を附せり、

藤樹別集一卷寫本

江西文集一卷寫本

以上六種の書は大同小異なり、

論語講説一卷寫本

先進篇の講義筆記にして卷末に「大溝侯儒臣中江藤樹講説」とあり蓋し大溝侯の爲めに講せしものを、何人か筆記して傳へしものならん、

語圖二卷

卷末に「此書之作者、不著名氏、然世傳近江中江藤樹先生之所述、曾爲童蒙用國字、藏之於塾、故今希于世也、云、于時寛正十二年九月得焉、林保父」とあり然れども是れ一條兼良公の作にして藤樹の作にあらず、語圖

の事、圖書解題に見ゆ、

先哲傳傳并に近代名家著述目錄等に二十有餘の書目を列擧すれども、悉く一部の書なりしと思惟するを得ず、例へば、原入説の如きは唯、一篇の文なるのみ、一部の書とすべきものにあらず、又藤樹先生行狀、藤樹先生學術旨趣大畧、知止歌小解、心學文集等をも掲ぐれども、是等は皆藤樹の作にあらざるなり、

藤樹先生全書三十五卷寫本

是れ岡田季誠が始めて編纂せしものにて、最も正確なり、三輪執齋の序あり、其中言へるあり、云く、

先生、藤樹道を江西の小川に講じ玉ひし時、季誠の父仲實従つて師としつかふ、季誠の生るゝ、先生既に没するの後にして、父仲實も又幼年にして離るゝと雖も、先生の三男江西常省子に親炙して其道を聞くことを得て、是れを信ずること篤く、したふこと深し、云云、先生の著はせる書、ちくれる文、元より多しと雖も、家々に納め、國々に傳へて之れ

を編輯する人なし、かの翁問答、鑑草、大學中庸の解、孝經啓蒙、醫筌、春風などの書は既に書肆に印行すと雖も、或は未定の書或は不成の編にして、未だ其全書を見ず、其餘殘篇遺文の處々に散在するを聞いては季誠必ず求めて之れを獲ヲズといふことなし、或は疑はしきものは則ち之れを江西常省子に質し、或は先生の門人泉仲愛、加世季弘、中村叔貫の備州に在るに送り正して、其家の藏めたる所と合して之れを録し、名づけて藤樹全書とす、此書のなれる時、先生の長子宜伯及び二子仲樹ともに卒して、季子常省、軒季重、獨り江府にあり、依りて之れを送り正して、其序を請ふ、其頃、江府大火ありて、其書も亦灰燼となれり、亦痛はしからずや、季誠復た其草稿をあつめて、終に編をなし、再び全きことを得たり、時に常省軒にも亦既に卒せられければ、空しく家に藏して年月を経たり、云、

是れによりて此書の來歴を知るべきなり、岡田季誠の功勞實に多とするに足る、後大阪の津川某藤樹全集の編纂を企てしこと、松下伯季

の聞見録に見ゆれども、未だ其書の成否いかんを知らず

藤樹全書十卷 志村巳之助 齋藤耕三 編纂

此書は明治二十六年の刊行に係る、世の學者にして、藤樹の學説を知らんと欲するもの、多くは此書による、然れども此書管に文字の校正甚だ粗漏なるのみならず、蕃山の書類を混入し、反りて藤樹の書類を脱逸せり、例へば鑑草の如きは刊行本もありて、何人も能く知る所なるに、全書中之れを收載せざるは、何ぞや、又孝經全圖並に説は藤樹の作にあらず、孝經大全卷一の末に掲載しあり、孝字從老省云云の孝説も藤樹の作にあらず、皆編者一言の説明なかるべからざるものなり、然るに些の批評をも加へず、錯雜混亂して之れを印行せり、杜撰も亦甚しといふべし、近頃再版の本出でしと雖も、是等の事は依然として舊の如く、人を誤ること少しとせず、此の如くなれば、藤樹に對し、世間に對し、其粗漏の罪、決して遁るべからざるなり、然れども此書亦なきに優さる、

第四 文 藻

藤樹は道德を修むるを專一とせしが故に詩文の如きは深く意を用ひず、然れども其氣象甚だ正大にして其思想亦高尙なる所あるを以て詩文共に雕琢を経ずして自ら佳なるものあり、熊澤蕃山が歳晚備前に還へるを送る詩に云く、

舊年無幾日、何意上旗亭、送汝雲霄器、羞吾犬馬齡、梅花鬢邊白、楊柳眼中青、惆悵滄江上、西風數客醒、

誠に傑作となす、其他全書載する所數十首ありと雖も、多くは道學の詩にして且つ平仄及び押韻の法に拘はらざるものなり、摩島松南が娛語卷二に云く、偶讀藤樹集、每篇片言隻語、亦必歸道德、其氣象純粹、可想也、然當時文運未闢、行文之間未免陳謬、詩亦直述其志、殊乏風致、余唯愛其明德、首尾吟一絕、困りて其詩を讀むに云く、

原○是○太○虛○月○一○團○怒○雷○陰○雨○甚○无○端○陣○々○西○風○雲○霧○後○原○是○太○虛○月○一○團○

借くば轉句平仄を誤まるを、然れども改めて「西風陣々雲暗後」とすれば
反りて妥當なるが如し、此詩曾て赤穂義士の作とするものありしと見
え、松南論じて曰く、此篇或傳爲赤穂義士作者誤矣と、文も亦時に誦すべ
きものなきにあらざ、今二三の短文を擧げんに、立志を論じて云く、

其一

志者致知之始、躋聖之基本也。故曰志真立、則驢鳴亦爲師、苟不立其志、則
孔聖亦不爲師。故學問之道、無他在立、必爲聖人之志而已矣。

其二

志者氣之帥也。故克立其志、干過不來、萬欲忽消。人云雖立其志、未能克己、
此未體察者也。子曰三軍可奪帥、鄙夫不可奪志、宜自省。

其三

志有真假、志名志利、志色、種々、願于外、皆滅生入死之假志也。只志於道、
念養生出死之真志也。人之所欲、無甚於生、其所惡、無甚於死、而安於假志、
而不知真志者、可憐、可憐。

藤樹亦和歌を作れり、多くは心法を叙述するものにて、詩情に乏し、然れども亦間、佳なるものあり、例へば、

明明徳と題して

いかて、我心の月をあらはして

やみにまどへる人をてらさむ

勿^レ縦染指之欲と題して

降ると見ばつもらぬ先にはらへたし

風ある松にゆき折はなし

偶成と題して

學ひ得てのちのころにくらぶれば

むかしはよくもまぬかれに、是

思はさりしゆめのみ夢となし、身の

さめても夢の憂世なりどは

いかにせん、聖のたかく呼ひさます

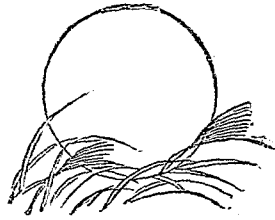
聲にもさめよよの中のゆめ
たのしみを外にもどむる世の中の

人はましらの月を握るかな

是れに由りて之れを觀れば、藤樹は決して文藻に乏しき人にあらず、但、意を用ひざる而已、然れども折に觸れて情を述べ、此好文辭を成せり、彼曾て心法明かなる者は文理も自ら通せり、と云へり、蓋し夫子自ら道ふものなり、

藤樹は近江聖人と呼ばれし程の徳行家なれば、其作る所の論著の類、多くは活氣なきものならんと推測するものあらん、然れども彼れの文、活氣に富むこと豫想外にして、論鋒の銳利なるもの亦少しとせず、例へば林子剃髮受位辨の如き、林羅山が儒者の身を以て敢て佛氏の法に倣ふを痛擧し、遂に穿窬の盜に比するに至れり、又翁問答中佛教を非議する處の如き、短刀直入、精銳を萃めて敵壘に逼るの概あり、世の子弟、藤樹の書を読まば、決して塵魔に襲はるゝことなく、反りて興味津津々として盡

第一編 第一章 中江藤樹―第四 文藝
きなるものあるを覺ゆべきなり、



第五 學 說

第一 叙 論

藤樹は三十三歳に至るまで全く朱子學を尊信し、三十三歳以後王學に一變し、我邦に於ける王學派の鼻祖となれり、唯、惜むらくば藤樹早逝せるを以て、其王學を唱道せしは僅に八年に過ぎざるを若し彼れをして尙ほ數十年の壽命を得せしめしならば、其造詣する所必ず測るべからざるものありしならん、然れども彼れが不惑の年を踰ゆること僅に一年なるに、其論著せる所十有餘種の多きに及べるを以て之れを見れば、亦成功なしと謂ふを得ざるなり、况んや其學問識見已に深遠なるものあるに於てをや、藤樹王學を尊信すと雖も、決して朱子を排斥することを取てせず、其朱王二氏を評する言に云く、

朱子は大儒と云ふ者あらん、又賢なり、王子は文武の士と云ふ者あらん、又賢なり、蓋し、朱子は、文に、廣、過、ぎ、た、る、つ、い、え、あ、り、學、者、理、學、に、近、く

して心法に遠し、王子は仁に過ぎ、約に過ぎて、異學悟道の流に似たる
とあり、然れども二子の共に賢なる處は天理を心として人欲を去れ
り、一人の罪なき者を殺して天下を得ることを爲さざるは一なり、
是れに由りて之れを觀れば、藤樹陽明を尸祝するに拘はらず、朱子をも
崇敬せしを知るべし、又藤樹は陽明に従ひて古本大學を是とし、たれど
も、經傳は朱子に従ひて差別ありとし、陽明の如く、一篇の文字とせず、其
言に云く、

今吾れ古本を是とする所は陽明に従ひ、經傳の差別は朱子に従ふを
見て黨同の私なきこと知るべし、吾れは唯、其至當に與せんと希ふの
み、若し其眞是にあらざらんは吾愚なり、

其専ら公平を期して寸毫も黨同伐異の念なき處、偶、以て其襟度の大な
るを想見するに足るなり、

藤樹の學問は専ら倫理を攻究して之れを實行するにあり、或は宇宙
或は神靈に關するの說なきにあらざると雖も、畢竟是れに由りて倫理を

闡明せんとするに外ならず、倫理は人類相互の間に存するものなれども、其根柢を確定せんが爲めに、或は宇宙或は神靈に論及せるものなり、之れを要するに、藤樹學問の範圍は倫理に限れり、即ち倫理が唯一の學問なり、然るに、藤樹は在天の神靈を信ずること最も堅固にして、又心法を重んじ、操行を尙じ、實踐躬行の一方に偏すること甚しきが故に、其學問は知的考察を主とする哲學に比するよりは寧ろ既定的信念を基とする宗教に比すべきが如し、然れども又彼れが慎重なる態度を以て考察せる結果中吾人の注意を惹くに足るもの少しとせざるなり、

第二 宇宙論

藤樹は宇宙に就きて一元的世界觀 *monistisch-weltanschauung* を有せり、然るに其一元的世界觀は差、唯心的 *idealistisch* の傾向を有し、極めて高尚なる哲理の境界に到達せり、今其要領を叙述せ

(一) 原人説を見よ、
んに、無極にして太極、至誠にして至神なるものあり、是れを上帝とす、即ち萬有精神とも稱すべき世界の實在なり、然るに

世界は理と氣の二元より成る、理は其心にして氣は其形なり、其心を分ちて萬物の性を成し、其形を分ちて萬物の形を生ず、形は分れて異なるあり、心は分ると雖も、異なる所なし、是故に他語を以て之れを言へば、差別は其形を受くるものにして即ち氣なり、平等は其心を受くるものにして即ち理なり、此の如く世界に理と氣の二元あるを認定する以上は之れを二元的世界觀と謂はざるべからず、若し理と氣の差異を論せば、理は氣の舵輓（一）にして造化の主宰なり、氣は理の舟車にして、造化の具なり、理は無體无方と曰ふと雖も、實は定體止方なり、氣は流行發生して定止する所なし、理は尊くして氣の帥たり、氣は賤くして理の卒徒たり、然れども此二元も仔細に攻究し來たれば、畢竟一元に歸するを見るなり、理は氣の舵輓たり、是故に氣は理によりて準的を取るにあらざれば、其用をなすこと能はず、譬へば舟車の舵輓なきが如きなり、氣は理の舟車たり、是故に理は氣なければ、其用をなすこと能はず、譬へば唯、舵輓ありて舟車なきが如き

（一）明德圖說を見よ、

なり理氣相合して造化行はる、理氣は此點より之れを言へば、分ちて二種となすを得ず、即ち理氣は妙合して間なし、是れ本と二物にあらざるなり、理あれば氣あり、氣あれば理あり、度と比れどはわれざるにあり、須臾も分離するを得ざるなり。

此の如く論じ來たりて之れを考察すれば、藤樹が理氣によりて世界を解釋せんとする處は二元論なり、即ち朱子の世界觀と異なる所なきなり、然れども藤樹は理氣の妙合を説き、更に進んで理氣共に是れ上帝の具有する二種の屬性とし、幾んどスピノザ氏が心意と物質とを萬有本幹の屬性とせる、一元的世界觀と奇異なる暗合をなさんとせり、然るに藤樹の上帝は決して理氣以外にあるものにあらず、分ちて之れを言へば、理氣なり、合して之れを言へば、上帝なり、同一の世界にして、兩方面あり、差別として之れを見れば、理氣なり、平等として之れを見れば、上帝なり、是故に藤樹は其一元的世界觀を分明に喝破して、太虚天地人物一貫にして分殊す譬へば一樹の根幹花實枝葉の分あるが如し、と云ひ、又、太

虚三才總べて一貫、此中自ら大上の眞樂あり、此れを教ふる、之れを眞教と謂ふ、此れを學ぶ、之れを眞學と謂ふ、と云へり、此れによりて之れを觀れば、藤樹が純然たる *deus sive natura* の觀念を有せること復た疑を容れざるなり、

更に進んで藤樹の一元的世界觀は果して如何なるものなるかを推究するに、體かに唯心的の傾向を有せり、明德圖說に、心は統體の總號にして太極の異名なり、理氣を合し、性情を統ぶ、一身に主たりと雖も、其實は天地有形の外に通じ、其大外なく、其小内なし、即ち造化の天、我れに在るを得るものなりと云へり、是れに由りて之れを觀れば、藤樹は朱子の如く心を以て氣に屬するものとせずして、理氣の二元を合して之れを統ぶるものとせり、故に土肥子に與ふる書に、心は理氣を統べて名を立つと斷言せり、蓋し世界は理氣より成立するもの、然るに心、理氣を統ぶとせば、是れ心世界を統ぶるとするものなり、藤樹は戸田氏に與ふる書に、此意を述べて、人は小體の天にして、天は大體の人と云へり、人の一身を

天地に合して少しも違ふことなし云云形は異なれども其神は一貫流通隔なし理に大小なきが故に方寸太虚本より同じ云云我心は則ち太虚なり天地四海も我心の中に在りと云ひ論語の爲己爲人を論じて太虚塵廓は吾人の本體なり故に天地萬物己れにあらざるはなし是を以て己れが爲めにする者は天地神明の爲めに心を立て萬物を修む一貫の謂なりと云へり是等の言によりて之れを考ふるに藤樹は陽明と同じく唯心的の思想を有し殆んど萬法唯心と道破せんとせり

天地人三才を通じて一定の法則ありて亂れず萬物を發育して生々息まらず是れを道とす宇宙より之れを言へば天地の道なり人類より之れを言へば人道なり神道大義に天地ひらけて人の道あり人の道は則ち天地の道なりと云ひ又天理の條に人心天理に従ふを道と云ふ則ち一陰一陽を道と云ふと一致なりと云へるは此意を述ぶるものなり若し三才一貫の道より之れを言へば生死有無の差別あるなし生死有無の差別ありとするは開悟の未だ到らざるが爲めなり若し開悟して底に

徹○せ○ば、唯、長○在○不○滅○の○道○あ○る○を○見○る○復○た○何○の○生○死○有○無○か○之○れ○あ○ら○ん、或
 問○入○條○の○最○後○の○條○に○云○く、人○心○は○形○氣○の○心○な○り、此○形○な○け○れ○ば○此○心○な○し、
 吾○人○の○本○心○は○理○な○り、理○は○無○始○無○終、生○々○し○て○息○ま○ず、則○ち○性○則○ち○心○な○り、
 君○子○は○此○理○明○に○し○て○存○亡○死○生○を○以○て○二○に○せ○ず、人○も○天○理○を○以○て○動○く○時
 は○形○色○共○に○天○性○に○し○て○形○を○踏○む○も○の○な○り、生○死○を○以○て○有○無○を○言○ふ○も○の
 は○道○を○知○ら○ざ○る○も○の○な○り、と○其○理○と○云○ふ○は○即○ち○道○の○事○な○り、又○翁○問○答○卷
 一○に○云○く、本○來○太○虛○三○才○の○道○一○貫○に○し○て○生○死○有○無○の○差○別○無○き○者○な○り、聖
 人○の○儒○道○は○生○死○有○無○の○差○別○無○き○三○才○一○貫○の○道○を○其○の○儘○教○と○な○し、學○と
 な○す○と、藤○樹○は○此○に○至○り○て○死○生○有○無○を○同○一○視○し、老○佛○諸○氏○の○如○く、現○象○を○
 超○越○し○て○無○差○別○平○等○の○實○在○に○到○達○せ○り、然○れ○ど○も○現○象○を○捨○て○去○り○て○虛
 無○の○見○解○に○陥○る○も○の○に○あ○ら○ざ○る○な○り、

第三 神靈論

藤樹は天地を造り萬物を生ずる上帝ありと思惟し、或は單に之れを天
 と云ひ、又之れを皇上帝と云ひ、又太一尊神と云ひ、又太上天尊大一神と

云へり、上帝は世界の實在にして遠くして天地の外、近くして一身の中、久くして古今の間、暫くして一息の頃、微にして一塵の内、幽にして隱、獨の中、上帝の在らざる所なく、一念の善惡、一事の善惡も、上帝得て之れを知れり、之れを勸懲するに、禍福を以てす、是故に上帝は極めて尊ぶべく、極めて畏るべきもの、然るに世人が此に出でざるは、之れを知らざるに由るのみ、但、止まるを知るものは、尊ぶべく畏るべきの本然を知るを求むるものなり、止於至善と云ひ、願願天之明命と云ひ、誠意と云ひ、正心と云ひ、脩齊治平と云ひ、戒懼慎獨と云ふは、皆恭敬して上帝の命を奉持する所以なり、是れを持敬と謂ふ、持敬は聖學の始を成して終を成す所以なり、

藤樹は分明に通我別我の思想を有せり、已に前にも引用せるが如く、彼れは、人は小體の天にして天は大體の人と云へり、其天と云ふは即ち上帝の事なるが故に、彼れにありては、上帝は通我にして、我れにあるの天は別我なり、我れにあるの天とは何ぞや、我心なり、即ち良知なり、即ち明

徳なり、即ち conscience なり、即ち Gevissen なり、即ち bewustzijn なり、明徳圖説に云く「天與心一理」と、又云く「蓋明德者、上帝之在人者、而純粹至善者也」と、戸田氏に與ふる書に云く「天地人を三極と云ふ、形は異なれども、其神は一貫流通隔なし、理に太小なきが故に、方寸太虛本より同じと、又人道圖説に眞知の神靈たることを明言して云く「知は天理の貞徳にして心の神明なり」と、此れによりて之れを觀れば、我方寸の裏にある一點炯々たる眞知は即ち上帝なるが故に、上帝は我方寸の裏にあるなり、是に於てか藤樹の思想は吠檀多派の本體論に近似せり、吠檀多派にありては梵天 Brahman 即ち世界の本體にして又同時に個人之精神なり、梵天は最上の實在にして天地萬物皆梵天中にあり、然るに梵天は其れと同時に我れにあり、我精神即ち梵天なり、換言すれば、我れ梵天の裏にありて、梵天亦我れの裏にあり、故に「我れ即ち梵天なり、jñāna brahman asi」と云ひ、又「是れ即ち汝なり」 tat tvam asi と云へり、又約翰傳第十章第三十節に我與我父一也」と云ひ、又第三十八節に「父在、我、我在、父焉」と云へり、又第十四章

第二十節に類似の言あるを忘るべからず、云く爾在、我、而我在、爾、*ich bin, du bist, er ist*と藤樹の思想亦此れに異ならず、此世界の實在は上帝なるが故に、我れ上帝の裏にあり、然れども、良知は即ち上帝なるが故に、上帝は我れにあり、是故に若し自反、*revers*に於て上帝を發見し、擴充して之れと合一するを得ば、其大外なく、其小内なく、遂に天地の間に充實するを得るものなり、

藤樹の所謂上帝は賞罰を行ふものなるが故に人格 *Personalität* を有するものなるや疑なし、然れども決して具體的のものにあらざ、委しく之れを言へば、人感的 *anthropopathisch* とは謂ふべきも、擬人的 *anthropomorphisch* とは謂ふ可らざるが如し、蓋し其本體は太虚に充滿せり、否、寧ろ太虚即ち上帝の本體と謂ふを得べし、彼れ易を論じて、太虚、*太虚* 廖廓神化之全軀也、と云へるを以て之れを知るべし、然れども又大上、*大上* 太一神經序に、其體充塞太虚、而無聲無臭、其妙用流行太虚、而至神至靈、と云へるが如く、上帝の事は唯、*唯* 聲もなく、臭もなしと謂ふべきも、之れを虚無と謂

ふべからず、冥冥の中に其妙用ありて行はるればなり、是故に藤樹の上帝は世界精神 *Weltseele* と稱すべきものにして、其世界の主人たること、猶ほ個人の心が其身體の主人たるが如し、然るに世界の主人たる上帝と個體の主人たる心が共に太虚にして一體たるを道破するに至りて、恰も大鹽中齋を豫想せり、中齋思へらく、方寸之虚者、便是太虚之虚、而太虚之虚、便是方寸之虚也、と即ち通我と別我を一貫せる太虚説を立て、姚江流派に一異彩を放ちしが如きも、其實は全く藤樹より學び來たるが如し、何づれにせよ、藤樹已に中齋に先ちて中齋の主張する所を講述せり、上帝の太虚なることは前に引用せる二句によりて知るべし、今又我心の太虚たるを證せん、藤樹は爲己爲人を論じて、太虚廖廓、吾人之本體也、と云ひ、又明德を論じて、本與太虚同體也、故天地萬物、盡包在明德裏面、と云ふが如き、皆我心は世界の本體と同一體にして、即ち太虚に外ならざるを述ぶるものなり、彼れ又慎獨を論じて云く、厥爲神也、於太虚廖廓之中、只有一箇而無對行、其實體具于方寸之中、而塞于天地、無所不通、

無所不利、千變萬化、無非此獨之神通妙用、是れ我身を容るゝ太虚は我方寸の虚と直に相通するものなるが故に、慎獨の功さへ積むを得ば我れ即ち太虚と合一するを得べきを謂ふものなり、彼れ又慎獨を論じて云く、太虚摩廓之皇上帝太一元神之、厥靈光、稟受人心之月窟、而妙用一貫、云云、其意此れに由りて愈々明瞭なり、又中を論じて云く、無所不在、無所不在、大本在太虚、降在人心、是れ亦人天合一の妙處を説示するものなり、之れを要するに、藤樹が太虚を以て、我方寸の虚と直に相通するものとするや疑なし、是故に太虚説に於ては、彼れ中齋の先驅をなせり、但、中齋は太虚を以て上帝の本體とはせざるのみ、

第四 人類論

人類の位置……世界は理氣の二元より成る、天は即ち此二元の實在にして氣を以て其形とし、理を以て其心とし、其氣を分ちて人物の形を命じ、其理を分ちて人物の性を命ず、萬物の中只人のみ其理の全體を得て明徳明かに、其氣の正眞を得て動靜順なり、是故に人は萬物の靈にし

て大なるものを従へ、強きものを制し、徳、天地に配して造化を助くるを得るなり、然るに他の生類の如きは精神濁りて理の靈覺なく、無知闇昧にして身體の欲あるのみなり、是れ造化の人を生ぜる糟粕なればなり、然れども理氣は世界の根本主義なるが故に、禽獸と雖も、理氣を離るゝものにあらざり、然れども禽獸にありては、理氣共に濁りて味きが故に、理の靈覺は見えず、故に之れなしと謂ふべし、唯、其末になりて氣質の靈覺のみ之れあり、人は靈覺全し、故に生を知り、死を知り、死して亡びざるものありて存す、獸は生を知らず、死を知らず、死して則ち亡ぶ、唯、氣質あつきが故に、死を哀しむことを知るのみ、鳥は獸よりも知覺うすし、痛んで哀鳴すれども死を恐るゝ心はなし、大鳥は獸に近きものあり、魚は感のみありて知覺なし、草木は唯、質の生のみにて感もなし、此の如く知覺は階級を降だるに従ひて次第にうすく、遂に全く之れなきに至る、然るに是等階級の最上の位置を占むるものは人なり、人に聖凡の別あり、聖人は人の神明なるものなり、凡人は聖人の未だ開けざるものなり、

人類の同根……人類は同根より出づるものにして相互に兄弟たり、姉妹たり、藤樹、中川氏を送る序に、萬の物皆大本より生ずれば、四つの海の人悉く連れる枝なりと云ひ、又翁問答卷一に、天地を萬民の大父母となして見れば、我も人も人間の形ある程の者は皆兄弟、然る故に聖人は四海を一家、中國を一人と思召すと云へり、吾れと人との隔を立て、けわしくうとみ侮りぬるは迷へる凡夫の心なりと云へり、此れに由りて之れを考ふるに、藤樹が人類同根の思想は其一元的世界觀より論結し來たれる所なり、何づれにせよ、彼れは彼此の差別を立てず、一切の人類を同一視するものにして、幾多の聖人と同じく、絶大の人生觀を有せり、論語顔淵篇に云く、四海之内、皆兄弟也、是れ子夏の口より出づと雖も、蓋し彼れ孔子の意を述ぶるものならん、釋迦も亦一視同仁の意を述べて曰く、爾時四大河入海已無復本名字、同名爲海、此亦如是、有四姓、云何爲四刹利婆羅門長者、居士種、於如來所、剃除鬚髮、著三法衣、出家學道、無

(七) 釋迦證卷六第七葉
右に出づ、

復本姓、但言沙門釋迦子、所以然者、如來衆者、其猶大海、四識其如、四大河除、其結使入於無畏涅槃城、是れ亦四海兄弟の意に外ならず、耶蘇の如きも一切人類は天父の下にありては、相互に兄弟たり、姉妹たりとせり、人類の同性……藤樹は孟荀二氏と同じく萬人同性説を主張せり、孟子各自の性本と善なりとし、荀子は各自の性本と惡なりとす、其説全く相反せりと雖も、其萬人同性とするの一點に於ては一致せり、藤樹は孟子の如く性本と善なりとするものなり、大學十五條の中に云く、人其性に率ひて行ふときは其跡皆善なりと、又凡心圖説に云く、人と生れたるものは聖人凡夫共に天性に於てかはりなしと、以て證すべきなり、各自の性本と善なるに、如何んして君子小人の別を生ずるか、其岐路は實に方寸の中にあり、凡そ人の世に處する敬なきときは身を破る故に見聞の及ぶ處に於ては君子小人共に敬あり、唯、見聞の及ばざる處に於て自ら欺くものと、獨りを慎むものとの別あり、其の自ら欺くものを

(一) 凡心圖説并に立敬の條を參考せよ、

小人と云ひ、其の獨りを慎むものを君子と云ふ、換言すれば、敬は君子小人共に之れあるも、只主意の向ふ所異なるを以て君子と云ひ、小人と云ふなり、外に向ひて人の見聞する所を慎み、内心耻づるあるを秘して之れを行ふ、是れを小人となす、君子は主意とする所、内に在り、天地神明を友として、人の見聞の及ばざる所、即ち一念獨知の處に於て戒懼す、是れを慎獨と云ふ、慎獨は君子の域に入るの關門なり、是故に君子小人共に敬は一なるも、唯、外に向ふと内に向ふとの別あるによりて、其品位を異にし、其性格を別にするに至る、是故に其岐路は實に方寸の中にあるを知るべきなり、

人類の同等……藤樹が己に萬人同性の見解を有する以上は、其結論として人類の同等と云ふことは、必ず起り來たらざるを得ず、何んとなれば、人皆君子聖人となるべき本性を有することに於て何等の差異もあらざればなり、又藤樹の尙ぶ所は徳性にして世間の名利にあらず、故に貧富貴賤の如きは、人の品位を規定すべきものにあらず、翁問答卷二

に「貧富貴賤の外のかざりはありと云へども、養の正味は同じものなり」と云へるは此意を述ぶるものなり、又明德圖説ふ云く「以性言之則萬物一原、固無人物貴賤之殊」と、又大學十五條の中に言へるあり云く「古字人と民と通ず、有位者を人と云ひ、無位者を民と云ふ、位は人の命ずるものなり、生れ出でたる所は貴賤、共に皆天民なり、故に人と云へば限りあり、民と云へば限りなし」と、又大學解に同一の意を述べて云く「天子諸侯卿大夫庶人五等の位、尊卑大小差別ありと雖も、其身に於ては毫髮も差別なし」と、彼れ茲に横目豎鼻の民は悉く平等 *Gleichheit* なることを明言せり、其旨意たる *ルツン* 氏が人類悉皆平等なりと思惟せると異ならず、然れども藤樹は固より氏の如く自由 *Freiheit* を教ふるものにあらずなり、

第五 心理論

藤樹は如何なる人も其知あるものとし、其知は本來人に具はるものにして即ち人の天に受くる所とせり、審に其知は人の天に受くる所と謂

ふべき而已ならず。真知即ち天なり。神明なり。上帝なり。明德圖説に、天與心一理と云ひ、人道圖説に、知は天理の貞徳にして心の神明なりと云ふによりて之れを知るべし。又明德圖説に云く、明德者、上帝之在人者と、明德は即ち真知なるが故に、是れ真知を以て上帝となすものなり。又中村子に與ふる書に、「一念獨知の内、止の神常に昭々たり」と云へるも、亦真知の神明たるを言ふものなり。已に神靈論の處に詳述せるが如く、上帝は世界の主人にして、真知は個體の主人なり。然るに個體の主人は世界の主人と同一軀にして、即ち最上の神靈なり。是故に藤樹の「真知は佛敎の如來」(Tathagata) と同一視するも、不可なきなり。是故に藤樹は自ら「真知を如來と稱せり」(彼れ牛原氏の老母に與ふる書に「真知明德の本體、佛法に所謂如來と申候は此心にて御座候」と云へり、如來も世界の本體にして、如何なる人も迷妄さへ打破し得ば、直に内界より如來に到達し、如來と合一するを得べければ、藤樹が「真知を以て如來となすこと謂はれなきにあらざるなり、

藤樹は此外尙ほ良知を種々なる點より考察し、種々なる名稱を付せり。是故に今次第に順を逐ふて之れを敘述せん、

第一、性の本然は人の天に受くる所に於て、善なるものなり。大學十四條に云く、人其性に率ふて行ふときは、其跡皆善なり。性に率はざる跡は、不善なりと、即ち彼れが性善説を把持せるを知るべきなり。然るに所謂良知は此性に外ならず、故に性即ち天性は即ち良知と謂ふを得べきなり。大學十四條に、心の靈覺曇りなき時は、性理自ら顯はる。性は本心なればなりとある、本心は即ち良知の事なり、

第二、良知は理なり、即ち天理なり、何んとなれば、天理は人欲に反せる心の本能なればなり、或間八條の中に、心天理を主とするときは、人欲亡失す、之れを操存と云ふ、心人欲を主とするときは、天理亡失す、之れを放棄と云ふと云へり、即ち天理の良知たるを知るべきなり、

第三、藤樹は又良知を機と稱せり、天命性道合一圖説に曰く、天人合一、理氣合一、謂之機、々者、心之天理、而人間是非之鑑也、云云、然則機良知乎、

と、是れ眞知を以て人天合一の關鍵とするものなり。
第四、藤樹は眞知を單に心と云へることも之れあり、是れ人類の心は
本と靈照ありて、些の汚點なきものとするに由る然れども人心道心
の別なきにあらざるが故に、又た道心を以て眞知の異名とせり、惑悟
を論じて云く、「解或則人心疑惑悉消化、而無我之吾立、而道心常明、吾與
心合同而爲悟、心即道心也」と、道心は眞心の異名にして、本と書大禹謨
及び荀子解蔽篇に出づ、藤樹の眞知と同じく Conscience を謂ふなり、藤
樹は又屢、本心眞心等の語を用ふ、是れ皆眞知の異名と知るべきなり、
第五、眞知は吾人自身の本體なるが故に藤樹は之れを眞吾、das wahre
Ich と稱せり、吾に眞なる者と假なるものとあり、吾人が現在有する
所の妄念雜慮は悉く是れ孩提以後習染し來たれる所にして固より
眞吾にあらざ、然るに世人之れを誤認して眞吾となす、世間種々の顛
倒迷亂は皆此一誤より生ずるなり、然らば何をか眞吾となす、眞吾は
即ち眞知に外ならず、彼れ斷言して、眞吾者、虛靈不昧、眞知是也、去假求

「眞學者之先務也」と云へり、

第六、我意を誠にして眞實無妄の地位に到れば、即ち良知あり、是故に誠を良知と謂ふべく、又良知を誠と謂ふべきなり、大學考に云く、誠は純一無雜、眞實無妄の本體、即ち良知なり、と、又誠意を論じて云く、誠者本心之實徳、所謂赤子之心、孩提之愛敬、當下不昧良知、是也、と、又清水子に答ふる書に云く、誠は良知の本體、意必固我を格して、良知の誠にかへるを意を、誠にすると申候、と、彼れが誠と良知とを同一視するを知るべきなり、

第七、良知は自反慎獨の際、炳然として發露し來たる者、是故に藤樹は良知と獨とを同一視し、獨を以て良知の異名とせり、大學考に、獨は即ち良知の別名と云ひ、又慎獨を論じて、獨者一念獨知之靈明、天性之殊稱、云云、孟子所謂良知也、と云へり、又心學文集卷上に、獨者良知之殊稱、千聖之學脈也、と云ひ、十五種の意義を列舉せり、獨は固より獨在 *Alone*、*sein* の義なれ共、又是れ世界の一片にして、所謂絶對 *Das Absolute* に外なむ

ざるなり、

第八、良知は明德なり、大學の初めに「在明、明德」とあるは即ち良知を明かにするの意をなせり、明徳圖説に「明徳者、本心之殊稱也」と云へり、本心は即ち良知の事なるが故に、是れ明德と良知を同一視するものなり、大學十四條の中に「明德之全體、充塞于太虚、是以雖具于方寸、光於四海、通于神明」と云ひ、又「本與太虚同體也、故天地萬物盡包在明德裏面」と云ふの類、皆良知を形容するの語なり、又中村子に答ふる書に「明德の本體は少しも動く所なく、變はる所なく、寂然不動にして神明昭々たり」と云ふも、良知の状態を説明するものと見て不可なきなり、

第九、中庸に所謂中は良知の異名なり、中は喜怒哀樂の未だ發せざる状態にして、即ち混沌たる心の本體なり、已に發すれば、必ず其跡ありて、現象となるも、未だ發せざる間は、無差別平等の實在なり、中庸解の初めに云く、中庸は明德の別名なり、明德は内に主として倚る所なく、中央の義あるが故に、中の字を借りて、明德の異名とす」と、明德は即ち

眞知のことなるが故に、中の眞知たるを知るべきなり、又、中也者、天下之大本也を解して云く、中は方寸に具はると雖も、太虚の太極と一體一理なるが故に、吾身の根本たるのみならず、天地萬物の根本なり、故に天下の大本なりと云へりと、是れ即ち眞知を形容するの言にあらざるはなし、

第十、藤樹は孝の意を廣義に解し、世界の實在とせり、孝經心法に云く、孝は天地未畫の前に在る太虚の神道なり、天地人萬物皆孝より生ぜりと、彼れは孝を以て理氣を合一せる天地の本體にして、神明の倚る所とせり、此の如くなれば、孝は即ち眞知ならざるべからず、彼れ果して孝經啓蒙の初に斷言して、孝者、天性之殊稱也と云へり、天性は即ち眞知なるが故に、孝は眞知に外ならざることを推して知るべきなり、第十一、藤樹は天君を眞知の異名とせり、岡村氏に答ふる書に云く、見世の心裏面に常住不易の天君泰然として御座候云云、本心の堂に登り、天君は御目見の有るべく候云云と、天君は全く眞知を指して云ふ

ものなり、第十二道と真知とは同一のものなり。陽明己に道即是真知と云へり、
應樹も亦道を以て真知とし、中意には其意を述べて云く、道は本體、大
學に所謂良知なりと、大學に真知と云ふことなけれども格物致知の
知を真知と解する故に此の如く言へるなり、道は蓋し天道なり、其、由
りて來たる所は先天なれども此の體用は經驗なり、何んとなれば、斯道
に従ひて行動云ふは是れ即ち人道なればなり、道の入天合一の機た
ること亦以て知るべきなり、
第十三真知は善なり否、至善なり、一尼氏に答ふる書に云く、真知則ち
善なり、真知を致さば、善常に心の主たりと、又大學抄に云く、至善は無
極の理なり、止は無極にして太極の義なり、専ら言へば明德と云ふて
至善あり、至善と云ふて明德あり、分けて言へば、明德は性の體なり、至
善は性の用なり、至善は性の主宰なり、云云と、至善は其作用上より真
知を稱するの名なり、

第十四頁^{〇〇}頁知は説樂なり大安樂なり、即ち妙樂 *Yama* なり、中西子を送る文に「説者、心之本體也」とあり、又論語抄解に云く「説樂と云ふは心の本體なり、云云と、説樂は人々具足するものなれども、唯、意必固我の惑によりて之れを失ふとせり、又大學十四條に云く、心之本體、元有大安樂」と云云と、即ち説樂は良知の本來有する所とするものなり、是れ亦吠檀多派の思想と相類せり、吠檀多經第一卷第一章第十二節に云く、妙樂より成立する所^所の自己は最上の自己なりと、因りて其根據を饅波尼沙土中に求むるに、「*Taittiriya-kā, Upa-niṣad Taittiriya-Upaniṣad*」(二、五)に云く、「他の内面的自己は妙樂より成り、此悟性より成る所の自己と異なり」と、此に他の内面的自己と云へるは、即ち梵天のとなり、是れ我れも亦梵天中のものにて、梵天と同一體なればなり、然れども其妙樂たるは唯、梵天のみ、此悟性より成るの自己にあらず、然れども吾人最深の内面は亦妙樂を具すること最上の自己と異ならず、*Taittiriya-kā, Upa-niṣad* (二、七)に云く、「何人能く呼吸し何人能く

呼吸し來たるや、若し其妙樂が精氣中即ち
 心胸中にあざりしならば、何んとなれば
 唯、彼れのみ能く福祿を生じ得ればなり」と、
 藤樹が吠檀多派と同じく悦樂を以て世界
 實在 *Tollwesen* たる真知の本體とすること眞に奇異なる暗合と謂ふ
 べきなり、

第十五、真知は光明なり、依九樂示工夫の文に云く、真知自克和樂光明、
故不求明快、而自然明快と、真知の別名を明德と稱するも、其光明なる
 が爲めなり、然るに此光明は太虚に充滿し、四海に光耀し、日月と其光
 明を合し、適せざる所なく、至らざる所なきものなり、藤樹は此點に於
 ても吠檀多派と暗合し、左右逢原、眞に符節を合するが如きものあり、
 吠檀多派は梵天を以て光明とせり、商羯羅 (マ) 吠檀多經第一卷第
 阿闍梨 *Samkara Acharya* の吠檀多經の注(一、
 三、二)に云く、凡そ知覺し得らるゝものは、
 三章第二十二節乃至第
 二十三節及び第四十節
 を参看せよ、

唯、梵天の光明によりてのみ知覺し得らる、日月等も其中に輝くと謂ふべし、梵天は自然的にして他の光明を凌ちて知覺する所にあらず、梵天は一切他の物を表現す、然れども他の物によりて表現せらるゝにあらざるなり」と、佛敎にありても、如來を光明とせり、如來に三身 Triskaya あり、一を法身 Dharmakaya と云ひ、二を報身 Sambhogakaya と云ひ、三を應身 Nirmankaya と云ふ、其法身は即ち毗盧遮那佛 Vairohana にして光明遍照の義なり、耶蘇敎にありても、亦差、之れに類することあり、馬太傳第十七章第二節には耶蘇高山に躋りて相貌變化し、而耀如日、衣皎有光」と云ふ、而已ならず、又約翰傳第八章第十二節に、我乃世之光、從我者、乃不行於暗、而獲生之光」と云へり、藤樹は良知を以て一切世界の光の本源なりとまでは、主張せざれども、唯、其之れを光明なりとするは、吠檀多派が梵天に於けると同じく、又佛敎徒が如來を光明とすると類似せり、

第十六良知は仁なり、論語抄解に云く、孔門の學仁を以て宗とし、一貫

を以て準則とす、仁は一貫の本體、一貫は仁の體段なり」と、又云く、「徳愛を仁と名づく、萬物一體の本心なり」と、又云く、「仁の本體、凡心の外にあるにあらざり、私欲に克ち去りて本體呈露すれば、凡心即ち仁の本體なり」と、煩惱即菩提の意を明言せり、茲に仁と云ふは即ち良知のことに外ならざるなり、

第十七、良知は禮なり、論語抄解に克己復禮を解して云く、禮と仁と同體異名なり、渾然たる全體を指して仁と名づく、其の條理を指して禮と名づく、私欲を非とする良知は、仁の靈昭條理なるによりて仁と言はずして禮に復へると云へり」と、又云く、「明徳の條理を禮と名づけ、明徳の慈愛を仁と名づく、名義の指處は異なりと雖も、其實體は同一、明德なり」と、藤樹は良知に種々なる異名を付すれども、是れ良知を種々なる方面より考察するに由る、歸する所は、盡く良知にあるなり、

第十八、良知は全知 omniscient なり、即ち一切智 sarvajñā なり、大學解に云く、「良知の知る所は知謀機巧も捨ひかくすこと能はず」と、又云く、「明

徳の獨知は隱微なるが如くなれども、天地鬼神に通じて人を欺くこと能はざること十人の指視する所よりも甚だ嚴なる所ありと、又中府解に云く、「獨の知る所は天に通じ、地に通じ、鬼神に通ず、假令ひ人間を欺き得たりと雖も、天地鬼神、豈に欺くべけんや」と、皆「良知の omniscient 即ち allwissend にして寸毫も欺くべからざるを謂ふ、殊に良知は我方寸の中にあるものなれば、如何んぞ之れを欺くを得ん」。

第十九頁「良知は廣大無邊にして即ち遍一切處なり、大學解に云く「良知は方寸に具はると雖も、天地有形の外に通じ、鬼神と吉凶を合するもの云云と、又大學解に良知の異名たる明徳を論じて云く「明徳は方寸に備はると雖も、太虛廓廓と一貫にして、天地萬物を包括し、其大外なく其尊對なし」と、又云く「明徳は上天道に通じ、下人道に通じ、生に通じ、死に通じ、順に通じ、道に通じ、晝に通じ、夜に通じ、通せずと云ふことなし」と、即ち良知は萬象を貫徹して盡十方に到達するものにて、即ち omnipresent なり、即ち allgegenwärtig なるを知るべきなり、

第二十、良知は長在不滅なり。大學解に云く、良知は不滅不昧と、又中庸解に云く、獨知の靈明は至惡の人と雖も、不昧不滅、况んや其餘をやと、即ち良知は私欲の爲めに蔽はるゝことはあるべきも、全く消滅し了はるものにあらずとせり、又中庸解に明德を以て、萬古不易常在不滅なるものと斷言せり。

第廿一、良知は聖人なり。天命性道合一、爾說に良知を愛敬無欲無知となして云く、嗚呼愛敬無欲無知者、夫聖人乎、(一) 陽明曰く、「入道中、各有箇聖人、只自信不疑、都自埋倒了、(傳習錄下)
心之聖人、此之謂良知故致其良知則聖。茲得焉と、良知は心にあるの聖人なるが故に、人皆方寸の中に聖人を有せり、若し能く良知を養ふて擴充するを得ば、即ち聖人となるを得べし、所謂聖人は良知を擴充して之れと合一せるものなり。

此れに由りて之れを觀れば、藤樹の所謂良知は今日倫理學者の所謂良心 Gewissen のことなるや疑なしと雖も、其含有する所の旨趣に至り

は必ずしも之れと同一なりと謂ふを得ず、否、大に之れと異なるものあり、蓋し良心は先天的 *transcendentales* Govissen のと經驗的 *empirisches* Govissen 即ち後天的の二種に分ちて之れを考察するを得、倫理學者の良心は經驗的の者たるに止まる、然るに藤樹の良心は兩者を兼ねるものなり、其故は良心は我方寸の中にあり、我れ今此良心に従ひて日常の行爲を規定すれば、其跡は善のみにて、之れに逆へば必ず不善に陥る、是れ經驗の方面なり、然るに此良心は向上的に之れを考察すれば、世界の實在に通じ、世界の實在と同一體たり、果して然らば是れ先天的のものなり、果して然らば是れ倫理學者の所謂良心の範圍を超越して、縹渺たる詩的の境界に入る者なり、是故に藤樹の良心は即ち絶對にして基督教の神の如く、婆羅門教の梵天の如く、佛教の如來の如し、之れを要するに、藤樹は上帝を内容的に思惟し、之れを良心と合一せしなり、是故に往々經驗の範圍を超越し、良心に神秘的の意義を付與するに至れり、

良心は我方寸の中にある純一無雜の本心なるに相違なきも、先天的と

經驗的の兩方面を有するものなるが故に是れ實に天人合一の樞紐にして聖凡の分るゝ處と謂ふべし、如何なる人も良知を具有せざるはなし、苟も操りて之れを存すれば、小我を以て大我に合し、直に世界の本體と一體たるを得べく、即ち即身成佛亦出來得べからざることにあらず、君子、小人の別、他にあらず、唯、其、良知を操りて之れを存する、と否らざるとにあるのみ、

若し我胸中に唯、良知のみあらば、何等の惡をも生ずべき謂はれなし、何となれば、良知は善なればなり、一尾氏に答ふる書に曰く、良知則ち善なり、良知を致さば、善常に心の主たり、と、然れども、若し嚴密に之れを言はば、是れ未だ其義を盡くさざるものなり、良知を善と云ふは、現象界より其成績に就きて言ふのみ、若し良知其れ自身に就きて之れを言はば、是れ心の本體にして世界の本體と一體たるが故に善もなく惡もなし、即ち絶對的に之れを言へば、善惡共にあるなし、良知を善と云ふは、唯、之れを相對的に言ふに過ぎざるのみ、孟子三條に云く、心の本體は虚靈不昧

なるものなれば、唯、惡なき而已ならず、善と云ふものも又無し然れども性は本然なり、性の感通する跡を見れば皆善にして惡なし、と、是れ絶對相對の兩方面より考察し來たるもの、彼れ體用一源、顯微無間と謂ひて、有無死生を融合し、殆んど現象即實在論に類似せる世界觀を有するものなるが故に、此の如く同一の良知を兩様に考察するものなり、是れ決して藤樹に始まるにあらず、陽明已に此種の思想あり、傳習錄卷上に云く、「人性皆善」又云く、「至善者、性也、性元無一毫之惡」と、已にして又云く、「無善無惡、是謂至善」と、彼れ人性を善なりとして、又善なし惡なしとす、是れ必ずしも自家撞着にあらず、相對善と絶對善とを合一して説くものなり、藤樹は此の如き相對善と絶對善の思想を陽明より得來たりしものならん、何づれにせよ、藤樹は惡の元素は良知の中にあるにあらずとするものなり。

果して然らば惡は如何にして生起するや、惡の本源は那邊にありや、吾人は惡の由りて來たる所を究明せざるべからず、藤樹は意即ち意念を

以て一切の惡の起因とせり。大學考に「明德をくちます病疢多端なり」と
 雖も、畢竟其病根は意なり」と云い、又意は萬欲百惡の淵源なり、故に意あ
 るときは、明德昏昧、五事顛倒錯亂なり、意なきときは、明德明徹、五官令に
 従ひ、萬事中正通利なり」と云ひ、又大學解に「學問の功、誠を辨へて本體を
 立つるより外はなし、惑の根意の一病に極はまれり」と云ふの類、昔人生
 のあらゆる惡は畢竟意より生起するものなるを言ふなり、藤樹の所謂
 意は蓋し意欲 *Dis Volun* なり、僅に意欲あれば必ず執着する所あり、執
 着する所あれば、必ず一方に偏して、茲に離隔拘泥の弊を生じて、全く差
 別の偏見に陥り、百般の惡を來たすを免れず、是れ疑ふべからざる經驗
 的事實なり、藤樹此に見るあり、故に意を以て惡の本源とす、朱子は「意者、
 心之所發也」とすれども、藤樹は「意者、心之所倚也」とせり、朱子の解にては
 意が必ず惡に傾向するものと云ふことは明
 瞭ならず、然れども、藤樹の解によれば、意は本
 心の其儘にあらざる、本心の其儘ならば、唯、善、
 由りて之れを知るべし、

(マ) 大學十四條に云く「人
 其性に率ひて行ふときは
 其跡皆善なり、性に率はざ
 る跡は不善なり」と、此れに

りて悪なかるべきも、本心の其儘にあらずして、那邊にか倚る所あり、即ち何物にか執着する所あるが故に、必ず悪に傾向するものなり、是故に意あれば、良知蔽はれて昏昧となり、意なければ、良知明らかにして神靈なり、是故に君子小人の別は、意あると意なきとにありとも謂ふを得べきなり、大學抄に云く、夫れ意は聖凡の分るゝ處にして、明暗の境なり、聖人は已に意なし、意なきときは惑なし、惑なければ、教なし、教なければ、聖賢の名なし、是れを太古神聖の至治の代と云ふ、心上に始なかりし、意と云ふもの生じてより、人に惑あり、惑ありて後、人に病痰あり、世に治亂あり、教なく、政なき事能はずと、又云く、意は不常往來の念なり、無事の時は閒思となり、有事の時は雜慮となる、赤子の心にこれなし、聖人の心にこれなし、凡心には此意念而已にして、至誠無息の性はなきが如くなり、云と、即ち良知と意とは正反對に立つものなるを知るべきなり、因りて又吾人は意の那邊より起る、未たるかを推究せざるべからず、意の本心中に之れなきは論とし、何んぞ之れば、本心は本と善惡なきものにて、強

ひて之れを言へば、之れを至善と云ふより外之れなければなり、然らば吾人は如何なる處に於て之の存在を認定すべきか、大學考に云く、凡心の起發、善あり惡あるは、本心の衷實に意の伏藏ある故なり、然らば則ち理念は意の伏藏より起發して本心の發見にあり、す、此の如く意を以て心の衷實に伏藏すとするも、身心など本心の中に入り得べからざるものなるが故に、其起原は尙ほ甚だ不明瞭なりとす、固りて又之れを考ふるに、磨樹は此世界は理氣の二元より成立するものとし、且つ心は理氣を統ぶるものとせり、然れども理氣共に良知なるにあらざ、良知は理なり、即ち天理なり、天理の人に付するもの、之れを良知となし、之れを本心となす、意は理にあらざ、又氣にあらざ、但氣の統攝として起るものなり、然るに良知は世界の本體と一體たるものなるが故に氣も亦良知の外にあらざ、否、良知は理氣を統合せる本體ならざるべからず、中庸解に云く、太極は造化の根本、陰陽は造化の具、太極陰陽一にして二、自然に俱に相離るゝこと能はず、然るに太極は即ち理にして陰陽は即ち氣

なるが故に、是れ理氣の合一を謂ふものなり、又中庸十一條に云く、道は理氣なり、理を云へば、氣を殘し、氣を云へば、理を殘す、理氣は離れざれども、言に殘す處あり、只道と云ふときは、殘すことなし、理氣一體の名なればなりと、又土肥子に與ふる書に云く、性心氣本と一體のものにて、名義の指す處かはりあるなり、靈覺を指して心と名づけ、靈覺の主本を指して性と名づく、靈覺の流行して體に充つる處を指して氣と名づく、性は氣の中に就きて専ら理を指す、心は理氣を統べて名を立つ、理氣を分ちて見るときは、理は靈覺ありて、氣は靈覺なし、理は主宰、氣は乗る所の機なりと、藤樹の概念差、精緻を缺き、混亂を免れざるものなきにあらざるも、然れども亦明瞭にして疑ふべからざるものあり、彼れの言ふ所に據れば、理氣は分ちて之れを言ふべきも、其實相離れずして一體たるものなり、換言すれば、理氣は一にして二、二にして一なるものなり、理氣の融合して一體たる所より、之れを言へば、是れ即ち世界の本體にして、即ち人的個體の有する良知は亦此れに外ならず、良知は世界の本體と一體

たるものなればなり然れども理氣は又分ちて之れを言ふを得べきものなり若し分ちて之れを言へば良知は理にして氣にあらず然るに意は全く氣に淵源するものなり是故に理氣を合して之れを言ふと分ちて之れを言ふとによりて良知の觀念自ら異なる所あるを知るべきなり

然るに意が果して氣に淵源するものにして一切人生に於ける惡の本源なる以上は氣即ち惡の本源たるにあらざるか理の善たること否寧ろ至善たること論を俟たず今氣は理に反して惡なるものにあらざるか此疑問は必ず念頭に起り來たらざるを得ず然るに藤樹は決して氣を以て惡なるものとせず明德圖說に云く形氣者爲理之配本有善而無惡者也氣は本と善ありて惡なきものなれども唯其形質即ち身體あるが爲めに偏倚する所あるを免れず揆言すれば好惡する所あるを免れず此の如く好惡する所ある是れを意と云ふ然らば何故に此の如く好惡する所あるか此の如く好惡する所あるは蓋し我身の欲に執着す

て意なきを得べきか、良知に至れる君子と雖も、意なきの人たるを得べきか、此點に就きての藤樹の辯解は差、窮せるが如しと雖も、其實決して然らず、若し其言句に拘泥せずして唯、其旨意を取らば、反りて貫徹する所あらん蓋し、聖人と雖も、意なきこと能はず、但其意は、我態に拘泥するの意に、おらず、私欲を充たさんとするの意に、おらず、故に、之れを意と云はずして、彼の、小人意欲の意と區別するのみ、藤樹一貫を論して曰く、欲、明明徳於天下者、性之欲也、名欲、高、位、欲、貴、財、欲、積、色、欲、美、形、氣、欲、便、利、器、欲、好格者、人之欲也、茲に人の欲に對して性の欲と云ふ、即ち聖人亦意あるを知るべし、然れども是れ彼れが所謂欲にあらず、彼れが所謂欲は人の欲の方に於て邪僻なるものなり、性の欲は偶、人の欲に對して用ひたる語にして其實欲と謂ふべきものにあらざ、大學考に此旨意を述べて云く、「一心の倚る處、良知の誠に率ふときは、倚るといへども邪僻にあらず、倚るを以て倚らざるに至るときは、倚るもまた倚らざるの理なりと、若し、良知の誠に率はい、總べて其なす所は、私利、私欲を目的とするにあ

らず、但、良知に、戻らざるの外、之れなれば、意なく欲なしと謂ふべきなり、是故に良知に率へば、惡の萌すべき所なく、喜怒愛樂と雖も節度を失ふことなく、能く中庸を得て善なり、然れども若し計挾あれば、即ち企畫あれば、是れ意なり、是れ所謂人心なり、是れ人生に於ける一切の惡の由りて起る所なり、意は本と良知の中にあるものにあらず、良知其儘ならば必ず善なるべきに、此正路を離れて、其本然を亡ふが故に、善を以て正統とし、惡を以て傍出とするものなり、君子は良知其儘なるが故に、其爲す所善ならずと云ふことなし、小人は意欲ありて良知蔽はるゝが故に、百般の惡、隨ひて生ずるを免れず、然れども良知全く滅し了るにあらず、故に自反愼獨によりて君子とならんと欲せば、能はざるにあらず、禽獸に至りては唯、意あるのみ、欲あるのみ、彼の小人の如きは、自ら墮落して禽獸に近づくものなり、

次に藤樹が知識に就きて如何なる見解を有せしかを考察するに、是れ已に彼れが良知の説より推測して知るを得べきなり、如何なる人も

本と眞知を具有せざるなきが故に、知識は我れにありて存するなり、是故に知識は之れを外界に求むべきにあらずして、我れにあるものを發達せしむべきなり、人道圖説に、知は天理の貞徳にして心の神明なり、空々として衆理を妙にす、天下の事に感じて是非善惡の鑑となる、と云ふが如き、全く是非善惡を判別するの知識は自然に人類に存すとするもの、即ち眞正の知識は先天的 transcendental のものなるを謂ふなり、夫の經驗によりて外界より得たる知識の如きは、反りて眞正の知識を蔽ふの弊あるを免れず、人道圖説に尙ほ此意を述べて云く、

知の本體に是非善惡と云ふ者ありて分つにあらず、一物なくして虚明神靈なる故に、萬事萬物の形あらはれ情分るゝなり、鏡の虚明にして一物なき故に、物の形を寫すが如し、鏡は虚なる而已にて、神靈なる故に、物を寫すばかりなり、知は神明なる故に、能く天下の事を主どり物を寫すなり、云云鏡に扇子なりども一物寫し置きてのけざるときは、他の物うつらず、知も空々として一物なきときは、能く萬事に應ず、

知識のたくはへある時は眞知自然の照にあらず云云、

此れに由りて之れを觀れば、藤樹が吾人眞正の知識を以て先天的とすること復た疑なし、果して然らば、其思想はスピノザ氏が知識は本來我れに具備するものなれども、唯、情欲の爲めに暗まされ居るが故に之れを掃蕩すれば、自ら明かなるに至るものと甚だ相類似するが如し、カント氏が理性を以て世界解釋の根本主義とし、先天知識によりて心的發達を説明するが如き、其哲學組織は必ずしも比較すべきにあらざるも、其先天知識を立するの一點は亦相似たりと謂ふべし、然れども吠檀多哲學の如き最も藤樹の思想に近きものあり、吠檀多派は知識は先天的に我れにありて存するも、唯、迷妄の爲めに蔽はれ居るが故に此の如き迷妄を打破して解脱を求め、外界に向ふ所の思想を内界に向はしめんとせり、ムンダカ、ウパニシヤド(三、二九)に云く、其最上の梵天を知るものは梵天となると、又(二、二九)に云く、其最高最深の者を觀るときは、胸中の鐵鎖は破れ、一切の疑團は解け、一切の作法は滅すと、吠檀多派

は自己を知るを以て最上の知識とするものなり、然るに藤樹も自己の本體たる良知を知るを以て知識の至れるものとすなり、彼れ曾て偶成の作あり、其中に云く、知○愚○者○不○愚○知○己○者○明○也○と、是れ即ち空海が「即此如實知自心名爲菩提」と云へると、其歸を同うするものにて、又ソクテ「テス氏が己れを知れ、*know thyself*」と喝破したると同一の趣なしとせざるなり、



第六 倫理論

第一 理論的方面

倫理に關する一切の事項を論究するに先ちて先づ確定せざるべからざる問題あり、何ぞや、是れ他にあらず、即ち善惡の標準是れなり、善惡の標準に就きて古來種々なる異説あり、然るに今藤樹は何を以て善惡の標準とするものなるか、藤樹は良知を以て世界解釋の根本主義として、良知に率ふを善とし、良知に違ふを惡とし、一に良知を以て善惡の標準とせり、一尾氏に答ふる書に云く、良知は則ち善なり、良知を致さば善常に心の主たり、云云、良知を善の本體として、良知に背くを惡の本色とする精義を能く御辨へ成さるべく候と、即ち善惡を質すべきもの、良知より外之れなきを知るべきなり、又此れによりて藤樹の動機論者なるをも推測するを得ん、今日の倫理説數多あるに相違なきも、大別して動機より善惡を確定するものと結果より善惡を確定するものとの二派と

なすを得べし、例へば利用派 utilitarian の如きは、行爲の結果が有益なりや否やを計較して善惡の別をなすが故に結果論者なり、之れに反して行爲の結果如何を論せずして、單に内部先天の判斷力(即ち直覺)によりて善惡の別をつすもの、之れを動機論者とす、藤樹は即ち後者に屬するものなり、田邊氏に答ふる書に云く、善惡の實體は心上にありて、事跡にあらざり、一念良知に致るを善とし、一念道に離るゝを惡とす、夫の利用派の如きは善惡の實體を以て事跡にありとするものにて、藤樹は是れ全く我心上にありとするものなり、

藤樹の倫理に關する思想は如何に枝葉に涉るとありとするも、其根柢は畢竟良知にあり、古人が良知は生前隨身の規矩、死後隨身の資糧と云へるが如く、藤樹は良知を以て人的行爲の唯一の準的とせり、然るに良知の觀念よりして左の三種の事實は其結果として起り來らざるを得ず

(一) 神人合一……吾人々類は是れ人類なりと云ふと雖も、各、自ら良知を具有せざるなし、然るに良知は神靈にして世界の本體たるが

故に若し能く其良知を擴充するを得ば即ち神靈なり、神人合一の機實に此にありて存するなり、神靈は幽遠の境にありて我心胸中の隱微を知ることなかるべしと思惟するは淺墓なる考なり、神靈は現に我身の中にあればなり、我良知即ち神靈にして欺かんとするも欺くべからざればなり、假令ひ之れを欺くも、内部より其非を咎むるの聲起り來るものなればなり、神道大義に云く、「君子は己れ獨り知る所の思念の上に於て慎むことをす、平生の思ふ事、天地神明に訂して畏るべき事をば思はず、平生のなす事、人に知られはづかしからん事をばせず、誤りて惡念生じ非が事あつても、心に明かなる神知ある故に、悟らずと云ふことなし、知れば則ち改めて思はず爲さず、本どの清淨神明の常に歸るなり、凡、夫は、妄念と知つても、思ひ、惡事と知りながらもなす、然れども心の神明既に知る故に、匿す事をす、人々の心に天神一體の神明ありて善惡共にかくれなし、鏡に向ふが如しと、是れ實に天國胸にありの意と同一、路加傳第

十七章第廿一節に云く「視哉、神之國在爾衷也」(007) yda, ꝥ ꝥharistia roo
Deus servat vivat servet. (Denn sehet, das Reich Gottes ist inwendig in euch) ꝥ ꝥ 藤
 樹の意亦此れに外ならず、又藤樹が中西氏に答ふる書に「君子安樂
 の本體は吾人方寸の内にありと云ふが如き、基督の言と何ぞ相似
 たるの甚しきや、之れを要するに、善惡を知るの神明は我れにある
 が故に、一切の行爲は此れに由りて規定せざるべからざるなり、何
 づれにせよ、藤樹は基督と同じく神靈を内容的 *immanent* に考察せ
 り、其忘の字を解して「心者天人合一之神明」と云ふが如き、最も能く
 此意を道破せり、然るに方寸の中に神靈を具有するは、獨り君子に
 限るにあらず、本と如何なる人も之れを具有せざるなし、唯小人は
 意念の爲めに蔽はるゝのみ、若し一たび意念の累を免るゝを得ば、
 斯心即ち聖人の心にして、我れ即ち聖人なり、翁問答卷二に云く「意
 を誠にし心を正うすれば、聖賢の心即ち我心となり、我心即ち聖賢
 の心に違はず」云云と、又慎獨之贊に云く「心之良知、斯之謂聖、當下自

在、聖凡一性」と是れ空海が「一切衆生身中皆有佛性、具如來藏、一切衆生、無非、無上菩提法器（法華儀軌經）」と云へると同じく、亦吠檀多派の「我れ即ち梵天なり、*aham brahma asi*」の旨意に異ならず、之れを要するに、善惡を知るの神明は我れにあるが故に、一切の行爲は此れに由りて規定せざるべからざるなり、

(二)物我一體……藤樹は一元的世界觀を有し、萬物も我れも決して全く分離せるものにあらずして、畢竟一體たるものとせり、中川氏を送るの文に云く「萬の物皆大本より生ずれば、四つの海の人悉く、連れる枝なり」と、是れ世界の人を以て悉く同胞とするものにして、即ち一元的世界觀より直に倫理上に論及するものなり、已に一元的世界觀を有する以上は此れより推論して人類相互の交際上に及ぶときは、一視同仁の觀念に達せざるべからず、是れ其必然の結果なればなり、論語抄解に云く「意必固我の私欲を以て間隔する故に、我れと天下と扞格して、相入れず、昏迷顛倒なり、意必固我の私欲

を除却して禮にかへる上は、當下即ち我れと天下と融通して、間隔なく萬物一體の本心呈露して、盡天下皆吾仁の裏に歸入すと、是れ君子博愛の情無限無際にして、彼我の隔なきを謂ふものなり、又論語十八條に云く、天は其心萬物に徧き故に無心なり、仁は萬物を以て一躰とする故に無欲なりと、是れ君子の心は天の如く偏倚する所なきを謂ふものなり、之れを要するに、藤樹は一元的世界觀より推論して四海兄弟萬國一家の博愛的的人生觀を立するものなるを知るべきなり、

(三)内外鑒徹……如何なる人も良知を有せざるなし、故に善惡は外界の事實に徴して確定するを須ひず、單に我方寸の中に於て之を直觀すべきなり、即ち善惡を質すの師は我れにありて存するなり、論語十八條に云く、明師ありと雖も、一念の微は知りがたし、唯我れにありて善惡を知るの靈明を捧持する時は、師我れにありて幽明の隔なしと、然れども世人動もすれば輒ち我れにあるの師を信ぜ

ず、自ら欺きて意欲を成遂げ、遂に小人となる、凡心圖説に云く、人ど
 生れたるものは、聖人、凡夫共に、天性に於ては、かはりなし、善を知り
 悪を知るの神明あらずと云ふとなし、人々不義をにくみ、悪を耻づ
 るの良知ある故なり、唯、慎獨と自欺のたかひより千里の誤りと
 なりて、君子、小人の名あるなり、然れども、一念自反して、惑を辨へ、獨を
 慎み、過を改めて善に遷る時は、凡夫も君子となるべしと、小人も一
 旦過を改むれば、直に君子となるべけれども、多く其非を蔽ふて、内
 に不善を蓄へ、唯、外貌を飾ふて君子に擬す、是を以て内外蓋徹なら
 ず、昏迷顛倒の弊を免れず、實に憫むべきの甚しき者なり、大學解に
 云く、小人は欲心甚しと雖も、利害の心あるも、故に外人の見聞する
 時には忌憚する所ありて思ふさまに不善をなすと能はず、然れど
 も、獨知の恐るべきと人の見聞に異ならざるとを辨へざるにより
 て、間居の時は忌憚する所なしと云、云、小人と雖も、良知は不滅不昧、故
 に、其心行の善不善、明に識得せずと云ふとなし、是を以て君子を見

る時は忌憚する所あるに、よつて俄にあわて、其の不善を蓋藏して、
 善人のふりをあらはす云云、忌憚する所ある時には戒慎の心真切
 なり、戒慎によつて欲心退き、良知明朗なる故に人の己れが不善を
 見知らんとを恐るゝ心甚だ深うして蓋藏に圖方を失ふ、其意味肺
 肝を見透せらるゝが如し、獨知は隱微なるに似たれども、天下の顯
 見、これより大なるはなれば、遂に人の見知るとも、亦肺肝を見る
 が如し、蓋し小人が私に不善を爲して、若し能く之れを隱匿せば
 何人も知らざるべしと思惟するは、愚の甚しき者にて、全く其事が
 自然に外に顯現するを知らざるに因る、大學抄に云く、善惡共に内
 に誠ありて外に顯はるゝとかくれなしたと、一旦は善惡共に加
 くれても、其實は終に知れぬと云ふ事はなきぞ、云云と、耶蘇も亦曾
 て此意を述べて曰く、蓋藏者無有、不露、隱者無有、不顯也、*οὐδὲν ἴδιο ἐστὶ*
κεκρυμμένον, ὃ οὐκ ἀποκαλύπθῆσκει καὶ ἠφαντὸν ὃ οὐ γινώσκῆσκει. (Es ist

nichts verborgen, das nicht offenbar werde, und ist nichts heimlich, das man

nicht wissen werde) (馬太傳第十章第二十六節)と、假令、人は欺き得べしと、するも、心の神明、即ち、良知は、到底、欺く可らず、良知は、我れにありて常に我隱微を知るものなり之を思へば、誠に耻かしきとなれば、君子は人の知ると知らざるとによらず、一念、獨知の神明を恐れ、敢て之に違はず、是を以て内外、鑿微なるを得るなり、

百惡の淵源は意なり、意なければ、心の内清朗にして、些の陰翳を留めず、良知の光輝々として輝くべきも、意あれば、良知蔽はれて、百惡生じ來たる、大學解に云く、意なきときは、功名利害、毀譽、得喪、死生、禍福、一切の俗習、順逆、汚染すること能はず、意ある故に、功名等の衆魔、祟りをなす、所謂萬欲意に生ずるの義なりと、意は佛教に所謂魔羅 Mara の如く、人を不善に導くものなり、即ち人をして忽ち地獄に陥らしむるものは、此意に外ならず、彼の「セータン」と云ひ、波旬と云ひ、皆我方寸中に生ずるものなり、是を以て藤樹は意を除去するの法を教へたり、此に至りて藤樹の見解は、シヨッペンハウエル氏と相接近し來たれり、シヨッペンハウエル氏が意思

を以て生命とし、又實在とする所は、藤樹と同じからず、否寧ろ正反對にありと謂ふべきも、其一切の苦惱は意思の結果なるが故に、意思を否定して虚無寂滅に歸せんとする所、甚だ相似たり、然れども、又其間決して混同すべからざるものあり、藤樹は意を絶滅せよと教へず、唯意を誠にせよと教ふ、是れ其シヨツペン・ハウエル氏と異なる所にして、又其佛教及び婆羅門教と同じからざる所なり、大學抄に云く、俄に此意を絶つべからず、徒に無くせんとしては無くならず、誠にするによりて無くならず、此言太だ味あり、何んとなれば、意は人の生命ある限りは、絶滅し得べきものにあらざり、故に唯之れを誠にするより外之れなければなり、シヨツペン・ハウエル氏曰く、意思が其處に存する以上は、生命も亦存すべし、世界も存すべし、*Wenn Willie da ist, wird auch Leben, Welt da seyn* (Stimmliche Werke, Bd. II, S. 324) と、氏は意思を以て生命及び世界の本體とするが故に、此言ありと雖も、生命の存する限り、世界の存する限り、意の消滅すべき謂はれなし、是故に藤樹は意を誠にせよと教へて、佛教の謬見を破

れり、大學抄に云く、異學には此意を輪廻と見たり、誠にしては無くする受用を見て絶ち亡さんとするなり、爰に於て毫厘を誤りて千里の差出來、此意たえずして、自欺者は習性となりて眞知曇ればなりと、藤樹の此言は差、明漸を缺ぐ、然れども唯、佛教にありては意を絶滅せんとするが故に、反りて絶滅すると能はず、是れ其方法を誤まるが故なりとの意として解せば足れり、此意を輪廻と見るとは、根本的の差異にあらず、藤樹自ら嘗に因果應報を説出せる而已ならず、又分明に輪廻を道破せり、論語抄解に、畢竟たゞ一病なり、意に始まりて心に遂げ、固に留まりて我に成り、我、又意を生じて循環きわまりなしと云へるは、輪廻にあらずして何ぞや、但、藤樹の工夫の要點は意を誠にすと云ふことにあるなり、是れ實に身を脩め行を正うする根本的條件にして、人心萬機の起發點と謂ふべきなり、然らば如何なる方法によりて意を誠にするを得べきか、意を誠にするの法は、唯、致知格物にあるのみ、致知格物とは何ぞや、致知格物とは、知に至り事を正うするを謂ふ、知に至り(一)と(三)宅石庵は藤樹が致

るとは、意念の己私に克ちて當下不昧の良知——至るまで醒したるものに就きて其非を辯ぜり、藤樹先生に至るを謂ひ、事を正うすとは貌言視聽思——書翰雜著の凡例中に見ゆ、の五事を正うすることを謂ふ、大學解に云く、致知格物の外更に工夫なし、所謂天下第一等人間第一義の事、別路の走るべきなく、別事の做すべきなくして、易簡直截なること分曉なり云云と、是故に畢竟期する所は良知に至るにあり、然るに良知に至るは、五事を正うするにあり、五事は外面に發表せる作用にして、其善惡是非の如きは、心の邪正如何に根柢するものなり、然るに心の邪なるが如きは、意念の崇りをなすが爲めに、して、意念は實に五事の非の主たり、一切の煩惱意念より起らざるはなし、然るに意念の外、別に煌々として滅せざる良知のあるあり、良知は能く五事の善惡邪正を知る、良知の知る所を主として、五事の非を格すは、即ち格物の工夫にして、脩身正心誠意致知の功一切、其中に存す、換言すれば、格物は倫理を目的とする實踐躬行の起發點なり、藤樹の良知の説、頗る佛教の止觀若くは三昧に類するものあり、大學の

初めに止於至善とある其止まるを良知の本體に到達して寂然不動なるの意として解釋せり是故に止まるは現象界より收斂退藏して直に世界の本體と合一し此に其寂然不動の狀態を得るを謂ふなり是故に止るは即ち即身成佛の義なり煩惱即菩提の義なり此の如く看來れば止まるは單に經驗的の旨意を有するにあらず又超絶的の旨意を有するなり即ち冲漠無朕先天未畫の境界に入りて神明の地位に安住するなり是故に人をして佛教の止觀若くは三昧と何等の差異あるかを疑はしむ起信論(疏記下末第二)に云く云何修行止觀門所言止者謂止一切境界相隨順空摩他觀義故所言觀者謂分別因緣生滅相隨順毗鉢舍那觀義故と又大智度論卷七(第十)に何等爲三昧善心一處住不動是爲三昧と此れに由りて其如何に相類似するかを了知すべきなり然れども止まるとは止まるに終はるの義にあらず止まるは其根柢を定むるなり即ち地盤を作るなり換言すれば一切倫理的行為の起發點を建設するものに於て決して世間を遠離し了はらんとするものにあらざるなり故

に涅槃解脱の教と混すべからざるものあり、殊に灰身滅智を以て終局の目的とするものとは、差、相似たるが如くにして大に異なるものあるを知るべし、藤樹は人の或は止まるを消極的に理會せんことを恐れて大學解に如下の説をなせり、云く、至善の徳たるや、止にして而して能く慮る止は體にして慮は用なり、體用一源なれば、止外に慮なし、慮外に止なし、慮即止、止即慮なり、慮なき止は枯寂の止にして、本體の止にあらず、止外の慮は意念の慮にして、天性の慮にあらず、止といへば定靜安慮、其中にありと即ち止まるは枯木死灰の意にあざること明かなり、藤樹又「止至善」の歌あり、云く、

至善に止まりぬれば苦しみの

海の水ひてたのしみの國

果して然らば極樂世界の Nirvana は、止まるによりて到達し得らるべきなり、藤樹は又止まるの境界を以て中庸の中と同一視せり、蓋し中は喜怒哀樂の如き、種々なる情緒の未だ發現せざる先天未畫、冲漠無朕の狀

能なり中庸解に云く中[○]は方寸[○]に具[○]ると雖[○]も太[○]虚[○]の太[○]極[○]と二[○]體[○]一[○]理[○]なる故[○]に吾[○]身[○]の根[○]本[○]なるのみならず天地萬物[○]の根[○]本[○]なり故[○]に天下[○]の大[○]本[○]なりと中[○]も亦止まると同じく消極的に理會すべきにあらず消極的に理會すれば必ず頑空に陥り異端一様の惑を免れず中庸十一條に中を解して這是神明不測之靈性と云ひ又至誠无息之殊稱と云へり即ち其積極的に理會すべきものたるを知るべきなり

藤樹は此の如く先天未畫冲漠無朕の境界ありとして之れを倫理的行為の本源とするが故にカントシヨッペンハウエル諸氏の如く先天的自由 transcendentale Freiheit を認定せり慎獨之賛に云く心之良知斯之謂聖當下自在[○]聖凡一性[○]と此に當下自在と云へるは即ち當下不昧の良知は自由自在なりの意なり又中庸解に左の如く云へり

道はたどへば水の如し人はたどへば魚の如くなれば本來道と人と一貫にして離れざるものなり只人意念の惑に依りて自ら離るゝのみ故に惑ひて學ばざれば離る學びて覺るときは吾心即ち道なり魚

は水を得て生樂の自由自在を得、水を離るれば其苦痛云ふべからず、人の道に於けるも亦如是、

此れに由りて之れを觀れば、人道と合すれば、魚の水を得るが如く、自由自在なるを得るなり、藤樹は經驗界の必然性を道破せしにはあらざるも、先天的自由は分明に認定するを得たり、

藤樹は又因果應報を以て倫理的行爲の制裁となし、苦樂は自業自得に外ならずとせり、彼れ曾て諸生に謂ひて曰く、余深信善惡之應報故、一舉一動無不畏敬汝輩、雖小事決不可輕々處理焉と、又陰隲之解を著はして因果應報の類例を列舉せり、又辨惑立志を論じて云く、與奪の權は天に在りて得失の機は人の一心に在り、是を以て自反慎獨の功新にして、仁に違はざるときは、天是れを與へ給ひて、人は是れを得る外に願ひ自ら欺きて仁に違ふときは、天是れを奪ひ給ひて、人は是れを失ふと、是故に苦樂の何づれを得るかは、各自ら其所爲によりて之れを定むるなり、故に行爲を起發する初一念の動機如何は苦樂の由りて分かるゝ所なり、藤樹

は此意を述べて左の歌を作れり、云く、

たのしみも又くるしみもよそならず

たゞ一ねんのごこくごくらく、

藤樹又翁問答卷二に於て福善禍淫の理を詳細に論述せり、然れども彼れ因果應報の事に關しては、間、甚しき迷信に陥れり、是れ固より尺璧の寸瑕と雖も、亦一の缺點たるや疑なきなり、



實際的方面

(一) 立志

實際的方面に於ては立志を先きとす。志は他なし、道德を修め、聖人となるを期するにあり。藤樹立志を論じて云く、

志者致知之始、隣聖之基本也。故曰志真立則驢鳴亦爲師、苟不立其志則孔聖亦不爲師。故學問之道無他在立、必爲聖人之志而已矣。

志者氣之帥也、故克立其志、千過不來、萬欲忽消。人云雖立其志、未能克己、此未體察者也。子曰三軍可奪帥、鄙夫不可奪志、宜自省。

志有真假、志名志利、志色、種々顯于外、皆滅生入死之假志也。唯志於道一念養生、出死之真志也。人之所欲無甚於生、其所惡無甚於死、而妄假志而不知真志者、可憐、可憐。

又志を論じて云く、

志と云ふは道に志すなり、初學の人、道に志して未だ道を知らずと雖

も、心志の向ふ所正しき故に邪僞の惑解し、

學びて志を立つるは義理に志すなり、人の知らざるを以て義を破ぶることなきは、是れ學の始めなり、

天地の間に己れ一人生きて有ると思ふべし、天を師とし、神明を友とすれば、外人に頼る心なし、

最後の一語、最も學者に適切なり、己れ自ら先づ獨立して自主的精神を有するにあらざれば、何等の事業も成就し難かるべし、

(二) 惑 悟

己に志を立てたる以上は、如何なる事より始むべきか、先づ其惑障を打破せざるべからず、蓋し人類は私欲の爲めに、惑障に蔽はれ居るが故に、良知の光明を見ず、若し其惑障を打破するを得ば、良知再び天日の如く光明を放ち來たらん、國領大に與ふる書に云く、

意欲の魔障重き時は、良知の主翁權を失ふ故に、提撕方なく、墮落に及び、候、其體は、ふつとすたり、候様に、相見ゆるものに、候、然れども氣機の

動靜常ならざる故に、魔障も時として退散仕ものに候。其時又良知星々として、適を悔ゆる心切なるものに候。此好時期に於て、志だにすたらざれば、進修の益有之ものに候。

藤樹又惑悟を論じて曰く、

解、惑、則、心、疑、惑、悉、消、化、而、無、我、之、吾、立、而、道、心、常、明、故、吾、與、心、合、同、而、爲、
悟、心、即、道、心、也、

翁問答卷四に尙ほ一層適切なる論あり、其言に云く、

夫、れ、人、間、は、迷、悟、の、二、つ、に、極、ま、れ、り、迷、ふ、と、き、は、凡、夫、な、り、悟、る、と、き、は、
聖、賢、君、子、佛、菩、薩、な、り、其、迷、と、悟、り、と、は、一、心、に、あ、り、人、欲、深、く、無、明、の、雲、
厚、く、心、月、の、光、り、幽、か、に、し、て、暗、の、夜、の、如、く、な、る、を、迷、ひ、の、心、と、云、ふ、な、
り、學、問、修、行、の、功、積、ん、で、人、欲、清、く、盡、き、て、無、明、の、雲、晴、れ、心、月、の、靈、光、明、
か、に、照、ら、す、を、悟、り、の、心、と、云、ふ、

是れ惑障さへ打破すれば、我れ即ち真吾となりて、當下不昧の良知と一體たるを得べきを謂ふなり、

(三) 自反慎獨

惑障を打破せんには自反慎獨をなさざるべからず蓋し一切の倫理的行為は自反慎獨を以て第一となす自反慎獨は即ち聖人の境界に入るの關鍵なりと謂ふべし藤樹自反慎獨を論じて曰く、

自反慎獨通治萬病之聖藥有換骨顯神之良能湯散丸之所不治鍼石灸治之所不及非此藥不及非此藥不能癒雖然而服食者尠嗜

又國領大に與ふる書に云く、

心裏面に常住不息の良知の主人公御座候この君に御對面なされ工夫御勤め候へば何時となく浮氣除き申べく候扱又工夫間斷なく候へば程なく主人公に御對面あるべく候主人公に御對面以後は萬事顛倒除きやすきものにて候、

又佃叔に答ふる書に云く、

外物に引れ候も答我心に在りて外物に御座なく候世俗に移され候も世俗に谷なくて答は我心に御座候能く自反なされ心上の意魔を

御除き候へば天下に異をなすもの御座有間敷候。

静なる心の水に住む月の

かくるゝ波を時に定むる、

自反慎獨によりて始めて當下不昧の良知と合一し世界の本体と一體となる、即ち先天未葺冲漠無朕の境界に入りて神明の地位に安住するを得るなり、一切の倫理的行爲は之れを起發點として開始すべきなり、

(四) 修徳及び積善

假令自反慎獨によりて當下不昧の良知と合一するを得るも、忽ち又私欲の爲めに蔽はれ、長く止まるの境界にありて其行爲を規定すること能はざれば徳を修むること能はず、藤樹乃ち修徳の法を論じて曰く、吾人徳を修むることを思はゞ、日々に善をせん而已、一善益すときは、一惡損す、日々に善をなさば、日々に惡退くべし、是れ陽長ずるときは、陰消するの理なり、久しく怠らざらんば、善人とならざらんや、名は實の聲なり、又善人は名あるべし、實あり名あり、是れを徳と云はざらんや、

人利に入るものは義を無みず、義を尊ぶものは利を卑む。天理人欲并次立たざるが故なり。

是故に徳を修めんと欲せば積善の功を成すに若くはなし。藤樹乃ち積善の法を論じて曰く、

人皆惡名を惡みて令名を好めり、小善を積み、積らざれば、令名顯れず。小人は人の目に立つべき善ならは爲さんと思ひて、小善は目にもかけず、君子は日々に爲すべき小善を、一つをも捨てず、大善も應ずれば、是れを行ふ求めて爲すにあらざ、夫れ大善は稀にして、小善は日々に多し。大善は名に近し、小善は徳に近し。大善は人争ひて爲さんとす、名を好むが故なり、名によりて爲すときは、大も小となる。君子は小善を積んで徳を爲すものなり、眞の大善は徳より大なるはなし、徳は善の淵源なり。

是れ實に有徳者の心情にして、學者の最も勉むべき所なり。其言たる、易の繫辭下に「善不積不足以成名、惡不積不足以滅身、小人以小善爲无益、而

弗爲也、以小惡爲无傷、而弗去也、故惡積而不可掩、罪大而不可解、と云へるよりも一層適切なるものあるなり、

(五) 毀譽

世の毀譽褒貶は人の心を動かし易きものにて、道に志あるものど雖も、動もすれば、輒ち之れが爲めに左右せらるゝことあり、故に藤樹は毀譽に就きて深く戒むる所あり、其言に云く、

物事實義に叶はざれども、當世の人の譽むることなれば、是れをなし、實義に叶ふことも、人毀ることは、之れを止む、眼前の名を求むるは、利なり、名利の人、之れを小人と云ふ、形の欲に従ひて道を知らざればなり、

人の己れを譽むるを聞きては、實に過ぐる小事たりども、悦び誇り、己れを誇れるを聞きては、有ることなれば、怨み、無きことなれば、怒る、過を飾り非を遂げて改むることを知らず、人皆其人品を知り、其心の邪を知れども、己れ獨り克く隠して知られずと思へり、欲する所を必と

して諫を防ぎて入れず、

人の非を見るを以て己れ智ありと思へり、自滿せざるものなし、道に違ひて譽を求め、義に背きて利を求め、士は媚びて手立を以て、祿を得んことを思ひ、庶人は人の眼を暗まして利を得んとす、之れを不義にして富み且つ貴き浮べる雲の如しといへり、終に子孫を亡ぼすに至れども察せず、

己れあることを知りて人あることを知らず、己れに利あれば人を害ふことを顧みず、近きは身を亡ぼし、遠きは家を亡ぼす、自滿して才覺ありと思へるものは是れなり、愚これより甚しきはなし、

藤樹又佃子に與ふる書に交はる所の人の善惡是非は反りて己れ自ら然からしむる所なるを論じて曰く、

萬事の支か候へば、他人の非は無之候、皆我心にすくみたる非ある故にて候、云世間の人是我心の立様に依りて、魔どもなり、又師友どもなるものにて候、

是等の名言、眞に千古不磨、思ふに藤樹教ふる所の如きは、ダムマバ、ダ、
若くは、スツタニバタ、若くは福音書中説く所と、伯仲の間にあると謂ふ
べし、

(六) 悔

如何なる人も過失なきこと能はず、故に一たび過失ありたればとて、忽
ち絶望して放縱し、再び放心を求めて本來の地位に立ち還へることな
ければ、世殆んど、完人なからん、是故に古來の聖人皆悔悟に就きて教ゆ
る所多し、然るに藤樹の悔を説くこと、最も適切なり、其言に曰く、

悔は、凶より吉に、越くの道なり、強く悔ゆることは、反りて、先非の病、援
けざる根なり、昔ありたる過失の今は、跡方もなくなりて、心氣替りた
ることは、思ひ出で、いも悔はなし、唯よその事の如し、思ひ出だして、首
を搔き汗出づるは、未だ、其過失の根、伏藏して、又も其境をあらはずが
故なり、

悟悔の心法も此の如く説き去りて、實際に効力あり、孔子曰く、過則勿憚

「故」^と、此言餘りに簡單に過ぎて、悟悔の工夫は窺ひ難し、子貢曰く「君子之過也、如日月之食焉、過也人皆見之、更也人皆仰之」と、是れ亦悔悟の工夫如何に論及せず、又普賢觀經説く所の懺悔の工夫の如きは、縷々數百言に涉ると雖も、未だ藤樹の言の簡明にして要領を得たるに及ばざるの感あり、

(七) 孝

藤樹の所謂孝は廣大無邊の意義を有するものにて、決して普通人の思惟する如き狹義の孝にあらず、若し狹義に解釋せば、孝は父母を敬愛することとなり、然れども藤樹に據れば、孝は先天的に世界に實在し、人類の行爲によりて發達し來たれる倫理的秩序なり、今之れを考ふるに、孝經援神契(緯書の七一)にして(古微書卷二十九)に云く「元氣混沌、孝在其中」と、是れ孝を以て人類に始まるにあらず、人類に先ちて世界に實在するものとすものなり、後、何人か此旨意を敷衍して全孝圖説を作れり、載せて孝經大全卷一にあり、藤樹是等の説に本づきて、孝を廣義に解釋せり、藤樹自ら

作○る○所○の○孝○經○心○法○に○云○く○孝○は○天○地○未○盡○の○前○
に○あ○る○太○虛○の○神○道○な○り○天○地○人○萬○物○皆○孝○よ○り○
生○ぜ○り○と○此○れ○に○由○り○て○之○れ○を○觀○れ○ば○孝○は○實○
に○人○類○に○先○ち○て○世○界○に○實○在○す○る○而○已○な○ら○ず○
又○世○界○萬○物○を○發○生○す○る○根○本○主○義○な○り○即○ち○世○
界○萬○物○の○發○達○進○化○を○催○進○す○る○根○本○主○義○な○り○
翁○問○答○卷○一○に○も○元○來○孝○は○太○虛○を○以○て○全○體○と○
し○て○萬○劫○を○經○て○も○終○り○な○く○又○始○め○な○し○孝○の○な○き○ど○き○な○く○孝○の○な○き○も○

(チ)藤樹全書卷二に載する
まごころの全孝圖及び卷六
に載する所の孝の第一説
は即ち孝經大全の全孝圖
説なり又卷二に載する所
の「人在氣中」云の一文亦
孝經大全第一卷載する所
の全孝心法なり何づれも
藤樹の作にあらず讀者宜
しく注意すべきなり

の○な○し○と○果○し○て○此○の○如○く○な○れ○ば○孝○は○世○界○の○最○大○理○法○の○如○き○も○の○に○し○
て○遍○一○切○處○ omnipresent の○性○を○有○せ○り○其○他○藤○樹○は○孝○を○解○釋○し○て○或○は○其○
全○體○充○塞○於○太○虛○通○徹○於○無○限○と○云○ひ○又○太○虛○之○神○明○是○其○本○體○聖○人○之○妙○用○
是○其○感○通○と○云○へ○り○藤○樹○に○あ○り○て○は○孝○は○廣○大○無○邊○の○世○界○的○實○在○に○し○て○
即○ち○真○知○と○同○一○の○者○な○り○孝○經○心○法○に○も○神○理○の○含○蓄○す○る○所○を○孝○と○す○言○
語○を○以○て○名○づ○け○云○ふ○べ○か○ら○ず○強○ひ○て○象○を○取○り○て○孝○と○云○ふ○と○云○へ○り○是○

故に孝は獨り經驗的の旨趣を有するに止まらずして、又先天的の旨趣を有するものにて、恰も佛教の眞如實相の如く、言説の能く盡くす所にあらざるなり、尙ほ委しく藤樹の意を述べんに、孝は世界に實在する大道にして世界萬物は唯此れによりて發達進化するを得るなり、若し人類に就きて之れを言へば、孝は先天的に我身に伏藏するものにて、我生長するに從ひて發達し來たる即ち我徳性なり、即ち我眞知なり、我徳性と云ひ、我眞知と云ふものは、是れ父母遺體の天真に外ならず、之れを養成し、之れを尊重し、之れに率由するは、即ち父母を敬愛するなり、藤樹此意を述べて曰く、

自己徳性乃父母遺體之天真也、是以養吾性、所以養親也、尊吾性、所以尊吾親也、此則大孝之精髓、不論在膝下與否、

父母は又祖先の遺體を受けたるものにて、其本源に溯りて之れを考ふれば、天地神明に歸せざるを得ず、故に藤樹が引用せる全孝心法中にも、可見此身不但父母遺體也、是天地的遺體、人是太虛的遺體、と、藤樹又孝經

援神契を引きて曰く、

孝在混沌之中太虛本體之神靈在方寸者爲孝所謂未發之中是也故曰
孝者在混沌之中、

又孝經啓蒙に詩の大雅の「無念爾祖、聿修厥德」を註して云く、

父母之本推之至始祖始祖之本天地也天地之本太虛也舉一祖而包父
母先祖天地太虛、

此れに由りて之れを觀れば、孝は父母を敬愛するに始まると雖も、其關係する所は、決して父母に止まるに、あらず、父母を敬愛するは即ち天地神明を敬愛するなり、藤樹此に至りて一種深遠なる祖先教を建設するものと謂ふべきなり、然れども藤樹の所謂孝は實に上下の關係を有する而已ならず、又縱横の關係を有するものなり、即ち博愛的人道の如き、萬物一體の達觀の如き、仁義禮智信の五常の如き、皆孝の結果に外ならざるなり、孝經心法に云く、

其親を愛する心は、天下に於て悟むものなし、其親を敬する心は、天下

に於て、慢るものなし、愛敬親に事ふる一心の上に盡くして、天地同根萬物一躰の性命明かなり、一日も私欲亡びて、天理存する時は、其大を尋ねるに外なく、其小を見るに内なし、僅に始めて仁を云ふべし、義は孝の勇なり、禮は孝の品節なり、智は孝の神明なり、信は孝の實なり、

若し孝を行へば、是れ天理の自然に率ふが故に、是れ倫理的秩序に合するが故に、能く發達進化するを得るなり、是故に藤樹は孝を以て世界萬物の發達進化を催進する根本主義となせり、若し孝を行はざれば、早晚滅亡を免れず、是れ自衛自進の理法に逆へばなり、藤樹乃ち不孝の自滅を來たす所以を述べて曰く、

這箇是人根、若滅却此心、則其生如無根之草木、倏不死者、苟幸免而已、

孝は倫理上此の如き重且つ大なる綱常なるが故に、學者の學ぶべきは即ち孝に外ならず、藤樹は孝を以て唯一の學ぶべきものとせり、其言に云く、

此是三才之至德、要道、生天生地、生人生物、只是此孝、學者學此而已、孝

于何^〇在^〇在^〇吾^〇此^〇身^〇離^〇身^〇無^〇孝^〇離^〇孝^〇無^〇身^〇立^〇身^〇行^〇道^〇光^〇于^〇四^〇海^〇通^〇于^〇神^〇明^〇
我身の此の如く存在するは祖先の孝によるなり、若し祖先にして不孝
なりしならば、我身は決して此の如く存在するを得ず、我血族は疾くに
滅亡すればなり、故に「離孝無身」と云へり、然るに其孝は我身の實在即ち
良知となりて、我れに伏藏せり、故に「離身無孝」と云へり、唯、孝さへ能く行
ふを得ば、我身の徳、遂に光輝を放ちて世界を照耀するに至るべきなり

(八) 忠

忠に就きては藤樹説く所多からず、蓋し彼れ忠を以て孝の一部分と見
做すが故に、其孝を説くに當りては忠をも含み居ると思惟すべきなり。
翁問答卷三に云く、

君の恩は親の恩にひとしく廣大なる恩徳なり、忠臣は必ず孝子の門
より出づるものなれば、孝徳の明かなるものは、必ず戦陣に於て武篇
を勵み、武功を立つるものなり、

此れに由りて之れを觀れば、藤樹は孝徳さへ備はれば、忠は自ら附隨し

來たるものとするなり、孝經啓蒙に云く、

忠○本○孝○中○之○一○端○故○所○以○事○家○人○嚴○君○之○敬○所○以○教○臣○也○經○曰○以○孝○事○君○則○忠○此○意○也○

是れ即ち忠孝一本の旨意なり、藤樹は孝經に「資於事父、以事君、而敬同」とあるによりて孝を見ること最も重く、之れを原本的となす、之れに次ぎては、忠最も重きなり、孝經啓蒙に云く、

君○臣○夫○婦○長○幼○朋○友○四○倫○之○中○君○臣○之○義○最○重○

藤樹曾て新谷侯に事へしも、故郷の老母を養はんが爲めに、官を棄て、逃げ歸りたり、其時の書置の中に「されば忠孝の二つをわきまへ見中に孝はちもくして忠はかるし」と云へり、其孝を以て第一となすこと、以て證すべきなり、

(九) 謙

古來聖賢謙德に就きて教ふる所少しとせず、書の大禹謨に「滿招損謙受、益」と云ふが如き、易の謙に「天道虧盈而益謙」と云ふが如き、老子が「天之道

其猶張弓乎。高者抑之、下者舉之、云ふが如き、耶蘇が、且自高者必降爲卑、
自卑者必升爲高也、と云ふが如き、皆千古の格言なり、藤樹も亦謙徳に就
きて放ふる所多く、其中學者に適切なるものあり、個子を送る序に云く、
夫人心之病、莫大於滿心、人之浮氣、躁念、千狀萬態、如狂如醉、知病、悉是滿
心爲祟、是以心術之要、莫先於降滿致虛、

又老子の三寶を論ずる文に曰く、

謙は尊くして光り、卑くして隘ゆべからず、人に下るものは人常に愛
敬し、吉祥門に集まる、

大學抄にも此れと同様の論あり、是れ易の謙に、謙尊而光、卑而不可踰、
云へるに本づく、と雖も、亦名言たるを失はず、藤樹又謙意を論じて曰く、
謙者、虚也、心虚則好惡出於自然、是非見於心體、廓然大公、而物來順、應、意
者、心之所倚也、謙與意相對、心有所倚、則好惡私作、是非逆播、萬欲千殃、於
是乎生、終喪其本心、故大學誠意之傳、以自謙、揭示本心、自然之好、惡、以爲
誠意之準的、旨哉、

藤樹は謙あれば意なく、意あれば謙なく、畢竟謙と意とは兩立せざるものとすなり、又謙を論じて曰く、

天德由此明、五福由此得、子曰、如有周公之才之美、使驕且吝、其餘不足觀也、已、學者克去滿心、而不求謙德、則雖博學多才、未足爲出下愚之凡、窟可猛戒、

是等の言説を玩讀するに、藤樹の謙徳を論ずるの切なる、多く古の聖賢に譲らざるものあるなり、

(十) 忍

忍は謙と相竝ちて人の美德を成すものなり、藤樹此事に就きて教ふる所あり、其言真に傾聽すべし、乃ち忍を論じて曰く、

善用此字、克私欲、則世間無窮之苦痛、忽消、而心安氣和、百禍福、因此而已矣、

又曰く、

這字、從、又、從、心、以、羞、惡、之、心、爲、裁、割、人、欲、之、利、刀、能、用、此、忍、則、四、方、八、面、來

之、心、名、利、之、妖、魔、情、欲、之、盜、賊、无、一、不、斷、盡、者、故、曰、忍、字、衆、妙、之、門、
此文忍の字を説きて甚だ興味あり、而して又實際に適切なる所なしと
せず、藤樹又曰く、

這箇是以道制之勇心也、初學鍊形化氣之良方、入道積德之門也、
別に又忍の字に題するの詩あり、云く、

一忍七情皆中和、再忍五福皆駢臻、忍到百忍滿腔春、願々宇宙都真境、
押韻もなく、平仄も整はずと雖も、尙ほ琅々誦すべき所以は其教として
價值あるが故なり、



第七 政治論

藤樹は元來倫理を以て主とするものなるが故に、政治の事は多く言はず、然れども亦間、政治に關する論なきにあらざ、藤樹は孔孟の如く政治と倫理を分離せず、政治は倫理を基礎として成るものとせり、即ち政教一致論者なり、翁問答卷二に云く、

政は明徳を明にするを本とす、學問は天下國家を治むる政なり、元來一にして二にして一なるものと心得べし、云云、天子諸侯の身に行ひ給ふ一事、口にの給ふ一言、皆仕置の根本なれば、政と學問と本來同一の理なる事を明かに得心すべし。

西洋にありても古代の哲學者は往々倫理を以て政治の基本とせり、殊にプラトニアリストテレス諸氏の如きは、國家の目的は民族の道徳を育成するにありとせり、佛國のフテロン氏が著はせる *Les aventures de Télémaque* も亦倫理政治の理想を敘述するものなり、然れども今日に於

りては政治は極めて錯雜せる機關となれり、其目的は固より倫理と撞
着せざるも、倫理のみによりて政治を完成するを得ざるなり、是故に藤
樹の政治に關する見解、今日より之を見れば、未だ盡くさるる所あり、然
れども藤樹は法律制度は時位等によりて斟酌する所なかるべから
ずと論じ、頗る活眼を具有する所あり、翁問答卷二に、善き法度は活法と
て事を指して定らぬものにて、候、一偏に定めたるを死法と云ひて用
いたぬものなり、云云と論ずる所、決して迂濶ならざるを證すべし、又翁
問答卷五には、頗りに權を説き、聖人の定めたる禮法と雖も、徒に之れに
従ふときは變通の活潑なし、故に禮法に違ふも、亦道に背かざる變通の
妙用を知らざるべからずと論じ、遂に權の外に道無く、道の外に權なし、
權の外に學無く、學の外に權無なしと喝破せり、乃ち知るべし、藤樹は臨
機應變の態度を取らざるべからざることを主張するものなるを、

藤樹は文武合一論を唱へ、元來文武は一徳たるものにて、決して分離す
べからずとし、武なきの文は眞實の文にあらず、文なきの武は眞實の武

にあらずとし、又孝悌忠信の道を正して行ふは文にして、孝悌忠信の障りとなるものを退治して勤め行ふは武なりとし、文と武と必然に相互關係を有する所以を論ずること、頗る巧なり、藤樹又文を仁とし武を義とし、共に人性の一徳なることを説きて曰く、

文は仁道の異名、武は義道の異名なり、仁と義は同じく、人性の一徳なるに由り、文武も同じく一徳にして各別なるものにあらず云、云、仁に背きたる文は名は文なれども、實は文にあらず、義に背きたる武は名あれども、實は武にあらず云、云、文武合一なるを眞實の文武と云ひ、眞實の儒者と云ふなり、文藝ありて、文徳なきは、文道の役に立たず、武藝ありて、武徳なきは、武道の役に立たず、譬へば、根なき草木の實を結ぶこと、能はざるが如し、後

藤樹の此論は當時にありては卓見なりと謂ふべし、上毛の巖井任重が是等文武に關する文を翁問答より抄録して、別に一本となし、も、蓋し深く其説に推服するに由るなり、

第八 學問論

藤樹は倫理を以て唯一の學問とし、學問と云へば、即ち倫理を意味するものとせり、均しく倫理と云ふも、學理を主とするにあらず、寧ろ實踐を主とするものなり、藤樹乃ち聖人を論じて曰く、

學は將來の人欲を去りて、元來の天理を存することを學ぶものなり、此心天理にして、人欲の私なきときは、即ち聖人の心なり、

又學を論じて曰く、

夫れ學は人に下だることを學ぶものなり、人の父たることを學ばずして、子たることを學び、師たることを學ばずして、弟子たることを學ぶ能く、人の子たるものは能く、人の父となる能く、人の弟子たるものは能く、人の師となる自ら高うするにあらず、人より推して尊ぶなり、

又翁問答卷三に云く、

夫れ學問は心の汚れを清め、身の行を能くするを本實とす、

此の如く藤樹にありては學問は即ち倫理を實行することなり然るに藤樹の學問の根本主義は良知なるが故に、學問の要は良知を認定して之れと合一するにあるなり、田中氏に答ふる書に云く、

學は良知を致すより外はなく志を立つるより先なるはなく候、
又佃叔一に答ふる書に云く、

學問の工夫は本體を認知するを第一義とす、

此に本體とあるは即ち良知のことなり、今其旨意を考ふるに、差僧法派の哲學思想に類似するものあり、僧法派の哲學によれば神我が大と心根との作用によりて自性の汚穢なるを覺知すれば、之れを離脱して自存的實在となるなり、藤樹の所謂良知は神我の如きものにして其私欲の爲めに汚され居ることを自覺すれば、即ち己れが本體に歸りて自存的實在となるなり、畢竟藤樹は倫理を實行するを學問とするが故に、博學多識を要せず、又詩賦文章を尙はず、専ら力を經學に用ふるものなり、經書の中には最も易を重んじたるが如し、靈符義解に云く、

蓋○儒○者○之○道○以○易○爲○主○本○四○書○六○經○所○說○諸○儒○發○明○之○語○錄○雖○廣○皆○本○於○易○
理○一○毫○有○差○則○異○端○也、

又翁問答卷三に云く、

本來易經一部を教へ廣めたる十三經なれば、易經を能く學びたるが善く候、

藤樹此の如く易を重んじたりと雖も、易に關する著書なきは惜むべしとなす、易以外に於ては孝經、大學、中庸、論語を重んぜり、藤樹固より經書を尙ぶと雖も、專ら其精神を取るを務め、毫も其訓詁に拘泥せず、換言すれば、其目的は古聖人の心と融會貫通するにありて、唯、學問として經書を講ずるにあらず、殊に經書を讀むにあらずして、經書に讀まるゝが如きは、其最も戒むる所なり、谷川寅に答ふる書に云く、

讀書は本來吾人心性の註解なり、註解を讀むは本經を悟らん爲めに候、已れが眞知を認めずして、徒に經書を究むるは譬へば、本經の文字讀を知らずして、徒に註解の訓詁を講究するが如し、

又小川子に答ふる書に云く、

蓋經有心有迹有訓話學訓話而講明其迹者初學未知文字者之所務也
已曉文義則專於正經上體察玩索須求心々融會之妙云云、

是れ陸象山が我不註六經六經皆我註脚と云へる旨意に同じく其活眼
を具有するを知るべし翁問答卷三に云く、

文字を目に見覺ゆる事ならざれども聖人の本意を能く得心して我
心の鏡とするを心にて心を讀むと申候て眞實の讀書なり心の會得
なく只目にて文字を見覺ゆるばかりなるをば眼にて文字を讀むと
申て眞實の讀書にはあらず、

又翁問答卷二に四書六經に心と迹と訓話と三つの差別あることを論
じて云く、

其訓話を學び其迹を能く辨へ其心を能く取り用ひて我心の師範と
なし意を誠にし心を正うすれば聖賢の心即ち我心となり我心即ち
聖賢の心に違はず心に聖賢の心に違はず候得ば言行自から至善

に止まるものにて候、此の如くに學ぶを、正眞の學問と云ふなり、

若し私欲によりて繫縛せらるゝ所の現象界より退藏して、沖漠無朕、先天未畫の境界に達するを得ば、即ち己れが本體と合一するを得ば、空閒時間及び因果の關係を脱するが故に、我心即ち先聖の心、先聖の心即ち我心と謂ふべきなり、藤樹曾て藤樹槩を作りて、之れを楯間に掲げ、力行強踐の資となせり、其文左の如し、

大學之道在明明德、在親民、在止於至善、

朱子曰、堯舜使契爲司徒、敬敷五教、五教者、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、是也、學者學之而已、愚按三綱領之宗旨、一、是皆以五教爲定本、而所以學之術、存養以持敬爲主、進脩以致知力行、而日新、其別如左、

畏天命、尊德性、

右持敬之要、進脩之本也、

博學之、審問之、慎思之、明辨之、篤行之、

右進脩之序學問思辨四者所以致知也若夫篤行之事則自脩身以至

于處事接物亦各有要其別如左

言忠信行篤敬懲忿窒欲遷善改過

右脩身之要

正其義不謀其利明其道不計其功

右處事之要

己所不欲勿施於人行有不得反求諸己

右接物之要

原竊惟今之人爲學者惟記誦詞章而已是以吾道之所寄不越乎言語文字之間愚嘗憂之也深故推本聖人立教之宗旨而參以白鹿洞規條列如右而揭之楣間庶幾與一二同志固守力行之也

是れ蓋し朱子の白鹿洞書院の揭示に擬して作れるものなり殊に進脩の序以下は全く白鹿洞書院の揭示に同じ又學舍坐右戒あり云く

一可明辨長幼之序而篤行惠順之義也尊幼輩行凡三等曰尊者謂長於己二十

歲以上在二曰長者，謂長於已十歲。父行者，以上在兄行者，謂年上下不節，十歲者長者。曰少者，於已十歲，以下者，謂少於已二十歲，以下者。曰幼者，謂少於已二十歲，以下者。

記曰：行一物而三善皆得者，唯世子而已。其齒於學之謂也。故世子齒於學，國人觀之曰：將君我，而與我齒讓，何也？曰：有父在，則禮然，今而衆知父子之道矣。其二曰：將君我，而與我齒讓，何也？曰：有君在，則禮然，今而衆著於君臣之義也。其三曰：將君我，而與我齒讓，何也？曰：長令也。然而衆知長幼之節矣。又曰：天子之元子，士也，天下無生而貴者也，此乃可觀長幼之序，不可不敬也。

一同志之交際，可以恭敬爲主，以和睦行之，一毫不可自擇便利，狼母求勝，而不可淫嫖戲慢，評論女色，不可動作無儀，不可里巷之歌謠，俚近之語，出諸口，宜德業相勸，過失相規。

一每日清晨拜誦孝經，可以養平旦之氣，而后或受讀，或受講，或溫習，或膠寫，不可一時放慢，晚炊后，可以遊藝，若及志倦體疲，則可少逍遙自適。

第九 教育論

藤樹の學問は倫理を實行するを目的とするが故に其教育も子弟を導きて道徳に歸せしむるにあり、即ち藤樹は知育體育等を度外視し、獨り德育を尙ひ専ら徳教を布かんことを期するものなり、大學十四條に云く、

聖○賢○教○人○千○言○萬○語○總○歸○于○誠○意○一○路○舍○此○更○無○別○事○可○做○無○別○路○可○走○所○謂○一○貫○宗○是○也○

殊に藤樹は言論により注入せんとするよりは、身自ら模範となりて、躬行實踐を務め、此れによりて人を自然に教化せんことを主張せり、翁問答卷一に云く、

根○本○眞○實○の○教○化○は○徳○教○な○り○口○に○て○は○教○へ○ず○し○て○我○身○を○立○て○道○を○行○ひ○て○人○の○自○ら○變○化○す○る○を○徳○教○と○云○ふ○

又熊澤子の行を餞する文に云く、

夫師範之官立本於隱微而生道於講論、

是れ教育は自反慎獨より歩を進め、之れに次々に講論を以てすべきを謂ふものなり、

然るに徳教を施すには、幼少の時を以て最も適切なりとす、是れ人は幼少の時に於て最も變化し易ければなり、是故に藤樹は翁問答卷一に於て幼少の時の教育の最も輕忽にすべからざることを論せり、

藤樹は又音樂の教育上甚だ重要なることを認識せるが如し、論語十八條に云く、

正樂を以て遊びて后、心の安する處、遊び樂む事正しくして后、徳に入る事易し、夫れ樂に五聲十二律あり、或は歌に發し、或は絲竹に調べ、人の性情を養ひて邪穢を蕩滌し、和順にして道徳を得るものなり、故に風を移し俗を易ふる事、樂より善きはなし、道徳の樂に成就する事は問學にして正樂は習ひて后、初めて知るべし、

是れ音樂を以て徳教に裨益あるものとするなり、藤樹は又女子教育の

必要を主張せり當時にありては、世人一般教育と云へば、殆んど男子に限るものと思惟せるに、藤樹が女子教育の必要を主張せるは、誠に卓見と謂ふべし、今、春風を按ずるに、藤樹は詩を作り歌を讀むことは、女子に相應せず、唯、心を脩むる學問は、女子に必須なりとせり、其言に云く、

詩を作り歌を讀む學問は、婦人の業に似合はざることなれども、女中に取扱ふ方多くして、人も又怪まず、心を脩むることは、女中の第一義なれば、似合はざる杯と云へるは大なる誤なり、何んとなれば、女は陰氣を形氣の本とすれば、其氣騷がしく、小いさくして、心けはしくして、ひがみ易きものなればなり、其上、閨門の内へのみ明かし暮らして、其習ひ私勝にして、其見る所狹し、故に女に慈悲正直の心まめやかなるは稀なり、されば佛教に女人は取りわけ罪深くして成佛しかたしと云へるも、此意なり、されば、女人は、取りわけ、心の學問なく、は、かなはぬ事なり、妻の心まめやかにして、孝順慈悲正直なれば、親子兄弟は云ふに及ばず、一門まで和睦し、其家よく齊ひ、賤しき奴婢迄も、其恩澤に

潤ふ、其家は是れによりて福厚く、子孫も是れによりて繁昌す、云云。
藤樹は専ら女子を訓戒せんが爲めに、鑑草六卷を著はせり、後、貝原益軒
女子教育に注意する所ありたれども、藤樹已に之れが先鞭を着けたり
と謂ふべきなり、



第十 異端論

藤樹の學問は、已に上來敘述せる所によりて了知すべきが如く、種々なる點に於て佛教と相類似せり、其良知は眞如の如く、其知止は三昧の如く、其感悟は無明と解脱の如く、算へ來たれば、兩々對照すべきなり、是故に藤樹は佛教の旨意、總へて自家藥籠中にあるを言へり、曾て諸生に謂ひて曰く、

頃日余看佛書、其與旨亦悉包含于吾儒教中、若彼教別有、好意思學之、亦可也、彼亦不過明其心、則何舍吾儒全、駢之教、而別求之哉、學者所宜知也、然れども藤樹の學問と佛教とを比較考察すれば、其間多少の別なきにあらず、其多少の別は倫理を實行する上に重大なる關係を有するものなり、是を以て藤樹は痛く佛教を排斥し、其異同を指示し、自家の學と混同することなからんことを期せり、即ち倫理論の下に敘述せる意念に關する見解の如き、蓋し重要なる差異なり、藤樹異學を論じて曰く、

人○道○の○無○欲○は○義○あ○る○こ○と○を○知○り○て○利○を○知○ら○ず○公○義○に○従○ひ○て○私○心○な○
き○を○無○欲○と○す○取○る○べ○き○義○あ○れ○ば○取○り○興○ふ○べ○き○義○あ○れ○ば○興○ふ○蓄○ふ○べ○
き○義○あ○れ○ば○蓄○へ○施○す○べ○き○義○あ○れ○ば○施○す○只○心○の○義○に○隨○ひ○て○無○欲○と○し○
利○に○依○る○を○欲○と○す○る○な○り○、

此れに由りて之れを觀れば、無欲と云ふことは、藤樹も佛教と同じく、之れを期す、然れども藤樹の無欲は義によりて動くことなり、意念を滅するにあらざ、意念を正うして、義の一筋に従ふことなり、是故に藤樹の無欲は活動的の無欲なり、枯木死灰の無欲にあらざ、世間のあらゆる事業に従事して無欲なるを得るなり、利に依るの心なければ、即ち無欲なればなり、是故に藤樹の眼を以て之れを見れば、釋迦も達磨も滑臂を演せるなり、是故に藤樹は釋迦も達磨も皆一括して之れを狂者と稱せり、翁問答卷四に云く、

釋尊十九にて天子の位を棄て、山に入り、三十成道の後、人間本分の生理を營まず、或時は乞食し、人倫を外にし、人事を厭ひ棄て、種々の權教

方便説を説きて愚民を誑誘めされたること、皆是れ無欲無爲自然清淨の位を極上と定め、元氣の靈覺に任せたる毫髮の差より起りたる無欲の妄行の誤りなり、

藤樹は此の如く釋迦の行爲も教義も共に誤まれるものとなせり、翁問答卷五に云く、

位にあるを欲とし、位を棄つるを無欲とし、財寶を貯ふるを欲とし、財寶を棄つるを無欲なりと思ふは、未だ明德昧くして位を好み、財寶を貪る心根殘りて外物に凝滯して便利揀擇の私ある故なり、聖人の心は良背敵應にして、意必固我の私なきに因りて、富貴貧賤、死生禍福、其外天下の萬事、大小高下、清濁美惡に於て毛頭好惡揀擇の情なく、只滿腔滿目、一貫皇極の神理ばかりなり、然る故に位に登るをも、財寶を貯ふるをも、欲ともせず、位を棄て財寶を棄つるをも、無欲ともせず、又欲ともせず、只天道の神理に背くを欲とし、妄とす、天道の神理にかなふを無欲とし、無妄とす、神理にかなひぬれば、天子の位に登るも、財寶を

貯ふるも、位を棄つるも、財寶を棄つるも、皆無欲なり、無妄なり、神理に背きぬれば、天子の位を棄つるも、財寶を棄つるも、位に登るも、財寶を蓄ふるも、皆欲なり、妄なり、欲と無欲と、妄と無妄とは、行ふ事の品には、あらず、只心根にあるものなれば、如何様なることは、無欲なり、如何様なることは、欲なりと、事にて定むるは、迷ひたる凡夫の心得、又は異端偏僻の法なり、釋尊此心を悟りぬされたらば、王宮を檀特靈山とし、寂光淨土とし、天子の位を摩尼輪の位とし、袞衣玉殿を麻衣草座とし、禮樂刑政を說法として、衆生を濟度めさるべきに、けはしくひがみて、王宮を厭ひ、山に入り、袞衣玉殿を厭ひて、麻衣草座を好みめされたるは、何たる心ぞや、良背敵應、不和與、時は、王宮帝位、何ぞ我れを汚さんや、山中の靜座、何ぞ我れをまさんや、袞衣玉殿、何ぞ我れを損せんや、麻衣草座、何ぞ我れを潔くせんや

是れ藤樹の眼に映じたる釋迦なり、畢竟欲と無欲と、妄と無妄とは、我心の狀態如何によることなれば、外部の形狀境遇等に拘はるを要せずと

の意なり、藤樹が此に天道の神理と云ふは、利に對する義と同一と見做して可ならん、藤樹又達磨を評して、禽獸に比せり、達磨之責に云く、

九○年○撰○像○我○賊○本○心○棄○絕○人○事○乃○獸○乃○禽○

又坐禪を論する文に云く、

瞿○曇○迷○而○入○山○又○迷○而○出○山○達○磨○惑○而○面○壁○又○惑○而○背○壁○譬○如○蟻○旋○磨○

儒教は現在社會に於ける人倫の關係に就きて教を立つるものなるが故に、日常云爲の間に於て道に合するを得べし、必ずしも家を棄て山に入るを要せず、又壁に面し壁に背するを要せず、是故に藤樹釋迦と達磨とを併せて之れを非議するなり、藤樹は又佛教の如きは、甚しき害はあれども、益とては寸毫もなしとせり、大學抄に云く、

釋迦帝位を棄て、出家し、下に居りて教へをせんとす、終に遂げずして、其生國に廢たれ、中國に入りて中國を害ひ、日本に來たりて、日本の神道を亡ぼし、國を衰微せしむ、云云、釋迦帝位を棄てたる心は殊勝に侍れども、仁を好んで、聖學を知らざるの愚に陥りたり、生れ付きたる

帝位を棄つるは五倫を離るゝの始めなり、佛教始まりて后天下に於て何の益あるや、害はあけて數へ難し、益は一つもなし、云云、

此論は固より辭に失す、佛教が寸毫の益を爲さざりしとは斷言すべからず、先づ美術の如きは、佛教によりて起れり、文學の如きも、佛教によりて裝飾せられたり、加之佛教は我邦の思想界を豊富にせり、儒教の如きも佛教の刺激によりて深遠なる旨趣を有するに至れり、即ち藤樹の唱道せる王學の如きも、佛教の影響を免れず、果して然らば佛教の益ありしは疑なし、然れども藤樹の眼中には、唯實踐倫理あるのみなれば、實踐倫理の上より佛教益なしと言ひしならん、佛教が實踐倫理に何程の裨益を與へしやは、實に疑問に屬するなり、是故に藤樹の論亦一理なきにあらざるなり、

藤樹又異學を論じて曰く、

佛教は淺ましき愚なる道なり、故に愚なるものは、好しと思へり、佛者には心根の愚なるものならねば、成らぬものなり、

釋迦達磨さへも狂者と稱する程なるが故に、藤樹の眼中にありては如何なる碩徳高僧も、迷へる癡人に外ならざるなり、

藤樹は其論の極端に走るまでも、佛敎を排斥せり、是れ何故ぞ、王學の甚だ佛敎に類似する所あるは事實なり、王學は儒佛二敎の融合によりて産出せられたりと云ふも、不可なきが如し、古來王學を稱して儒中の禪と稱するも、亦故なきにあらざるなり、之れを要するに、王學は佛敎と混同し易し、唯佛敎と混同し易きが故に、痛く佛敎を排斥し、人をして迷はざらしめんとするなり、寸毫の差は、遂に千里の差を來たすことあり、是を以て佛敎と異なる點を辨明するの必要あり、然るに同じく佛敎とは云ふものゝ、王學は殊に禪に近し、是を以て禪祖の達磨を罵倒せざるべからず、是れ達磨の贊ある所以なり、贊は本と人物の徳性を贊するの意なるべきに、達磨の贊は贊にあらざり、冷嘲熱罵なり、故に之れを達磨の罵といはゞ適當ならん、

藤樹は佛敎の外老莊管商等の敎は勿論、記誦詞章の學を併せて皆禽敎

として之れを排斥し其理由を述べて曰く、

人^〇與^〇禽^〇獸^〇之^〇辨^〇其^〇機^〇在^〇一^〇心^〇之^〇敬^〇不^〇敬^〇五^〇倫^〇之^〇遜^〇不^〇遜^〇天^〇事^〇之^〇脩^〇不^〇脩^〇而
已^〇雖^〇曰^〇讀^〇人^〇之^〇書^〇然^〇其^〇所^〇以^〇求^〇書^〇者^〇不^〇在^〇書^〇之^〇所^〇以^〇爲^〇書^〇而^〇却^〇以^〇爲^〇求^〇温
飽^〇之^〇術^〇是^〇以^〇其^〇讀^〇愈^〇多^〇而^〇其^〇德^〇愈^〇昏^〇其^〇所^〇存^〇者^〇只^〇是^〇禽^〇心^〇惟^〇豈^〇可^〇不^〇曰^〇禽
獸^〇之^〇教^〇乎^〇、

然るに藤樹は神道に對しては其態度大に異なり彼れ曾て一切鬼神を
遠け其祖先を除くの外は如何なる祠廟も詣拜せず説を爲して曰く、賤
之於貴、不可以相親、在人且然、况鬼神幽明、殊途者乎、と然るに後大に其非
を悟りて、曰く、他神姑置之、若太廟則天地開闢之祖、凡生於此間者、安有遠
焉而不祭之理哉、と乃ち往きて太廟を拜せり、是れ其三十四歳の時なり
祝詞に準するの詩あり、云く、

光華孝德續無窮、正與犧皇業亦同、默禱聖人神道教、照臨六合太神宮、
又曾て菅公の廟に詣謁し、深く其德に推服せり、菅廟に題するの詩あり
云く

七字靈光、日東、昭臨、赫々、在、儒宗、斯文、興起、冀神助、千里、飛梅、一夜、松、藤樹は深く神道の教義を崇信し、是れ毫も唐土古聖人の道と違背するものにあらずと思惟し、神道大義を著はして、神儒調和説を主張せり、今其要領を擧げんに、夫れ神道は正直を以て體とし、愛敬を以て心とし、無事を以て行とす、然るに正直愛敬無事の三者は彼、中庸に所謂知仁勇の三者にかよへり、正直は知なり、愛敬は仁なり、無事は勇なり、(一)正直の徳は知明かにして鏡の美惡を照すが如し、惑ふことなく、隠るゝことなし、一念の微にありて外に顯はれずと雖も、神明之れを知り、我れ亦之れを諱る、故に君子は獨りを慎み、平生の思ふ事、天地神明に訂して畏るべき事をば思はず、平生の爲す事、人に知られ耻づかしからん事をばせず、誤りて惡念生じ、非が事ありても、心に明かなる神知ある故に悟らずと云ふことなし、知れば則ち改めて思はず、爲さず、本どの清淨神明の常に歸るなり、人々の心に、天神一體の神明ありて、善惡共に隠れなし、鏡に向ふが如し、是故に神道には、内外明暗を以て心を二つにせず、正直を以て本

どするなり此の如くなれば心廣く體胖かにして恐るべきものなく耻づべきことなし(二)愛敬の徳は天地同根萬物一體なり人欲清く盡きて天理流行す空々如たり其大外なく其小内なし天地萬物皆心中にあり我れにあらざると云ふことなし故に我なし故に無欲にして靜なり富貴なる時は人を教育し貧賤なる時は退きて徳を養ふ生を得ては行ひ死を得ては休す君子一として自得せずと云ふ事なし(三)勇は堪忍を尊ぶ能く堪忍すれば無事なり凡心の人は不屈なる振舞のみなり夫れ咎むれば他人は云ふに及ばず親族の間と雖も怨み怒り不足の絶ゆることなし不孝不弟の本なり皆堪忍して見すごし其人を以て其人を見て凡心は此の如くなるものなりかゝればこそ凡夫とも言へと思へば酒に酔ひたるもの、正體なきと等しく凡心の迷ひを觀許すべし偶善き心ばへ振舞あるをば此れこそ此人の本心なれど喜び親み先日非を止めざるは君子の心なり總じて昔より大勇の人は物咎めせず常に怒れること稀なり温和にしておほどかなるものなり是れを沈勇とも云へ

り、沈[○]勇[○]なら[○]では[○]大[○]勇[○]は[○]な[○]き[○]も[○]の[○]な[○]り[○]、大[○]勇[○]は[○]必[○]ず[○]威[○]あり[○]、故[○]に[○]ち[○]ど[○]さ[○]ざ[○]れ[○]、[△]れ[△]ど[△]も[△]民[△]恐[△]れ[△]、刑[△]罰[△]を[△]用[△]ひ[△]ざ[△]れ[△]ど[△]も[△]罪[△]人[△]少[△]し[△]、戰[△]伐[△]せ[△]ざ[△]れ[△]ど[△]も[△]敵[△]國[△]服[△]す[△]、[△]此[△]れ[△]勇[△]に[△]は[△]あ[△]ら[△]ず[△]、仁[△]の[△]勇[△]なり[△]、智[△]、仁[△]、勇[△]の[△]三[△]つ[△]の[△]德[△]は[△]有[△]る[△]、時[△]は[△]共[△]に[△]あ[△]り[△]、勇[△]な[△]ら[△]ざ[△]る[△]の[△]仁[△]は[△]君[△]子[△]の[△]仁[△]に[△]あ[△]ら[△]ず[△]、勇[△]な[△]ら[△]ざ[△]る[△]の[△]知[△]は[△]真[△]の[△]知[△]に[△]あ[△]ら[△]ず[△]、仁[△]な[△]ら[△]ず[△]、知[△]な[△]ら[△]ざ[△]る[△]の[△]勇[△]は[△]德[△]の[△]勇[△]に[△]あ[△]ら[△]ず[△]、

藤樹は更に又知仁勇の三徳を三種の神器に配當して之れを論ぜり、其主意は左の如し、

天地ひらけて人の道あり、人の道は則ち天地の道なり、天地は不言にして人に教へ給ふ、神聖之れを翼くるに、言を以てし給ふ、但神の代には未だ文字あらざりしを以て物によりて人の徳を象どり、教をなし給へり、蓋し此心の中三の徳あり、能く萬事萬物を照し諭して辨へすと云ふことなく、溥博淵泉にして、時に之れを出だすの徳をば鏡[◎]を鑄させて之れに象どり給へり、神明不測にして私なく、寛裕溫柔慈愛の徳をば玉[◎]を磨かせて之れに象どり給へり、堪忍の力強くして、物を破らず、神武にして

て不殺の徳をば劍を打せて之れに象どり給へり、唐土の聖人は之れを
 知仁勇と名づく、天地の神道は和漢同じ事なり、我朝の神皇の象と、唐土
 の聖人の言と符節を合したる如し、是れを奇特と云ふべからず、心同じ
 く道一なるが故なり、故に神道に深きものは、儒道を借らざるも、心法明
 かにして、政教備はれり、兎んや異端をや、神道は易簡明白至れり、盡くせ
 りと謂ふべし、

藤樹は王學の立脚點より神道を解釋し、能く其肯綮を得たり、蓋し神明
 を以て我良知の本體とし、神明を内容的に考察するものなり、



第六 批判

藤樹の學問の全體の組織を考察するに、極めて佛教に類似する所多し、然れども遂に佛教と混同すべからざるものあり、佛教は厭世的にして、畢竟解脱涅槃を期すれども、藤樹の學問は現世的にして、假令ひ世界の本體を論ずるも其期する所は人倫の秩序にあり、人倫の秩序を破壊して、別に理想界を建設せんとするにあらず、故に其佛教を排斥するや、峻刻を極めたりと謂ふべし、

然るに藤樹の學問は又耶蘇教に近似せる所少しとせず、先づ其上帝は天父に比すべし、思ふに支那古代の人民は人格的の上帝を信ぜしが如し、詩經書經等によりて證明すべし、宋儒に至りて之れを哲理的に解釋せり、故に其名は同一なれども、意味は頗る變更するに至れり、藤樹は人格的の上帝を崇信し、之れを己れの本體とし、之れと合一するを期せり、然るに彼れは之れを己れが方寸の中に發見せり、即ち一切行爲の指導

者たる良知を以て上帝の降りて我れにあるものとせり、故に良知に從ふは、上帝の命に從ふ所以にして、一切禍福の分かるゝ所、實に此にありて存す、中西氏に答ふる書に云く、君子安樂の本體は、吾人方寸の内に在り、是れ天國胸に在るの旨意と符節を合するが如し、藤樹は上帝を以て無限の慈愛とせり、陰陽之解に云く、上帝眞實無妄の慈愛を以て萬物を造化し、人極を定め給ふと、乃ち上帝の慈愛を認定せるを知るべし、然れども尙ほ之れより重大なるものあり、何ぞや、藤樹は天地萬物は孝によりて生ぜるものとし、孝を以て人倫の大本とせり、此旨意を推して之れを考察するに、孝は上帝の德にして、其慈愛の發現なり、孝經心法に、神理の含蓋する所を孝とすと云ひ、翁問答卷一に、此實は天に在りては、天の道となり、地に在りては、地の道となる、元來名はなきものなれども、衆生に教へ示さん爲めに、昔の聖人其光景を象どりて、孝と名付け玉ふと云ひ、又、扱元來を能く押し極めて見れば、我身は父母の身を分けて受け、父母の身は、天地の氣を分けて受け、天地は太虛の氣を分けて受けたる

ものなれば、本來我身は太虚神明の分身變化なる故に、太虚神明の本體を明かにして失はざるを以て身を立つると云ふなりと云へり、此れに由りて之れを觀れば、孝は世界に充滿せるものにして、天地萬物の本源なり、然るに孝は慈愛なり、是故に上帝の慈愛は無限にして、絶對なるを知るべきなり、是に於て藤樹の思想は、耶穌教と益々接近し來たる、然るに藤樹は又上帝の賞罰を確信せり、原人説及び太上大尊太乙神經序によりて之れを知るべし、又天道を論じて曰く、欽崇則與五福、不欽崇則降六極、惟影響可畏可畏と、藤樹の上帝に關する觀念此の如く、耶穌教に類似せるを以て、耶穌教徒は、基督の福音を聞かずして、既に基督教會の長老たりと云はん、然れども藤樹の學問は決して耶穌教と混同すべからず、藤樹の學問は能く洙泗の精神を得たるものにして、其主眼は人倫の秩序を正うするにあり、假令ひ人類の同等を主張するも、君臣父子等の關係を蔑如するものにあらず、否、君臣父子等の關係を正確にせんと欲するものなり、之れを要するに、藤樹の學問は畢竟世間的なり、現實的なり、

時に超絶的の觀念ありと雖も、是れ唯、實踐倫理の根柢を確定する爲めのみ、出世間的の解脱を希求するにあらざるなり、然るに耶蘇は人倫の關係以外に天國を建設し、君臣父子等の關係を蔑如し、獨り人類の天父に對する關係のみを尊重し、之れが爲めには一家の中は勿論、一國の中と雖も、不和を來たすを意とせざるなり、即ち出世間上の關係の爲めに世間上の關係を犠牲に供するものなり、此の如き差異は毫釐の如し、雖も其結果は千里の差異となり、民族の運命に偉大の變動を來たすを免れざるなり、藤樹にして、今日にあらしめば、恰も佛教を排斥せしが如く、耶蘇教を排斥せしならん、藤樹が佛教を排斥せしは、殊に之れが自家の學問に類似せるが爲めなり、耶蘇教も亦藤樹の學問に類似するもの、藤樹にして之れを知りたり、ならんには、等しく之れを排斥して、人をして兩者を混同すること、莫らしめしならん、耶蘇教徒が藤樹を以て、耶蘇の教旨に合せるものとするは、二五を知りて、未だ十を知らずと、謂ふべきなり、

藤樹は道と法とを辨別し、道は普遍なれども、法は時處位によりて異なるものとせり、即ち道法の異なる所を論じて曰く、

道と法とは別なるものなり、心得違ひて法を道と覺りたる、誤多し、法は中國聖人と雖も代々替れり、况んや吾國へ移して行ひ難きこと多し、

又翁問答卷五に儒道と儒書に載する所の禮義作法とを辨別して曰く、
 儒書に載する所の禮義作法は時により處により人によりて其儘は行はぬものにて候、儒書に載する所の禮義作法は、大方周の代の制作なり、此禮義作法を少しも違へず、只今日本にて位なきものが取り行ふ事は難成候、たとひ位ある人の取り行ひ給ふども、有りの儘に少しも違はず取り行ひ給ふ事はならず候、

此れに由りて之れを觀れば、藤樹は道の普遍なるを認定すると同時に、其應用は時處位によりて異ならざるべからざるを主張するものなり、即ち支那の法律制度若くは禮義作法等を輸入し來たりて其儘之れを

我邦に應用せんとするにあらず、我邦の事情如何を斟酌して、宜しく其應用を異にすべきを勸告するものなり、孔子の言と雖も、盡く我邦に適せりとせず、逸事に云く、

論語は聖賢の言行を記したる所に、今日に合はざること有りとの玉ひて諸子に書きぬかせて、其必要の所をのみ講し玉ひき、

藤樹は先哲の和魂漢才と喝破せるが如く、日本の精神を以て、漢學を講究し、漢學の爲めに併吞せられず、我邦人の取るべき立脚點を取り、儼として樹立する所ありき之れを要するに、彼れは彼此の差別あることを辨識せり、此點に就きて之れを考ふるに、藤樹は耶蘇教徒と大に同じからざるものあり、耶蘇教徒は動もすれば、輒ち漠然たる世界主義を唱へ、西洋の耶蘇教々義を其儘、我邦に傳播して、實際に應用せんとす、其左支右吾を免れざるもの故なきに、あらざるなり、果して然らば、其藤樹を以て基督教會の長老とするもの皮相の見に過ぎざるなり、

藤樹は各種の徳性中に於て最も孝を重んぜり、是れ亦吾人の顧慮すべ

き所なり、孝は祖先教 Ahnenkultus の綱常なり、孝の最も重んぜらるゝ處
 には、必ず祖先教ありて存す、祖先教にして敗頽し了らば復た孝の重
 んぜらるべき理由あるなし、孝は祖先と子孫とを連結する所以にして
 血族の運命如何は孝の強弱如何による、然るに日本民族は同一の古傳
 説より其遙遠なる系統を引き、建國以來他の民族の爲めに擾亂せられ
 しことなく、同一の言語風俗習慣歴史等を有せるが故に、一大血族の形
 を成し、國家は一の家族制を成せり、日本民族は此の如くにして他の民
 族の如く過去の歴史に亂調を呈することなく、古今一貫の系統を有し、
 現在の國民は祖先を繼承し、子孫は又現在の國民を繼承し、益發達せん
 とするものなり、是故に孝の教は日本民族の運命上に重大の關係を有
 するものなり、此れに由りて之れを觀れば、藤樹の孝を重んずる故なき
 にあらざるなり、忠は孝を擴充したるものなり、殊に日本にありては、孝
 を言へば忠は自ら其中にあり、日本の國家は一の家族制を成せるが故
 に家にありて父に對するが如く、國にありては君に對するなり、國は家

を擴充したるものにて、家は國を縮少したるものなり。是故に忠孝一本の教を立つるを得るなり。藤樹が忠を以て孝の一端となし、主として孝を論じたる所以、此れに外ならざるなり。

藤樹良知の説は、所謂動機論にして、是非の差別を主觀的に定むるものなり。是故に今日の利用論とは正反對に立つものにして、經驗的事實の比較考察を怠るの傾向あるを免れざるは必然の結果なりと謂ふべし。然れども藤樹は動機論者なるの故を以て、内に自得する所ありて、確然不動の状態あり、換言すれば、外物の爲めに動搖せられず、卓として樹立する所あるなり。是故に其人を教ふるや、千言萬語を費やすと雖も、畢竟一主義を以て貫くものなり。今日の倫理學者が動もすれば唯各種の倫理説を法合排列するに止まりて、何等一定の主義を有せざると天淵雲壤の差あるなり。實踐上に於ては藤樹迥に功力多かりしを想見するに足るなり。

藤樹の良知を説く所、往々婆羅門教の梵天若くは佛教の如來に類似す

る所ありて、頗る興味あり、然れども、個體的良知と世界的良知の關係に明瞭ならず、如何なる人も、良知を有せざるなし、然るに各個人有する所の良知は、即ち世界の本體なり、世界の本體としては、良知は一體なり、各個人有する所の良知としては、良知は數多なり、此の如く一躰の良知が如何にして、數多なり得べきか、之れを倒逆して、數多の良知が如何にして一體なり得べきか、其相互の關係如何に就きては、藤樹遂に何等の説明をもなさないなり、藤樹は幾多の迷信ありて、殆んど宗教家の如し、固より其時勢を回顧すれば、是れ深く咎むべきことにあらずと雖も、亦尺壁の寸瑕、辨明せざるを得ざるなり、藤樹は深く因果應報の説を信ぜり、自然界に因果の關係あることは事實なり、又道德上にありても、之に類する因果の關係あることは、否定すべきにあらず、然れども、兩者を混同するは大なる謬見なり、然るに、藤樹は、往々、兩者を混同して、甚しき迷信に陥れり、例へば孝を論ずる處に、不孝之人變狗頭云云と云へるが如き、是れなり、然れども、迷信の多きは、春風及び陰鷲之解、最も甚しとす、春

風に於ては明德を修むれば、衆人之れを愛敬し、天道之れを助け、神明之れを加護するが故に、如何なる天災地妖も、之れを傷ふこと能はざるを論じ、數多の説話を例證として列舉せり、道德は唯、人類相互の關係に止まりて、毫も自然界と關係なし、然るに藤樹は此兩者を混同し、道德さへ能く修むるを得ば、自然界の其人に對するは、餘人に對すると同じからずとせり、是れ根本的謬誤なり、又、陰陽之解に於ては眞實無妄の心を以て陰に慈善を爲さば、必ず子孫を得べしと論じ、之れを證するに、數多の説話を以てせり、是れ亦道德と自然界の間に何等か必然の關係ありと思惟するに出づるものにて、今日にありては、許容し難き所なり、殊に堯舜の子何づれも不肖なりしを忘れたるは、奇なりと謂ふべし、又藤樹は人格的の上帝を信ぜり、人格的の上帝を信ずるの根據、已に薄弱なるを免れず、然るに藤樹は嘗に人格的の上帝を信ずる而已ならず、又之れが靈像を造り拜禮の儀式をなせり、

王學は本と心法を明かにするを主とするが故に、博學多識を要せず、寧

ろ博學多識を以て心法に害ありとなすものなり、陸象山已に「我不註經、六經皆我註脚」と云ひて、記誦訓詁の學以外に一種心學の系統を開始せり、王陽明之れを祖述して、大に心學を唱道し、自餘の學問を斥けて曰く、只存得此心常見在、便是學、過去未來事、思之何益、徒放心耳」と、然るに藤樹も亦痛く記誦訓詁の學を斥け、單に修身の一事を以て學問とせり、翁問答卷三に云く、

文字無き古は元來讀むべき書物無ければ、只聖人の言行を手本として、學問せしなり、世の末になりて、學問の本實を失はん事を憂ひて、物の本に記して、學問の鑑と定めしより以來、物の本を讀むを初門とするなり、然る故に其心を潔く、行跡を正しくする思案工夫ある人は、書物を讀まずして、一文不通なりとも、學問する人なり、其心を明かにし身を脩むる思案工夫なき人は、書物を夜晝手を離さず讀むと云ふとも、學問する人にあらず、云、

是れ少しく弊害あり、學問は獨り倫理のみならず、種々なる學問あり、是

故に書籍を讀まざるも、學問は爲し得べしとせば、世の子弟は、學問を廢するに至らん、書籍は固より學問の舟筏に過ぎざれども、又書籍を讀まざれば、學問は甚だ爲し難しとす、假令ひ倫理の如く、實踐を期するものも、亦全く書籍の助を要せざるにあらず、况や其他をや、訂正翁問答の中に言へるあり、云く、

心學を能く勤むる賤男賤女は、書物を讀まずして讀むなり、今時流行る學問は、書物を讀んで、讀まざるに等し、

此言は子夏が德行あるものを稱して、雖曰未學、吾謂之學矣と云へると同じく、單に倫理のみを以て唯一の學問とするより起れる結論なり、訂正翁問答に又云く、

聞かでかなはぬ書物は十三經なり、十三經の取り入れ梯になるべき名儒の書七書などの外は、讀んで益なし、然るに務めて讀みぬるは、目だるく、心勞るゝあだ事なり、史書は古今の事變を考へ、福善禍淫の印證となすものなれば、餘力慰みに讀むものなりと知るべし、

若し此の如くせば、學問の範圍甚だ狹隘にして、固陋寡聞に陥らん、殊に史書を小説の如くに見做すは、偏頗なる見解と謂ふべし、之れを要するに、藤樹の學問は主觀的考察を主とするが故に、一種の哲學として、自ら價值なきにあらざるも、客觀的事實に關する一切の探究的精神を擯斥するに至りては、弊害少しとせざるなり、

藤樹は又才智を退けて、差、其度を過ごせり、蓋し才智は往々徳性を損傷するの具となることあり、是れ才智あれば、交際を巧にし、外貌を飾り、内心必ずしも之れに副はざることあり、是故に藤樹才智を取らず、或問八條に云く、

學は己れが明德を明かにせんとなり、才知ありて徳を害ふ者は多し
徳の助けとなる者は稀なり、

已にして又云く、

拙きは徳なり、巧みなるは賊なり、故に不才にして拙きは徳に近し、自然の幸なり、才知ありて巧みなるは、僞に近し、一の不祥なり、

是れ實に有徳者の言なり、然れども才智を退くること、差、醜に失す、才智の不祥なるものは、是れ、猾才なり、才智と云へば、皆、猾才なりと思推するは、大早計なり、然るに藤樹は尙ほ一步を進めて斷言して、云く、

才智隠れて人民拙き時は、悪なし、不治に平なり、惡の源は才智より生ず、至治の世、何ぞ才智を用ひんや、

此に至りて藤樹の見解の大に誤まれると明瞭となれり、藤樹は才智は惡の淵源なりとして、痛く之れを擯斥し、寧ろ愚にして拙なる國民を希望せり、其理想たる「ニートピア」は老子の夢想せし所に酷似せり、優勝劣敗の益、激烈なる今日に當りて、人民をして愚にして拙ならしむるが如き、自滅を招くの路に外ならず、才智は惡の淵源たることなきにあらざるも、亦善の淵源たるを得べし、唯、其應用如何によるのみ、然るに、一概に才智を惡むは、恰も庖丁の人を傷づくるを、恐れて、盡く庖丁を廢するが如し、誰れか其惡を、嗤はざらんや、

藤樹の詩文を輕蔑すること、亦甚だ其度に過ぐ、訂正翁問答に云く、

文藝は道を求むる筈なり、魚を得れば筈は無用の物なり、

文藝は亦文藝として、道德以外に自ら特殊の範圍を成すべきものにて、其精粹に至りては、道德と光輝を争ふに足るものなり、藤樹の着眼餘りに道德の一方に偏せるを以て、文藝の實價如何を考察すること能はざりしは遺憾なり、藤樹又程子と東坡を論じて曰く、

程子と東坡は君子と小人にして、黑白の違ひたる人品なれども、其時には程子派東坡派とて、天下の學術二つに分れて争ひしが、后世には東坡は一人の詩人となり、程子は萬歳道德の師と仰がる、

藤樹専ら力を道德に用ひたるが故に、藤樹の眼に映じたる程子は東坡より迫に偉大なりしならん然れども公平に之れを言へば、東坡は啻に一代の文豪として、當時に傑出せし而已ならず、其著作は永く磨滅すべからざる價値を有するもの、決して一人の詩人として輕侮するを得ず、一人の詩人は、天地の秘奥を歌ひ、人生の美妙を語り得べきものなればなり、藤樹は善の一方に目を注ぎたれども、別に又美と云ふものあるこ

どを知らざりしが如し、

最後に藤樹が經書を解釋せる事に就きて、注意を要することあり、藤樹の解釋、多くは巧妙にして精神あり、氣象あり、眞に活眼と謂ふべし、然れども、是れ、經書によりて、自家の哲學を工夫するものなり、經書其物の解釋にわらず、例へば、藤樹は大學の明德を良知とす、然るに良知の語は孟子の始めて用ふる所にして、孟子も亦未だ詳密に良知の何たるかを説明せず、良知の説、王陽明に至りて始めて精細なるを得たり、大學成るの時、豈に良知の説あらんや、大學に明德と云ふもの、果して良知なりや否やは、最も疑ふべきなり、然れども、藤樹は、經書によりて、自家の哲學を成し、此哲學によりて、經書を解釋するものなり、是故に主觀的の價值は、否定すべからざるも、客觀的の價值は、未だ容易に許容すべからざるものあり、

第七 藤樹門人

- (1) 熊澤伯繼、字は了介、小字は次郎八、後、助右衛門と改む、蕃山と號し、又息遊軒と號す、平安の人、備前の芳烈公に事へて大に治績あり、
- (2) 中川謙叔、權右衛門と稱す、備前の芳烈公に仕ふ、公彼れに和氣郡大田村にて二百石の所領を賜ふ、彼れは藤樹門下第一の高弟にして明敏豪杰、其德行世之れを稱す、著す所全人論あり、
- (3) 泉仲愛、入右衛門と稱す、
- (4) 山脇佐右衛門、
- (5) 中村叔貫、又之丞と稱す、備前侯に仕ふ、別に中村兵と稱するものあり、未だ其同一人なりや否やを知らず、
- (6) 加世季弘、入兵衛と稱す、備前侯に仕ふ、
- (7) 谷川寅儀、左衛門と稱す、備前侯に仕ふ、
- (8) 淵宗誠、源右衛門と稱す、京都の霞屋町にありて王學を講せりと云ふ、

(9) 中西常慶

(10) 吉田新

(11) 森村長

(12) 森村小

(13) 清水季楨後姓を西川と改む、晩年集義和書類非二卷を著はして番山の説を駁せり、

(14) 清水十

(15) 國領太

(16) 佃叔一

(17) 赤羽子

(18) 小川仙

(19) 岡村子

(20) 田邊子

(21) 早藤子

-
- (22) 一尾子、
(23) 山田權、
(24) 淺野子、
(25) 横山子、
(26) 垂井子、
(27) 戸田子、
(28) 土肥子、
(29) 田覺子、
(30) 木下氏、
(31) 田中氏、
(32) 中山氏、
(33) 池田子、
(34) 土橋子、
(35) 岡田仲實、其子名は敬字は季誠、常省に學ぶ、貞享年間に至りて始めて始め、

(36) 藤樹先生全書を編次せり、
岡山子

凡○育○入○才○宜○如○農○夫○養○菜○不○要○如○愛○菊○者○養○菊○養○菜○美○
惡○彙○培○各○有○所○用○養○菊○者○見○不○如○己○意○者○必○刈○而○棄○之○

紀 平 洲

第八 藤樹關係書類

心學文集二卷

此書は初め元祿年間に上木し、後寛政年間に至りて再刻せり、是れ主として藤樹の文を集録するものなれども、又蕃山の文をも編入し、一々姓名を記さへること畧し二程全書の如くなるを以て往々分別し易からざるものあり、先哲像傳並に近代名家著述目録等に之れを藤樹の著書とするは誤の甚しきものなり、

儒生雜記五卷

此書果して何人の手に成るやを知らず、元祿二年の出版にして、兵無射の序あり、其收載する所は、主として藤樹蕃山の文章若くは書翰の類なり、

藤樹先生書翰雜著一卷 寫本〇三宅石庵輯録

此書載する所の書簡雜著凡そ五十五篇あり、大坂の三宅石庵が校訂

編次する所に係る、初めに石庵が漢文の序あり、又國文の凡例あり、石河定源之れが跋を作りて、藤樹先生書簡一卷、浪華碩庵老人之所輯錄而編次、不與吾黨之所傳之書同、間亦附己意、所論許多也、故與二三之同志相共繕寫、而備校考云、元文四己未年秋七月望日と云へり、

藤樹先生塵抗集三卷

此書は帝國圖書館にあり、人以て藤樹の書となす、然れども是れ決して藤樹の書にあらざ、著者自ら曰く、予が身の上にていはれ、人と生れ男と生れ、己に六十九歳になれば、榮子が三樂皆得たりと、藤樹は四十一歳にして歿せるが故に、著者の藤樹ならざるは論を俟たざるなり、

中江藤樹書置一卷

此書は史籍集覽中に編入せる介壽筆叢の卷末に收載せり、

藤樹先生學術定論一卷寫本〇石川氏逸

此書は表紙には孤琴論と題し、中には藤樹先生學術定論とあり、石川氏は享保年間の人にして深く藤樹の學を尊信せしもの、蓋し彼れ自

ら示教を以休子に受く、以休子は木村子に學び、木村子は岡山先生に學ぶ、岡山先生は昔し洛陽、即ち京都、霞屋町一條の邊りに藤樹先生の祠堂を築きたりと云ふ、岡山先生は藤樹の學を傳へたる一大儒なりしが如し、

藤樹先生精言一卷精明編次

此書は翁問答中學問に關する部分を抜萃して、一篇の書となし、も
のにて、文化十年の刊行に係る、編者橘明は讃岐の人にて五老と號せ
り、

藤樹先生文武問答一卷巖井任重抄録

此書は翁問答中文武に關する部分を抄録して、單行本とせるもの
にて、嘉永四年の刊行に係る、巖井任重は上州安中の人なり、

藤樹先生知止歌小解一卷

此書は藤樹學派の人の著はす所しにて、卷末に、于時享保八癸卯歲冬
月洛下諸生某敬書之とあるのみにて、撰人の姓氏未だ詳ならず、又于

時享保入云とあるを以て之れを觀れば、此書は、藤樹死後七十餘年を経て成るものなり、近時内藤耻叟氏此書を日本文庫第七編中に收載せり、

藤樹先生行狀一卷寫本〇撰人名聞

藤樹先生年譜一卷撰人名聞〇南畝叢書所收

藤樹餘稿の年譜を收載せり、

藤樹先生年譜抄錄一卷一技堂抄錄

此書は南畝叢書收むる所の藤樹年譜より抄錄せるものなり

藤樹年譜一卷二宮玄仲著

此書は藤樹の門人江州志賀郡膳所草醫二宮玄仲が萬治三年藤樹の十三回忌辰に於て撰述せし所に係る、

藤樹行狀一卷

此書は慶安三年の著作に係り、前に擧げたる藤樹先生行狀とは別なり、

中江藤樹熊澤蕃山傳一卷寫本〇片山重範所藏

此書は主として蕃山の事蹟を叙述せり、然れども藤樹の子孫及び門人の事に關して、參考となるもの少しとせず、

藤樹先生年譜一卷川田颯江著

此書は蕨江が大溝分部侯の依託によりて編輯せしものなり、

藤樹中江先生傳板倉勝明撰

此傳は甘雨亭叢書第五集にあり

藤樹先生年譜藤樹全書所收

藤樹先生行狀大木鹿之助撰〇藤樹全書所收

藤樹先生逸事藤樹全書所收

近江聖人一卷馬場森之助編

近江聖人堀江榮五撰〇陽明學第四十七號、
第四十九號及び第五十號にあり、

藤樹先生聞見錄一卷寫本

此書は松下伯季が藤樹に關する敘事若くは評論を拔萃せるものな

身

藤樹書院記一卷 寫本 ○安原貞平著

藤樹先生年忌說一卷 川田雄琴著

先哲叢談(卷一) 瓜念齋著

日本儒林談(卷上) 全上

日本古今人物史(卷五) 宇都宮遜庵著

本朝孝子傳(卷下) 藤井韻齋著

近世叢語(卷一) 角田九華著

先哲像傳(卷二) 原德齋著

斯文源流 河口靜齋著

近世畸人傳(卷一) 伴詔溪著

東遊記(卷四) 橋南谿著

翁草(卷三) 神澤其綱著

近世名家書畫談(二編) 卷三 安西於菟編次

第一篇 第一章 中江藤樹、第八 藤樹關係書類

開田次筆〔卷四〕伴高蹊著

險草〔卷上〕見島願齋著

世事百談〔卷三〕山崎美成著

野史〔卷二百五十六〕飯田忠彦著

日本教育史資料〔卷五〕文部省編纂

史料原稿中江藤樹の部○文科大學所藏

近世大儒列傳〔卷上〕丙藤燦聚著

中江藤樹の教育說足立栗園稿○教育時論

藤樹と蕃山足立栗園稿○教育時論

日本名家人名詳傳〔卷之下〕

名家全書〔卷一〕

陸象山建部遜吾著

日本之陽明學高瀬武次郎著

蕤苑叢話〔卷上〕山縣篤藏編著

尙友小史(第一輯)中村鼎五著

鑒定便覽(卷一)

近世名家著述目錄(卷之三)

古今諸家人物志釋 萬應著

日本諸家人物志(卷上) 甯山道人纂述

中江藤樹の倫理思想 井上哲次郎第六號にあり、
教育論第六號にあり、

中江藤樹の宗教思想 海老名正七號にあり、
百名彈正號にあり、

中江藤樹一卷塚越芳太郎著

右の書、出版の事を豫告せしと雖も、未だ出版せられず、甚だ惜むべし
となす、

中江藤樹一卷得能機堂新海正行合著

熊澤蕃山塚越芳太郎著

名儒傳寫本〇著者未詳

陽明學吉本誕發行

中江藤樹の精神的教育金子馬治第四卷第三號にあり、教育界

近江聖人墓參日記高瀬武次郎第六〇陽明學に第六十

近世德育史傳足立栗園著

大日本人名辭書

其他村井弦齋の近江聖人、國府犀東の中江藤樹等の書あれども、皆少年の爲めに著はしたるものにて、學者の參考とならず、小學修身書の類に散見せる藤樹の傳も亦然り、故に皆之れを畧す、

日本哲學思想之發達獨文井上哲次郎著

日本之哲學者英文ノツクス氏著



第九 藤樹學派

藤樹は曾て京都の葭屋町一條にありて子弟の爲めに學を講ぜしことありと雖も、退きて小川村に隱れ、世界に向ひて求むる所なし、然れども世人往々其德を聞き傳へて、道を問ふもの少しとせず、贈答の書翰等によりて其教を受けし者を算ふるに、凡そ三十餘人あり、其中最も傑出せるは、熊澤蕃山なると、何人も稔知する所なり、蕃山の外には、中川謙叔、泉八右衛門、中村又之丞、加世八兵衛、谷川儀左衛門等、差名聲あり、中川謙叔、權右衛門と稱す、(或は誤り、權左)加藤羽州侯の家士、中川善兵衛が次男にして伊豫の大洲に住せり、曾て藤樹の教を受けて、深く其學を尊信し、後藤樹江州に歸るに及んで、隨ひて來たり、藤樹に師事す、藤樹己れの姪女兒島氏を以て謙叔に妻はす、謙叔は藤樹門下第一の高弟なり、明敏豪杰、其徳行の如きは世の稱する所たり、著はす所全人論あり、又翁問答の跋文を作れり、蕃山の如きも、始めて藤樹の門に入るに當りては、謙叔に

負ふ所ありき、謙叔後備前の芳烈公に仕へ、和氣郡大田村に於て二百石の所領を有せり、勤仕既に久うして病を以て死せり、子あり、來助と云ふ、後名を改めて權太夫と云ふ、曹源公に仕ふ、百五十石を賜ふ、泉八右衛門、名は仲愛、熊澤蕃山の弟なり、資質靜明にして、心術早熟、蕃山と共に芳烈公に事ふ、國務總監に任じ、俸祿五百石を賜はる、曾て國政評定の席に列するや、議論、意に合はざるものあるを以て多く是非を言はず、人之れを毀りて曰く、君公何を以て此人をして此席に出でしむるや、默然何の益かあると、久うして後元老某曉りて曰く、君公の智、人に過ぐる遠し、夫れ仲愛席にあれば、人能く戯言妄作を謹み、自ら省察の意あり、是れ人を教ふるの大化、政刑の紀綱、之れに過ぐるものなし、豈に不善ならんやと、此れに由りて之れを觀れば、仲愛は、本と政治經濟の術に優れたる人物とは思はれざれども、治心の術に於て自ら得る所ありしを察知すべきなり、其他中村又之丞、加世八兵衛、谷川儀左衛門の三人皆備前侯に仕ふ、藤樹に三人の子あり、皆備前侯に事ふ、長男名は宜伯(一)に宜伯(二)に作る、幼名を虎之助

と云ひ、後太右衛門と稱す、甫め九歳にして已に備前侯に召し使はれ、長するに及んで六百石を賜ふ、宜伯父の徳を受けて、温厚篤實、苟も餘力あれば、馬を馳せ、劍を試み、藝に遊んで、日を空ふせず、寛文四年を以て病歿す、時に年僅に二十有三、未婚にして嗣なし、二男、名は仲樹、幼名を鑑之助と云ひ、後藤之亟と稱す、備前侯に事ふるに及んで、百五十石を賜ふ、未だ幾ならずして病に墜り、仕を致して京都に住し、寛文五年を以て没す、時に年僅に二十、三男、名は季重、彌三郎と稱す、後江西氏を冒し、名を文内と改め、常省と號す、亦芳烈公に筮仕し、後暫く曹源公に事ふ、病の故を以て仕を致して小川村に歸り、子弟を集めて學を講す、對州侯其賢を聞き、之れを江戸に聘し、食祿二百石を賜ふ、未だ幾くならずして歸りて京都に出で學を講じ、後復た病を得て郷里に歸る、寛永六年を以て没す、時に年六十四(一)に蓋し誤ならん、藤樹三子の中、常省最も長命なりしが故に、學問上に少しく藤樹を繼ぐ所ありしが如し、藤樹書院に常省先生會約一卷あり、是れ其著はす所に係る、今左に其全文を擧ぐ、

未以交會友、以友輔仁者、先賢之明訓也、今一二之同志、孝弟之餘暇、交會於此、其志以爲從古訓講習討論、相俱切磋琢磨、而以除去氣質之昏蔽、而復于本然之性、至于孝弟之極處焉、故筆會約數件、揭之於壁間、以爲吾人之勸戒、

自反慎獨、入聖通神之大道、換骨願神之靈方也、苟自反則良知之明鏡洞然、妍媸不得遁影、是以凝冰忽泮、焦火倏滅矣、凡情之象魔、不得爲祟矣、慎獨則外物不得役之、應事接物、盡天理、流行而無事、而不善無入、而不自得焉、當要拳、服膺而無須臾離矣、

博學審問、慎思明辨、篤行者、道學之終始也、當要讀誦聖經、賢傳、玩味其意味、浹洽涵泳、而以滌淨琢磨、凡習之污滯矣、審問於同志之中、而渙然釋焉、倍慎思之、怡然理順焉、以學問思之功、天理人欲、判然明辨之、篤行之、其身焉、

口能興戎、出好吉凶、榮辱惟其所召也、當禁躁妄、言內不靜、專發躁妄也、且勿辨論、誹議當世之政事矣、不在其位、不謀其政矣、勿誹謗人之過矣、自求

厚則何有暇于求人哉、勿俳優戲言、戲言出於愚、勿談無用之俗話、
容貌要從容端正焉、表正則影正、是自然之應効也、譬心如帥、四肢百骸如
卒、徒帥正則卒徒隨、命嚴肅也、若以不正之帥、驅廻卒徒之不整、則遂致乖
敗之禍矣、忘正其心、徒求外貌之端、正、是外本也、必失却其心理乎、且老者
以筋骨不爲禮、稍就易安、

或討論心術、或論辯書義、過失相質、或讀誦經傳、或學習禮容、或試射、或揮
才、

少者習洒掃應對進退之節、是學業之一事也、當聽從長者之命、而服其勞
矣、

若交際移時、及舖時、喫喫白粥、南都茶等之食、救其飢、不可求美味、而事口
腹矣、

又其長男名は藤内、幼名を龜之助と云ふ、中江氏を復し、後貞平と稱す、對
州侯に事へて、食祿四百石を受く、其子孫今に存すといふ、藤樹の子孫は、
家學を發揚する方面には、何等の顯著なる貢獻をも爲すに至らざりき、

然れども藤樹死後其學の影響綿々として小川村及び其近郷に存續し今に至りて未だ全く絶えざるの感なしとせず、又少くとも七八十年の間、其學を尊信するもの京都に存續せり、是れ藤樹曾て京都の一條葭屋町に寓居せしことあるによるなり、享保年間に至りて京都の人知止歌小解を著はして藤樹の學を唱道せり、石川某も亦享保年間に於て孤琴論を著はして藤樹の學を主張せり、其言に據れば、曾て岡山某あり、京都の葭屋町一條に於ける藤樹の遺跡に藤樹の祠堂を築き、茲に藤樹の學を講ぜり、其門に木村某あり、木村某其學を以休子に傳ふ、以休子又其學を石川某に傳ふ、三輪執齋に據れば、岡山某は藤樹の門人なり、治教論の中に云く、藤樹先生の門人岡山氏も亦學校を建て、四十餘年尙ほ廢せず、岡山の没、已に三十年其家相つきて學を講じ、其道を信ずるもの少からずと、文政六年を以て歿せる太田南畝曾て藤樹の葭屋町に寓居せることを叙述して、其地尙存と云へり、此れに由りて之れを觀れば、藤樹を尊信せしもの、久しく相繼いで京都にありしを知るべきなり、大阪にも藤

樹の徒ありて其學を講ぜり、治教論に云く、大阪天濤に素績と云へる盲人是れも藤樹の門人にて有馬町といふ所に校舎を建て、其道を講ず、其跡も亦五十年にあまりて猶ほ絶えず、近年攝州原野の郷人、相共に謀りて校舎を建て名儒を招して學を講ず、名づけて合翠堂といへり、其郷人孝悌實行の徒多し施を好み餓を救ふて、近郷の規となる、講學の効誠に空しからず云と、思想の影響次第に増大して蔓延すること、以て證すべきなり、此の如き藤樹門下の系統を外にして、藤樹の學を尊信するものなきにあらざり、即ち大坂の三宅石庵の如き、藤樹の學を尊信し、正徳三年を以て藤樹先生書簡雜著を著はせり、石庵は初め朱子學を奉ぜり、雖も、遂に王學に歸せり、而して佐藤一齋亦間接に其學問の系統を石庵より繼承せり、三輪軌齋の如きは本と佐藤直方に學ぶと雖も、朱子學を取らずして陽明學に歸し、深く藤樹を尊信せり、殊に大鹽中齋の如き、藤樹を尊信すること最も深しとなす、中齋は藤樹の書を讀んで陽明學に歸せしものなるが如し、其題藤樹先生致良知三大字眞蹟文に云く、余狂

愚[△]而亦竊從[△]事陽明[△]王子[△]良知[△]之學[△]而初開[△]其學[△]于東方[△]者[△]乃先生也[△]微[△]先生[△]余安得[△]與[△]聞斯學[△]故受[△]其賜[△]亦厚[△]矣[△]と、即ち其學の藤樹に出づるを知るべきなり、又中齋唱道する太虚の説の如きは藤樹已に道破せり、中齋唯、其旨意を敷衍して、一家言となせるのみ、此れに由りて之れを觀れば藤樹の學の影響亦決して淺少なりとせざるなり、

藤樹の學派は、藤樹死後次第に二派に分かれたり、或るものは自反慎獨の工夫に力を用ひ、個人的倫理の實行を主とせり、然るに或るものは其學ひ得たる所を國家に應用し、公的倫理の實行を主とせり、即ち省察派と事功派是れなり、此二派の分ちは、固より然く嚴密なるものにあらずと雖も、又多少區別すべきものあるは疑なし、藤樹自らは隱君子の風ありて政治^ト家流の人にあらず、故に退きて自反慎獨を主とし、省察派の系統を創始せり、藤樹死後省察派は、其流を汲むものによりて繼承せられたり、然るに又蕃山の其門に出づるあり、彼れは英才深智ありて大に藤樹に異なる所あり、彼れは隱君子にあらず、彼れは政治家なり、經濟家

なり、謀略家なり、進んで社會に爲す所あるものなり、事功派は實に蕃山によりて代表せられ、蕃山によりて惹起せられたり、蕃山亦一個偉大の人物たるを失はざるものなり、



第二章 熊澤蕃山

第一事蹟

藤樹門下最も卓絶せるものを熊澤蕃山とす。蕃山姓は熊澤、名は伯繼、字は了介(又其介了芥皆くは了海に作る)。小字を次郎八といひ、後又助右衛門と稱す。蕃山は其號なり、又息遊軒と號す。本姓は野尻氏なり、加藤左馬助高時(江藤樹熊澤)の臣、野尻藤兵衛一利が子なり、一利は本と尾張の人にして、後京都に寓居す。蕃山元和五年(六一九)を以て京都の五條に生まる。山崎闇齋に後るゝこと一歳にして、木下順庵に先つと二歳而して、恰も藤原愷窩の卒する年を以て(一説に助右衛門ミナト)。蕃山を養ひて嗣とするに及んで、其姓を冒す。守久初めの名は喜三郎(一説に嘉三郎とす)と云ふ、喜三郎か父を平三郎と云ふ、亦尾張の人なり、平三郎は徳川家康に事へ、箕形原の役に戦死す、平三郎が戦死してより、喜三郎即ち後の守久漂泊し

て越前の柴田勝家に事へ、後福島正則に事ふ、正則亡ぶるに及んで、浪士となりて京都に居り、最後に水戸の威公(即ち頼公)に事ふ、實父の野尻一利は後、高原の役に鍋島氏に従屬して城を攻め、銃丸に中り、延寶八年を以て備前の岡山に卒せり、蕃山幼にして岐嶷、深智衆に超ゆ、年僅かに十六歳にして備前の芳烈公に仕ふ、芳烈公は新太郎光政の證なり、烈公蚤に其凡才ならざるを知り、漸く之れを用ひんとす、然るに蕃山自ら以爲く君に仕へ民を治むるには、先づ學問なかるべからずと、乃ち二十にして仕を致して近江國桐原に適き、武術を練り、又文學を修めんとす、時に中江藤樹盛徳備はりて、君子の稱あり、四方より來たり學ぶもの多し、蕃山竊に之れを慕ひ、二十三歳の秋八月、小川村に至り、藤樹に見えんことを求む、藤樹謝して許さず、蕃山空しく歸る、冬十一月再び往きて頻に乞ふ、藤樹是に於てか始めて蕃山に逢ひ、其舉動如何を問ふ、蕃山乃ち告ぐるに、問學の志ある事、及び父母國にあり、弟に託するの事を以てす、藤樹の曰く、學問の淵源、孝より先なるはなし、孝はよく養ふを本とす、己れが爲

めにあらず、吾子よく養ふことを得ず、今之れを弟に託す、子が志たがり、子よく奉養寄住せば何づくに居りてか學なからんと云へり、蕃山乃ち家に歸り、父母に告ぐるに左右を去るに忍びざるを以てす、父母其意を察し、汝果して我が爲めに去らずんば、我れ汝の爲めに行かん、遂に家を擧げて江州に移る、翌年七月再び小川村に住き、藤樹に逢ひて仔細を告ぐ、藤樹其志を好みし、以て共に道を言ふべしと爲して、乃ち教ふる所あり、又九月小川村に往き、翌年四月まで滞留して孝經大學中庸を學び、學益進む、此時父一利仕を求めん爲め江戸に赴きたるを以て蕃山弟妹五人と共に江東に居を卜して母を孝養す、家甚だ貧なり、然れども少しも屈せず、力を良知の學に用ひ、倦むことを知らず、(説論の三、み)正保二年を以て再び備前に來たり仕ふ、時に二十七歳なり、即ち備前を去りて復た備前に來たるまで、七星霜を経たり、烈公固より蕃山が王佐の才あることを知り、深く之れを信任し、國事を問ふ、蕃山忠誠の心厚ければ、知りて言はざるなく、言ふ所公の意に叶はざるなし、是に於てか采地三千

石を賜はる、和氣郡八塔寺村は備前美作播磨の互に相接するの地なり
之れを蕃山の領地となす、八塔寺村は蓋し備前一國の要害の地なり、故
に蕃山に賜はれり、蕃山乃ち和氣郡内に於ける田地を開墾し、士數十人
を土着せしめ、邊備大に備はる、此頃蕃山名を助右衛門と改む、既にして
公に従ひて江戸に往く、時に三十一歳なり、名聲籍甚、侯伯大夫士人にして
道を問ふもの少しとせず、承應三年備前備中洪水あり、翌年即ち明暦
元年飢饉の災ありて餓死せんとするもの九萬人の多きに及ぶ、蕃山乃
ち烈公に申して曰く、今や事急なり、延引せば居ながら其斃るゝを見ん、
早く倉廩を開きて民に施すべしと、公乃ち倉廩を開きて大に窮民を救
ひ、其懇切の情至らざる所なし、全國の民が公の仁政に感泣したること
略、想見すべきなり、然るに其本を問へば、蕃山の機敏なる政畧に出づ、
蓋し芳烈公は比類少き賢明の君主なり、然るに蕃山英邁の才を以て之
れに事ふ、殆んどウキルヘルム帝がホスマルク氏を採用せられたるが如
きの看あり、太宰春臺が湯淺常山に復する書に云く、夫烈公者不世出

英主得熊澤子、而任以國政、明良之遇、實千載之一時也。眞に然り、蕃山深く公に信任せらる、是に於てか滿腔の經綸を實際に應用し、仁政を施すに於て力を盡くさる所なし、蕃山先づ公に勸めて諫の箱を置き、臣民をして私に其言はんと欲する所を投せしめ、以て時弊を救ふの端緒を開き、佛教及び耶蘇教の取締を嚴にし、之れに反して大に儒教を開くことを務め、又水利を善くし、武備を嚴にする等の事實に海内の耳目を驚かすに至れり、蕃山が日夜國境を巡視して其心を盡くすに至りては、人をして孔子無黔突、墨子無煖席の狀を追想せしむ、然るに蕃山一家甚だ儉にして夙に興き夜に寝ねて、婢女を置かず、衣服酒食總べて泊然として營む所なし、所屬の隊伍の士、朝夕となく常に來たりて蕃山の家に相會す、蕃山性客を好み人を愛す、

明曆二年蕃山年三十七、公に従ひて和氣郡木谷に狩せしに、馬より倒れ墜ちて右の手足を傷つく、(削簡の二を)是れより先き蕃山風雲に際會し、滿腔の經綸を應用し、大に儒教を興し、淫祠を毀ち、佛寺を滅し、惡を斥け

邪を正し、時處位によりて政を施し、大道行はれて國大に治まるに至れり、然るに此に至りて蕃山竊に以爲く、時運の然らしむる所必ず小人の怨なきにあらずと、乃ち進退の時を顧み、漸く歸臥の志あり、殊に右の手足を傷つければ馬に騎ることも、弓を引き、槍を取ることも不自由なれば、武士の勤も是れ迄なりと思惟し、初めて辭表を捧げて退かんことを願ふ、公之れを許さず、他日又切に辭せんことを乞ふ、公其志の遂に奪ふべからざることを慮り、汝果して退かば、乞にまかすべし、祿は其儘嗣子繼明に與ふべしとの仰せあり、蕃山我嗣子に三千石賜はること身分不相應なるが故に、三百石賜はらんことを望む、公乃ち之れを諾し、蕃山の嗣子繼明に三百石を賜ひ、又其季子池田丹波守輝祿をして蕃山の後たらしむ、丹波守は本と主税殿と稱せり、蕃山曾て之れを養育すること年ありと云ふ、蕃山此頃其采邑和氣郡寺口邑を改めて蕃山と名づく、新古今集に源重之が歌あり、云く、つくば山、葉山、蕃山しけいれど、思ひ入るには、さにはらざりけりと、蕃山の名は此歌の意に取るもの、王學治心の意

も其中にあり、又遁世の志も自ら其中に存するが如し、蕃山が後、其任を致して京都に寓せし時に當りては、蕃山を以て姓となせり、蕃山本と其號にあらざるも、人^も以て號となして之れを呼び、遂に其號となれるなり、明曆三年蕃山備前を辭して、京都に居り、國典を習ひ、雅樂を學び、一日微服して笛を吹く、安倍飛驒と云ふものあり、之れを聽きて曰く、常人にあらず、其心情の正しき、即ち音聲に發すと云ふ、京都の公卿大夫にして蕃山を慕ひて、束修を門に行ふもの少しとせず、蕃山又深草の元政と交を結ぶ、元政は日蓮宗の僧にして道心の堅固なる、世間の佛者の比にあらざるなり、元政常に蕃山の徳を稱す、蕃山も亦元政を以て眞の佛者なりと云へり、蕃山が曾て備前侯に事ふるや、其江戸往來の節は、必ず元政を訪ひて談話せり、致仕の後は交情愈密なるに至れり、蕃山本と佛敎の保護者にあらず、然るに元政と意氣投合するもの、蓋し得道の點に於て一致する所あるなり、蕃山此の如く親交の友を有すと雖も、亦何時となく幾多の敵を生ぜり、是れ其勢力盛にして、公卿の間に及ぶものあるを以

て、胚胎せられたるなり、讒人あり、諸司代牧野佐渡守親成に告げて曰く、了介か器量世にならぶ者なし、天下の列侯慕ふこと久し、今浪人として堂上に入らず、天朝の公卿亦之れを慕ひて送迎絶ゆることなし、事爰に至らば恐くば事あらんと、佐渡守之れを信じ、事漸く蕃山の身に及ばんとす、蕃山竊に之れを聞きて曰く、彼れ暫く勢を得て、虚説を造り、あだをなすは、彼れの悪なり、予が心に於て別に他の事なし、是れ予が不徳にて、道に入ること、未だ深からず、道理の淺き故に、世間の人に能く合ひがたく、應接に預るなるべし、され共予が志す所は然らず、全く當世の名利を求むるにあらざれば、百歳の後の名も望みなく候へ、其當世の名は、利に近く、百歳の後の名も譽るもの、毀るもの、共になくなり、虚説造言は、跡なく消えて、仁義忠信の誠なくては、留まり申さず、一旦讒に逢ひ、難に墮り、悪名を蒙るとても、浮べる雲の如くなるものなれば、何とも存せず、當時の毀譽は、やがて分り申すべしとて、乃ち京都を去りて大和國芳野山中に隠る、是れ寛文七年にして、彼れが四十九歳の時なり、ときに和歌一首

あり、

よしやよし吉野の山の山守りとなりてこそしれ花の心を、

其後山城國鹿背山に居を移し、交を絶ちて益徳を修む、寛文九年播州赤石城に移り、大山寺の側に居る、赤石侯松平日向守信之之れを尊信すると殊に篤し、是歳芳烈公新に學校を設け始めて聖師を祀る、番山因りて備前に至り、其禮儀法度を定めて又赤石城に歸る、時に年五十有一、門人皆呼んで息游先生と稱し、敢て名をいはず、初めて蕃山が大山寺の側に居るや、僧徒之れを忌み悪めりと雖も、後遂に其徳に信服し、蕃山の子、寺邊殺禁の境内に狩りすと雖も、之れを拒まざるに至れり、蓋し蕃山の佛教を排するは、只公義上已むを得ざるに出づるものにて、必ずしも妬猜争角の意あるにあらざ、故に僧徒と雖も、志真に識明なるの輩に至りては、蕃山を崇信するもの多かりきと云ふ、延寶七年日向守信之封を大和國郡山に徙す、蕃山之れに従ひて、矢田山に居る、貞享四年秋八月松平日向守復た封を下總國古河に移す、蕃山常憲公、即ち五代將軍の命により、

日向守に従ひて古河に往く、日向守蕃山を崇敬すること甚だ篤し、其歳の冬蕃山封事を幕府に奏して海内の政務を改革せんことを請ふ、事機密に涉り、大に將軍の旨に忤ひ、乃ち禁錮せらる、幽囚大約四星霜の久しきに及ぶ、然れども面に憂色なし、人の當世の事を問ふあれば、默然として答へず、乃ち筮を取りて之れを吹く、蕃山罪を蒙りし年の翌春歸雁を見て、

老の身の見んことかたき故里に春待ち得てや歸る雁がね

元祿四年秋八月十七日を以て病歿す、時に年七十有三、日向守乃ち親戚門人を會して儒禮を以て古河の大堤村鮭延寺に葬る、其後池田丹波守政倫爲めに廟宇を設け、神官をして司らしめ、春秋の祭祀、今に至りて尙ほ絶えずと云ふ、蕃山二弟四妹と四男八女あり、蕃山の弟を泉八右衛門仲愛と云ふ、藤樹の門人にして後、備前の芳烈公に事ふ、(其事藤樹學派其の條に詳なり)其次の弟を野尻藤介一成と云ふ、豊後國岡の中川山城守久清に事ふ、秩祿五百石なり、蕃山の妻矢部氏、蕃山に先ちて元祿元年を以て古河に歿

せり、長男右七郎繼明、蕃山氏と稱し、曹源公に事ふ、秩祿三百石を受く、子なくして家絶ゆ、二男左七郎野尻氏を復し、松平日向守信之に事ふ、三男武三郎、熊澤氏を襲ぎ、本多下野守忠泰に事ふ、四男左内も亦日向守信之に事ふ、

蕃山は身體肥滿にして容貌婦女子の如かりしと云ふ、初め十六七歳より二十歳までの間に、已に肥滿の傾向ありしかば、他人の肥滿にして進退不自由なるを見て、此の如く身體重くしては、達者なる武士になると難からんを憂ひ、如何にもして、身體肥滿の傾向を防がんことを企圖し、寐ぬるに帶を解かず、美味を食はず、酒を飲まず、男女の人道を絶つこと十年の久しきに及べり、夏日の炎暑をも厭はず、日中に鐵砲を持ち、野外に出で、雲雀を打ち、又互寒の節にありては、雪霜を踏み分けて、山中に入れども、別に夜着蒲團を携帶せしむることなく、其着たる衣服の儘にて、夜は民家に宿泊せり、江戸在勤中は山野に行くこと能はざるを以て、鎗をつかひ、太刀をならい、宿直所にありても、葛籠中に木刀と草履と

を入れ、人の寐靜まりて後に、人影なき所の廣庭に出で、闇夜に獨り兵法を練習せり、火事の時にも見苦しき事なからんが爲め、人遠き家屋の上を駆け廻れり、稀に之れを目撃したるものは、天狗の爲めに誘はれけんと云へり、(前簡の二を参考せよ)、蕃山年三十七八歳に至るまで、此の如く勉めたるを以て、身體稍瘦削するを得たり、又其容貌に就きては湯淺常山著す所の文會雜記卷五に、了介は婦人好女の如く見えしと老人の語りきとあり、近世叢語(卷二第)に、容姿婀娜、如美婦人と云へるは、蓋し文會雜記に本づくなり、又熊澤先生言行錄に、廿歳の後文學をつとめ居給へる時はわらべの如く、人道を忘れて顔色うるはしく、聲にほひありとて、人々稱美せしとなりと云ひ、又温裕寛柔にして、家人奴婢といへども、遂に其畏慍の色、疾言を見聞くことなしと云へり、又藤樹蕃山二先生の畧傳に、其人の平生は、甚だ温潤にして愛敬あまりありて謙遜ある人なりと云へり、此れに由りて之れを觀れば、蕃山は内剛にして外柔なりしを察知すべきなり、先哲像傳載する所の蕃山の肖像は、蕃山が自筆に出づと雖も、其

眞を得たるや疑はし、是れ本と武裝せるものを變更せるが故に、其平生溫柔の狀を認むること能はざるなり

蕃山は多藝にして音樂を能くせり、曾て琵琶を小倉大納言實起卿に學び、箏をば藪大納言綱孝卿に學ぶ、又其笛に巧なりしことは已に前にも叙述せり、蕃山又畫を能くし、歌を詠せり、

蕃山家甚だ儉素にして唯、義經の畫像一幅を懸くるのみにて未だ曾て他の書畫を懸けず、或る人蕃山を判官最負と云ひしに蕃山之れに答へて曰く、

君子に三のにくみあり、其功にほこり、賞を受くること多き者をにくみ、富貴にして驕る者をにくみ、上に居て下を惠まざる者をにくむ、判官義經は其人から道を知らず、勇氣によりて失ありといへども、大功ありて賞を受けず、人情の憐はれむ所なり、賴朝卿福分ありて天下を取ると雖も、不仁にして寛宥の心なし、人情の惡む所なり、賴朝判官に限るべからず、驕は天道の虧く所、地道の亡ぼす所、人道の惡む所なり、

謙は天道の益す所、地道の恵む所、人道の好む所なり、

此言、集義和書卷三に見ゆ、此れに由りて之れを觀れば、蕃山が義經の畫像を懸けたるは、深意の存する所ありしなり、

蕃山は由井正雪と時代を同うせり、嘗に時代を同うせる而已ならず、又嘗て彼れと遭遇せり、先哲叢談卷三に左の如く記せり、云く、

嘗至某侯、及入見一士、不知仕臣乎、將處士耶、侯曰、渠爲吾講兵書、處士一言、見侯曰、余今見一士、不知仕臣乎、將處士耶、侯曰、渠爲吾講兵書、處士

由井民部助者也、蕃山正色曰、余熟視其貌、以察其意、君勿復近、如彼士、他

日正雪亦來見、侯曰、前日比退朝、見某衣某形人、未知其爲誰、侯曰、渠說吾以經書、岡山臣熊澤次郎八者也、正雪正色曰、余熟視其貌、以察其意、君勿

復近、如彼士、

日本儒林譚には、某侯を芳烈公とせり、然れども其果して芳烈公なりしや否やは確定し難し、蕃山、正雪と共に當時の人傑なりき、然るに正雪亂を作して誅に伏す、幕府是に於てか人傑の勢力あるものを忌む、山鹿素

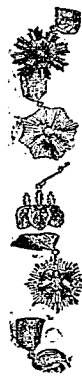
行の如き、亦竊に幕府に忌まれて、播州赤穂に謫せらる。番山亦幕府の嫌疑を免れず、番山が京都の諸司代に逐はれたるが如き、如何にも此邊の消息を洩すものゝ如し、中江藤樹熊澤番山傳に云く、

熊澤翁松平日向守殿へ御預之事一説には寛文の中頃まで丁介京畿に在りて教授せられけるに、日々に門人多く集まり、貴賤會合して止まざりける。去る慶安年中由井正雪九橋忠彌などゝ云ふ者、悪黨を聚めて頗る關東を騒がせし事、近きにあれば、都べて弟子の多く付き従ふ者を公儀に忌ませ給ふ時節にてありける間、熊澤の人品をば知らせ給はず、遠ざけらるべき爲めに、日州侯へ御預にて播磨の明石に移り、云云、

是れ彼事變の真相なるが如し、番山が幕府に忌まれたるは、全く其恐るべき人傑たりしが爲めなり、

番山の人傑たりしは、識者の均しく認定する所なり、物徂徠の如きは天下を睥睨して眼中殆んど人なし然れども、熊澤氏の人物に至りては深

敬服せるが如し、其言に云く、人才則熊澤學問則仁齋餘子傑々未足數也、と又云く、伊藤仁齋道徳熊澤了介英才與余之學術合而爲一則可謂聖人矣、と即ち知るべし、徂徠の眼中にありては蕃山と仁齋と彼れ自身と自ら鼎足の狀勢を成せるを、永富獨嘯菴亦曰く、偃武以來、豪傑之士、四人山鹿、素行、熊澤了介、伊藤仁齋、物徂徠、と服部南郭亦曰く、予讀熊澤了介經濟說、足踏其地、口論其政事、々確說不似他人空言矣、と其他太宰春臺の如き、湯淺常山の如き、藤田幽谷の如き、皆蕃山の人材を稱揚せり、蕃山の不世出の人傑たりしは、當時に於ける碩儒の認定せるによりても亦想見するに足るものあるなり、



第二 文 藻

蕃山は其文學的事業の方面より之れを看れば、他の儒者と頗る其趣を異にするものあり、他の儒者は多くは漢文を以て書を著はすを常とせしに、蕃山は然らず、蕃山の著書多からずとせず、然るに盡く國文を以て之れを記述せり、藤樹已に國文の著書多し、然れども孝經啓蒙の如き、論語鄉黨翼傳の如きは、皆漢文なり、蕃山に至りては漢文を以て記述せるもの一もあるなし、是故に蕃山の著書は、少しく文字を知れる以上は、理解し得べからざるものあるを見ず、是れ蕃山が其文學的方面に於ける長處なりと謂ふべし、蕃山の文章、暢達して明瞭なり、然れども別に特異の趣味あるにあらず、試に藤樹に比して之れを論ずれば、蕃山迥に藤樹に及ばず、蓋し其學問の結果に因るなり、藤樹は特更に文章を飾るにあらず、直に其思惟する所を叙述するに過ぎず、然れども其思惟する所已に優美にして透徹せり、故に之れを叙述すれば、即ち精粹純潔の字句と

なる、皆琅々誦すべきなり、蕃山多く其思想を藤樹より得來たるも、其文字差平板にして冗漫なり、時に光彩あるものなきにあらざるも、往々乾燥無味の言を爲せり、要するに藤樹は簡明に思想の精粹 (Quintessenz) を叙述せり、然るに蕃山は之れを傳受せしも、之れを混化して稀薄のものとなせり、此點より之れを言へば、蕃山の藤樹に及ばざること遠し、然れども蕃山は和歌に巧なり、藤樹も亦和歌を作れりと雖も、文學的趣味を以て和歌を作れるにあらざりて、單に和歌を假りて、其志を述ぶるに過ぎず、換言すれば、辭藻よりは、意味を主とせり、故に和歌としては見るべきもの割合に多からざるなり、然るに蕃山の和歌多く傳はらずと雖も、其儘に傳はれるものは多くは名作たるを失はず、和歌を作るの伎倆に於ては、蕃山蓋し藤樹に優れるなり、甘雨亭叢書中收載する所の蕃山の和歌總べて十三首あり、其他息遊先生初年文集中に尙ほ五首を掲載せり、前者は世人の知る所なれども、後者は湮滅の恐れあるが故に左に轉載せん、

山家のこゝろをよめる

山里はちくもかくれぬさゝ垣のあらはに安き人のこゝろも、
柴の戸をちしたてもせで出る跡に心もちかず澄める月かげ、

京の西山の紅葉を或人に見せばやとてせめて此腰折にて自得

あれどて、

一枝の色はいろかは紅葉ばの山のすがたにこゝろあるかな、

中秋人々に誘はれて廣澤の月見に、

離れかその人に習ひて廣澤の今宵最中の月を見るかな、

試筆

ことくゝにわきていはふは習ひぞと身のいとまある春にあふ哉、

蕃山多く詩を作らず稀に蕃山の詩として傳ふるものなきにあらざる
も見るに足るものなし唯名儒傳に收載する所の五絶の如きは能く其
體を得たり云く、

樹密茅檐古荒烟野水滾遙看濟川者應是此中人、

是れ蓋し題書の詩ならん。思ふに、蕃山一生の事業は政治經濟にあり、其學ひ得たる所を實際に應用すること、是れ其主眼なり。簡單に之れを言へば、蕃山は事功を期するものなり。是故に文藻の如きは、蓋し其深く心を用ふる所にあらず。世に傳ふる所の詩歌の如きも、其緒餘に過ぎざるものと謂ふべきなり。



第三 著書

集義和書十六卷

集義外書十六卷

右二書は蕃山が著書中主要なるものなり。就中外書は寛永七年書肆
小山知常が刊行する所にして、和書よりは反りて奇拔の論多し、其序
に云く、外書にいたりては、經世治教の事に、わたりて、頗る世の忌諱を
あかせることあれば、にや、その徒秘してこれを傳へず、故に見るもの
少なし云云と、以て外書の和書に異なる所以を知るべきなり。横井小
楠は越藩の岡田に與ふる書に外書は僞書なりと主張すれども、余未
だ其僞書たる所以を發見すること能はざるなり、

大學小解一卷

中庸小解一卷

論語小解八卷

以上三部の書は皆載せて陽明學にあり、

二十四孝評一卷

三輪物語八卷

別本三輪物語は十五卷あり、然れども内容に異同あるにあらず、

夜會記四卷

三神託解一卷

一に三社託宣と題せり、

神道大義一卷

一に神道大意と題せり、或は藤樹の著書となせども、瓜田季誠が藤樹
全書に之れを收載せず、而して巨勢直幹、草加定環、諸氏皆以て蕃山の
著書となす、果して然らば蕃山の著書と見做すべきか、但、其論旨と文
體とを考ふるに、殆んど藤樹の作なるが如し、姑く疑を存す、

繫辭解三卷

〔五倫書一卷〕

此書古來蕃山の書とすれども、其實然らず、削簡の三に云く、まことに五倫書などは、まさしく作者ありて、我等の生まれざる前に出でたる書に候七十餘の人は、五十年前に見たると申者御座候、しかるに我等の書に極まりて、此間批判の書まで出で申候、其外名もしらぬ書に愚作と申が多きよし承候、又愚作と申も無餘儀ほど似たるも出で候と、蕃山生存の時已に偽書の多かりしこと、以て知るべきなり、

大學或問二卷

孝經解或問十卷

女子訓五卷

易經小解五卷

此書首卷は序論にして、第二卷は乾卦、第三卷は坤卦、第四卷は屯蒙需卦、第五卷は訟師卦を解せり、訟師卦以下未だ成らずして歿せり、

蕃山實錄に右十六種の書目を擧げて、其末に、以上先生所著也、其他假先生之名、欲逞己說、而鑄梓之書多矣、勿用と云へり、然れども此說毫も

信憑するに足らず、何んとなれば、尙ほ他に蕃山の著書に相違なきものある而已ならず、蕃山の著書として擧げたる中にも五倫書の如きものを混入したればなり、

易繫辭小解二卷

是れ蓋し前に擧げたる繫辭解と同一にして集義和書卷七に載する所の始物解を單行せるものならん、

孝經小解二卷

此書は草加定環天明八年を以て刊行せり、定環字は循仲、崑山と號す、熊澤氏の姻戚なり、

孝經或問八卷

是れ恐くは蕃山實錄載する所の孝經解或問と同一の書ならん、然れども卷數同じからず、故に之れを掲ぐ、

孟子小解七卷

宇佐問答二卷

紫女物語

葬祭辨論一卷

女子訓或問

源氏外傳五十四卷二卷

源氏物語は總べて五十四卷あり、是れ毎卷の末に記入せし評論なるが故に五十四卷と云ひ傳へり、其實は單に二卷あるのみ。

二十四孝或問小解一卷

前の二十四孝評と同一ならん。

息遊先生初年文集二卷

上卷には各種の文を集め、下卷には古歌の註を載せたり、卷末に六品解及び氣質理利之解二篇を附載せり、

蕃山先生和歌一卷

此書は甘雨亭叢書に收載する所にして、蕃山の作に係る和歌十三首を集めて一卷となし、末に蕃山が曾て三輪神社に奉納せる保侶籠の

圖を附載せり

熊澤翁遊會實錄十卷

此書の眞蹟疑はし、

心學文集二卷

此書は藤樹の文と蕃山の文とを混入せり、未だ其果して蕃山の手になるものなりや否やを知らず、

孝經外傳或問三卷

別本孝經外傳或問四卷

此書前本と内容を異にせり、

經濟辨

是れ大學或問の異名なり、

はなむけ草一卷

易繫辭和解

是れ蓋し易繫辭小解と同一ならん、

第一篇 第二章 熊澤蕃山一集三 著書

二一四

大和西銘一卷

雅樂解一卷

是れ彼集義外書第十五卷の雅樂解を單行せるものなり、
何物語三卷



第四學說

第一 藤樹と蕃山の關係

蕃山は曾て親しく藤樹に學び、致良知の説を信奉せるものなり、蕃山必
ずしも藤樹の言に拘泥せずと雖も、全く藤樹に薰陶せられ、全く藤樹に
鎔鑄せらる、故に其叙述する所、江西に淵源せざるもの、殆んど稀なり要
するに、蕃山は藤樹の精神的兒子なりといふべきなり、

蕃山往々藤樹に懽焉たらざるが如き口吻をなせり、甚しきに至りては
江西派の弊害を論破せり、集義和書卷十一に江西の學の世に大功ある
を論ずるものに答へて云く、

尤も少しは益もあるべけれども、害もまた多し、甚かど經傳をも辨へ
ず、道の大意をもえらで管見を是とし、異見を立て、聖學といひ愚人
を導くもの出来ぬ、江西以前には此弊なかりしなり、天下の人目をさ
ましたりと雖も、未だ徳と好むの人を見ず、粗學の自滿のついえは一

二にあらざ、

又削簡の一に云く

いにしへとてもなべて悪しかるべきにも待らざ、今とても實に功あるほどの事も見え、少し心の付きたるかたもあるべけれども、其かはりに少し學問しては、異見を立て、儒も佛もしらで、儒佛の悟道者の様にいひあり、人多く出來たり、是れ又世の害なれば、善惡相半と存候、

藤樹派の學者淺薄の學識を懷き、獨り我徒のみ聖學の正脈を得たりと自負し、自餘の學派に對して城壁を築き、褊狹固陋の見に陥りたる時に際して、蕃山奇矯の言を放ちて其弊を打破せんとしたるなり、蕃山未だ必ずしも藤樹彼れ自身を非議するにはあらざるなり、又集義和書卷十三に左の如き文あり、云く、

心友問ふ、先生は先師中江氏の言を用ひずして、自の是を立て給へる高慢なりと申すものあり、

云く予が先師に受けて違はざるものは實義なり、學術言行の未熟なると時處位に應ずるとは、日をかさねて熟し、時に當りて變通すべし、大道の實義に於ては先師と予と一毛も違ふこと能はず、予の後の人も亦同じ、其變に通じて民人うむことなきの知るひとし、言行の跡の不同を見て同異を争ふは、道を知らざるなり、

問ふ、何をか大道の實義といふ、

云く、五典十義是れなり、一事の不義を行ひ、一人の罪かろきものを殺して天下を得ることもせざるの實義あり、不義を惡み、惡をはづるの明德を固有すればなり、此明德を養ひて日々に明かにし、人欲の爲めに害せられざるを心法といふ、是れ又心法の實義なり、先師と予と違はざるのみならず、唐日本と雖も、違ふことなし、此實義あるそかならば、其云ふ所皆先師の言に違はずとも、先師の門人にあらじ、予が後の人も、予が言を非とし、用ひずとも、此實義あらん人は、予が同志なり、先師固より凡情を愛せず、君子の志を尊べり、未熟の言を用ひて先師を

最負するものを悦ぶの凡心あるべからず、先師存生の時變せざるものは、志ばかりにて、學術は日々月々に進んで一所に固滞せざりき、其至善を期するの志を繼ぎて日々に新にするの徳業を受けたる人あらば、眞の門人なるべし、古より民三に生ず、父母生じ、君養ひ、師教ふといへり、思ひとしき故に、ともに三年の喪をつとめき、予が先師に於けるも、其恩君父に同じ、子よく父の家を起し、臣よく君の徳をひろめ、門人よく師の學を新にせば、ともに恩を報ずるなり、

蕃山が江西派の學に屑々たらざるものは、其能く變通を知るが爲めなり、藤樹已に權の妙用を説き、時處位の變通を論ぜり、蕃山乃ち此處より悟入し、己れが境遇の異なるに隨ひて、其行爲を異にせり、然れども其取る所の根本主義に至りては、藤樹と異なる所あるを見ず、此れに由りて之れを觀れば、蕃山は實に卓識活眼の人と謂はざるを得ざるなり、又集義外書卷二に云く、

來書畧人の申候は、貴老は江西に學び給へども、江西の學にあらざと

いかゞ其故御座候哉返書畧申所故御座候諸子は極りある所を學び
愚は極りなき所を學び候其時には大小たがひなく候ても今は大に
たがひ申べく候極りたる所は其時の議論講明なり極りなき所は先
生○の志○こゝに止まらず徳業○の昇り進むなり日新の學者は今日は昨
日の非を知るといへり愚は先生の志と徳業とを見て其時の學を常
とせず其時の學問を常とする者は先生の非を認めて是とするなり
先生の志は本としからず先生いへることあり朱子侯後之君子の語
を卑下の辭と講ずる者あり卑下にはあらず眞實なりと

蕃山決して藤樹に違背するの念慮あるにあらず然れども彼れは必ず
しも其言語の末に拘泥せずして唯其精神の存する所に從ひて發達進
歩を企圖するものなり故に往々他の江西派の人に非難せらるゝを免
れざりき殊に西川季格の如きは集義和書顯非を著はして蕃山を攻撃
せり然れども蕃山が集義和書及び集義外書に敘述する所の主意は全
く藤樹より得來たる所なり彼れは集義外書卷六に其曾て江東にあり

し時の事を追想して曰く、

其頃中江氏王子の書を見て、良知の旨をよるこひ、予にも亦さどされ
き、これによりて大に心法の方を得たり、

蕃山一生の學問は實に此に根柢せりと謂ふべし、彼れが藤樹に負ふ所
豈に鮮少なりとせんや、然れども彼れは、藤樹を以て完全なる理想的人
格とはせざりき、發句に來て見れば左程にもなし、富士の山と云へるが
如く、親炙して後多少豫想せる所に副はざる者ありしか、又古歌に「すめ
はまたうき世なりけりよそながらおもひしまし」の山里もかなと云へ
るが如く、渴望せし所を成し遂げて見れば、何等の特異なるものをも認
めざりしか、彼れは集義外書卷六に藤樹及び其學派を批評して曰く、
中江氏は生付きて氣質に君子の風あり、徳業を備へたる所ある人な
りき、學は未熟にて、異學のつひえもありき、五年命のびたらまじかば、
學も至所に至るべき所ありしなり、中江氏存生の時は、予を始として
皆粗學の者どもなれば、ゆるさるべき者一人もなかりしに、中江氏の

名によりて、江西の學者の名の實に過ぎたること十百倍なれば、つひ
えも亦大なり、

是れ蕃山が何等裝飾の言辭をも用ひず、直に江西派の真相を寫出だし
しものならん、近世名家書畫談二編卷三に云く、先生の未孫中江久風の
物語りに熊澤氏始めて藤樹先生にまみへ入門の時了芥よめる、

みな人の、詣る社に、神はなし、こゝろの内に、神ぞまします、
と無を以てとはれしに、藤樹先生

千早振神の社は、月なれや、詣るこゝろの、うちらうつらふ、

と有を以て答へられしとなり、藤樹と了芥と師弟なれども、後にその學
風の異なること初めより顯然たりと、未だ此事の眞否いかんを知らず
と雖も、蕃山が初めより心服せざる所ありしは事實と謂ふべし、
彼れ固より藤樹を以て完全なる理想的人格とはせざるも、其論述せる
所も、其成遂せる所も、皆藤樹より學び得たる根本主義によりて之れを
爲せること、復た疑を容るべからざるなり、

第二 陽明と蕃山の關係

蕃山の學問が藤樹に出づる以上は、藤樹の學問が陽明に本づく以上は、蕃山の陽明學派に屬するものなること、復た論を俟たざるが如し、然れども蕃山は本と活眼達識の人にして、舊套に拘泥すると能はず、古風に固滞すること能はず、常に時勢に應じて變通せんとするものなり、是故に一言一行悉く藤樹に倣はんとするにあらず、又旗幟を立て、専ら陽明の爲めに主張するにもあらず、是故に若し此點より考察し來たれば、蕃山は陽明學派の人にあらざるが如し、是を以て或は蕃山を以て陽明學派の人とするの非を論ずるものさへあるなり、事情此の如くなる以上は、蕃山が果して陽明學派の人なりや否やを論定するを要するなり、蕃山は他の陽明學派の人の如く、獨り陽明を尊崇して、朱子を輕侮するが如き褊狹固陋の人にあらざり、反りて朱子陽明共に各其長處ありとするものなり、宋の理學と明の心法と、何づれも其己れに裨益あるを知るものなり、集義和書卷一に云く、

再書略宋朝の理學明朝の心術と承候へば程子朱子は道統にあづからざるが如し、いかゞ返書畧周子の通書などを見侍れば、聖人の、は、だへ、あり、明道には顔子の氣象あり、後の賢者の能く及ぶ所にあらず、伊川の器量朱子の志、皆聖人の一體あり、凡心なき處は同じ、聖門傳受の心法にあらずして、何ぞや我はたゞ其學術を論ずることの多少を言ふのみ、惑を解くこと、の多きを理學と云ひ、心をあさむること、の多きを心術といふ、秦火に經、そこぬたり、故に漢儒の功は訓話にあり、其後異論、おこりて世に、まどひ多し、故に宋儒の學は理學にあり、惑どけては、心にかへる、故に明朝の論は心法にあり、

是れ漢儒宋儒乃至明儒各其功ありとするものにて、必ずしも獨り心法を取るべしと勸告するものにあらざるなり、即ち其主義の一方に偏せざるを知るべきなり、又議論の一に云く、

愚は朱子にも取らず、陽明にも取らず、唯古の聖人に取りて用ひ侍るなり、道統の傳のより來たること、宋王共に同じ、其言は時によりて發

する、なるべし、其、眞に於ては符節を合せたるが如し、又朱王までも各別にあらず、朱子は時の弊をたむべきが爲めに理を窮め、惑を辨ふるの上に重し、自反、慎獨の功なきにあらず、王子も時の弊によりて自反、慎獨の功に重し、窮理の學なきにあらず、愚拙、自反、慎獨の功の内に向ひて受用となる事は、陽明の良知の發起に、取り、惑を辨ふるの事は、朱子窮理の學により、侍り、朱王の世、學者の惑、異なり、地を易へば同じかるべし。

此文は又脱論の五にも見ゆ、蕃山が分明に朱子にも取らず、陽明にも取らずと云ひながら、其舌の未だ乾かざるに、自反、慎獨の受用となる事は、陽明に取り、惑を辨ふるの事は、朱子に據ると云ふは、自家撞着なり、然れども彼れの眞意は、朱子にも偏せず、陽明にも偏せず、總べて己れに裨益あるものを取りて、聖人の學に達せんと欲するにあるなり、又集義外書卷六に朱王二氏を批評して、其功過如何を論ぜり、

心友問ふ、朱子は賢人か、

曰く、大儒といふものならん、又賢なり、經傳の註にあきては古今一人の名人なり、古人の心に叶ひたると叶はぬとはあれども、先は初學の手を下だしよき様に手近く義理の聞ゆる註なり、此一色は後生の者、大に恩を得たり、

問ふ、王子は賢人が、

曰く、文武ある士と云ふ者ならむ、名大將なり、又賢なり、孟子の良知良能の奥旨をひらき教へ、自反慎獨の功にあきて後生の學者をして心を内に向はしむ、吾人徳をかうふる事、遠からず、内に向ひたる心にて經傳を見れば、語も理も本のものなれども、各別なる所あり、

問ふ、二子の弊は何の所ぞ、

曰く、朱子は文にひろ過ぎたる弊あり、學者理學に近くして心理に遠し、書は譬へば、雪中の兔の足跡なり、兔は心なり、聖經賢傳は皆我心の註なり、兔を得て後、足あどは用なし、心を得て後、書は用なし、一貫一路に大やうにとるも、あり、大意を見て、心を得べし、日用の功夫にあきて

は委しく見る事もあり然れどもそれは我受用の委しきが爲めなり徒に書のみ委しく見るにはあらず朱學はあまりに章句を分過ぎて文句の理に落ちて心を失ふこと多し云云故に聖經は註の爲めに蔽はれ心法は經義の爲めに隔てらる王子は仁にあやまち約に過ぎて異學悟道の流に似たる事あり云云

蕃山が朱王二氏を軒輊せざるの思想は全く藤樹に淵源す藤樹已に朱王二氏の功過を論じて其要を得たり第四章學問第一節叙論を參考せよ蕃山が此に朱王二氏を批評せる文章も大抵藤樹のを其儘引用せるに過ぎざるなり蕃山又朱王二氏の學を主張するもの各學派を成して相争ふの弊を論せり集義外書卷八に云く

朱學の最負をするものは晦菴をたふし王學の最負をするものは陽明をたふす朱子王子共に名を好むの中人にあらず徳を思ふの君子なりたゞ時の弊を除きて聖人の道を明かにせんと思へりまかるに朱學といひて一流とし王學といひて一流とすその學者を見れば徳

を好ま^ず、業をな^さず、た^い同^異の争^のみ^{あり}て、聖^學起^らず、朱^王の本^心は、聖^人の道^をあら^はさん^ど、せ^り、え^かる^に、か^へりて、聖^人の道^を塞^ぐなり、朱^王の本^心を、た^がへて、朱^王をか^なし、ま^しむ^るは、最^負だ^ふしに^あら^ずや、云^云、二^子の學^共に、聖^學に助^ある^事、少^から^ず、しか^れども、ひと^へに取^用ゆ^るど^きは、又^害あり、大^賢以^下の學^は、熟^せざる^所あり、其^所には、弊^生ず^るもの^{なり}、然^れども、二^子の本^心を學^ぶものは、益^のみ^取りて、弊^をな^さず、

又集義外書卷十に云く、

朱^學、王^學など、て世^に争^ひ、侍^れども、皆^易、簡^の善^には、遠^し、

又水土解に云く、

今の儒者の様子にては、朱^學も王^學も治^道の助^とはなり侍^らじ、國^君世^主少し用^ひ給^はい、少^し害^{ある}べし、大^に用^ひ給^はい、大^に害^{ある}べし、王^學の者、朱^學を格^法とて難^じ侍^れども、心^學者どもに多^くは格^法にま^どは^れたる體^{なり}、

是等の言によりて之れを考察すれば、蕃山は陽明學派の人と稱するを得ざるが如し、然れども實際彼れが論述する所を見るに、其主義とする所は全く致良知の學にして、姚江派の範圍を出でざるものなり、彼れ初め藤樹に就きて學ぶに當りて、藤樹其喜ぶ所の致良知の旨を教ふ、彼れ是に於て加力を心法に用ひたり、集義和書卷二に

少し文武の徳に志ありて、聖學の心法を心かけ候へども云云、

と云ひ、又集義和書卷九に

つどめは一念獨知の地にあり、

と云ひ、又

心内にむかふ時は一言にして、も精微を盡くすべし、心外に向ふものは、千言萬語の親切なる講習をなすども、たい説話のみにして、精微に入ることを能はず、云云、

と云へり、又集義外書卷七にも、

凡夫より聖人に至るの眞志實學は、たい慎獨の工夫にあり、

と云へり、凡そ是等心法に關するの言、枚舉に違わらず、此れに由りて之れを考ふるに、蕃山自ら朱子にも取らず、陽明にも取らずと公言すれども、其實は全く陽明學を尊信するものなり、朱子學を斟酌して之れを採り用したるの痕迹、毫も明断ならず、而して論旨の歸する所、徹頭徹尾、自反慎獨の心法なり、蕃山其世に處するに當りて、幕府の保護せる朱子學に反することを避くるの心ありしか、將た又特更に度量の廣大なるを、さんと欲するの心ありしか、今其意思の存する所を確定し難し、雖も、實際、陽明學を尊崇しながら、必ずしも陽明學にあらず、るが如くに公言せり、然れども、彼れは眞實朱子學を喜ぶものにあらず、集義外書卷十に云く、

朱學は理をいふ事はよくども、水土に應ぜぬこと多し、其上今の朱學者、聖賢の法を用ゆといへども、心の凡情は、小人と同じきもの多し、彼れ如何に公平を装はんとするも、遂に此に至りて、其朱子學に對する感情を漏洩せり、

彼れは専ら力を事業上に用ひしものにて、廣く學說を講明せしにあら
 ず、即ち朱子學の如きも、能く其奧義を究めしものと思惟するを得ず
 彼れの學問の素養は皆藤樹門下に得たるものにして、彼れは殆んど藤
 樹の學說を敷衍するが如き看あるなり、若し極言すれば、差、藤樹の文章
 を剽竊して己れの文章中に挿入して、憚からざるものなり、之れを要す
 るに蕃山の陽明學派に屬すること、決して否定すべからざるの痕迹あ
 るを見るなり、

第三 宗教論

蕃山は大に心を宗教上に用ひたりと見え、集義和書集義外書の兩書中
 佛教神道及び耶蘇教に關する論說少しとせず、又宇佐問答及び三論物
 語中にも間、神道に關する所あり、殊に三社託宣の如き、全く神道に關す
 るものなり、蕃山が宗教上の意見は、大體に於ては藤樹と異なる所なし、
 然れども又時に吾人の注意を惹くものなきにあらず、今左に其要領を
 叙述せん、

蕃山は佛教を以て迷妄の結果に成るものとせり、其迷妄は他なし、造化の自然を輪廻と見誤まり、見誤まりたる輪廻を根底として教を立つること、是れなり、佛教の根本的謬誤、全く此にありとせり、集義和書第十一に云く、

佛氏剃髮、人倫を棄るは、輪廻を恐るればなり、天道輪廻なし、まかるを輪廻と云へるは、惑へり、云云、むかし釋迦輪廻を見たるは、心眼病なり、後世の佛者、此心病を傳へて、輪廻ありと思へり、

思ふに、輪廻に二種の意義あり、一は六道の輪廻にして、各個躰は種々に流轉して定まりなしとするもの、一は心的状態の輪廻にして、刹那刹那に變化して窮りなしとするもの、第二の意義ならば、輪廻も否定すべからず、然れども佛教の輪廻は固より第一の意義を主要とする而已ならず、是れ其原本的の旨意なり、此の如き輪廻は、全く空想に出づ、全く臆測に成る、無智蒙昧の徒を、威すべき方便とはなるべきも、事實の證すべきものなし、蕃山が之れを破したるは、其肯綮を得たるものにて、今日にあ

ありても、佛敎の痛所は實に此にあり、集義外書卷四に云く、

釋迦よりして迷へり迷は、では一日も出家しては居、さることなり、造化の神理を、しらで輪廻と見たり、云云佛者の佛知とし、悟道とする所は、迷の根より出でたり、根本の神理を見そこなひ、異を立つるほどなる、迷やあるべき、迷の心ほど卑き心やあるべき、一旦まげて造化を、輪廻とせば、聖人の言皆非なり、造化に、輪廻なきが故に、佛氏の言皆非なり、

儒敎は世間上の敎なり、佛敎は出世間上の敎なり、世間上の敎を以て己れの立脚地とせるもの、此の如く佛敎を見るは、必然の結果に出づと謂ふべきなり、蕃山尙は明瞭に世間上の敎、反りて出世間上の敎に優ることを論述せり、集義外書卷五に云く、

聖人の學は平地のごとし、異端の學は山のごとし、山高しと雖も、平地には及ぶべからず、山にして險阻を行くことは、目を驚かし、平地にして大道を行くことは、人驚くことなし、出家にして、器量あり、惜しきと

云へるものを遷俗させては變はらぬ平人なり、築山にしては高きと思へるも、ならして平地とすれば、小村にも充たざるがごとし、是を以て君子の徳の大なると知るべし。

蕃山佛教に對して此の如き見解を有するが故に、甚しく佛教を賤視せり、全書卷四に云く、

迷はぬ者の心には、第一によしと云へる、佛教は第一に惡しく、淺ましき愚痴なる教なり、あるかなる道故、愚なる者はよしと思へり、佛者は心根の愚なる者ならで、はならぬと思ひ給へ、

彼れは佛教を此の如く愚痴なる教と見做すが故に、其創唱者たる釋迦をも賤視し、空海に及ばずとせり、其言に云く、

釋迦は反りて空海が半分も學問はなし、文筆もつたなし、

釋迦の自ら著作せるもの一も之れなきが故に、其文筆もつたなしと云へるは固より妄斷なり、又其空海を以て釋迦に優れりとするも、奇論の甚しきものと謂ふべきなり、蕃山又寂滅の教義に對して左の如き批評

を爲せり、集義外書卷九に云く、

汝寂滅といへども、帷子のまゝにて冬まで得居らず、寒き感あれば、綿入を重ぬ、飢て飯を食すかほど感する道理を、知りながら、無理に滅せんとす心の活物たる事を知らざるなり、

其論ずる所淺近なりと雖も、亦佛教の經驗的事實と撞着せる所を道破して、其當を得たるものなり、蕃山は佛教徒を以て耶蘇教の手引とせり、集義外書卷十に云く、

今の佛者は又吉利支丹のみちびきなり、かなしむべし、

又全書卷二に云く

佛法は後世といふ偽を信じ、其迷の心を本として、吉利支丹も起り候へば、吉利支丹のひき入は、佛法にて侍り、云云、

此れに由りて之れを觀れば、蕃山もへらく、佛教先づ幾多の出世間的迷信を我邦に傳播し、他の迷信の傳播し得べき關門を開けり、佛教にして我邦に入らざれば、耶蘇教も入り難かるべきも、佛教にして已に我邦

に存する以上は、蘇教も亦入り易かるべしと、然れども彼れは佛教を以て我邦の水土に適應するものにして容易に滅亡せざるべしと思惟せり、然れども其我邦に有害なることは明瞭に認識して之れを排斥することを務めたり、但、佛教諸派中禪宗は其自家の心學と共通の點あるを以て比較的に稱揚せり、集義外書卷八に云く、

達磨の佛心宗世にひろまることを惡みて、毒害せられしも、其身死して道は後世ひとり盛なり、異學といへども其徳あればなり。

又集義和書卷十一に云く、

佛學流おほしと雖も、天台と禪とすぐれたり、天台は、高妙なり、佛學の精しきこと禪に優れり、然れども心に惑あり、禪は學あらけれども近く、心法に付て要を得たり、惑なきが如くなれども、實は惑へり、

蕃山、禪宗を以て最も優れりとすれども、之れを儒教と混同するを恐る、故に尙ほ惑へりとして取らず、然れども佛教諸派中將來獨り盛なるべきは禪宗ならんと豫言せり、全書卷十一に云く、

唐にても初めは佛流分れて弘まりしかども、他は次第に衰へて唯、禪學のみ残り、日本も後は左様になり行きなん、人は易簡なる事により易し、云云、近年文明に従ひて地獄極樂等の説を信ずる事薄し、是れより後は愈々あるべし、禪宗はむつかしき事なく、易簡に教へてしかも悟とてさのみ後世の地獄にかゝはらず、是れ文明の時にあへり、今の禪は愚夫愚婦のよらんことを欲して妙を云ふ、是れ利心なり、祖師の傳來に背けり、此事なくば、愈々盛になりて、他宗は皆おされづべし、

次に蕃山が耶蘇教に就きて如何なる見解を有せしかを叙述せんに、彼れは耶蘇教を以て心の病なりとせり、議論の四に云く、

北狄は外邪なれば、治し易し、吉利支丹は内病なれば、治し難し、此内病の生ずる根、本は、人心の惑と、庶人の困究によれり、迷どげ困究やまば根を絶つべし、

此文又脱論の五にも見ゆ、蕃山が耶蘇教を以て迷妄に出づとするは當れり、然れども彼れは如何なる方法によりてか、多少耶蘇教の旨意を學

び得たりと見え、之れを佛教より優れりとし、佛教は到底之れを防遏するの力なかるべしとせり、集義外書卷十に云く、

後世と輪廻と立てし、云ふときは、吉利支丹は後世の手たても佛者よりは上手なり、理を云ふことも佛道よりは優れり、佛道の力を以て、防ぐべきこと難し、

尙ほ又儒教も耶蘇教の爲めに壓倒せらるべきことを論じて云く、

今の儒法は天下國家の政道となるべからざれば、終に一流となりて、吉利支丹の爲めに失はるべし、

蕃山は儒教は我水土に適應せず、佛教反りて我水土に適應せり、故に儒教は滅亡すべきも、佛教は滅亡することなしとして論じて曰く、

佛法は水土にかなふ處あり、儒法は水土に應せず、是を以て知れり、佛法も絶ゆべからず、儒道もこらず、儒道もこらず、佛法たえずは終に吉利支丹の爲めに奪はれぬべきか、然らば神道も儒道も盡く打破られて、畜生國となり、禁中もなくなるべし、

是れ固より彼れが漫に描出せる一時の妄想にして何等の根據あるに
 あらず、殊に佛教は我水土に適應せり、儒教は然らずとするもの、荒謬無
 稽取るに足らざるの説なり、彼れ耶蘇教の我邦に蔓延すべきことを想
 像すれども、耶蘇教を信ずるものにあらず、耶蘇教を好しとするもの
 ならず、故に耶蘇教の蔓延と共に、我邦は畜生國となるべしと云へり、然
 らば彼れは如何なる教を取るものなるか、彼れ餘姚の學を奉ずるもの
 なるが故に、勿論儒教に反するを得ず、然れども彼れは儒教も我邦に害
 ありとせり、水土解に云く、

佛、教、の、此、國、に、害、あ、る、の、み、な、ら、ず、儒、法、も、又、害、あ、り、

蕃山の取る所は神道なり、儒教の如き、取りて以て己れに資するに過ぎ
 ざるなり、水土解に云く、

三、種、の、神、器、則、神、代、の、經、典、也、上、古、に、は、書、な、く、文、字、な、し、器、を、作、り、て、象
 と、す、玉、を、以、て、仁、の、象、と、し、鏡、を、以、て、知、の、象、と、し、劍、を、以、て、勇、の、象、と、し、
 た、ま、へ、り、云、云、神、代、の、文、字、言、葉、は、絶、え、て、不、傳、ひ、と、り、三、種、の、象、の、み、の

こちといまり、至易、至簡にして、道德、學術の淵源也、高明、廣大、深遠、神妙、幽玄、悠久、盡く備はれり、心法、政教、他に求めずして足りぬ、

其神道を賛すること、至れり盡くせりと謂ふべし、尙ほ脱論の三に我邦に於ては各種の教法中獨り神道を取るべきことを論ぜり、其言に云く、
儒に著せず、俗學のいやしきをも見たり、朱學、王學等の弊も知れり、ずべて取るべきと思ふ學なし、天地の神道を大道と云ふ、我國には、日本の水土によるの神道あり、大道は名なけれども、我國の道なれば、やむとを得ずして取らば神道を取るべし、

又削簡の二に佛敎を崇信する者を非議して云く、

本より四海の師國たる天理の自然をば恥ぢて、西戎の佛法を用ひ、吾國の神を拜せずして、異國のほどけを拜す、我主人を捨て、人の主人を君とする事をば恥とせず、其あやまちを知るべし、

此れに由りて之れを觀れば、香山は日本主義を奉ずるものなり、和魂漢才の旨意を認むるものなり、國土の異同によりて敎の異なるべきを知

るものなり是故に彼れは日本は自ら日本の教あり他國は自ら他國の教あり彼是混同すべからずとせり水土解に云く

日本の水土によるの神道はもろこしへも我國へもかすと能はずかると能はず唐土の水土によるの聖教も又日本にかると能はずかすと能はず我國の人心によるの佛教も又然り云云學は儒をも學ひ佛をも學ひ理ゆたかに心廣くなりてかりかされざるの吾神道を立つべきなり

又削簡の二に釋迦と雖も日本に來たらば吾神道に従ふべきことを論じて云く

釋迦もし聰明の人にて中國日本へ渡られ候はゞ茫然として新に生まれたるが如く後生輪廻の見も何も忘れらるべく候もろこしならば聖人を師とし日本ならば神道に従はるべく候

宗教は何づれも特殊的の性質を帯ぶものにて假令ひ佛教若くは基督教の如く普遍的の性質を帯ぶと稱するものと雖も尙ほ其發達せる境

遇の影響を免るゝこと能はず、况んや其他をや、是を以て他國に發達せる宗教は我邦に適應せず、苟も宗教を要すとせば、我邦に發達せる宗教を採るに若かざるなり、蕃山蓋し此に見るあり、故に吾神道を立つべしと主張するなり、

蕃山此の如く神道を以て自家の本領とすれども、本と儒教によりて其素養を得たるものにて、到底儒教を捨つること能はず、乃ち神儒合一を工夫せり、削簡の二に、神道と聖人の道とは名こそかはりたれども同じく人道にして、三綱五常の道にもれずと云ふが如き、又天の神道は二なく候へば、儒と云ひ、佛と云ひ、道と云ふ名を其國ならぬ國へ持來れる事は、道を知らぬ者のまわざにて候と云ふが如き、其全く神儒合一を期するものなるを知るべきなり、彼れは深く天照大御神を信じ、(議論の三を)單に之れを歴史的に看過せずして、内容的に考察し、近く吾人の精神中に宿れるものと思惟せり、脱論の一に云く、人々の心に天神一體の神明ありと、即ち知るべし、天人合一なるを、若し吾人にして天賦の明德即ち

冥知を養成せば是れ即ち神明なり、光明なり、太陽なり、天照大御神なり、
故に彼れは明德を以て心の太陽とせり、(議論の三を)蓋し是等の思想本
と皆藤樹より得來たる所なり、



第五 批判

蕃山は學者といふよりは寧ろ經濟家なり、政治家なり、其人物性行、差野中兼山に類せり、彼れは社會に活動せんとするものにて、身を學理の研究に委ぬるが如きは、其性にあらざるなり、是故に其著はす所の書、少しとせざれども、皆通俗的の書にして、學說として觀るべきもの、殆んど之れあるなし、其中時に名言佳句の誦すべきものなきにあらざるも、悉く是れ思想の斷片にして、連續したる哲理的想考は彼れに望むべくもあらず、精細に看來たれば、彼れの思想は、大抵皆藤樹より得來たれるものにて、曾て江西書院に於て學び得たる旨意を敷衍するの外、殆んど附加する所あるを見ざるなり、甚しきは藤樹の言論を其儘剽竊して、視として恥ぢざるの狀あり、例へば、集義和書の首卷に見ゆる萬物一體の論は、全く藤樹の文なり、(戸田氏に與ふ)此類外にも多きが如し、彼が藤樹に負ふ所亦大ならずとせざらんや、藤樹は蕃山に取りては、良師なり、然り、良

に得やすからざる、其師なり、然るに、蕃山は、藤樹を呼ぶに、或は中江氏を以てし、未だ必ずしも、藤樹先生といはず、彼れ藤樹の如き君子人を師となしなから、私に之れを凌ぎ、管に先生と呼ばざるのみならず、又往々冷語を用ひて、其短を言ふを憚からざりき、即ち彼れが藤樹の學を、三尺の泉に比せしが、如き又は、未熟にして、弊ありとするが、如き皆、藤樹に對する、不満の情を洩すものなり、此の如くなれば、吾人蕃山の人物に就いて、多少の疑なき能はず、西川季裕其著集義和書顯非に於て蕃山を非議して、狼疾の人といひ、又

高滿至極なり、高滿甚しき故に、我分量を知らず、恥づべきの至りなり、といへり、同門の士に斯くまで甚しく指彈せらるるといふも、本と蕃山自ら招くに由るなり、蕃山は才子なり、然り、非常の才子なり、王學によりて身を修むと雖も、其才子たるの質、變化し、難きなり、故に往々其破綻を見る、重野安繹氏の、岡山ばなしに、閑谷に學校を創設したるは、津田左源太にして、蕃山與らざることを論じ、一體蕃山は功名心の深き人ならんと

いひ、痛く蕃山を撥斥せり、氏の論差反對の極端に走るの嫌なきにあらざるも、蕃山てふ人が、傳説によりて、頗る誇大にせられたるは、事實として、認容するも、不可なる可きなり、

然れども蕃山の不世出の人傑たるは否定すべからず、當時の貴顯に尊信せらるゝこと實に篤く、又學者に推獎せらるゝこと尋常なりとせず、殊に門人の如きは、蕃山を崇敬すること鬼神の如し、蕃山は政治經濟に従事せしが故に門人は固より多からず、集義和書書簡の二に云く、

拙者には弟子と申者は、一人もなく、侯師に成るべき藝、一としてなき故にて候、

然れども多少の門人なきにあらず、大江俊光、中江次常等皆蕃山に親炙せしものなり、就中俊光は日記あり、之れを俊光日記といふ、蕃山の事蹟を徴するに缺くべからざるの書なり、其中言へるあり云く、

入徳學術之示生前之大幸多益多恩不淺義也、日本之大賢君子と可謂人也、

其尊信の深き、以て知るべきなり、又蕃山が幕府に呈せし封事を論じて云く、

感信多益、不少、當時治世の要政也、目錄四十ヶ條程あり、凡知之不及所なり、天下の大寶といへども、人不知事、残念也、

余未だ其封事の内容いかんを知らずと雖も、蕃山の達識、固より疑ふべからず、其優に時流に抜いて秀づる所ありしは、信せざらんとするも、能はざる所なり、然れども、單に達識あるのみにては、未だ蕃山の如くに、周園の尊信を受くること、覺束なし、周園の尊信を受けんには、内容の徳なかるべからず、蕃山本、才子にして、藤樹の如く、自然に有道の態度ありしに、あらざるべけれど、藤樹より學び得たる治心の法によりて、賢人君子の域に入るを得たるなり、俊光日記に云く、

廿二日早朝、隱山被參、云云、息遊軒心傳と云ふも、昨日の書付にかはる事なし、書付之通りを込むる一言あり、聖人の氣象に成りて、居候事也、此氣象を何事にも不更、元我想萌さば、其儘打拂ひて、又聖人の氣象に

立○ち○か○へ○る○事○な○り○、一○生○此○氣○象○を○不○變○也○然○ら○は○自○然○に○入○德○君○子○に○も
可○至○者○也○云○云、

藩山入徳の工夫此の如し此の如くなれば内容の徳なかるべからず其
周囲の尊信を受くるもの内容の徳に由らずとするを得ざるなり果し
て然らば藩山の如き豈に啻に政治家といひ、經濟家といふに止まらん
や、



第六 蕃山關係書類

蕃山の事蹟及び學問に就きて參考となるべき書類の重要なるものは

熊澤先生行狀記一卷 湯淺常山著

蕃山先生行狀一卷 草加定環撰

此行狀は先哲像傳卷二に掲載せり、

熊澤先生言行錄 草加定環輯

此書蕃山の事蹟を述ぶること頗る詳密にして參考となるもの少しとせず、

蕃山實錄一卷 巨勢直幹著

此書の末に巨勢卓幹とあり、然れども他の上木せる書類には皆巨勢直幹に作る、故に姑く之れに従ふ、直幹は蕃山の門人なり、草加定環撰ぶ所の行狀の末に會喪門人五人を擧ぐ、其中巨勢直幹あり、杉浦正臣

の儒學源流に藤樹の門人とするは誤なり、

中江藤樹熊澤蕃山傳一卷寫本〇片山重範所藏

此書中には藤樹蕃山二先生の畧傳とあり、然れども主として蕃山の事蹟を敘述せるもの著者は伊豫宇和島の人なるが如きも、姓名詳ならず、

熊澤了介先生事跡考一卷寫本〇清水信著

慕賢錄一卷寫本〇秋山弘道著

此書は備前の人秋山弘道子皓が文政十四年を以て十有七部の傳記を參考して蕃山の事蹟を編次せしものなり、

湯子祥書牘一卷管政友筆記

熊澤了介傳一卷菱川大觀著

此書は岡山の菱川大觀が著はす所にして、敬齋叢書中に收載せり、

熊澤伯繼傳藤田一正著

此書は備後の五弓久文が編輯せる事實文編卷十八に收載せり、

蕃山先生行狀逸名

此篇も亦事實文編卷十八に收載せり、今其文を讀むに、全く草加定環が行狀と同一なり、

熊澤了介事蹟一卷寫本〇熊澤繼明著

此繼明は蕃山の苗裔にして、其長男の繼明にあらず、右蕃山の事蹟は明治十年二月修史局の需に應じて報道せし所に係る、

熊澤氏事依尋答一卷寫本〇松平日向守用人之答

大江俊光記寫本

蕃山先生年譜一卷片山重範著

蕃山先生行狀齋藤一興著

文會雜記(卷五)湯淺常山著

集義和書顯非二卷四川季格著

是れ西川氏が元祿四年を以て撰述し、元祿十年に至りて始めて刊行せし所にして、専ら集義和書を駁撃せるもの、西川氏は藤樹に親炙せ

し人にして、本と清水氏と稱せり、

東遊記(卷四)橘南谿著

先哲叢談(卷三)原念齋著

近世叢語(卷二)角田九華著

日本儒林譚(卷上)原念齋著

近世畸人傳(卷一)伴蒿蹊著

近世名家書畫談(二編卷三)安西於菟編次

野史(卷二百五十六)飯田忠彦著

事實文編(卷十八)弓久文編輯

藝苑叢話(卷下)山縣篤藏編著

熊澤菴山一卷孫越芳太郎著

日本の陽明學高瀬武次郎著

陸象山建部遊吾著

先哲像傳(卷二)原德齋著

近代名家著述目錄(卷之四)

日本諸家人物誌(南山道人畫迹)

古今諸家人物誌(釋萬善堂)

鑒定便覽(卷一)

日本名家人名詳傳(卷之下)

名家全書(卷一)

近世大儒列傳(卷上)(内藤燦桑著)

日本教育史資料(卷五)(文部省編纂)

名儒傳(寫本)(撰人名闕)

文學偉人傳(服部喜太郎編述)

陽明學(吉本優發行)

熊澤蕃山の教育(足立栗園稿一〇號)教育時論

藤樹と蕃山(全五百七號)教育時論第

近世德育史(足立栗園著)



我○必○方○法○は○節○儉○以○て○冗○費○を○省○き
有○餘○を○生○じ○他○の○艱○苦○を○救○ひ○各
其○業○を○勉○勵○刻○苦○終○身○善○行○を○履○み
惡○業○を○爲○さ○ず○勤○動○以○て○一○家○を○全
う○す○る○に○あ○り。

二 宮 尊 德

第二篇 藤樹菴山以後の陽明學派

藤樹菴山以後單獨に陽明學を崇奉し、所在子弟を感化するもの陸續輩出せり、其中間接に江西學派の影響を受けたるものなきにあらざるも、亦自ら陽明の遺書によりて、感奮せるもの少しとせず、就中北島雪山、三重松菴、三宅石菴、三輪執齋、川田雄琴、中根東里、佐藤一齋、大鹽中齋諸氏の如きは、蓋し鑑中の錚々たるものなり、

第一章 北島雪山 附細井廣澤

江西學派と何等の關係もなく、全く單獨に他の地方に於て陽明學を喜ぶもあり、是れを北島雪山とす、雪山名は三立、肥後熊本の人なり、寛永十四年に生れ、元祿十年に卒せり、享年六十有二、雪山壯年の時、江戸に遊び、林羅山の子春齋及び春徳木下順菴等と相交はり、才學俱に富み、藏書甚だ多し、時人稱して書廚と云ふ、熊本侯に仕へ、祿四百石を賜はる、然るに

寛文九年十月に及んで侯國中に令し、陽明學を修むるものをして之れを改めしむ。是に於てか雪山其迫害の甚しきに耐へず、同志の徒と俱に謂へらく、爵祿の爲めに我攘行を變ずるは大丈夫の所爲にあらざるなりと。乃ち上書して言はく、臣少うして陽明の學を修め、君父に事ふること、必ず此れに由る今にして之れを棄つれば、更に君父に事ふるの道なきなり。請ふ臣たるを致して行かん」と、侯甚だ其言を奇として特に命じて三年の祿を賜ひ、隨意に國を去るを得せしむ。是に於て雪山屋宇を修理し、庭内を洒掃して、之れを有司に致し、野服蕭然として去る。肥後先哲遺蹟に欣古雜話を引いて云く、寛文九年十月一同に朝山次郎右衛門、西川與助、小笠原勘助、淺野七左衛門、北島三立など多くの人御暇給はりしなり。此は世に傳ふる所は、彼の王陽明が學派を禁せられしに因りての事と、なん、總べては、廿人近くもありけらし。云云と、此れに由りて之れを觀れば、陽明學派は一時可なりの勢力ありしと見ゆ。熊本侯が之れを禁ぜしも、獨り雪山の爲めに然かせしにあらざるを知るべきなり。

是れより雪山狂吟放浪繩墨に拘はらず、士大夫と席を接し、衣襟襪を纏ふて曾て愧色なし、甚しきに至りては、青樓に遊ひ、褻衣を解き、妓をして虱を拾はしめ、或は道に凍餓の人に逢へば、衣を解いて之れに與へ、裸體にして歸れり、其奇行の多きこと、ヨーロッパのデオグチスに譲らず、雪山遂に長崎に適き、六十二歳にして歿せり、時に家に擔石の貯なく、唯、藤紙數本と酒器一箇ありしのみと云ふ、其生活の單純なる、以て想見すべきなり、雪山が陽明學を修めたるは別に師傳あるにあらず、全く單獨に之れに歸したるなり、雪山も初めは同志も、ありて、教育上に、多少の影響を及ぼし、ものと思はるれども、一旦驟然故國を去りしより、専ら其長せる書道に心を寄せ、復た陽明學を講せざりき。

雪山著はす所唯、國郡一統志あるのみ、陽明學に關しては一つも著はす所なし、彼れ熊本を去りてより一意書法を究め、技倆益進みしと見え、書法に於ては彼れ自ら「宇宙獨歩」と公言し、印を打たざるに至る、永富獨嘯菴曰く、南郭之詩、雪山之書、芭蕉之俳諧歌、皆一世之逸品、研精刻意之久、遂

詣此域也、亦豈容易乎哉、と彼れが能書の名一世に高かりしこと、此れに由りて知るべきなり、然れども彼れが學は遂に彼れが書名の爲めに蔽はれて、單に書家の名をのみ遺せり、

門人に有名なる書家細井廣澤あり、嘗に書道を承けたるのみならず、又王學をも併せて承けたり、近世叢語にも、廣澤治程米學、又悦陽明王氏之説とあり、蓋し又據る所あるならん、



第二章 三重松菴

三重松菴名は貞亮、新七郎と稱す、京師の人、三輪執齋と同時に陽明學を唱道す、元祿十五年を以て門人の爲めに王學名義二卷を著はす、松菴は自ら傳習錄を讀んで陽明學に歸せしものにて別に師傳あるにあらず、故に跋文の中に云く、二日嘗讀傳習錄初未曉文義讀之已久而恍然似有所省者然後知陽明子之學真切簡易而粹然大中正之歸矣と、一時門戸を張りて教授せしと見え、豐滿教元村上明亮等の門人あり、

其著王學名義は上卷に致良知と五倫と孝とを説き、下卷に大學説、五常孝悌忠信、心性情理氣、知行合一、四句教法の七箇條を説き、最も通俗的に王學の要領を叙述せり、松菴良知に就きては、先づ之れを心の神明とし、次ぎに萬古不易とし、次ぎに萬人同性とし、其能く良知を失はざるものを聖人賢人と稱し、論じて曰く、

四書五經に説きたまふ所は、皆吾心の良知を致す注文なり、されば此

致、其、知、の、三、字、を、標、的、と、し、て、四、書、五、經、を、讀、ま、ば、皆、我、身、の、行、と、な、り、て、
今、日、の、用、と、な、る、べ、し、若、し、さ、な、く、ば、四、書、五、經、と、我、身、と、別、に、な、り、て、其、
益、な、し、さ、て、こ、そ、此、三、字、は、學、問、の、肝、要、に、て、聖、人、の、人、を、教、へ、た、ま、ふ、第、
一、義、と、い、ふ、殊、に、陽、明、學、の、宗、旨、な、り、

是れ陸王の遺旨にして其學の生氣を帶ぶるもの實に此に存す松菴が
父子の關係を説く所往々傾聽するに足るものあり其言に云く、

親の慈悲ふかく道あるに孝あるは行ひ易きことなればさして孝行
と言ひ難し親の慈悲あさく無道なるに孝あるこそ誠の孝行とはい
ふべけれ、

是れ逆境に處して節義の光を發するを謂ふなり又子の教へざるべか
らざることを論じて曰く、

吾身は親に受けたれば即ち親の身なり吾身を分ちて子の身となし
たれば子の身も原は親の身なりされば子を惡しく育つるは親の身
を惡しくするに同じ故に子を教へざるを不孝の第一とす、

松菴も藤樹と同じく萬人同等 equality を主張し、君臣と雖も、本と差等なしとせり、其言に云く、

所産の貴賤によりて、君となり、臣となれども、元來は皆天地の子なれば、我れも人も皆兄弟同理なり、

其他彼れは尙ほ學問は良知を明かにするを本とするを論じ、至徳要道を約めて云へば、愛敬の二字に究まるを辨じ、又萬物一體、理氣合一等の事、畧説明して其要を得たり、學者之れを一讀するも亦全く無用の業にあらざるべきなり



第三章 三宅石菴

三宅石菴名は正名、字は實父、石菴は其號なり、又萬年と號す、京師の人、寛文五年正月十九日に生まる、少うして學を好み、群童に異なり、稍長じて親を喪ひ、一意學に耽り、家道如何を顧みず、之れが爲めに家産遂に蕩盡するに至る、乃ち家具を賣り拂ひ、盡く負債を償ふ、餘ます所僅に數十金あるのみ、石菴兄弟六人ありしも、獨り弟觀瀾のみ石菴と同じく學を好む、因りて弟觀瀾に謂ひて曰く、今貧極まると雖も、短褐蔬食、以て數年を支ふべしと、研究の志愈々厚く、環堵の室、兄弟案を並べて講習し、日夜屹々共に寢食を忘るゝに至る、幾もなく窮乏已に極まる、是に於て兄弟相携へて江戸に來り、子弟を教授し、以て口に糊するを得たり、居る數年にして石菴仕途に就くを屑しとせず、望々然として獨り京師に歸る、時に年三十三、會、讃岐の木村某禮を以て之れを迎ふ、乃ち往いて居ること四年、邑中化を承け、學に嚮ふを知る、既にして又大阪に至り、程朱の學を唱ふ、時

に其名海内に噪しく、弟子の來たり集まるもの日に月に多し、中井竹山の父養菴の如きも亦其弟子たり、弟子等大坂に學校を創設せんことを謀り、之れを關東に訟へしに、石菴の名、固より台閣に達しければ、即ち其名を指して學校の地を賜ふ、是に於てか學校を設立し、之れを懷德書院又は懷德堂と名づけ、石菴を推して之に主たらしむ、石菴固辭して曰く、「君子不重則不威、我は布衣の賤夫なり、如何ぞ棟梁たらんと、然れども弟子等請ふて止まざるを以て、遂に祭酒の事を領す、懷德堂は中井氏石菴の後を承けて之を持續し、遂に關西に於ける學界の重鎮となれり、石菴祭酒の事を領してより、僅に三年にして、享保十五年七月十六日を以て、浪華に歿す、享年六十六、河内の神光寺に葬る、石菴の婦人は岡田氏にして二男二女を生む、長男文太郎及び二女ともに父に先ちて死し、獨り二男才二郎、名は正誼、父の志を繼ぐを得たり、弟觀瀾、名は緝明、字は用晦、水戸義公に仕へて國史編修總裁となり、又幕府に仕へ、年四十五にして歿す、石菴人となり、謙和質樸にして、能く人を容れ、論するに、人道を以てす、

るの外毫も他事を説かず、生涯、只綿衣を着、け、曾て絹帛を穿、た、ず、と云ふ、石菴初め程朱の學を唱へたりと雖も、晩年全く陽明學に歸せり、故に香川太冲彼れを評して曰く、世呼石菴爲鶴學、問此謂其首朱子、尾陽明、而聲似仁齋也、と、石菴顔真卿を追慕し、書に於て一家を成せり、筆力遒勁にして妙を得たり、故に隻字と雖も、人争ふて之れを求むるに至る、然れども印章を捺することなし、是れ其の質素を守るが故なり、雪山の如く抱負する所あるが爲めにあらず、彼れ又兼ねて倭歌及び俳諧に通せり、蓋し彼れは學者にして頗る多能なるものなり、續近世畸人傳には、詩文にも巧なりしが如く記載あれども、詩文は多く世に傳はらず、梁田蛻巖觀瀾の文を激賞すれども、一言も石菴に及ばず、蓋し石菴は文才に於ては迪に靚瀾に及ばざりしならん、石菴の門人中有名なるは前に挙げたる贅菴を最とす、然れども尙ほ外に富永仲基あり、亦曾て石菴に學ぶ、然れども未だ全く儒學に懽焉たらざるものあり、乃ち説叢を著はして儒教を破す、之れが爲めに石菴と絶交す、惜ひかな其書傳はらず、仲基又出家

後語の著あり、佛書の批評として頗る注意すべきもの、是れ今日に儼存する所なり、

石菴著はす所甚だ少かりしと見え、其著書の傳はれる者殆んど稀なり、唯、僅に藤樹先生書簡雜著二卷あり、是れ石菴が藤樹の書翰を集め、比較對照して其謬誤を正し、初めに序論を附載せり、其中左の一節あり、云く、

先生致知至及び誠意を言ふ者、恐くは未だ精詳ならず、余別に説あり、今その略を叙せん、世の學者皆致知をよみて知をいたすとし、知至をよみて知いたるとす、固より當れり、唯、先生は致知、知至を以て、渾べて知にいたるとよむは、何ぞや、蓋し玉説に泥んで然るなり、王子の致者至也といふは、大概に之をいふ、字を説くの體なり、其實は致は至と自ら分辨あり、若し其丁寧を致さば、字彙に此字を訓じて使之至也といふが如くなるべし、方に明かにしてまぎれず、泥む所あり、云云大學にいはゆる意は論語のいはゆる意と自ら異同あり、蓋し意は意のみ、然るに意必固我の意は絶ちて迹なからしむべし、之を誠にするは病

根に培ふなり。身心意知の意は誠にして終あらしむべし。之れを絶つは生機を息るなり。故に王子實行温清之意の云を以て誠意を説けり。先生清水に答ふる書を見れば、いはく、大學の意と論語の意と二義なし。誠は良知の本體、意必固我を格して、良知の誠に復るを誠意といふ。意、必の意を以て、誠意を解すれば、病根、生機を併せて、俱に之れを失ふことあらんとす。正にいはゆる、噎ぶに、よりて、食を廢するなり。たい其良知の誠に復るといふを以て説を終る。前の過自ら補はれ、此意再次活潑することを得て、方に王子大學と其歸を同うするのみ云云。此れに由りて之れを觀れば、石菴如何に藤樹を尊信すと雖も、敢て之れに盲従するものにあらざるを知るべきなり。

石菴固より陽明學に歸するものなりと雖も、又朱子を排するを敢てせず。朱陸王を崇敬して均しく之れを尸祝するものなり。此事に關する一節あり云く、

朱陸王子は皆吾道の宗子、斯文の大家なり、世の朱を爲るもの、陸を非

とし、その王を爲るものは、又朱を是ならずとして各、之れを屢倒せんとするの氣あり、是れ三先生の心を知らざるなり、當時朱子象山を謂ひて天下第一の人なりと、陸子も亦紫陽を謂ひて天下第一の人なりと、その相交ること兄弟の如し、議論の間合はざることありと雖も、並び行はれて相害せざりき、之れを君子の心といふ、その學は天下の公なり、然れば、朱に本づくど、王に本づくど、本づくど、所異なりと、雖も、その私たるは一なり、三先生の道とする所は、何ぞ、此私に勝ちて天下と大同するのみ。

石菴の此見解寧ろ公平なりと謂ふべし、然れども其學は雜駁にして純粹ならず、世人が鶴學問と稱するもの、故なきにあらざるなり、



第四章 三輪執齋 附繁伯

第一 事蹟

三宅石菴に後るゝこと五年にして三輪執齋生まる。寛文九年なり、執齋名は希賢、字は善藏、執齋は其號なり、又躬耕蘆と號す、京師の人なり、番山松菴、石菴皆京師の人にして執齋亦京師に出づ、思ふに、藤樹曾て暫く京師にありて教授せしこともあり、又江西書院に學びたる藤樹の門人にして王學を京師に唱へしものもあり、或は其等の結果にや、王學を唱ふるもの相繼いで京師に起れり、執齋の如き、亦其尤なるものなり、執齋の先祖は大和國三輪神社の司祝なり、父を澤村自三と云ひ、醫を以て業とし、京師に住す、母は箸尾氏、執齋六歳の時母を失ひ、十四歳の時父を失ひ、市人大村氏に養はれ、後出で、眞野氏を鬪ぐ、後又本姓を三輪氏に復し、祖先の祭を爲せり、執齋十八歳にして始めて江戸に赴けり、其事甚だ奇異なるものあるが故に左に獻徵先賢錄の文を擧ぐ、云く

執齋は京師の人なり、歳十八の春、母方の族人、大村彦太郎といふ者、

何ぞ相應の功業を成して世に知らるべしとて種々の事を考へしと、
兩人して北野の管公府に通夜して、終身の夙業を考へしと、
なかりしが、醫者の儒者になるべしといふ彦太郎は、商估となりて、
く産業を豊にすべしといふ、さあち江戶へ行くと定めて、兩人
して送來下し、品川隈に到りて、これより速ならば十年、遅くなら
年、互に時を得るをまちて面會すべし、されども是れより何方へ寄寓
するも、各の知音を頼んで、人の手をまつ事なれば、行く先も知れず、命
さへあらば、まづは五年の星霜を経て、日本橋の上へ、斯日の夜を以て、
待運ふべしとて別れぬ、時に貞享三年、丙寅の歳の三月三日なりとぞ、
執齋は東下の歳は、眞野善藏と稱し、諸方の藩醫などへ、隨身して、醫業
を學べんとせしむ、これぞさいふ名師にも遇はずして、空しく一年の
光陰過せしが、翌年十九歳の春、初めて佐藤直方の門に入りて、儒者ま
成るべしと思ひ、直方が塾生となりて、其家に寓せり、直方は麻橋の酒
井侯の賓師として、侯の儀糧を受け、其優禮甚だ厚くして、大手前の邸
舎中に在り、執齋能く師を敬し、業を勵み、學術も大に進む、直方も大に
其人となり、貧乏して、時々諸家よりの招聘の講筵に、執齋をして代り
に行かしむ、二十二歳の春は、直方の推舉によりて、學業の資として、酒
井侯より俸米十口を賜り、別に邸舎中に於て、居宅を賜ふるに至る、時

に三月三日に至りければ、兼て五年以前、大村彦太郎（僕奴一人を召連れ、
 て夜中に待合ふべく事約し置しなれば、黄昏より僕奴一人を召連れ、
 橋上へ行きしが、彦太郎もまた一人の僕を従へ、互に居處をあかし歸り、
 て時刻を移しけるが、間も四日にも近ければ、互に居處をあかし歸り、
 尋れゆくべきに、まだ十分の時を得しさいふには、あらざれば、今年
 を過ぎて、又々斯所にて出あふべしとて、別れぬ果して、亦三年の後に
 は、執齋は若黨兩人、若頭兩人を従へて、箱提灯をさぼさせゆきぬ、彦太
 郎も亦若者兩人、小僧貳人を従へて、來りぬ、互に先づば時を得しに、近
 しとて、今は、麻橋（三口の扶持を贈られ、其邸中に資禮を以て遇
 せられ、其餘の諸侯、數家に招請せられ、衣食まで何の不足もなくして、
 昔に異なるを告げれば、彦太郎も日本橋通一丁目へ、以前より小切の
 店を開しが、今は小切にてはなし、次第に繁昌して、呉服の商ひを爲し、
 白木屋さ唱へ、先ば五十人に近き手代を抱へ、千金の産を成したりと、
 て語りける、これより互に往來して、兄弟の交りを爲すべしとて、彦太
 郎は執齋より、歳二つ長しければ、兄なりさて、生涯を送りしなりとぞ、

大村彦太郎は即ち、呉服店白木屋の創立者にて、代々彦太郎と稱し、今日
 に至れり、執齋年十九にして、始めて佐藤直方に學ぶ、崎門の學、他姓を承

々ことを非とす、執齋之れが爲めに本姓に復し、深く直方を徳とせり、直方は、崎門の翹楚にして、固より程朱の學を主張し、痛く王學を排斥せり、王學論談一卷以て、其説を窺ふべし、執齋其門に入り、親しく朱説を聞きながら、反りて、私に、王學に歸し、其多く己れに益あるを喜び、其道を講究す、是に於て、直方の爲めに、絶交せられ、暴言を受くるに至る、彼れ自ら往いて之れを懇へんと欲すれば、亦其門人の怒に逢ふ、是を以て之れが爲めに、困むこと、數年の久しきに及ぶ、然うして、後直方漸く其學を變ずるの意、名利の爲めに、あらざるを知り、遂に相見ること、故の如し、直方病革まるの日子、弟に命じ、先づ之れを執齋に告げしむ、執齋乃ち往いて之れを訪ふ、命既に絶えて及ばず、因りて、終夜、柩前に侍し、和歌八首を賦して之れを哭せり、其三首は、先哲像傳に掲載せり、皆參考となるものなるが故に、又左に轉載せん、

今年八月望、佐藤先生俄に病し給ふとき、くよりやがてまいりければ、やこと切れ給ひぬ、永きわかれにも及ばざりしかなしさよ、終

夜むなしき御からの傍に侍りてすぎこしかたを思ひ續け侍る、今宵は十五夜なりけれど、雨痛く降りて名高き月も見えず、名に高き最中の月の、かくれしや、世にたぐひなき恨なるらん、

希賢十九になり侍る年始めてまみへけるよりことし三十三年になりぬ

けふまでと、契りやかけじ、つかへしも、三十じみとせの、秋の夕露、此ころ先生どもなはん人しなければ、たどりゆく、千代のふる道おどをたづねてと讀み給ひて希賢に見せ給ひしも四日五日のほどなり、

たづねけん、千代の古道あどかへて、ひどりや、昔の下に行くらん、執齋曾て直方の推薦によりて酒井侯に仕へしも、後仕を致して去り、京師に歸り、尋いて大阪に之き、又江戸に來たり、數年の間居止定まらず、或は日本橋に、或は飯田町に住し、遂に下谷泉橋の北に講舎を扨設して之れを明倫堂と名づけ、世の子弟を教授し、東都の木鐸を以て自ら任ず、門

人の多き指を屈するに違わらざるに至る。時に物徂徠死して後、服南郭平金華等ありと雖も、要するに皆文人のみ、執齋此間に立ちて道を講ずること甚だ力む、其功決して没すべからざるものあり、梁田蛻巖が復井登菴書に曰く、

示及告寬量小菡公文一首、讀玩再三、足以觀德業之實矣。大抵執菴子弟、飽齊梁耽絲肉、未曾學問、及其馭吏臨民、嘗不知務、甚者毒人靈國、如公可不謂大中蓮乎。雖然、徵輪氏不得聞道、姚江之學、其所陶鑄、果不誣矣。方今江左儒人、以詞藻名、如南郭金華諸才子、姑置是、振鐸四方、大倡聖學、舍斯人其誰也。昔文中子講道河汾、王魏房杜之曹、達材成德、安知他日東都賢士大夫、明體適用、與寬量公相弟昆者、不出輪門乎。吾儕當拭目而俟。(集後)

七編卷)

執齋齡耳順を過ぎて、痰咳の患に嬰り、病勢日に熾なり、因りて疾を興して京師に歸る。寛文四年七十一歳の時、壽藏を建仁寺兩足院に立て、自筆の和歌二首を其裏に刻せり、

先塋の後に予が終の住所營みけるに、幸に杉の二本有りけるも、た
いならず覺へければ、

たらちねに、かへす此身を、あきつきの、しるしとぞみる、杉の二本、
契ちく、玉のありかを、こことみよ、からはいづくの、土となるとも、

後五年を経て寛保四年(即ち延享元年)正月二十五日京師に卒す、西曆に
據れば彼れ千六百六十九年に生れて千七百四十四年に死せり、執齋痰
咳の患漸く重大となりて寢牀に就くに至りしは、寛保三年の冬十二月
中頃のことにして此れより翌年正月に至り、愈々危篤となりしに、正月二
十三日に至り、髭を剃りて洞堂を拜して永訣を告げ、廿三日及び廿四日
の兩日には親族舊讎より従僕に至るまで悉く永訣し畢り、廿四日の晝
未の刻(即ち今の二時)に筆紙を請ふて、寛保四年子正月廿五日三輪希賢
死と自書し、翌廿五日の朝寅の刻(即ち今の四時)に逝去せり、享年七十有
六、壽藏の地建仁寺中兩足院に葬る、執齋男六人あり、然れども一人の箕
裘を繼ぐに足るものなし、門人に川田雄琴あり、(後に出)王學を傳へて之

れを主張せり、

執齋和歌に巧なり、或は云ふ、儒者にして和歌を善くするもの、未だ執齋の如きはあらずと、彼れ又詩文に巧なり、殊に國文に妙を得たり、其著日用心法の如き、行文甚だ明晰にして自ら味あり、一種の文筆と謂ふべし、今其詩二三首を擧げんに、

慢興

黃鳥聲々、簷外暮、杏花陰裏、獨倚欄、光風霽、月滿天地、洒落自知、茂叔看、

懷鄉

故園萬里、東茫茫、望無窮、紅添樹、花雨白、知柳絮、風陽炎、盈草野、落日入山中、瘦馬追春色、黃昏歸路空、

三疇吟

辭祿偶成詩一章、偷閑取適、閱風光、澗明徑、裏孤松、老茂叔、窓前萬草長、非市非山人、寂寞欲晴、欲雨、客彷徨、移家自愛、三疇內、躑躅含紅、向夕陽、

題水仙

夜寂藥珠宮殿內黃冠綠袖獨蕭然金盤高捧承朝露自是地行花裏仙

首尾吟

休爲他人論是非
向先我非非焉能使人
爲他人論是非

此篇の如きは修徳の工夫に裨益多きは藤樹の首尾吟にも優れりと謂ふべし、雜著の第三卷に載する所の詩總べて二十六首あり、其中右に擧げたる四首を最も佳なりとす、文も亦多くは肺肝を披瀝せるものにして、毫も浮薄の弊なし、故に讀んで興味津津々として盡きざるの感あり、今左に一篇を擧げんに、

送中村恒亭歸

先民有言道之在人心如白日如大路夫萬變無非一心之用而好惡之情善惡之實十指焉十日視焉亘哉近且易也自孟子沒而後諸儒茫然不復務本親道於陳編之間講學於事物之末不及求諸身心則生資之偏人欲之蔽終不能以除之而其博也適足以長傲也其詳也適足以飾非也紛紛之論於是乎興各立門戶以相摯拳躬言學聖人而不老佛若矣不亦傷

乎、當此時、雖有豪傑卓越之士、明智高才之徒、其何心辨是非、而決其所適、從以是觀之、向所謂如白日而大路者、是耶非耶、余亦甚惑焉、雖然、道無今古、心無彼我、則何遠且難之有矣、而十手指十目、視者又嚴々乎、遂無別于今古、則其近且易者、豈待求之佗乎、如夫揣白日於尺寸、要大路於東西者、焉能有所取、諸予言哉、予憂於斯尚矣、今於恒亨歸省、亦稱此言、以勉其專力於根本、聞子卿有谷先生者、博古君子也、子若過之、幸以余言正之、

此外尙ほ見るべき文少しとせず、或は執齋詩文に長せずとすれども、余は頗る之れを疑ふ、唯、彼れは彫蟲の技を務めざりしのみ、
執齋が我學術界に最も貢獻する所多かりしは、其傳習錄の翻刻にあり、
執齋の時に當り、麴樹己に歿し、蕃山亦繼いで歿し、源を江西に發したる
王學俄然一頓挫を爲せり、東に中根東里あり、西に三宅石庵ありと雖も
大に其學を發揚すると能はず、此時に當りて執齋頗る務むる所あるも
未だ堀川若くは護國の勢力に匹敵すべくもあらず、然れども其傳習錄
を翻刻したるは、頗る王學を振興するに功ありき、是れ實に正徳二年壬

辰九月三十日の事なり、然るに陽明も成化八年壬辰九月三十日に生れたるが故に陽明の誕辰と支干月日を同うす、加之陽明は成化年間に生れたれども、其最も生榮せるは正徳年間なり、是故に年號も亦偶然にも同じ、執齋が新刻傳習錄成告王先生文に云く、

維日本正徳二年、歲次壬辰、九月盡日、希賢敢昭告于大明新建侯文成王公、曰、道無古今、心無彼我、恭惟先生得心傳於同然、指聖功於良知、德業輝於當世、餘訓流於萬邦、嗚呼盛哉、我京尹篠山源君景仰其德、篤信其學、政務餘暇、使希賢講傳習錄、且考定刻行之、希賢固辭不得、叨奉嚴命、發軔於去歲八月、畢功於今日、今日謹考支干月日、悉皆正當、先生誕辰而曆號亦與先生存日同實、和漢萬世未曾有之一遇矣、其偶然與將有數存焉、與則斯道之興、似有所俟也、謹以清酌茶菓、奠傳習錄新刻本、虔告功畢於我文成公、伏冀先生之道大明乎天下、至治之澤徧蒙乎生民、

此の如く傳習錄の醜刻は陽明の事蹟と暗合の點ありしが爲め、世人奇異の思を爲して王學振興の徴となせり、那波魯堂が學問源流に、陽明は

明の正徳年中の人なるに、其學今又正徳年中に唱ふる人あるは、縁機誠に熟するなりとて、従ひて學ぶ者鮮なからずと、以て當時の狀況を推知すべきなり、傳習錄は王學派の福音書とも云ふべき經典にして、此書の傳播は王學の振興に裨補なきこと能はず、執齋が之れに標註を加へたるも、功多しとなす、傳習錄に註あるは、此書を以て始めとす、其後唯、佐藤一齋の欄外書あるのみ、

執齋は深く中江藤樹を尊信せり、獻徵先賢錄に據るに、彼れ我土の先修中江藤樹を以て姚江の後第一頭の人物なりと稱揚し、伊藤仁齋物徂徠などを指して、實踐躬行の説を知らずして、徒に藻繪巧綴の文詩に苦思して、生涯を浮薄虚驕の境に送るなりとて、其徒と交はることなかりき、又拔本塞源論私抄序に、王陽明萬世聖學の恢復を爲し、其門人再傳の後終に其統を失へりとして論じて云く、

吾江西の中江先師遺經によりて、其緒を接ぎ、致良知の學を本邦百年の後に興起し、訓話詞章の陋を改めたり、從學の徒、孝悌忠義の徳、良知

に發し、忠信愛敬の實、感通に出でざることなし、されど其時を得たまはざるを以て、治平の教を一世に見ずと雖も、其没已に八十年にして、其郷の民、父母をしたふが如くにして、其流を汲む者は、又かの忠孝の徳敬信の實を、一念感通の良知に試みざることなれば、先師の治績従ひて知るべし、是れ先師の學、老佛霸功の偏蔽に落ちず、内外支離の作爲に涉らずして、誠に本邦の王文成公、夫れ此の人に非ずして誰ぞや、

又藤樹先生全書序に云く、

蓋し先生徳崇く學正しうして、實に本邦道學の淵源たり、かくて是れを以て當世に教へたまふに靡然として、其風を慕ひ、其徳を崇み、興起服従せずと、いふことなし、云云、

執齋が藤樹を尊信することの尋常ならざるは、此れに由りて知るべし、彼れ又曾て自ら小川村の江西書院に之いて、士民を集めて學を講ぜしに、衆皆爲めに感泣し、相謂ひて藤樹先生の再生とせり、

之れに反して執齋は開齋に對して何等退慕の情をも述べしことあるを見ず、獨り直方は其師なるが故に之れに對する交誼を傷はざらんことを務めしむ、其學已に一變せしが爲め、専ら心を江西學派に傾注せり、是故に開齋派の人は痛く執齋を撥斥せり、殊に三宅尙齋の如きは、其著默識錄中に、執齋の缺點を擧げて、其品姓上に打撃を加へたり、其言に云く、
茲歲春希賢自武藏來京師、其近權要交右族、自世俗見之、可謂得時伸志者矣、然全是儀秦之術也耳、渠宗王氏守仁之學、果然歟、在京日所爲可議者不一、而就中學其大者、招請僧徒於市人宅、一來院門、市見於所司、牧某、因坊令小、見坊令、小濱氏、因其交有素、因小、所司及坊令皆非有志人、本多滋氏所言、見坊令、小濱氏所言、始見本多氏、小、所司及坊令皆非有志人、本多氏好佛學、往本多氏講、說莊子書、以僧徒之請求令、嫡男爲伏見宮女媵、臣是等不待學者知其可耻、蓋乘勢自不覺其流蕩至于此乎、
又云く、

三輪希賢、往年自悔親死時幼弱不知、不服喪、三十餘年、後先忌日百日計爲服喪、余當時爲說其不可、渠終不用、儀禮喪服傳、嫁女小祥後、被出歸于

家服既除、故不與兄弟更着三年服、蓋可以見事之既過者、不復必追矣、
又云く、

三輪希賢悼直方之死、有和歌曰、忘るなよ三輪のしるしの過し世を慕ふも君の教へならずや 自謝復

於本姓之恩、而却以其子爲市民、白木屋性大者養子、大村氏京初仕于酒

井家、其主受僧祐天之念佛名俗謂之授于念、希賢甚憤之、遂退去、此時從直方未

後受紀伊太守常饒、甚稱揚紀守之好王學之功、而紀守以其子爲僧、人問

之、希賢謂紀守不知之、且紀守許以其子爲酒井家之繼嗣、後公家不許、人

中希賢與此策、余謂如是而說道理、我未知何義理、以是等舉動察其眞情、

無所遁學術姦詐不俟論辯

執齋が行爲に多少自家撞着の點ありしは、蔽ふべからざるも、尙齋が非

とせる論點の如きは、今日より之れを見れば、誠に瑣々たる事件にして

固より深く尤むるに足らざるなり、

執齋は經濟に長じ、家道富饒にして當時の逢掖、比肩するものなし、隱秘

録卷三に

飯田町邊に三輪執齋と云ふ儒者ありけり、殊の外門弟多く、御旗本中多くは奥向の衆中歴々のみ來たり給ふ、此執齋大金持にて歴々も賃金致し金の威勢甚敷、云云、

とあり、其富有の状況略想見すべきなり、

執齋は三宅石菴、三宅觀瀾、三宅尙齋、玉木葦齋等と相交はれり、又同窓の友に魚住靜安と云ふ者あり、初め朱學を尊崇せしも、執齋が勸むるに従ひ、遂に舊學を改めて王學に變じ、後之れを西播に唱ふ、執齋が門人數多ありと雖も、川田雄琴(後に出)を以て最となす、其他小野直方及び中村恒亨、通稱は惣次郎、土佐人、石井信行、伊勢人、田井定容、通稱は文之進等、執齋に親炙する者なり、貴紳には寛量小濱公、松平原君、鹿橋の酒井侯等、少しとせず、又商人にして執齋の弟子となる者甚だ多かりき、隱秘錄卷三に云く、

爰に田所町の家主田所半藏、かの三輪が門弟となりて、學問を致しければ、ある時町奉行大岡忠相半藏を呼出して、御申渡し有るは、其方儀

三輪執齋が弟子に成りて、學問を精出す由、町内の事を司り支配する身には尤の事なり、此上随分不打捨に學問致すべし、此段御上にも、相聞え、呼出し、褒美仕れど、御老中方より被仰渡たり、難有奉存候へどの御事なり、平藏冥賀至極、難有存候とて大に面目をほどこし、退出す、此事、江戸中取沙汰しきりにして、諸所名主、或は分限、成町人、共何れも學問せざるはなく、多くは三輪執齋が門下と成れり、云云。

小野直方が祭文に云く、

寛保五年甲子、正月廿五日甲辰、我執齋先生逝矣、嗚呼哀哉、不肖始見於先生、十九年于此嘗視猶子也、其教愛諷育之厚、何以報之乎、在得於道而已矣、然不肖頑蔽、怠懈、道未有所得於心、終孤負教愛之報、何不震慄乎、往歲先生去東武、歸于京師、絕不聞聲、咳者數年、慕念猶追々焉、而今渣而永逝矣、聞訃不勝哀傷、最憾素居相望千里、靡由奔走執紼也、遙望嶺雲、淚滂沱矣、靜言長懷、其言在吾耳、其貌在吾目、嗚呼哀哉、將何如哉、嗟乎先生、淑質貞諒、易直雄志、狷介純篤、歸于善如流、任道忘寢食、善誘善導、助貧周窮、

取予惟義之從矣。始爲窮理之學，頗寄心於辭章，中志致良知之學，終覺聖學在此，脫然棄舊業如敝屣也。乃涉獵不事乎文，務在於躬行而已。世方沒溺於辭章，刀錐於利祿，狗俗鈞聲，不復知有身心之學也。而獨卓然定見，惟是之從，舉世非之，而不顧，一卷々於斯道矣。既而辭官，從其所好矣。古稱豪傑無文，猶興也。如先生方絕學頽靡之際，旣已識其大者，真可謂豪傑也。宜哉當時纒綬之徒，紳佩之士，望形表而影附，聆嘉聲而響和，善類是與焉。德行振於當時，聲光被遠邇，然後功成身退，長解世紛矣。居數年，癸亥之冬，寢疾牀蓐，及疾病亦念常在道，以存亡不繫於心，死期近而告終，拜家廟，告辭世，招集親戚，永訣，從容懷和即冥矣。春秋七十有六，親戚悲悼，近識遠士，傷情舉落，哀慕從靈輶者數百人矣。嘗自造喪具，遺命喪紀惟約焉。存不好麗，歿不踰分，嗚呼禮哉！乃嘆曰：嗚呼哀哉！天不憖遺，奈喪斯文，奪我吉士，梁木折摧，規極斯毀，德音永斷，微言絕耳。來者曷聞，而曷從，事歸焉，忘栖游魚失水，有生必死，振古自爾，身歿名垂，先哲所美，向幽不疑，委命安天，視死如歸，令終歸全，令聞不朽，廣譽世延，存祭沒哀，後何憾焉。

執齋人となり謙虚和平なりしこと其言論文章によりて知るべし然れども亦稍、峭刻なる所もありしが如し、小野道方が彼れを形容して、徽質貞諒、易直雄志、狷介純篤と云へり、狷介の字、蓋し削去すべからず、執齋嘗て鞭禪師と云へる僧の爲めに中庸を講ず、務めて佛氏の性命の理に悖りて日用の常を棄るを排斥し、其舊習の非を悟りて、儒教の正に歸せんことを庶幾す、講畢るに及んで僧執齋に贈るに筆墨と詩一首を以てす、然るに執齋之れを卻けて、曰く、凡そ吾學を爲すもの、固より浮屠の爲めに講説すべき所にあらずと雖も、然れども或は其非を知りて儒に歸するわらは亦美事ならずや、是れ予の其請に應ずる所以なり、而して師終に陷溺の窟を免出すること能はず、則ち惠む所の筆墨之れを受くる、尤も説なしと、其氣象の存する所、以て想見すべきなり、

第二 著書

- 日用心法一卷
- 四言教講義一卷
- 大學俗解二卷
- 孝經小解四卷
- 周易進講手記六卷
- 祭薦卷一卷
- 訓蒙大意和解一卷
- 堯典和釋二卷
- 神道臆說一卷
- 標註傳習錄四卷
- 陽明學名義二卷

今代名家著述目錄、慶長以來諸家著述目錄等皆此書を以て執齋の著とすれども、恐くば三重松菴の王學名義を以て執齋の著と誤まりし

ならん、執齋門人小野直方が執齋三輪先生著述目錄中に之れを載せざるを以て之れを知るべし、

社倉大意一卷

古本大學校正本一卷

古本大學和解

陽明學第一號以下に載す、前に擧げたる大學俗解と異同如何を知らず、

正享問答

拔本塞源論抄一卷

雜著四卷

第一卷 十二孝子○顯謚篇○祠堂考○猪兵衛翁の碑○答河崎氏書

二○原野學問所之事○藤樹先生全書序○淡齋記○合翠堂記○加茂

步射并競馬説○養子辨を辨す○春秋傳序講義○道之以政章説

第二卷 ほそかみ○答酒井彈正公書○北野獻策記○士志論○治教

論○四言教ことかき并歌○孝子於以麻碑○會澤孝子傳序○居喪論

○渡部子命名説○藺相如贊○諱説○古稀賀に答ふる歌并序

第三卷 邪正説○知上○呈佐藤先生○策答○詩○講小學○答山田
住信○贈犬飼平七郎○卻鞭禪師之覲辭○道儒學○送玉田新平歸播
州○靜坐説○荊子發雞冠花解○詩○贈松崎助作惟章○諫爭説○三
疇吟○弄月窓記○君子小人辨○祭山口先生文○樂山樓記○送魚住
氏序○與三宅觀瀾書○峨帽石記○日用心法序○西江一水居士碑○
送中村恒亨歸○實齋記○責善文○答門人○存菴記○勞謙記○道之
以政章記○拙菴今井君碑○答原田平八疑問○藤樹先生全書序○答
鈴木貞齋書○古本大學講義序○祈水文○大久保忠喬君碑○書篆字
論語後○醉露菅雄碑

第四卷 拔本塞源論私抄序○答原田平八疑問○拔本塞源論外傳○
學拔説○生財有大道の説

維著の細目、小野直方が記する所并に先哲像傳に掲ぐる所と同じか
らず、故に之れを列舉して其煩しきを厭はず

第三 學 說

執齋初め佐藤直方の門に游び、朱子學を修め之れを尊信すること深く孔孟の學は、盡く朱子の書にありと思惟し、之れを尊ぶこと神明の如く之れを信ずること著龜の如く、若し少しく他説に涉るものあれば、之れを匡正して朱子に歸せしめて後已むを常とせり、然るに三十歳の頃より陽明の書を読み、陽明學派となり、陽明を信ずること、曾て朱子を信ぜしに異ならず、答鈴木貞齋書に云く、

僕三十年前始讀新建書、覺有少所益、而後只管信之、如神明、今僕年六十而萬無一得、雖然於求德于己、而不責道于人之志、則三十年來、如一日、每求助於君子、相共成之、外無他心矣、

然れども彼れは一概に王陽明を尊崇し、朱子を誹謗するが如き偏狹の人にあらず、藤樹、蕃山と同じく朱子をも併せて尊崇せり、答鈴木貞齋書の末に在昔朱文公不信陸之學、而與之交厚、其知有道、而不知有我、也と云

ひて、其學派の異同を以て相排擠せざるを稱せり、又答門人書に云く

祿雖未必貪、而念慮之間、未能無意、則莫顯於幽者、不得自蔽、如人之毀已、雖不甚慍、其開譽或喜之、則汲々于名者、我未能自異、至若立異好、奇排朱、張、王、則不然矣、信王固深尊朱、亦不淺、何者、文、公、古、昔之賢、而文、成、公、亦古昔之賢、而不尊信、則其誰尊信之、雖然、其所以爲說、四子、六經之訓、古今人物之評、政事、巨細之態、心術、本末之切、則或取之、朱子、或取之、王子、不以、王而荷、同、不以、朱、而必排、故、伯、夷、伊、尹、不、同、道、而、同、爲、聖、晦、庵、陽、明、不、同、學、而、同、爲、賢、司、馬、溫、公、嘗、作、非、孟、而、譏、孟、子、當、時、雖、伊、川、之、謹、嚴、與、之、友、善、未、聞、其、絕、交、也、故、聖、人、之、道、人、倫、而、已、朱、子、於、人、倫、厚、矣、王、子、亦、於、人、倫、厚、矣、我、豈、以、爲、賢、而、不、尊、信、也、

執齋が度量の寛宏なること此れに由りて知るべきなり、然れども朱子の學の誤謬に至りては、彼れ之れを痛論し、王陽明の説の眞なるに贊同せり

執齋が學說の要領は日用心法にあり、此書分ちて十章となし、品目種々

ありと雖も、自ら聖學に入るの次第を成せり、今其大意を叙述せん、

(一) 立志を始めとす

心は天理の凝聚にして、志は其發し向ふ所なり、心もと不善なし、故に其發し向ふ所も不善なし、聖人に志すは志の本體なり、異學に志すは志の惑へるなり、凡そ聖書の中に専ら志と云へるは皆聖道にこゝろざすことを謂ふなり、故に志の一字は初學より聖人に至るまで學問の全體なり、志を立つるは本心天理を存するの工夫にして、内外を一にし、本未を合せたるものなり、故に志の立つと云へるは本體道心の立ち定まりて、善を善とし、惡を惡とし、かりにも他事の爲めに移されざるをいふなり、西にかたぶき、東に倒るゝが如きは立つるといふべからず、其歸向の定まれることは、猶の鼠を捕ふるが如く、念々之れを離れざるなり、人心の光なきにあらざれば、一旦思ひ立つことありと雖も、跡より人欲雲の如く覆ひ、本心の月暗くなれば、必ず怠り易きなり、故に其怠れる時に當りて、耻を以て之れを責むべし、之れを責むると雖も、常に之れを持つ

こと能はざれば志健かならずして責を受くる地なし故に志を持たんと
思はれ之れを養ひて餓やすべからず凍やすべからず然るに之れを
養ふの法は義と道とに違はざるにあり言と行とを慎むにあり一行猥
りに爲すべからず細行愼まざれば大徳を煩はす一念妄に思ふべから
ず毫釐のたがひ千里の誤りとなる言行は志の衣なり一たび失すれば
則ち凍ゆ義と道とは志の食なり一たび怠れば則ち餓ゆ若し之れをし
て餓え凍えしめば日々に鞭ちて其足らんことを責むるとも得べから
ず

(二) 辱を知るを助けとす

此心は父母の遺體にあらずといふことなれば此身此心皆是れ父母
なり今此心を入欲の爲めに害ひたるは父を討たせ國を失へると何ぞ
異ならんかの父を殺し國を掠める仇は外にありて得がたきも猶も苦
に寐ぬ劔を枕として終に讐を報ひざれば死に至るまでやまずかの入
欲の我身にあるは立處に得べくしてなをざりなるはいかばかりあ

せ○る○淺○ま○し○き○こ○と○な○ら○ん○是○に○於○て○耻○づ○る○事○を○知○ら○ざ○ら○ん○は○鳥○獸○に○も○劣○れ○る○な○り○、

(三) 孝悌を本とす

孝○悌○は○天○地○生○々○の○德○な○り○人○に○受○け○て○仁○義○と○な○る○其○發○用○は○孝○悌○な○り○諸○人○孝○悌○の○心○あ○り○と○雖○も○志○足○ら○ず○ん○ば○此○天○眞○を○全○う○し○て○生○々○の○德○を○體○す○る○こ○と○能○は○ず○故○に○立○志○を○始○め○と○し○孝○悌○を○本○と○す○志○は○孝○悌○の○工○夫○孝○悌○は○志○の○主○意○さ○ら○に○二○つ○あ○る○べ○か○ら○ず○本○な○く○ん○は○何○を○か○生○せ○ん○始○め○な○く○ん○ば○い○づ○く○に○よ○く○な○ら○ん○、

(四) 氣を養ふ

氣○は○形○體○の○生○意○に○し○て○疾○痛○寒○熱○を○感○ず○る○も○の○心○と○二○な○し○と○雖○も○道○と○器○ど○の○辨○な○く○ん○ば○あ○ら○ず○能○く○養○ふ○も○の○は○心○に○於○て○工○を○用○ふ○故○に○志○に○從○ふ○も○の○は○氣○之○れ○が○助○け○を○爲○し○て○理○氣○一○つ○な○り○氣○に○流○るゝも○の○は○道○心○微○に○し○て○心○身○二○つ○な○り○聖○賢○は○只○志○を○定○め○て○形○氣○に○ま○か○せ○ず○故○に○和○し○て○淫○せ○ず○安○う○し○て○危○か○ら○ず○心○は○氣○に○圍○し○氣○は○心○に○治○め○らるゝを○以

て、之れが工夫を爲すこと能はず、故に之れを養ふの功かくべからず、此意堯舜相傳の惟危惟微より始まり、孔聖の書、此趣にあらずと云ふことなし、然れども、之れが題目を立てて、一箇の工夫を爲すことは、孟子より始まれり、其浩然の氣を説く、即ち是れなり、一身を以て之れをいへば、頭上より脚下に至るまで、周流充盈して、元來缺闕なく、よし廣めて、天地にみつれば、宇宙に彌綸し、人我に通貫して、少しも蔽塞なし、是れ浩然ならざらんや、人誰れか之れを具せざらんや、只人欲の私に覆はるゝを、以て天地はさて置きぬ、父子兄弟骨肉の親と雖も、相通せず、閭中閑居の時と雖も、心志愧怍し、己れが氣己れが體に滿たず、何ぞ天地に周流せんや、然れば、其昏塞の胸中に於て、此氣の浩大を識取すること、誠に難かるべし、五常百行、一事も快からざること、あれば、心はぢ氣飢ゆ、故に事々に於て、之れを試み、事物の來たるに於て、本心天理に復り求めて、是れに應じ、處し得ば、悠然として自得するものは、義の得るなり、斯の如く、事々物々として、工夫をなし、應事接物、一として快からざることなき、氣象を覺えた

るものは、眞の快心なり。是れ即ち良知の自ら知る處なり。仰いで天に恥ぢず、俯して人に愧ぢざるは、天地の間にみてるなり。浩然の本體なり。初學たいつひえを恐れて、盤桓すれば、本體の工夫早く絶えはつる。只一向にどひ入るべし。佛者の諺に曰く、身を捨て、こそ浮ぶ瀬もあれど、戰場に臨むものは、死地を避けずして、將の行く處に従ふ。聖人の道に志すものは、流弊を恐れずして、師の導く跡に決すべし。

(五) 量を廣うす

人の性は天の命なり、人の心は并びて三才となるべくして、氣も亦浩然たり。天もど無量、人の量何ぞかぎるに分界を以てせん。唯有我の私にからまされ、天受の量を狭隘にす。故に、聖學に志さずもの此關を打通らざれば、更に補けどなすべきなし。凡そ量せばき者善事を爲すと雖も、切迫の病ありて、從容の氣象なし。毀譽に動きやすく、憂苦に堪へがたし。故に其人志を得れば、忤恨睚眦の恨も必ず報ひんことを思ひ、位を失へば悲憂痛感いふべからず。故に量廣からざれば、聖學語りがたし。百尺の臺を

篤^くか^んど^お思^ふもの^は、必^ず基^を大^にす、聖^人に^至ら^んど^お思^ふもの^は、必^ず其^量を^廣う^す、

(六) 氣象を考ふ

人聖人にあらざるよりは、必^ず氣象昏明清濁によりてかはりあり、氣象清明なる時は、本心自ら發し易しと雖も、昏濁なる時は、力を用ひて心を勵ますと雖も、必^ず失ふこと多し、是を以て氣象を考ふことを知らざらば、信僞の界を辨じ進退の位を別けがたし、常に氣象を考ふれば、自^得誠意の處より發する者の、各別なる味あるを知るを得べし、夫れ、自^得誠意の處より發する者、優々、游々、從容、追^らず、事^の爲^めに、怒^らず、物^の爲^めに、擾^らず、志氣清明、事終りて喜快^{こゝ}地^{よし}、風^干、俛^{にか}けるの氣象あり、假令^ひ死^{地に}臨^むと雖も、仁^を求^めて、仁^を得^復た何^ぞ恨^みん、然らざれば、善事を成すと雖も、心甚だ苦しみ、成し終りて安からず、利害の成るに逢ふ時は、却て之れを悔ゆることあり、是れ皆一旦の意氣より出で本心自得の處より生ぜざればなり、故に氣象を考へて、一旦の意氣に使

役せらるべきにあらず、只心をせめ、内に省みて勵まさは、即時に心強く、氣従ひ、將卒各其處を得て、事々必ず誠意の氣象あらん、我心を勵ますは、心の本態なり、眠りたる者、君父の大事を聞いて目をさますが如し。

(七) 内省

言は心の聲なり、行は心の跡なり、只私欲に隔斷せられて、心跡二つどなる、言行よしと雖も、爲めにする所あれば、本心の發見にあらず、其心跡二つどなるものなり、人は自ら是を知る人の知らざる處にして、己れ獨り知る此處に於て力を用ふるは、誠意の慎獨なり、是れ自反内に省みて、内自ら訟ふるなり、天下の人舉りて譽むるも、歎ぶべからず、天下の人舉りて毀るも、愁ふべからず、只自反して心に快きは、是れ即ち天心にあへると知るべし、本心即ち天理、何ぞ他に求むることを煩はさんや、願れば即ち此に存ず、自反内省は存亡の機なり。

(八) 致良知

致知の工夫は、大學に始めて是れをいひ、知を良知とすることは、孟子に

よれり、良は自然の善にして、人爲をからず、聖愚同じくある處にして、人の人たる所以のものなり、良能といひ、良心といふも皆同じ、學といふも此天眞を學びて、事々此良知の本體に至らんことを欲するなり、然れども、人氣に拘はられ、物に覆はれ、天眞の光明直に發出することなし、されど、人の人たる處未だ絶え亡びざれば、時として此光明顯はれずといふことなし、孺子の井に入るを見て必ず慌惕惻隱の心發出す、是れ豈に按排思慮のなす所ならんや、是れより學べば、事々皆實事たい之れを致すを學ぶといふ、善を善と知り、惡を惡と知る、誰れか其明なからん、是れを良知といふ、即ち明德なり、誰れか是れを備へざらん、良知至れば善を善とし、惡を惡として、自ら欺くことなくして、自ら快し、是れ誠意なり、意に就きていへば、誠にすといひ、知に就きていへば、致といひ、物に就きていへば、格といふ、實は一なり、今の學者、心學に暗く、只物に考へずして、直に出づるをのみ良知なりと思へるは、甚だ愚なり、其實は學んで知るも、良知なり、其知るに至りては、一なり、我所謂良知は善を見て之れを好み、惡

を見て之れを悪み、君の忠すべき、親の孝すべき、有學無學によらず、皆是れを知る、是れ人の人たる、良知にして天下の同情、我心の同じく然るものなり、之れに背くものを、人の性に違ふといひ、爾必ず其身に及ぶ、是れ愚夫愚婦と雖も、同じく備へたる證據にあらずや、

(九) 言行念慮妄にすべからず

言は心の聲なり、行は心の跡なり、思慮は心の動なり、此三つのものは、人の必ず有るものにして、其事真と妄との二つあり、是れを此處に慎む、則ち是れ立志養氣、内省致知の條目なり、夫れ無妄は天理の實然り、心の本真なり、人欲氣質の蔽はれより、其本體を失すれば、則ち妄を爲すことあり、其時本心に復へり求めて、志を責め、耻以て勵まし、氣を養ひ、良知を致し、其他其處に従ひて之れが工夫を爲さば、邪妄退去す、一言妄に發すべからず、一行妄に爲すべからず、一念妄に思ふべからず、必ず之れを良知に問ひ、之れを孝悌に本づけ、之れを志に責め、之れを氣象に考へて、障る所なく、耻づる所なく、迫る所なく、畏るゝ所なく、疑ふ所なくして、後之れ

を發出すべし、是れ内外を一つにして、表裏を合せ、衆人より以て塞入に至り、一身より以て天下に施すべきの要道なり、

(十) 執中

大禹謨に曰く、人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中、是れ先聖相傳の意旨なり、人此身あれば、必ず自ら私する所ありて、道と一つなり難し、是を以て道に志なきものは、常に軀殼より念を起し、其道心あらはれ難し、故に微なりと、夫れ善を見ては必ず之れを善みし、惡を見ては必ず之れを惡むは、是れ道心の發見、軀殼によらざるものなり、我身に至りては善に疏く、惡に近きは、軀殼に従ふて自ら私するものなり、故に人至愚と雖も、人を責むることの必ず明かなるは、天下の眼を以て公に見ればなり、至明と雖も、己れを計ることの必ず暗きは、一人の身を以て自ら私すればなり、故に人心道心互に消長を相成す、道心專一なれば、人心消し、人心盛なれば、道心微なり、道心微にして復ることを知らざれば、其遂に禽獸を去ること遠からざるなり、人心の危きは、道心本體を失へばなり、道心

の微なるは、人心の事を用ふればなり、聖人、人心を去るを惟精といひ、其道に復るを惟一といふなり、二事なるにあらず、聖學、他なし、唯一の道、一のつとめを精といひ、精の極を一といふ、之れを一にするを精といひ、精の成りたるを一といふ、精は一の始め、一は精の終りなり、精や一や、亦一物なり、惟精にあらざれば、惟一に至ること能はず、惟一にあらざれば、惟精の功止む、惟精惟一、允執厥中、その人欲を去りて、道心に復る、皆一道なり、聖賢元より、二語なし、人欲を去るは、惟精なり、道心に復るは、惟一なり、而して中を執るは、其至善なり、中は即ち心にして、中を執るは、心を取るなり、中を事物の末に求むれば、工夫安堵の處なし、心を以て中とすれば、之れを執るに實ありて、工夫道あるなり、心を取ること、いかに常ならず、省て、獨をつゝし、み心を求めて、之れを戒謹恐懼して、少しき間、斷あらず、れば、中を執ること、漸を以て、其功を見るべし、中を執るの工夫、間斷あらず、れば、良心常に存して、放たざるなり、

執齋が論ずる所を見るに、別に大に發明する所あるにあらず、又必ずし

も異彩を放つの看あるにあらざ、然れども王學の立脚點より平易に其所信を叙述し、頗る初學をして正路に歸せしむるに足るものあり、若し精細に其旨意の存する所を翫味せば、塵俗を超越せる一種高尚なる氣象を覺えん、かの「氣象を考ふの條に、鳳千仞にかけるの氣象あり」と云ふが如き、賢人君子の心胸あるにあらざれば、道破すること能はず、此れに山りて之れを亂れば、執齋が藤樹以後の一名師たるや疑なし、但彼れは名聲を求めずして、専ら功を修徳に用ふ、故に其聲聞に至りて、徂徠に及ばざるは言ふまでもなく、南郭等にも及ばざるが如し、然れども、世道人心に關する點より之れを言へば、徂徠が榮、傲、怒、張の文字は、執齋が平易なる有益の文字に及ばざること、遠しとなす、

執齋が四言教講義も亦金玉の文字にして、此に脱逸せんとは遺憾に堪へず、四言教とは、王陽明の唱道する所にして、傳習錄卷下(左五八)に出づ、云く、無善無惡、是心之體、有善有惡、是意之動、知善知惡、是良知、爲善去惡、是格物、又是れを王門の四句訣と稱す、實に王學派の主義綱領なり、執齋

之れが講義を作り、便宜の爲めに順序を倒逆して其旨意を發揮せり、今左に其要領を擧げんに

一、爲善去惡是格物……夫れ學問は、惡人を免れて善人とならんと欲するが爲めならずや、善人の至極は堯舜にもすゝむべし、惡人の至極は桀紂にも陥るべし、其界は一念の間にあり、善人にならんと願はば、善をなすべし、惡人を免れんとらば、惡を去るべし、是れを物を格すと云ふ、是れ聖門最初の手を下すの實功にして、聖となるに至るまで外に待つことなきなり、人此處に於て丈夫に志を立てざれば、萬事皆成ることなし、室を造るに基なきが如し、夫れ物を格すと云ふこと、世間外人は、物を格すにあらず、唯我心の物を格すなり、身に顯はるゝ善惡は、皆心より出づれば、先づ一念の起る所いかんと察すべし、故に自反して、慎獨の功を立つと云ふ、一言一行までも、其本體のままの善心起り出づれば、尊信して當下に是れを爲し、若し本體に背きて、惡しき心起り出づれば、恥ぢ悔いて、當下に是れを去る、一時此の如くすれば、一時聖人の地にすゝみ、一

刻此の如くすれば、一刻聖人の地にいたる是れ、即ち人皆以て堯舜と
なすべきの道、皇天の御心にして、聖人道統の學術なり、何の疑ふべきこと
か、あらん其善を爲し、其惡を去るに當りては、生命をも顧みるべからず。
是れを身を殺して仁をなすといひ、是れを生を捨て、義を取るといふ。是
れを知るを止まることを知るといひ、是れを得るを道を聞くと云ふ。夕
に死するも可なりと喜ぶ。此の如く丈夫に志を立て、自ら己れが本
心に誓ふを、門に入るの始めとす。

二、知善知惡是良知……學ぶもの格物の段に於て、覺悟を定めて善は
生命にかへてなさん、惡は骨を粉にすとも去らんと十分、に思ひ入り、た
る上は十の内七八まではすむべし、然れども其知れる所必ず良知よ
り出づるにあらざれば、其善なりと思ふ事に、惡なる事ありて、其惡なり
と思ふ事に、惡ならざるもあるべし、夫れ良知は心の光なり、善惡を照す
こと、白日の黑白を分つが如し、良知は本體のまゝにして、人爲にわたら
ざるものなり、孺子の井に入るを見て、怵惕惻隱するが如きは、人爲にわ

たらず、天命の性より、直に發出するものなり、是れを良知といふ、此外、譏知あり、俗知、世知あり、姦知、邪知あり、皆天然自然の良知をふさぐ、良知と混ずべからず、此心體自然の良知より出でたる善を、至善と云ふ、良知と云ふも是れなり、

三、有善有惡、意之動……天下の事々物々の理を外に窮めたりとも、我心の起る所、誠ならずば、窮め得て却て害あるべし、人心元來至善なりと雖も、血氣の生々止まる事なければ、必ず動かすと云ふことなし、其動くを意といふ、意のある所、千緒萬端と雖も、つゝまる所、善惡の二途にもるゝ事なし、只自反の功、間斷あれば、過惡を念慮の間に分つこと、能はずして、長じて後、事業にあらはれて、其害あるに至りては、良知に照してはづかしくなれども、如何ともすべからざれば、俄に驚いて、其不善を揜ふて、其害をあらはさざらん、とす、是れ常人の狀態なり、然るに終に揜ふこと能はざれば、復た何の益あらんや、故に戒懼の功、懈らずして、獨をつゝしむ、是れ先聖の學脈なり、假令ひ一念の場をとりはづして、事業の上にあ

らはれたるも、此一念の場へ引きかへして、初念の所に立ちかへり、悔悟し改むるは誠意の工夫なり、一念の界、つゝいし、まずんばあるべからず、四無善無惡、心之體……人心善惡の二途ありと雖も、それは動き出づる時の事なり、動くけ氣によるが故なり、其動かざる時は、一の明のみ、此心の本體は即ち人心に宿れる天神なり、此光明人の意念にわたらず、自然に是非を照らす、是れを真知といふ、夫れ耳に五音なきは、耳の本體なり、夫れ只五音なし、故によく五音を聞いて、違ふことなし、若し常に一音もあれば、五音皆違ふ、故に五音なきを耳の至善とす、口も亦味なきは、口の本體なり、夫れ只五味なし、故によく五味を分ちて、違ふことなし、若し一味もあれば、五味どもに違ふ、故に五味なきを、口の至善とす、心に善惡なきは、心の本體なり、夫れ只善惡なし、故によく善惡を辨へて、各誤まることなし、若し之れある時は、善惡どもに違ふ、故に善惡なきを、心の至善とす、故に至善は、心の本體なりともいへり、

此外古本大學和解の如きも、之れと同じく頗る趣味多き文字なり、又雜

著の第二卷に編入せる「答酒井躰正公書」一篇、亦有益の文字たるを失はず、其中に言へるあり、云く、

それ斯の如く徳行ありて、之れを失へることは、何の由ぞといへば、人の此身あるより父子兄弟と雖も、各己れを愛するの情起りぬ、己れを愛すれば、人に疎し、己れを愛して、人に疎ければ、必ず隔つ、此隔てを名づけて人欲の私と云ふ、此人欲の私あれば、かの本心に備はれる道理を破りて、性を鑿ち、本心の光をおほひて、明德を暗まし、本心所を失ひて、中にあらず、自ら欺いて、實にあらず、人我を隔て、仁にあらず、行ふべき筋を違へて、道にあらず、斯本心を損ふ所、其品多しと雖も、皆是れ人欲の私より起らずといふことなし、かの人欲の動いて本心を害するも、亦其品多し、中にも大敵となれる、巨魁三あり、色欲利欲名聞なり、

又云く、

此人欲の私起り出て、心を害すること、如何なる故ぞと尋ぬれば、此身に主人あり、名づけて心といふ、常に方寸の内に居て、萬事に主等た

るものなり。然るに此心一度放たれて其位に居らざるよりか。三欲の大敵起りて、此心の徳を害す。故に學ぶ者其放心を求めて本の方寸の内、に納むれば、三欲の大敵より諸の私いきほひを失ひ、其光明天性の如し。譬へば太陽一たび出で、雪霜忽ち消ゆるが如し。孟子の學問の道他なし、其放心を求むるといへる。是れなり。然るに一たびは之れを求むと雖も、常に之れを取るの工夫間斷あれば、則ち亡び失ふて方寸復た空しくなり。大敵再び盛なり。是れ本心人欲互に敵身方となりて勝負を相なす。云云。

又云く、

今聖賢の心術を學ばずして、其なせる事業をのみ見て、事々物々にて是れを尋ね究め、知を盡せりと思ひ、其知る所をまね行ひて、よく之れを行ふと思ふ。是れ自らは聖學なりと思ふらめど、即ち覇者のしわざなり。よく知りよく行ふと雖も、天道にあらず。又義襲ふて之れを取るのみ。夫れ已に此心法無くして、知を究めんとて、事々物々にて道理を

尋ぬるは、暗夜に燈なくして物を探るが如し、知れる所似たりと、雖終に自得の學にあらざして却て人、我の隔出來り、人欲の私勢ひを得、按排措置して、意必固我をなす、故にも、學ぶ諸生は、大やう常人よりは劣り、是れを教ふる師は、諸生より又ひが、める方多し、如何と云れば、三欲の大敵を去らずして、知る所多ければ、其知る所已れが欲を助けて自ら高ぶり人を輕しむ、行ふ所人に勝れたるものあれば、其行ふ所又已れが欲を助けて、自ら高ぶり人を輕しむ、譬へば、食は民命を救ひて一日も是れなければ、死すと雖も、食に傷れし人は、食毒をさり、傷れを補はずして、是れに食をすゝむれば、却て病を助けて、民命將に盡きんとするが如し、云云、

執齋が内に深く自得する所ありて、外界の事物の爲めに動かされざる一點に至りては、決して侮るべからざるものあり、存菴記に云く、

君子可以存心於己、而不可用意於物也。心存於己、則神肥於内、德全於我矣。雖處天下萬機之變、常有餘裕也。故其於死生禍福之間、一如煙雲度大

空。

此最後二句の如きは、王學によりて養ひ得たる絶大の氣象にして、眞に天馬空を行くの概あり、又四言教講義の終りに言へるあり云く、

此四言の此一句を初入門の誓約と心得、齋戒沐浴して之れを受け、其善をなし、其惡を去り、堯舜の徒となるに當りては、身命を捨つるは、本望なりと心得て、自ら其本心に誓ふべし、茲に於て丈夫に性根をすゑて志を立て得定まる時は、世上一切の利害名聞得喪の類は、誠に浮雲の大空をわたるを見るが如くにて心の動かざるに至るべし。

彼れが此の如き寂然不動の地位を得たるは全く一念隱微の處より工夫を下しゝに起因せずんばあらず、彼れは博學多識を取らず、唯當下に悟入することを適切なりとせり、故に學問は大學一部を了解すれば足れりとせり、道儒學と題せる文に云く、

古之設學校也、教人以洒掃應對進退之節、禮樂射御書數之文、與窮理正心修己治人之道、而其治在書其節、在禮、其律在春秋、決疑事、是易、正性情。

是詩、和神、人是樂、求其道於大學、講其理於論語、察其變於孟子、歸其極於中庸、而其階梯、則濂洛關閩之書也。

又其要を舉げて云く、

初學入德之門、無如大學、未有能通大學、而不通論語者、論語已治、則六經可不治而明矣、而濂洛關閩之書、亦在其中也。

大學の書、殊に古本大學は、王學の本づく所にして、致良知の説と云ひ、内外一致の説と云ひ、知行合一の説と云ひ、皆其範圍を出づることなきものなり、執齋が大學を以て初學徳に入るの門となすもの、洵に其故なしとせざるなり

執齋の頃常陸に繁伯と云へる人あり、深く陽明の學を信じ、其門人の爲めに古本大學を講じ、古本大學講義を著はせり、執齋之れが序を作れり、繁伯の事蹟未だ詳ならず、故に姑く此に附記して、以て參考となす、

第四 執齋關係書類

先哲叢談(卷六)原念齋著

先哲像傳(卷三)原德齋著

續近世時人傳(卷二)

獻徵先賢錄

執齋先生聞見錄松下伯季著

隱秘錄(卷三)

大岡誠忠錄

默識錄(卷二)三宅尙齋著

學問源流那波魯堂著

日本諸家人物志南山道人著

鑒定便覽(卷一)

日本名家人名詳傳(卷之下)

第二篇 第四章 三輪執事―第四 執事關係書類

名家全書(卷一)

史料原稿一卷

日本之陽明學高瀬武次郎著

近世德育史傳足立栗園著



第五章 川田雄琴 附 冨家伯壽

執齋の門人に川田雄琴あり、名は資深、字は琴卿、又の字は君潤、雄琴と號し、又北窓翁と號す、江戸の人、其生卒の年月未だ詳ならず、但し元文延享の間に生榮せしことは明かなり、始め蒔田侯に仕ふ、故ありて仕を致して去る、享保十八年に至り三輪執齋の推薦により、大洲侯加藤遠江守泰温禮を厚うして之れを聘す、雄琴乃ち臣となりて、居を大洲に移せり、大洲は藤樹の曾て臣として仕へし所にして、此時已に一百年を經過せり、雄琴遙に藤樹の遺緒を承け、躬行實踐の學を講述し、大に國內の風教を盛にせり、雄琴一とせ需によりて郡中を巡行し、人民を教諭せしことありしに、每席男女僧俗百人二百人入れ替りくして來聽し、緣崩れゆり落し、一巡の間、聽講者二三萬に及びしこともあり、雄琴初め梁田蛻巖に學ぶ、蛻巖之れに謂ふて曰く、

余以一日之長文藝則爲爾師、至明道義窮心術爾當就三輪執齋而學、

是に於てか雄琴即ち蛻巖の紹介により、贊を執齋に執り、始めて道義の學を講ず、此れより餘姚の學を奉じ、精思力行、知行合一の旨を推し、遂に執齋に繼いで之れを唱道するに至れり、執齋が病を京師に養ふに當りて、雄琴適、京師に之きて其病を問ふ、執齋曰く、吾病奚ぞ憂へん、憂ふべきもの、此にあらざるなりと、因りて又雄琴に囑して曰く、汝善く斯道に従事して豫州に興起せよ、豫州は即ち中江子出身の地なり、必ず祠堂を建て、祭り、以て其徳を無窮に傳へよと、乃ち手自ら王陽明の肖像と藤樹の眞蹟とを授けたり、執齋嘗て明倫堂を江戸の下谷に楸設して、諸生を教授せしが、其晩年京師に赴くに嘗り、雄琴をして代りて事を主らしむ然るに幾もなく執齋は京師に歿し、雄琴亦大洲に赴くことゝなれり、是を以て大洲侯明倫堂を大洲に移さしむ、延享四年の秋、堂宇始めて成る、即ち其堂を明倫堂と謂ひ、其書院を止善書院と謂ふ、雄琴止善書院の記を作る、曰く、

深恒慨東西都文華之盛世不_レ乏其人_レ也、而我豫州西海邊夷地僻人頑、與

聞斯文者希焉。惟藤樹先生長於此，旁無師友而自尋，濼溪明道之宗，旨開
考亭姚江之蘊，與探洙泗之淵源，推鄒魯之本，抉遂悟無聲無臭之本，然无
方無體之妙，要不知不識之帝，則於自己固，有之良知矣，不獨善其身，雖東西
都人士竊取法於此者，亦不鮮焉，何必彼夏而此夷哉，然先生去茲土既
百有餘歲，物換星移，流風漸衰，俗習日滋，文獻拂地而空，禮樂典章靡而不
講，其間譚性命論經濟者，非縉徒之詛法，則兵家者流之賞罰，誣民誑人焉
耳，先生之德澤於是乎幾絕矣，先是本邑始有黃鳥來止於大洲，世臣滕大
夫之室，親皖好音聞者悅焉，深嘗謂是斯道之再興于茲土之先兆哉，辛酉
秋，故滕大夫高忠張黃鳥之燮於席上，而召深曰，請爲吾作止於至善之說，
而贊之，深固辭弗獲，遂書以贈之，且曰，大夫之室乃藤樹先生舊宅之東
隣也，而既有黃鳥之感，今亦講止於至善之學，深竊悅乎斯道，將與也，大
夫曰，諾，願侯之德一日新於一日，臣見其進而未見其退也，然則道之大
行也，可立而俟耳，甲子之冬，陽復之月，深辱承嚴命，營文成公與藤樹先
生之祠堂，不幸侯懼疾，事未成而卒，今年夏五月，橋大夫與有司議而經

營之今既落成矣茲者同志松本久豐以藤樹先生書緒繼章於黃鳥之書而自爲之釋者與深曰是我先大人之家藏也今也先生之堂及講學之書院成矣因以屬之子深曰時哉時哉祠堂及書院成矣而未得其名深謂夫名者實之賓也觚不觚而謂之觚夫子既嘆之然則雖一物之微豈可容易名之乎哉矧於講學書院名教之所繫者乎向深贊黃鳥之畫以應大夫之靈今子亦以先生所書黃鳥贊贈深先兆後徵如合符節也語曰國家將興必有禎祥斯道果可以興歟因名曰止丘書院也已頃之顧丘先聖之諱也不可不避蓋綿蠻詩止於至善之傳文也從經而可謂止善書院矣先生嘗以母疾乞骸骨其書曰母卒再來仕于茲也不幸先其母者命也然則此地固先生當止之處也而今日祭其神於茲豈非先生之素志也哉於是書齋所著止於至善之說併以爲之記云其說曰或問如之何可以止於至善曰純一無雜而已矣敢問曰至善無定體焉而止亦無定處焉蓋至善者天命之本性也而其於靈昭不昧者是乃明德之本體即所謂良知者也純一無雜于其本體良知則無往而非止於至善矣蓋文王之止於仁

敬孝慈信是也、所謂安身立命之靈樞也、人惟不知至善之無定體、止之無定處焉、又不知至善之在吾心、用其私知、求之於外、以爲事々物々、各有定理也、求至善於事々物々之中、而欲知所當止之處、是以揣摩天下千萬之理、而搜索天下千萬之止、支離決裂、錯雜紛紜、遂昧天然自有之中、喪民彝物則之極、噫、亦過矣哉、諸同志須先知止於至善之說、此說一明、則庶幾學必有所本矣、王子曰、止於至善、以親民而明其明德、是之謂大人之學、若欲明明德、而不知止於至善、則騫乎過高、失之空寂、而無有乎家國天下之施、若欲親民、而不知止於至善、則溺乎卑瑣、失之權謀、而無有乎仁愛惻怛之誠、故止至善之於明德親民也、猶之規矩之於方圓也、方圓而不止於規矩、爽其度矣、明德親民、而不止於至善、亡其則矣、大人之學、何以成之、且曰、大學之要、誠意而已矣、誠意之極、止於至善而已矣、能止於至善、則意誠、心正、身脩、家齊、國治、天下平矣、是故曰、止至善之說、一明、則庶幾學必有所本矣、此說也、雖本於先賢之意、深不獨文字、必有貫樞而還珠者、覽者幸正諸、

執齋又嘗て長崎の鎮臺、即ち御番に屬し、慶山が筆に成る所の王文成公

の畫像二幅を支那より得たり、乃ち其一を江戸下谷の明倫堂に安置し、其一を江州の藤樹書院に納付せり、藤樹書院に納付の分は雄琴之れを携へて小川村に傳達し、明倫堂に安置の分は大洲に再興せる明倫堂に移して安置せり、藤樹の祠堂は大洲の先侯已に之れを建つるの計畫ありて、嗣侯之れを繼承し、堂宇漸く成る、即ち雄琴をして之れを祭らしむ、雄琴、藤樹先生を祭るの文一篇あり、其中言へるあり、云く、

恭惟先生長于茲土、深希聖賢、遂悟良知之外、更無知致知之外、更無學之本旨、木鐸大振於海內、諸生日益衆多矣、嘗告門人以天下第一等人間第一義、無別路之可走、無別事之可做、嗚呼盛哉、德業輝當世、餘訓遠今日、雖鷲劣如深者、良知之明較知所嚮、况景慕篤信之士耶、可謂大賜後世、

雄琴の藤樹を追慕するの切なる、決して尋常ならざるものあり、苟も至誠の心あれば、遠く後人を動かすに足ること、復た疑ふべきにあらざるなり、雄琴又王陽明をも同時に祭れり、告文成王公藤樹江先生文は其落成の時の作なり、其終りに云く、

深前日所獲三生氏藤樹先生家藏之聖像、安諸正位置、王江二先生像於
左右、

此れに由り之れを觀れば、孔子と王江二氏とを同一の祠堂に合祭せる
なり、

雄琴の著書としては、余僅に其藤樹先生年忌説一卷并に藤樹書院に納
めたる明倫堂記一卷を見しのみ、續近世叢語卷一の初めに雄琴の小傳
を載せ、終りに著書十餘種藏於家とあり、此れに由りて之れを觀れば、一
も上梓せざりしものゝ如し、雄琴著はす所大洲好人錄五卷あり、此書元
文二年より稿を起し、延享二年に至りて成れり、其間九年なり、傳を立つ
ること四十有餘人、其中併せ擧ぐるものを合して八十人に及べり、皆大
洲に於ける孝悌忠信の人なり、

或は曰ふ、彼れが執齋の講義を筆記せる傳習錄講義は、頗る後人の珍と
する所なりと、余未だ其書を見るに及ばざるを憾む、

雄琴が、祭執齋先生文に、中江子既沒、僅百年矣、吾黨各以己見立說、或以無

爲良知、或以有爲良知、或以有無之間爲良知云云と云へり、當時姚江學派の徒種々なる分派を成せる狀況を推察すべきなり、

雄琴と大抵同時代に氏家伯壽といふ人あり、亦陽明學派に屬す、氏家氏名は九齡、伯壽は其字なり、蓋山人と號す、通稱は庄五郎、近江の人、生卒の年月未だ詳ならず、思ふに書を能くせしならん、和漢書畫集覽及次鑿定便覽等に姓名を存せり、

々



第六章 中根東里

第一 事蹟

東里姓は中根氏、名は若思、字は敬父、東里と號す、通稱は貞右衛門、伊豆下田の人、元祿七年を以て生まる、東里の父、名は重勝、字は子義、武濱と號す、三河の人、延寶年間伊豆に遊ひ、遂に此に移住し、淺野氏を娶り、五男一女を生む、然れども唯、東里と其弟孔昭(字は叔徳、號す)と二人のみ生存し、其他は皆夭折せり、重勝家を下田に構へ、農桑を業とし、又兼ねて醫術を善くす、是を以て治療を請ふもの日に多く、其名遂に郷里に聞ゆるに至れり、東里年僅に十三にして父を喪ひ、母に事へて孝謹なり、其母父の冥福を修めしめんが爲め、命じて僧とならしむ、初め郷里の一禪寺に入り、薙髮して證圓といふ、後宇治の黃蘗山に登り、悅山禪師に師事し、晝夜精研佛祖の眞面目を得るにあり、然れども禪宗の課業、本と博く群書を讀むを許さざるを以て、東里漸く其檢束を厭ひ、竊に寺を出で、東都に來たり、

下谷の蓮光寺に寓し、淨土宗の學を研究し、徧く經典を讀む、其寺主雄譽上人物徂徠と交はり、屢、東里が人となり、明敏にして衆に異なることを稱す、徂徠、之れを聞いて大に之れを賞し、嘗て試に東里をして李攀龍が白雪樓集一本を句讀せしむ、東里乃ち傍訓國讀を其書に附して之れを返す、時に年十九、東里又嘗て文を作りて之れを徂徠に示す、徂徠其半を讀んで之れを舍き、心未だ之れを善しとせず、且つ之れに謂ふて曰く、苟も文を學ばんと欲せば、左氏及び史漢を讀むに若くはなしと、東里乃ち左氏を取りて伏して之れを讀み、一序を作りて之れを徂徠に示す、徂徠見て之れを善しとし、其後に題して曰く、非復昔日阿蒙也と、後又一傳を作りて之れを示す、徂徠大に嗟賞し、坐客を顧みて曰く、是の如くにして後、左氏を學ぶと稱すべきなりと、是れに由りて東里の名聲、漸く都下に聞ゆるに至れり、一日東里疾に興り、佛殿の後房に偃臥して將に養はんとし、偶、几上の書を取り、手に任かせて之れを翻閱するに、是れ即ち孟子浩然の氣の章なり、乃ち反覆之れを讀み、慨然として歎むて曰く、道の廣

大簡易なる是の如し而して何ぞ茫乎として浮圖氏の虚誕に従ひ以て此生を誤まらんや」と是に於てか始めて還俗の志あり遂に郷里に歸り母氏に還俗の事を請ふ母氏許さず伯父某頗る學識あり母氏に請ふて曰く子を以て捨て、僧となす是れ之れを棄つるなり彼れ今還俗せんと欲す是れ更に一子を擧ぐるなり宜しく速に之れを聽すべし」と母氏乃ち以て然りとなし遂に之れを許す東里大に喜び又東都に至り之れを寺主雄譽上人に謀る上人頗る鑒識あり其意に任せて髮を寺中の別舎に蓄へしむ東里益書を読み刻苦すること惟れ日も足らざらんとす此時徂徠と毀隙を生じ遂に相容れざるに至れり東里頗る徂徠の眷顧誘掖の恩を受く故に其還俗するに當りて義當に之れを徂徠に謀りて後之れを爲すべし然るに東里之れを爲さずして髮を蓄ふること已に百有餘日徂徠之れを聞いて悦びず東里又其説を疑ひ論を著はして之れを駁し自ら其見る所を述ぶ山縣周南大宰春臺等其稿を見て大に之れを愠み貶排沮礙東里をして再び其門に入ること能はざらしむ東里

も亦稍、徂徠の學を疑ひ、所謂修辭の業を厭ひ、其作る所の文章を取りて、悉く之れを篋中に投じて之れを焼く、此れより還俗して中根貞右衛門と稱せり、室鳩巢引いて其家に致さんと欲す、東里素より其學を慕ふ、乃ち質を委して之れに師事す、時に年二十三、享保元年の正月なり、東里鳩巢に從ひて加賀にあること二年、享保三年加賀より還り、東都の八丁堀に居ること一年、又去りて鎌倉に之き、鶴岡廟前に居ること二年、其間其弟叔徳と共に木履を鬻いで以て衣食す、適、同居のもの、病めるあり、貧にして藥餌を供するなし、東里盡く經籍衣服を典賣して之れに資す、幾もなく又東都に遊び、辨慶橋の畔に僑居して、諸生を教授し、常に退落を甘んじて、當時の名家と相顔頭するを欲せず、其資用乏しければ、絲針等を市に鬻ぎ、又竹皮履を造りて之れを售り、僅に數日の費錢を得れば、乃ち戸を閉ぢて書を読み、沈黙して自重し、從遊の士の外は、人に接見せず、時人呼んで皮履先生といふ、一日或る人王陽明全書を進む、東里本ど之れを慢り、偃臥して之れを読む、其致知格物知行合一の説に至りて、肅然と

して容を改めて曰く、所謂孔門傳受の心法、盡く此書にあり、何ぞ之れを讀むことの晚きや、と、是れより王學に歸し、學問全く一變せり、享保年間下毛の植野（まき）に遊び、傳習録を金信甫（きんしんぽ）が家に請ず、延享年間又上毛の下仁田（したに）に遊び、高克明（たかきみ）が家に客たり、嘗て其曠野の清閑を愛し、益都會の煩喧を厭へり、遂に居を下毛安蘇郡の天明郷に移し、一箇の茅屋を經營して之れを知松菴と名づけ之れに居り、専ら王學を唱へて、子弟を誘ふ、園境之れが爲めに化し、東里を遐慕し、婦人小兒の輩と雖も、皆能く東里の名を知るに至れり、東里晩年に至りて多病なるを以て、親戚によりて老を養はんと欲す、寶曆十二年を以て、浦賀に之いて此に居り、大人歌を作り、又人説を作り、以て天地萬物一體の義を明かにす、蓋し其晩年開悟する所を發揮するものなり、東里其死期の迫れるを自覺し、寶曆十二年の冬、自ら東岸の地を擇んで墓石を建て、天命を待てり、翌年正月、門人須藤温（すどう ぬるみ）に與ふる書に云く、

老生今年七十、望外の歲月に存候、乍然自ら省みて精神血氣を考へ度

り候へば、決して今年限りの生命と被存候、

然れども其年は死せず、明和二年二月七日疾を以て蒲賀に卒す、享年七十有二、海關の顯正寺内に葬る、東里妻子なし、終に臨んで門人藤梓を以て嗣となす、著はす所新瓦一篇の外遺編なし、門人須藤温(字は子直)其詩文を輯めて東里遺稿一卷となし、後又下毛の服部政世(字は華と)其書牘及び雜文を纂めて東里外集一卷となせり、

東里資性洞介にして、高潔自ら持し、苟も世に容れらるゝを求めず、毫も利の爲めに動くことなく、唯、義によりて立てり、是故に従遊者皆之れを憚る、室鳩巢の如きは殊に其強項屈せず、緘黙競はざるを愛せり、

東里の父善く飲む、出づる毎に家に歸ること晩し、東里燭を挑げて之れを迎ふるを常とす、彼れ嘗て之れを途中に迎ふ、父醉ふこと甚しく、其東里なるか、將た他人なるかを知らず、大に之れを罵りて遂に樹下に倒ふれて睡る、因りて之れを扶持すれども起きず、走り反りて轎を家に取る而も其母の安んぜざるを恐るゝが故に、父某の家に住するに、今夜偶、醉

客多く、某の家又餘暇なきを以て之れを取り來たり、見と一宿して還ると稱し、遂に父の睡る處に到り、幘を樹に張り、終夜之れを護し、其睡の覺むるを竝ちて之れを持して家に歸る。是に於てか、郷人皆其孝を稱せり。東里は本と文學趣味のある人にして、詩歌文章に巧なり、然れども彼れ晩年に至りて専ら道學に志し、復た餘念なし、嘗て門人須藤温に謂ひて曰く、賤軀老疾交集、凡百好事皆以廢、唯好學之志日益壯矣、死而後已、夫往時所作之文章、皆浮華之言、恐誤己誤人、今悉棄之、机上獨餘大人歌耳、此れに由りて之れを觀れば、彼れが作に係れる文章にして、烏有に歸せしもの、少からざるべし、眞に惜しむべしとなす、今新瓦一篇を翫讀するに、實に千歲得やすからざるの名文なり、柴野栗山、古賀精里、太田錦城の徒、皆口を極めて之れを激賞せり、東里が嘗て下毛の天明郷にあるとき、弟叔徳其幼女の芳子を携へて相模より至り、之れを東里に託して還れり、時に芳子年僅に四歳、未だ能く誨ふべからず、是を以て東里一篇教訓の書を著はし、之れを新瓦と題し、鳥獸を其端に畫き飾るに、朱絲を以てし、

之れを芳子に與へて、弄ばしめ、其遂に之れを讀むの期あらんことを庶幾せり、其幼女を教へんとする情の切なる、殆んど豫想の外に出づるものあるなり、新瓦の外菅神廟碑の如き、亦絶妙好辭たるを失はず、田沼謙之れを註釋し、菅神廟碑銘解と名づけ、單行本として之れを世に公にせり、先哲叢談後編卷五に云く、

東里詩才、雋逸、文尤、跌宕、機軸、可觀、矣、若下毛天明、鄉菅神廟碑、相州鶴岡祀堂記、近世柴栗山井四明、太田錦城等、諸家皆稱曰、慶元以來、希有絕無之文。

其所謂相州鶴岡祀堂記は遺稿にも外集にも收載せず、甚だ遺憾なりと謂ふべし、東里が詩篇亦時に誦すべきものなしとせず、今左に二首を擧げん、

謁菅相公祠詩

衡茅露爲霜、蟋蟀鳴荆扉、幽棲莫與歡、田野誰相知、開帙戀前修、曳杖望廣
畦、廣畦坦且靜、中有菅公祠、鬱鬱松垂蔭、森森梅交枝、就階修禮容、憑軒想

昔時○昔時○何○罔○極○紛○紜○亂○是○非○路○險○豺○狼○嗥○林○昏○鷗○鷺○飛○休○勳○淪○西○海○遺○愛○
泣○群○黎○况○復○流○離○子○感○物○心○傷○悲○仰○歎○桂○華○發○俯○惜○蕙○草○萎○風○厲○霜○甘○棠○天○
寒○懷○緇○衣○懷○恨○不○能○去○含○情○涕○漣○泗○聊○知○巴○人○曲○以○比○祝○史○辭○辭○殫○情○未○已○
徘徊○恨○晚○暉○

送芳子歸相模詩并序

芳子與余寓於下毛語在新瓦寬延庚午秋其伯母自鄉里召之將厚養之明年春芳子年八歲亦欲往焉遂與其父俱行余喜芳子之得其所也欲其克有終也故作斯詩以祝之

莫○春○春○服○成○游○子○方○翺○翔○况○乃○與○乃○父○攜○手○歸○故○鄉○芳○草○萎○以○綠○鷓○鳴○路○
傍○伯○氏○既○仁○厚○故○舊○亦○溫○良○爾○將○承○其○德○永○繫○于○苞○桑○此○行○尤○可○樂○別○離○曷○
足○傷○但○母○之○不○存○豈○不○斷○中○腸○庶○幾○遂○愛○日○令○老○親○復○陽○縱○見○上○林○華○勿○忘○
曠○野○霜○

是等の詩篇は深く道義の蘊底に達するものにあらざれば作る能はざる所なり、徂徠集中格調の高古なるものなきにあらざるも、此種の真聲

にして且つ懇惻なるものに至りては吾人發見すること能はざるなり、

七



九

第二 學 說

東里は屢其所信を變更せり、此點に於ては石菴よりも一層甚だしと謂ふべし、彼れ初めは僧となりて禪學を修め、既にして又淨土の教義を學び、幾もなく儒教を喜び、菴園の學に歸せり、然るに忽ち又之れを厭ひ室鳩巢に師事してより朱子學を奉じ、後又一變して陽明學に歸せり、實に變化定まりなきの狀あり、若し石菴を鶴學問といはゞ、今東里を何どかいはん、余其如何なる名稱を以て形容すべきかを知らず、然れども彼れが享保年間一たび陽明學に歸してよりは、信念年と共に堅く、復た動搖するが如きことあらざりき、殊に晩年に至りては、益其所信を貫徹し、其自得する所の果して那邊にあるかを發揮せり、

東里は萬物一體の理を説いて、人道の本源、此に存すとせり、即ち彼れは一元的世界觀によりて、仁の本體如何を演繹せり、大人歌に云く、

天地與萬物、渾然惟一、人陰陽爲呼吸、四時是屈伸、分野唯虛名、全體靡不

均、

是れ世界を以て人の大なるものとするなり、又人説に云く、

人者天地之心也、故天地者人之身也、云云、宇宙即是人人、即是宇宙人之大全也、

東里は此の如く、宇宙を以て人の身體とし、人を以て宇宙の心意とし、人と宇宙とを合一して、常議を超絶せる大なる人格を寫象し、之れを人の全きものとせり、即ち人類の理想は、此の如く大なる人格 *Personlichkeit* を成すにありとするものなり、大なる人格の本體は唯、仁のみ、東里其意を、「一體之訓」中に叙述せり、云く、

泰誓に曰く、惟れ天地は萬物の父母、惟れ人は萬物の靈なり、夫れ天地果して萬物の父母ならば、萬物は乃ち天地の子なり、子と父母と一體ならざる者あらんや、禮に曰く、人は天地の徳なり、又曰く、人は天地の心なり、人果して天地の心ならば、天地は乃ち人の身なり、身と心と一體ならざるものあらんや、心と徳と一體ならざるものあらんや、萬物

の區にして以て別れたるは、一身の中に於て耳目口鼻首足肩背各、其分ちあるが如し、或は貴うして上にあり、或は賤うして下にあり、或は遠く或は近く、或は大、或は小、其差等節目、得て混同すべからず、然れども精神周流し、脈絡貫通し、疾痛歡樂感觸神應せざることをなし、是故に上なる者、下を愛し、下なる者、上を敬し、遠きを忘れず、近きを忽にせず、大に事へ、小を字ひ、相助け相安じ、樂むに天下を以てし、憂ふるに天下を以てす、是れ堯舜の治體にして、聖學の大本大源なり、吾儕こゝに於て心を專にし、志を致して講究體認することを務めずして、未を遂ひ流に隨ひて、滔々として反らず、日を曠うし、時を失ひ、遂に以て此生を虚くするに至る、其以て然る所の者は、何ぞや、一體の中に於て、自ら異にして、各其藩籬を高くする故なり、其れ此の如くなれば、人は只是れ一團の血肉のみ、豈に以て天地の心とするに足らんや、云云、明道曰く、仁は天地萬物を以て一體とす、己れにあらざることをなし、天地も己れなり、萬物も己れなり、天は己れが高きなり、地は己れが厚きなり、日月

は己れが明なるなり、學者誠に其心を存し、其氣を定め、人我の見を去り、意必の私に勝ちて、真誠に之れを體察せば、天地萬物吾に於て毫末の間隔なきを見て、聖賢の吾を欺くにあらざることを得すべし、况や陰陽五行の人にあるもの、天地四時と共に往來變化して、曾て内外彼此の別なし、喜怒哀樂、視聽言動、天地萬物に於て一毫の間隙あれば、斬るが如く、刺すが如く、疼痛惻怛、忍ぶべからず、一體にあらざれば、豈に此の如くならんや、是を以て古の聖賢、人飢溺のごとく、一夫も獲ざれば、己れ推して是れを溝中に納るゝがごとく、天下の憂に先ちて憂へ、汲々遑々として、席を煖むるに暇あらず、故にこの紛尤を求めて、以て自ら勞苦するにあらず、只是れ萬物も、吾が一體なれば、生民の困苦、荼毒、いづれか、疼痛の吾身に切なるものに、あらざらん、吾身の疼痛を知らざざる者は、是非の心なき者なり、程子は學んで至る所を以て云ふなり、禮と泰誓とは、聖愚の同じく然る所を指して云ふなり、夫れ天地萬物も、一體なれば、天地萬物も、一物なり、所謂格物は、此一物

を格すのみ。此一物を格すとは、其本然に復るのみ。聖人の學、其廣大にして簡易なること、此の如し。明道之れを宋に唱へ、陽明之れを明に和し、天下萬世に示すに宇宙の大全を以てす、其盛徳大惠、民得て稱する事なし、云云。

人にして萬物一體の理を知れば、自他の別、彼我の差、忽然消滅して、何等の藩礙もなく、融合相即して、我れ即ち宇宙、宇宙即ち我れなるを悟り、始めて仁を體察するに至る。仁を體察して、仁を實行すること、即ち學問の本領なり。人説に學問之道、無他、撤其藩籬而已」と云ふは、先づ其個體 *individuality* に執着する我見を打破すべきを謂ふなり。我見を打破すること、とは實に仁に到達するの關門なり。我見を打破し了れば、仁茲に得べし。是故に學問之道、無他、撤其藩籬而已」と云へり。學問の本領は唯、仁を實行するにあること。學問に詳なり、因りて今左に之れを擧げん。

學問

聖人の學、爲仁而已矣。仁者、天地萬物一體之心也。而義、禮、智、信皆在其中。

矣。蓋天下之物，其差等雖無窮，然莫弗得天地之性，以爲其性，得天地之氣，以爲其氣。此之謂一體。是故自我父子兄弟，以至於天下後世之人，皆吾骨肉也。日月雨露山川草木鳥獸魚鼈，無一物而非我也。則吾不忍之心，自不能已矣。是故己欲立而立人，己欲達而達人，己所不欲，無施諸人。人之善惡若己之有之。先天下之憂而憂，後天下之樂而樂，是之謂仁。是之謂天。地萬物一體之心，其自然有厚薄者，義也。譬影之參差，非日月之所私焉。禮，其節文也。智，其明覺也。信，其真實也。是心之德，其盛若此，但爲人欲所蔽而不知其所謂一體者安在也。譬々波々唯々一己之名利是圖，甚者視其一家骨肉之親，無異於仇讎。况他人乎。鳥獸草木乎。然而心之本體則自若也。其感於物也，輒成々焉。如痛孺子之入井，閔穀粒之牛之類是已。况於吾父子兄弟，其能怒然乎。譬如雖雲霧四塞，然日月之明，則無以異。縱有罅隙，輒能照焉。聖人之學，豈有他哉。勝夫人欲以盡是心而已矣。蓋合內外以平物，我而已矣。此之謂爲仁。此之謂好學。於戲，其廣大而簡易若是矣。彼以文辭爲學者，陋矣。求義於外，惑矣。吾懼學之日遠於仁也。於是乎言。

仁は即ち良知の異名にして、所謂致良知は仁を實行することなり、學問の目的は唯、仁を爲すといふことのみにあるが故に、眞に一貫なり、毫も岐路あることなし、是故に直截易簡、是れに過ぐるものはあるべからず、須藤子に與ふる書に云く、

○さして身を苦しめ、心を勞することも無之、甚だ易簡直截にして、萬物の多き萬物の繁き萬方の遠き萬世の久しき一以貫之道理有之候、
又桃野子に與ふる書に云く、

○天地萬物唯、一物也、格物は只此一物を格すのみなり、譬へば、大木のどどし、其枝葉花實百千萬億といふども、只是れ、一本なり、故に唯、一つの根を養へば、其百千萬億の枝葉花實盡く盛長せざることなし、是れ、至簡至易の妙法にして、格物の大全なり、

學問の目的已に明瞭にして、白日の照すが如く、復た邪路の迷ふべきもなしと雖も、躊躇顧盼、其決行すべきを知らざれば、遂に志を成すこと能はざるべし、是を以て柳圃子に與ふる書に迅速なる決斷の要を述べて

云く、

既に此れを爲す、又彼れを爲す、徘徊顧望して、日を曠うし、時を失ひ、無窮の悔を貽すべからず、歲月流るゝが如く、大福再び來らず、此生能く幾何ぞや、豈に萬物の靈を以て冲天の翼を屈して、鷄鶩と群をなすに忍びんや、

又須藤子に與ふる書に云く、

老拙事は一日之命有之候は、一日の學問勤め候て死して而して後已み可申と奉存候、只此一つの愚見を同志に傳達致度きは、是れを婚姻に譬ふれば、老拙は媒妁にて御座候、

東里は啻に人に説諭する而已ならず、身親ら其言ふ所を實行して、模範を示せり、彼れは又學者の外物に馳せ、迂濶に流れんことを恐れて、學問の方法を論ぜり、桃野子に與ふる書に云く、

俗人の學を以ていはゞ、讀書を以て第一義として、字々句句、分明に解釋するを成功とすべし、聖學の成功は是れより大なるものあり、經傳

の中斯學の大頭腦を指して示したる所は、讀み易く、解し易く、明々白々として、青天白日の如し、註釋を用ひず、思慮を勞せずして、通曉すべし、只是れを擇んで、反復玩味せば、足らざることなかるべし、無益の文字に於て讀み難きを讀み解し難きを解せんと欲して、精神を費やし、光陰を失ふべからず、大頭腦を見得ざるに及んで、五經四書といへども、月をさす指の如し、月を見るものは、指を忘れて可なり、文義に牽制せられて、其本に迷ふものは、指を以て月とするなり、象山先生曰く、學者も本あらば、六經皆我註脚也、致良知は斯學の大頭腦なり、良知の本體は天地萬物唯一身なり、此本體を提撕すれば、格物の功、其中にあり、是れ則ち一以貫之なり、譬へば、米を舂くもの唯、杵一つに力を用ひて、億萬の粒、米、盡く精白となるが如し、故に王子晩年の教、唯、致良知といふのみにして、格物に及ばず、いかんぞなれば、此本體を提撕することを知らずして、更に格物を以て事とするものは、木の根なきが如く、水の源なきが如し、米を舂くもの杵を失ふて、一粒々々に磨削す

るが如し、是れ世儒の學支離決裂、牽滯紛擾して、終に成功なき所以なり、

又柳圃子に與ふる書に云く、

聖人の學は五經四書及び陽明傳習錄文錄にて致全備候他に求むべからず、右之内にて要を求め、又要中に於て至要を求めば、何の足らざるとあらん、吾侪向來多岐に迷惑せしとは、此所に於て定見なき故也、彼れが學問の範圍、此に至りて愈狹隘となれるも、其自得する所の道義の觀念に至りては、愈精妙となり、殆んど古聖賢の域に接せんとするの概あり、又雷澤子に與ふる書に云く、

聖人の學を勤むる人は、私に勝ち過を改め、徳を養ひ、天地萬物一體の道理を信じ得るに及んで、夜のあけたるごとく、重荷をおろしたるごとく、盲人の目のあきたるごとく、さぞ心よくうれしく、善惡も前非も後悔も、殘念も昨夜の夢なり、昨日の風雨なり、何の憂ひ悲む事あらんや、わかき人兼ねて此意味を知り候はゞ、末頼しく學問に退屈なく、

精出で可申候處、教ふる人も學ぶ人も、只文字のさたばかりにて、心の安堵を求むる事を知らず、空しく光陰を送り、此世を夢の如くにて過去り候事、尙ほ又悲しきものに、御座候、老拙事も近年まで此學問を知らずして、おだに月日を過ごし來り候、何とぞ餘命の内、此悲をこごとくはらし申度き願のみにて御座候。

又云く、

名を好む心は學問の大魔なり、早く名を棄て實を勤むべし。老拙幼年より名を好むの病深く、近年以來殊の外うるさく覺候へ、其療治の力弱く、御座候、誠にまだいえきり不申候、名を惜むと申候へば、よき事に聞え候へども、聖人の學は、義を惜み候、間名には貪着不致候、名をよしむ心有之候へば、事ごとに外聞をかざりて、眞實の心なく、世上のうはさを恐れて、氣遣ひ多し、果てには只名のために能をすつるかたに成りゆき申候、たとへ大高名ありども、義を失ひては耻かしく、口惜しく、日夜に心のはらしやうもあるまじく候へば、羨ましからぬ事に、御座

候、只義に於て缺けたる所なれば、心はひろく氣はのびて少しの不
足も無之候へば、世上にていかほどそしり笑ふども、毛頭心にかゝる
ことなく、各別の樂み思ひやられ候義と名とは、玉と石となり取違ひ
なき襟に擇び分つべき事に候、

此れによりて之れを觀れば、東里己れが心を以て世界の中心として、寂
然不動の域に達するを得たり、此の如くなれば、平生毫も外物によりて
左右せられず、外物は反りて我れを樞紐として、周圍に遷轉するの状な
くんばあらず、其毀譽を雲烟の如くに看過し、名利を塵芥の如くに侮蔑
するもの亦怪むに足らざるなり、又彼れが迷妄を打破し去りて、心の光
明に向ひ、日夜急ぎつゝあるの状は、猶ほ孤鶴の聲を曳いて、空明の裏に
沖るが如く、其高尙崇大なる適に塵俗の外に超絶するものあるなり、然
れども如何なる人も人たる以上は情欲なきこと能はず、情欲は人を
引いて下劣の方向に導かんとするものにて、其勢力たる甚だ猛烈なる
ものあるなり、是故に之れを退治するの工夫なくんば、學問の目的は如

何に高尙なるも、之れに到達すること甚だ覺束なしと謂はざるべからず、是を以て東里は時々刻々、間斷なく、情欲の侵害に向つて戦はざるべからざることを論ぜり、彼れ之れが爲めに柳圃子に與ふる書に退屈の弊を説いて曰く、

此大虞即ち退屈を降伏すること能はずんば、小善ありといふも、車薪杯水、勞して功なきことなり、其由りて來る所を尋ね、求むれば、只吾志の誠一眞切ならざる所より出でたり、是故に學者の務は只吾志誠一眞切なるか、誠一眞切ならざるかと吟味、省察して、一息の間斷なかるべし、此患を免るゝの道、只此一方のみなり、智謀を用ふべき様もなし、才略を用ふべき様もなし、只是れ無二無三に、此退屈の念を攻撃、裁斷して、吾真心の本然に復するのみなり、譬へば、四方援なき地に於て、大敵にどり圍まれたるが如し、智謀も才智も用ひ様なければ、前後左右を顧みず、無二無三に、其大敵を撃破りて自ら全うせんと思ふより、外の方便はなきなり、今日も此通りに工夫をなし、明日も此通りに工夫

をなし、聲色の上にも、かくの如く、名利の上にも、かくの如く、貧賤にも
退屈せず、患難にも退屈せず、疾痛死亡にも退屈せず、時となく、處とな
く、只此大魔を降伏するを以て務とせざることなし、力を用ふるの久
うして、彼れ衰へて、我れ盛なるに至りては、吾本心周流和暢して、人欲
私意、客氣、俗習、隱伏する所なし、或は微き萌動するものありといふど
も、紅爐上、一點の雪なり、云云。

人は情欲に向ひて間斷なく戦ひ、遂に之れを降伏するに至らざるべか
らざること東里が論する所の如し、然れども此事を成し遂げんに百折
不撓の志なかるべからず、如何なる患難に遭遇するも、沮喪せざるの勇
氣なかるべからず、是故に彼れ亦志の誠一真切ならざるべからざるこ
とを論ぜり、柳園子に與ふる書に云く、

憂○深○く○情○切○に○し○て○志○氣○奮○發○人○を○し○て○興○起○せ○し○む○る○の○あり○天○の○將
に○大○任○を○是○人○に○降○さん○と○す○る○や○必○ず○先○づ○其○心○志○を○苦○し○め○其○筋○骨○を
勞○し○て○其○體○膚○を○餓○や○し○心○を○動○か○し○性○を○忍○ん○で○其○能○は○さ○る○所○を○増○益

せしむいはゆる汝を成るに玉にするなり伏して望むらくば此所に於て目を明かにし、膽を張り、精神を振起して、天意を奉承すべし、徒に放逸すべからず、吾志の誠一真切ならざるを御見得被成候ば、真知なり、此真知を致して、吾志をして必ず誠一、必ず真切ならしむべし、譬へば、羈客の郷里に歸るが如し、父母に見え、妻子に逢ふて、歡樂せんと思ふ心、誠一真切なるが故に、千里を遠しとせず、寒暑を畏れず、風雨を厭はず、道路の景色にも貪着する心なく、只一日もはや、郷里に歸着せんと思ふ心さかんにして、少しも退屈することはなきなり、云云、今右の事を以て斯學に比すれば、天地萬物一身の境界は吾眞の故郷なり、位なくして、貴く、賤なくして、富み、仰いで、愧ぢず、俯して、忤ぢず、心廣く、體胖かなり、富貴も淫すること、能はず、貧賤も移すこと、能はず、威武も屈すること、能はず、夷狄患難入るとして、自得せざることなし、天下の至樂なり、此郷里に歸り、此真樂を得んと思ふ心、誠一真切ならば、道中の艱難辛苦、心を動かすに足らず、何の退屈することあらん、凡そ他郷

の聲色紛華、何の羨むことのあるや、只是れ吾輩此境界を見得すること分明ならず、半は信じ、半は疑ひ、或は勤め、或は惰り、一日暴めて十日寒するが如くにして、成功あることを欲するは、種せずして秋を待つなり、是れ衆人の醉生夢死して、他郷異域の愚鬼となる所以なり、云云、此思を免れんと欲せば、何を以てせんや、斯學に倦むことなからんのみ、倦むことなきの至りは、誠一真切なり、誠一真切なれば、愈、倦むことなし、愈、倦むことなければ、愈、誠一真切なり、工夫茲に至りて、獨木橋を渡るが如し、左右皆深淵なり、進むべくして退くべからず、是れ古の人、戦々兢々として、敢て一念の間、雜なき所以なり、

其他東里が心の本體を以て光明正大となすが如き、無我を説いて彼我の別を撤するが如き、謙と仁と密着不離の關係あるを説くが如き、皆一顧の價なしとせざるなり、東里は又靜坐をなし、又靜立をなせり、靜坐は宋儒の工夫せし所にして、本と坐禪を翻案せしものなるが如し、然れども靜立と云ふことはなかりき、是れ全く東里の發明する所に係る、彼れ自

ら桃野子に與ふる書に其効を述べて曰く、

老拙近來靜坐を勤候に付靜立をも致候、古來靜立といふ名目は聞及ばず候へ共、愚意を以て作爲いたし候、靜坐は時を待ち處を擇ぶ事も有之候へども、靜立は其差別なく、内にありても、外に出ても、道路を往來するにも、心まかせになるべし、云云、

東里は執齋と殆んど伯仲の間にあるが如し、然れども其文多く傳はらざるを以て尙ほ多少の遺漏なきを保し、難きは吾人の頗る遺憾に堪へざる所なり、

尙ほ最後に東里の壁書を擧げん、

一 父母をいとをしみ、兄弟にむつまじきは、身を脩むる本なり、本かたければ、未しげし、

一 老を敬ひ、幼をいつくしみ、有徳を貴び、無能をあはれむ、

一 忠臣は國あることを知りて家あることを知らず、孝子は親あることを知りて己れあることを知らず、

- 一 先祖の祭を慎み、子孫の教を忽にせず、
- 一 辭はゆるくして、誠ならむことを願ひ、行は敏くして、厚からむことを欲す、
- 一 善を見ては法とし、不善を見ては、いましめとす、
- 一 怒に難を思へば、悔にいたらず、欲に義を思へば、恥をとらず、
- 一 儉より奢に移ることは易く、奢より儉に入ることにはかたし、
- 一 樵父は山にとり、漁父は海に浮ぶ、人各その業を樂むべし、
- 一 人の過をいはず、我功にはこらず、
- 一 病は口より入るもの多し、禍は口より出づるもの少からず、
- 一 施して報を願はず、受けて恩を忘れず、
- 一 他山の石は玉をみがくべし、憂患のことは心をみがくべし、
- 一 水を飲んで樂むものあり、錦を衣て憂ふるものあり、
- 一 出る月を待つべし、散る花を追ふこと勿れ、
- 一 忠言は耳にさかひ、良薬は口に苦し、

右十六條未だ甚だ奇なりとせずと雖も、亦日常の行爲に適切なる治心の法を列舉せり、學者若し之れを實行するを得ば、其君子たるに於て綽綽然として餘裕あること疑なきなり、

廣大なる現實の完全なる縮寫は、
即ち小世界なり、即ち小宇宙なり、

ロツツヒ

第七章 林子平

林子平、名は友直、字平は其字なり、仙臺の人、曾て海國兵談、三國通覽を著はす、政府以て怪詭を唱ふるものとなし、命じて其鑲版を綴ぎ、整居せしむ、子平是に於て六無歌を作り、以て自ら嘲る、歌に云く、

親もなし、妻なし、子なし、版木なし、金もなければ、死にたくもなし、

遂に自ら六無齋と號し、一室に端坐し、足復た戸庭を出でず、寛政五年六月廿一日を以て歿す、時に年五十六、

子平學則八條を立つ、第一に八徳(即ち孝悌忠信勇義廉耻)第二に讀書、第三に武藝、第四に良知、第五に克己、第六に復禮、第七に茶道、第八に猿樂、是れなり、此八條中八徳を以て基礎となす、良知に就いては、良知を能く認記して、心學を磨くべしといひ、更に其旨意を述べて云く、

人々善惡邪正に就いて可否いかんと願れば、善は善、惡は惡と明かに辨へ知る心あるなり、是れ良知なり、此良知は學ばずして天然自然に

人の胸中に存在するものにして、所謂神明なり、萬事此良知に問ひて取計るべし、此良知の儘にするには克己の修行を強ひて勤むべし、克己は即ち勇なり、云々

又八條の末に附記して曰く、

聖人の心法も佛氏も神家も武藝者の氣位も勇にあらざれば行ひ遂げられぬなり、都べて心法は勇を本として進む事を専らに勤むべし、文武の二藝も皆此心法を宗とするなり、是れ學者の大主意なり、

又父兄訓の中にも子弟を教ふるには幼少たりども能々心法を吞込むべし、とて縷々其旨意を叙述せり、子平がいかにして王學の系統に接せしやを知らずと雖も其良知を磨き心法を本とする處、全く姚江の流派に外ならざるなり、子平の書類は大槻修二氏集めて六無齋全書と題し、検討して世に公にせり、凡そ五卷あり、

第八章 佐藤一齋

第一 事蹟

中根東里歿後七年を経て佐藤一齋生まる、一齋名は坦、字は大道、捨藏と稱す、一齋は其號なり、又愛日樓と號し、又老吾軒と號す、江戸の人、其家の系大職官鎌足公に出づといふ、曾祖名は廣義、周軒と號す、始め儒を以て岩村侯に仕へ、後家老となる、祖名は信全、父の職を襲ぐ、父名は信由、文永と號す、通稱は勘平、父の職を襲ぎ、國政を執ると凡そ三十餘年、蒔田氏を娶りて二男二女を生む、長男は應之助、次男は即ち一齋なり、一齋安永元年十月を以て江戸濱町の藩邸に生まる、時に父信由年四十五、是れより先き信由、小菅氏の子治助を養ふて嗣となし、長女を以て之れに配す、一齋生まるゝに及んで、治助又一齋を以て其養子となす、一齋幼にして讀書を好み、又臨池の技を善くし、射騎刀槍の術、學ばざる所なし、北條氏の兵、小笠原氏の禮、亦皆之れを修む、十二三歳の比はひに、殆んど成人の如

し成童に至るに及んで、嶷然頭角を露はし、天下第一等の事を以て其名を成さんと欲す、乃ち聖賢の學に従事し、其志を立つること始めて堅固なるを得たり、

寛政二年一齋年十九、始めて岩村藩の仕籍に登り、近侍の列に入る、此時に當りて、一齋、林述齋と同じく學ぶ、述齋は本と松平氏、岩村城主能登守乘蘊の第三子なり、其頃未だ林氏を嗣がずして、濱町の藩邸にあり、述齋一齋より長ずると僅かに四歳、一齋は岩村藩の子弟たるを以て幼より述齋の伴友たり、長ずるに及んで兄弟の如く、往來學を講じ、概ね虛日なし、又井上四明、鷹見星阜の門に出入し、其講論を聽く、時々世の學者概ね護國の餘臭に染まらざるなし、是を以て辨道薙蕪二卷を著はして之れを駁し、又孝經解意補義一卷を作る、此頃官醫に杉本樗園といふものあり、一齋と同年にして又志操畧同じ、乃ち交を結んで親善し、豪放を以て自ら任ず、三年八月故ありて職を免せらる、因りて仕籍を脱せんことを請ふ、十月を以て許さる、乃ち詩を賦して曰く、

濯足溪流、仰看山唯山、與水意偏閑、投簪心境、無餘事、夢在鷗盟猿約間、
寛政四年二月述齋の徳憑により溟華に遊ぶ、行くに臨んで述齋詩を贈りて曰く、

三尺凝霜、識者稀、終教紫氣斗邊微、風雨何時開、匣去延平津、畔化龍飛、

一齋乃ち間大業の家（友問大業、名は重富、長涯と號し、晩に耕留主人と號す、大業は其字なり、事は愛日樓文卷十二に載するの所亡友問大業碑銘叙に詳なり、

しくて又兼ねて識見あり、一齋と相遇ふて、一

見舊の如し、又爲めに介して中井竹山に學ば

しむ、一齋日夜切磨經義を討論し、或は夜半に至る、竹山以て厭ふべしと

なさず、反りて其切問を喜べり、竹山の長子曾弘詞才絶倫、麗澤相質して

學大に進む、又京師に遊び、皆川淇園に見ゆ、六月家に歸る、竹山乃詩を贈

りて曰く、

聞君客迹自濃、齒目擊俱欣、吾道存累句、未極新知樂、歸路俄驚遠、別魂世

故易、擡双白眼、詞場且對一青樽、妙年將任斯文責、何日遊踪再及門、

又一行の大字を書して與ふ、其語に云く、困而後寢、休而復興と、一齋其出

處を問ふ答へて曰く、仆而復興は王文成の語なり、首句は則ち今筆に臨んで之れを加ふるのみと、此王文成の二語一齋をして眼を姚江派に轉せしむるの一端となりしこと復た疑なきなり、

寛政五年二月林簡順の門に入り、其邸内に寓し、始めて儒を以て業となす、述齋毎に其寓に來たりて相與に講習す、四月簡順没して嗣なし、官乃ち命じて述齋をして林氏の後を繼がしむ、述齋是に於てか始めて師弟の名を正うし、終身一齋を以て門人となす、然れども日夜同學、猶ほ奮時に似たり、一齋専ら心を六經に潛め、旁ら文辭を學ぶ、其交はる所のもの松崎謙堂、清水赤城市野隼卿の徒、皆一時の俊秀たり、或は有名の儒流を、歴訪し、討論難詰、以て理義を攻む、時に僧蕉、中名は顯常、字は大典、近江の人、能文を以て世に鳴る、其江戸に來たるや、一齋常に作る所の文を示して批評を請ひ、力を得る所多しといふ、

寛政八年父に従ひて京畿、大和伊勢及び攝播に遊び、名區勝蹟、探討せざるなし、其間風雨霜露、逆路の艱苦一ならず、然れども杖履を捧持し、親の

歡心を極む、既にして名聲漸く起り、門人日に進む、大小侯伯の學問に志あるもの、延聘講説を請ふもの多く、虚日あることなし、一齋其塾を號して百之寮といひ、又風自寮といふ、

寛政十二年三月平戸侯特に旅費を給して一齋を延聘す、一齋乃ち便路長崎に至り、清客に接し、以て聞見を博うせんことを請ふ、侯之れを許す、一齋乃ち四月を以て出發す、其行を榮として送りて品川驛に至るもの數十人、皆有名の士なり、一時傳稱して以て盛事となす、遂に攝津を越え、中國を経て肥前に至り、長崎に於ける、平戸侯の邸内に寓し、清客沈敬勝、劉雲臺、錢宇文、周慶書の徒と文酒の交をなす、其中雲臺宇文の二人は共に學植あり、單に商賈と見做すべきものにあらず、因りて得る所亦多からずとせず、次いで平戸に至り、經書を維新館に講ず、聽くもの三百餘人、歸路京師に入り、路を岐蘇に取り、九月を以て家に歸る、

文化元年新に愛日樓を築き、春より夏に至りて落成す、

文化二年十月林氏の塾長となり、其門生を監督す、是れより門人益々進み

從遊の士甚だ夥しく寮舎容るゝこと能はず然れども耳提面命講習倦まず夜以て日に繼ぐ講經の日に當りては聽者堂に滿つ述齋の嗣子種字を始めとし一齋に師事するもの少しとせず門人の其業を遂げて家を成すもの數十人の多きに及ぶ就中安積良齋竹村悔齋等尤も其翹然たるものなり、

一齋曾て東叡山法親王の知るを辱うし時々侍講し詩歌の絶あるごとに陪侍せざるなし文政元年法親王に陪して日光山に至り日光山行記を著はす載せて愛日樓詩文の卷末になり、
文政四年江戸を發して美濃に至り鉦尾山祖先の城墟を吊ひ其墳墓に謁し遂に京都に遊び日野大納言南洞公に謁し九月を以て家に歸る公文辭を好み尤も韻事を善くす是を以て一齋の至るや一見舊の如し爾後公の敕を奉じて江戸に來たるや一齋必ず其旅館に至りて起居を候ひ公東征道路獲る所の篇什を賜ふを以て例とせり、

一齋の岩村に於ける已に仕を辭するの後職事あるなし唯文學を以て

世子を輔導するのみ、文政九年世子國を承け、一齋を擢んで、老臣の列となし、以て國事を議せしめ、是時に當りて名聲籍甚、苟も道に志し、文を學ぶもの贊を其門に執らざるはなし、塾徒は肥薩奥羽の人を併せて、同窓切嗣、其質一ならずと雖も、皆篤く一齋を信じ、聲音笑貌に至るまで、一齋を模倣するに至る時に、吉村秋陽、山田方谷の徒、名聲尤も著はる。

天保十二年齡、古稀に躋るを以て、塵事を謝絶し、以て餘年を養はんと欲し、岩村侯の矢藏の下邸に就き、數百歩の地を借り、漸に書室を築き、名づけて靜修所といふ、又一樓を築き、名づけて東暖樓といふ、園には蕉桂を種えて、隱棲の所となし、往來宴息す、七月述齋逝去す、是を以て悽然無聊、益意を人世に絶つ、の傾向あり、此歲幕府庶政を一新し、賢良を晋む、十一月擢んでられて、儒官となり、昌平黌の官舎に住せしむ、是に於てか幡然復た作り、乃ち三律を賦して曰く、

畢竟虛名無一長、謬承微命入朝堂、久居人後材如礫、徒在物先齡迫桑、昨
夢猶餘篋笠態、殘軀重着帽袍裝、深慚垂釣磻溪叟、大蓋鷹揚報寵光、

近築幽棲墨水涯、豈圖今日赴公車、聖明普照分珠璣、文武兼收施兕罝、不比蟠桃初結實、恰同枯卉再生芽、老吾願使書香繼、傳一經餘傳一家、七十無車底用懸、抵今挽做曰強年、鷺鷥儘遣成新綴、猿鶴奈何違舊綠、赴所不期天一定、動於無妄物皆然、世間多少營々者、知否此翁真可憐、

天保十三年舊居を以て女孀河田興に與へ、自ら居を官舎に移し、匪勉從事後進を誘掖し、經義を講説し、敢て頽老を以て之れを人に委せず、是に於てか天下の人目して以て山斗となし、景仰せずといふことなし、侯伯以下迎聘して講を請ふもの、前後數十家、或は駕を官舎に任けて學ぶものあり、凡そ士民の門に入るもの、無慮三千人、四月特旨を以て易を將軍の前に講ず、辨説詳晰、賞命あり、是れより以後國家漸く多事なるに従ひ、或は林祭酒を助けて外交の書を作り、或は幕府の需に應じて時務策を作り、頗る國政上にも裨補する所あり、幕府も亦一齋を優遇し、屢賞與あり、一齋の光榮餘りありと謂ふべし、

幸

安政六年六月感冒を患ふ、八月に至りて稍回復せり、因りて強ひて塾徒

の爲めに論語を講ず、之れか爲めに再び二豎を挑發し、九月に入りて痰喘劇發し、荏苒起たず、元氣漸く消磨し、二十四日遂に昌平饗の官舎に没す、享年八十八、十月三日を以て城南麻布深廣寺に葬る、一齋初め片岡氏を娶る、先ちて没す、繼配坂本氏は離婚し、又更に中根氏を娶る、三男十女あり、長男、名は混、慎左衛門と稱す、是れ坂本氏の生む所にして家を承けず、出で、田口氏を冒し、先ちて卒す、次男名は其次、夭折す、三男名は樞、家を承けて儒員となり、明治維新の後權小吏となる、並に中根氏の生む所なり、内外男女孫曾凡そ三十九人なりといふ、

一齋の門人中最も著名なるは、左の如し、

佐久間象山、名は啓、字は子明、信濃の人、陽明學を奉ず、後に出だす、

吉村秋陽、名は晋、字は麗明、重介と稱す、安藝の人、陽明學を奉ず、後に出だす、

山田方谷、名は球、字は琳卿、安五郎と稱す、備中の人、陽明學を奉ず、後に出だす、

奥宮慥齋、名は正由、字は士道、土佐の人、陽明學を奉ず、後に出だす、
竹村悔齋、名は賁、字は伯實、三河の人、陽明學を奉ず、又詩に巧にして奇
行多し、藩宰の權を専らにするもの某を斬りて自刃す、時に年三十有
六、安積良齋其傳を作る、又續近世先哲叢談卷下に其事蹟を出だせり、
林鶴梁、名は長孺、伊太郎と稱す、武藏の人、明治十一年正月十六日を以
て没す、年七十三、

金子得所、名は清邦、字は鳴卿、與三郎と稱し、後六左衛門と改む、出羽の
人、陽明學を奉ず、事蹟の觀るべきもの多し、三島中州其碑文を作れり、
大橋訥菴、名は順、字は周道、順藏と稱す、江戸の人、初め陽明學を奉じ、後
朱子學に變ず、文久二年七月十二日を以て牢獄に没す、年四十八、著は
す所關邪小言四卷あり、

池田草菴、名は緝、字は子敬、但馬の人、陽明學を奉ず、後に出だす、
中島操存齋、名は建、字は仲強、衡平と稱す、筑前の人、陽明學を奉ず、筑前
秋月藩に仕へ、風俗を振ひ、正邪を辨ずるを以て己れが任となし、主君

に諫言して、其怒に觸れ、後官を免せられ、家に幽屏せらる。文久の歳、時事を陳言し、權要の意に忤ひ爲めに譴責せらる。明治元年五月中夜暴に歿す、或は云ふ、難に死すと、春日潜菴其碑陰誌を作れり、

柳澤芝陵、名は信兆、字は伯民、太郎と稱す、高原の人、陽明學を奉ず、後に
出だす、
み

安積良齋、名は信、字は思順、祐助と稱す、奥州の人、著はす所、良齋文畧四
卷、同續三卷、同詩畧一卷、良齋間話二卷、同續二卷等あり、

河田藻海、名は興、字は猶興、八之助と稱す、屏淑と號し、又藻海と號し、後
迪齋と號す、一齋の女孺、安政六年正月十五日を以て歿す、享年五十有

七、著す所、書經挿解八卷、易學啓蒙圖考一卷、自警編一卷、水雲問答一卷
等あり、藻海曾て藤樹の眞蹟、致良知の後に書して曰く、右藤樹中江翁

眞蹟也、寛保中三輪執齋寄納諸徳本堂、堂在江州小川邑翁之郷祠、而係
大溝侯封内翁啓手、足二百年於茲、而土人奉祠至今、其追慕之深、可知矣、

大溝侯好讀書、銳志躬行、有深慕翁、乃恐是蹟之或逸也、將摹刻以傳示、與

而微賤、展而觀之、筆力遒勁、足以見其充養之厚、蓋發知大學也、良知孟子也、而致良知則王文成之所獨得也、翁之學有得於此、則有是蹟、豈偶然也哉、因敬書其後、藻海亦陽明學を喜びしものなるが如し、藻海の行狀、教育史資料卷七に見ゆ、

菊池廓堂、名は履順助と稱す、笹山侯の儒臣、天保元年八月十二日を以て歿す、

深村邁

若山極、字は壯吉、勿堂と號す、通稱は壯吉、土佐の人、讀易私記、論語私記、學庸私記、教戰畧記等の著あり、

三谷佃

塚越雲、

本多楸、

昌谷碩、精溪と號す、備中の人、津山藩主確堂公に仕ふ、著はす所小學書合纂あり、事蹟は日本教育史資料卷五に詳なり、

其他一齋の薰陶を受けて世に出でたるもの少しとせず、要するに一齋の教育上に於ける功勞は決して輕々看過すべからざるものあるなり、一齋は文章家として屈指の大家なり、高井泰亮曰く、佐藤坦其學本於象山、全書傳習錄、困知記等、而引朱子、合於陸王也、其文章之巧實海内一人也、と、當時頼山陽、松崎懔堂等の能文家ありしが故に、海内一人とはいひ難きも、寛政以後有數の文章家たるは疑なきなり、一齋の最も長ずる所は文章にありと雖も、詩も亦巧ならずとせず、今左に數首を擧げん、

設言三首節二

斯○文○喪○墜○有○誰○尋○天○地○人○心○無○古○今○偶○坐○夜○堂○窺○斗○象○殊○疑○光○彩○照○吾○襟○
落○々○乾○坤○人○亦○無○誰○歟○自○古○是○真○儒○唯○名○與○利○多○爲○累○一○過○此○關○纒○丈○夫○

太公垂釣圖

認○被○文○王○載○得○歸○一○竿○風○月○與○心○違○想○君○牧○野○鷹○揚○後○夢○在○磻○溪○舊○釣○磯○



第二 著書

古本大學旁釋補一卷

此書は王陽明が古本大學旁釋を増補せしものなり、一齋之れが序を作りて曰く、本邦人所未見と、乃ち知る王陽明が古本大學旁釋は一齋始めて之れを我邦に傳ふるを、蓋し此書は朱彝尊が經義考に載すれども、毛奇齡は門人の僞入となす、一齋此書を得て檢閲し、決して門人の僞造にあらざるを發見し、種々意を用ひて一卷の定本となせり、此書は明治三十年南部保城大學古本旁釋と題して之れを發行せり

大學一家私言一卷

是れ一齋が二十四五歳の時陽明學の立脚點より著はし、所なり、大學摘說一卷

此書は前書の青年客氣の餘に成り、言往々詬罵に涉るを悔ひ、更に陽明及び諸儒の説を參酌して著はす所なり、

中庸欄外書一卷

論語欄外書二卷

孟子欄外書二卷

小學欄外書一卷

近思錄欄外書三卷

傳習錄欄外書三卷

此書は明治三十年南部保城之礼を發行せり

白鹿洞揭示示問一卷

白鹿洞揭示譯一卷

九卦廣義一卷

易學啓蒙一卷

全圖考一卷

吳草廬定論一卷

禿毫聚葩一卷

愛日樓稿本三十卷

愛日樓文詩四卷

此書は松平定常が文政十二年を以て刊行せし所に係る、

愛日樓文詩剩篇一卷

濟厥畧記一卷

初學課業次第一卷

課業次第續錄一卷

課業次第引用書目一卷

俗簡焚餘二卷

課業背誦一卷

言志錄四卷

一齋壯歲にして言志錄一卷を著はし、六十を踰えて言志後錄一卷を著はし、七十にして言志晚錄一卷を著はし、八十にして言志耄錄一卷を著はす、合して四卷あり、世之れを言志四錄といふ、此書本と誦錄に

して思想の斷片を記すに過ぎざれども、亦一齋の學問を窺ふに足るなり、

哀敬篇三卷

追蘇遊錄一卷

周易欄外書十卷

僖子時器雜著一卷

漫遊雜錄二卷

孫子副詮一卷

吳子副詮一卷

辨道薙蕪二卷

孝經解意補義一卷

右一齋の著書は大抵皆寫本なり、一齋が存命中刊行せしは愛日樓文
詩四卷と言志錄四卷とに過ぎざるが如し、一齋は又四書五經及び小
學に訓點を付し、後進を裨益せり、所謂一齋點是れなり、

第三 學 說

一齋は二十四五歳の時より陽明學を奉ぜしこと確實なり、蓋し其源を竹山が興へし陽明の語に發せしならん、其著大學一家私言は二十四五歳の時の作にして、全く姚江派の立脚點より論じ、朱子の妄謬を摘發せり、然れども一齋は林述齋の門人にして其塾長を勤め、後又昌平黌の教官たりしが故に公然王學の名を擧げて之れを主張すること能はず、朱子學は幕府の教育主義なればなり、是故に一齋は陽には朱子學を發揚し、陰には陽明學を唱道せり、是に於てか陽[△]朱[△]陰[△]王[△]の譏を受くるに至れり、然れども朱王二氏の學、全く調和して講究すること能はざるにあらざ、藤樹、蕃山、執齋の徒皆陽明學を主張しながら必ずしも朱子學を排斥せず、寧ろ之れをも併せて採るの傾向あり、一齋此點に於て多少の苦心なくんばあらず、抑、幕府が朱子學を取れるは初め林羅山が其儒官となり、其子孫之れを繼いで幕府に仕へたるが爲めなり、然るに羅山は藤原

惺窩の門に出づ、惺窩の學は朱子學に相違なきも必らずしも陸子を斥けず、即ち朱陸を併せて之れを取れり、朱陸を取るは朱王を取るに異ならざるなり、是を以て一齋は殊に惺窩を尊崇し、曾て矢倉の下邸の園中に就いて一小祠を營み、其肖像を掛け、以て欽仰の意を述べて曰く、

惺窩藤公答林羅山書曰、陸文安天資高明、措辭渾浩、自然之妙、亦不可掩焉、又曰、紫陽篤實而邃密、金溪高明而簡易、人見其異、不見其同、一旦貫通、同歟、異歟、必自知、然後已、余謂我邦首唱濂洛之學者、爲藤公、而早已并取朱陸如此、羅山亦出於其門、余曾祖周軒受學於後藤松軒、而松軒之學亦出自藤公、余欽慕藤公淵源所自、則有乎爾、

羅山は惺窩の如く朱陸を併せて之れを取らず、獨り朱子を尊崇して陸子を排斥せり、殊に惺窩の陸子を取るの非を痛論せり、唯、理氣の説のみは、陽明によると雖も、其他の點に於ては固より純然たる朱子學なり、然れども一齋に取りては此事に關しても、亦辯明する所なかるべからず、彼れ乃ち羅山の偏狹ならざるを論じて曰く、

博士家古來選用漢唐註疏、至惺窩先生始講宋賢復古之學、神祖嘗深悅之、舉其門人林羅山、羅山承繼師傳、折中宋賢諸家、其說與漢唐殊異、故稱曰宋學而已、至於關齋之徒、則拘泥過甚、與惺窩羅山稍不同、

又曰く、

惺窩羅山課其子弟、經業大略依朱氏、而其所取舍、則不特宋儒、而及元明諸家、鶯峰亦於諸經有私考、乃知其不拘一家者、顯然、

是れ彼れが朱王を併せ取るも、何等の不都合もなきことを辨疏するものなり、其學の幕府の教育主義に戻らざるを説明するものなり、又惺窩の贊を作りて曰く、

謝華胄而遐蹤、望白雲而獨臥、三徵不起、彭澤之儔、群雋並興、河汾之亞、矧乃開先于性學、與世而俱新、覺後以心詮、歷年而益播於戲源、深而流遠、傳入遡洄而上下、雖然、誰能真遡洄乎哉、誰能真上下乎哉、

惺窩を贊すること至れり盡くせりと謂ふべし、此の如くにして一齋は直ちに系統を惺窩に接し、徳川氏の初期の學問と照應して其正派を持

續するものなることを示せり。一齋曰く、

朱陸同宗伊洛、而見解稍異。二子並稱賢、儘非如蜀朔之與洛爲各黨。朱子嘗曰、南渡以來、理會著實工夫者、惟某與子靜二人。陸子亦謂建安無朱元晦、青田無陸子靜、蓋其互相許如此。當時門人、亦有兩家相通者、不爲各持師說相爭。至明儒如白沙、篁墩、餘姚、增城、並兼取兩家、我邦惺窩、藤公蓋亦如此。

是れ一齋が自ら惺窩と同一轍に出づと信ずる所以なり。惺窩は一齋がいへる如く朱陸を併せ取れり。然れども其主要なる傾向は朱子學にありしこと疑なきなり。然るに一齋の學は假令ひ朱王を併せ取るの意を公言するも其實著しく陽明學に歸向せり。彼れ假令ひ外公平を裝ふと雖も其實純然たる陽明學者たりしに相違なし。唯、周、國の境遇、彼れをして公然陽明學派と名のること能はざらしめたり。又彼れが性質の智巧多く且つ交道に長けたる遂に急流勇退、以て己れが所信を貫くの舉に出でざらしめたり。其平和なる生命を送り得たるの技倆は好みすべし。

ど、雖も、道、を、以、て、自、ら、任、ず、る、も、の、と、し、て、は、少、し、く、勇、氣、の、缺、け、た、る、所、あ
 る、を、惜、ま、ず、ん、ば、あ、ら、ず、言、志、録、の、中、王、學、の、旨、意、徃々、散、見、す、ど、雖も、未、だ
 分、明、に、認、定、す、べ、か、ら、ず、是、れ、其、存、命、中、に、公、に、せ、る、が、故、な、り、欄、外、書、の、類
 に、至、り、て、は、分、明、に、王、學、の、本、色、を、現、は、せ、る、を、見、る、其、存、命、中、に、之、れ、を、公
 に、せ、ざ、り、し、は、蓋、し、王、學、者、た、る、本、色、を、現、は、す、の、恐、れ、あ、り、し、に、よ、る、な、ら
 ん、又、一、齋、が、後、進、を、感、化、し、た、る、も、主、と、し、て、王、學、に、あ、り、王、學、の、系、統、を、受
 け、た、る、も、の、最、も、目、ざ、ま、し、き、事、蹟、を、遺、せ、り、此、邊、の、消、息、に、よ、り、て、之、れ、を
 考、ふ、れ、ば、一、齋、は、朱、子、を、拒、絶、す、る、も、の、に、は、あ、ら、ざ、る、べ、き、も、寧、ろ、王、學、者
 と、し、て、算、ふ、べ、き、も、の、た、る、こ、と、疑、を、容、れ、ざ、る、な、り、一、齋、が、深、く、中、江、藤、樹
 を、尊、崇、し、た、る、も、亦、此、邊、の、消、息、を、知、る、の、一、端、と、な、す、を、得、べ、し、彼、れ、曾、て
 小、川、村、に、之、き、藤、樹、書、院、を、訪、へ、り、時、に、詩、あ、り、云、く、

碩、人、已、矣、幾、星、霜、景、暮、今、顏、德、本、堂、關白一餘藤公遺、愛、藤、棚、荒、益、古、孤
 標、松、幹、老、逾、蒼、氣、常、和、處、春、長、煥、月、正、霽、時、風、亦、光、尙、見、士、民、敦、禮、讓、入、疆
 不、問、識、君、卿、

一齋又後に至りて此詩を藤樹の肖像に題せり、藤樹書院に藏する藤樹の肖像是れなり、要するに、一齋は宋儒を奉ずと稱すと雖も、其實、主として陽明を欽慕するもの、故に凡そ陽明に關するもの、網羅蒐集せざるなし、嘗て陽明の眞蹟、墨妙亭詩一帖を得て、珍襲翹に趙璧のみならず、凡そ墨蹟の我邦に存するもの、百方之れを求め、其獲がたきものに至りて、は人に命じて謄寫せしめて之れを藏し、輯めて愛日樓姚帖三卷となせり、蓋し陽明の生まるゝ、明の憲宗成化八年壬辰にあり、然るに一齋の生まるゝ、亦安永紀元壬辰にあり、中間恰も三百年を隔つ、古人言へるあり、云く、五星聚奎、濂洛大儒斯出、五星聚室、陽明道行と、五星室に聚まるは、正徳十六年にあり、即ち陽明五十歳の時にあたる、然るに文政四年五星室に聚まる、是れ亦一齋五十歳の時にあたる、是を以て當時の人、天の祥を下だす、殆んど偶然ならざるものありと稱せり、

一齋の學説は組織としては毫も觀るべきものなし、然れども特殊の事件に關して一家の見解なきにあらず、今左に其主要なるものを擧げん、

第一理氣の説：…愛日樓文卷三に原氣原理の二篇を載す、今其主意を考ふるに、天地萬物皆氣なり、氣分れて天地萬物となる、然れども、畢竟唯、氣あるのみ、然らば理は氣外にあるか、理と氣と、一にして二、二にして一、二を合して一となすは、其體をいふなり、一を分ちて二となすは、其用をいふなり、條ありて紊れざるもの、之れを理といひ、運んで已まざるもの、之れを氣といふ、即ち其名の同じからざるを知る、然れども、其運んで已まざるものは、即ち其條ありて紊れざるものなり、即ち其物の異ならざるを知る、之れを要するに、理と氣とは、其名同じからざるも、其物は異ならざるなり、

又言志蓋録に云く、

自主宰謂之理、自流行謂之氣、無主宰不能流行、流行然後見其主宰、非[△]二[△]也、學者輒過分別、不免於支離之病、

此れに由りて之れを觀れば、一齋は理氣合一論を是定するものにて、其思想は王陽明と異なる所なきなり、

第二、定數論……一齋は天地間の事、人間社會の事、總べて一定の命數に従ふものとせり、言志錄の首めに云く、

凡天地間事、古往今來、陰陽晝夜、日月代明、四時錯行、其數皆前定、至於、人富貴貧賤、死生壽夭、利害榮辱、聚散離合、莫非一定之數、殊未之前知、耳譬猶傀儡之戲、機關已具、而觀者不知也、世人不悟其如此、以爲己之知力足恃、而終身役役、東索西求、遂悴勞以斃、斯亦惑之甚、

又云く

天道以漸運、人事以漸變、必至之勢、不能卻之使遠、又不能促之使速、

是れ必然論に似て必然論にあらず、寧ろ命數論 Fatalismus なり、一定の命數か如何にして成立するか又如何なる方針を取るべきかは知るべからざるも、兎に角吾人は到底命數の規定を免れず、吾人は之れを奈何ともすべからずとするものなり、此の如くなれば、啻に人的自由意思を否定し、人として放任無爲の愚に陥らしむべきのみならず、又世界に關して一種不可思議の念を起し、迷信を誘發するの端となるべし、一齋は自

然界の必然性を見て、之れを命數となし、此れを外にして人的自由意思の惹起し來たるもの、決して尠少なざざるを知らざるなり、

第三、精神と身體の説……一齋は精神は天の我身體に寓するものとし、身體は地の精粹より成るものとせり、言志録に云く、

舉目百物皆有來處、軀殼出於父母、亦來處也、至於心則來處何在、余曰、軀殼是地氣之精、英由父母而聚之心、則天也、軀殼成而天寓焉、天寓而知覺生、天離而知覺泯、心之來處乃太虛是已、

又言志晚錄に云く、

人皆知仰而若々者爲天、俯而隕然者爲地、而不知吾軀皮毛骨骸之爲地、吾心靈明知覺之爲天、

即ち知る、一齋は人を以て一小天地となすを、然るに彼れは更に一步を進め、善惡の差別を此點より考察せり、

第四、善惡の説……一齋は善惡の觀念を精神と身體の關係上より論じ來たり、精神は本性にして人之れを天に受く、純粹にして形なく、唯善

なるのみ然るに身體は地より成るものにて善惡の兩者を兼ね、故に人の惡に流るゝは本性然らしむるにあらざして、身體然らしむるなり、其言に云く、

性稟諸天、軀殼受諸地、天純粹無形、則通乃一於善而已、斯駁雜有形、有形則滯、故兼善惡、地本能承乎天、以成功者、如起風雨以生萬物是也、又有時乎風雨壞物、則兼善惡矣、其所謂惡者、亦非真有惡由、有過不及而然、性之善與軀殼之兼善惡亦如此、

一齋又善惡の過不及の有無より起ることを論じて曰く、

看○來○宇○宙○內○事○曷○嘗○有○惡○有○過○不○及○處○即○是○惡○看○來○宇○宙○內○事○曷○嘗○有○善○無○過○不○及○處○即○是○善○

尙ほ又一齋は惡の淵源は全く身體の感觸に存し、決して本來の性に存するにあざらることを論じて曰く、

欲知性之善、須先究爲惡之所由、人之爲惡、果何爲也、非爲耳目鼻口四肢、平有耳目而後溺於聲色、有鼻口而後耽於臭味、有四肢而後縱於安逸、皆

惡之所由起也。設令驅殺去耳目鼻口打做一塊血肉則此人果何所爲惡邪。又令性脫於軀殼則此性果有爲惡之想否。壹試一思之。

一齋の此説大抵朱子の説く所と其歸を同うす固より一家の見解なきにあらざるも亦隠然朱子より脱化し來たるものと謂ふも不可なかるべきなり。

第五、死生の説……一齋は死生を晝夜と一様に見做し死は毫も畏るべきものにあらざとせり其言頗る味ふべきものあり云く。

生物皆畏死、人其靈也、當從畏死之中、揀出不畏死之理、吾思我身天物也、死生之權在天、當順受之、我之生也、自然而生、生時未嘗知喜矣、則我之死也、應亦自然而死、死時未嘗知悲也、天生之而天死之、一聽乎天而已、吾何畏焉、吾性即天也、軀殼則藏天之室也、精氣之爲物也、天寓於此室、遊魂之爲變也、天離於此室、死之後、即生之前、生之前、即死之後、而吾性之所以爲性者、恒在於死生之外、吾何畏焉、夫晝夜一理、幽明一理、原始反終、知死生之說、何其易簡而明白也、吾人當以此理自省焉。

又云く

畏死者、生後之情也、有軀殼而後有是情、不畏死者、生前之性也、離軀殼而始見是性、人須自得、不畏死之理於畏死之中、庶乎復性焉。

一齋が生前の状況によりて死後を推論すること當れり、彼れ又曰く、生是死之始、死是生之終、不生則不死、不死則不生、固生死亦生々之謂易、即此、

個人個人は死生を免れざれども、凡そ人類といふ生類は存續蕃殖して已まざるなり、一齋此點に曉得する所あるが如し、彼れ又曰く、欲知死之後、當觀生之前、晝夜死生也、醒睡死生也、呼吸死生也、

又曰く、

釋以死生爲一大事、我則謂晝夜是一日之死、生呼吸是一時之死、生只是尋常事、然我之所以爲我者、蓋在死生之外、須善自覓而自得之、

是に至りて一齋の死生觀はシヨツペンハウエル氏のと殆んど同一轍に出づ、意思及び寫象としての世界論中の一節に云く、

營養進行は繼常的發生にして發生進行は一層高く強められたる營養なり、發生に於ける、肉樂は生命感觸の一層高く強められたる快意なり、之れに反して、排泄、即ち物質の繼常的吐出及び投出は一層高く強められたる程度に於ては、發生の反對なる死と異ならざるなり、恰も吾人が常に此點に就いて満足し、投出せられたる物質を悲むとなくしく、其形式を持續するが如く、死に際して彼の各自が日々時々排泄に於て經驗せると同一のものが一層高く強められて、全體上に起り來たるとき、同様に自ら其態度を取らざるべからず、吾人が前者の場合に於て平氣なるが如く、後者の場合に於ても、亦畏縮すべきにあらず、此點より看來たれば、個體の存續を希求するは抑鬱見なり、個體は恰も其身體の物質が常に新規の物質によりて交代せらるゝが如く、他の個人によりて交代せらるべければなり、是故に死骸を保存することは排泄物を鄭重に保存すると同様に愚の甚だしきものなり、

是れ亦晝夜是一日之死生、呼吸是一時之死生の意を述ぶるものなり、一齋が「我之所以爲我者、蓋在死生之外」といへるは、蓋し常住不滅の眞我を指していふならん。

其他學者の服膺すべき特殊の格言少しとせず、今言志四錄中より其最も佳なるもの百二則を抄出せん、云く、

一 太上師天、其次師人、其次師經。

二

凡作事、須要有事天之心、不要有示人之念。

三

立志之功、以知恥爲要。

四

閒思雜慮、紛紛擾擾、由外物滷之也、常使志氣如劍、驅除一切外誘、不敢親近、肚裏自覺淨潔、快豁。

五 有○心○求○名○固○非○有○心○避○名○亦○非○

六 與○有○大○志○者○克○勤○小○物○真○有○遠○慮○者○不○忽○細○事○

七 有○志○之○士○如○利○刃○百○邪○辟○易○無○志○之○人○如○鈍○刀○童○蒙○侮○

八 人○之○賢○否○於○初○見○時○相○之○多○不○謬○

九 得○意○時○候○最○當○着○退○步○工○夫○一○時○一○事○亦○皆○有○元○龍○

十 凡○所○遭○患○難○變○故○屈○辱○譏○謗○拂○逆○之○事○皆○天○之○所○以○老○吾○才○莫○非○砥○礪○切○磋○之○地○君○子○當○慮○所○以○處○之○欲○徒○免○之○不○可○

十一

才猶劍，善用之則足以衛身，不善用之則足以殺身。

十二

治已與治人，只是一套事，自欺與欺人，亦只是一套事。

十三

欲爲世間第一等人物，其志不小矣。余則以爲猶小也。世間生民雖衆，而數有限，茲事恐非難濟。如前古已死之人，則幾萬倍於今，其中聖人、賢人、英雄、豪傑，不可勝數。我今日未死，則似稽出頭人，而明日即死，輒忽入於古人籙中，於是，以我所爲，按諸古人，無足比數者，是則可愧矣。故有志者，要當以古今第一等人物自期焉。

十四

士當恃在己者，動天驚地，極大事業，亦都自己締造。

十五

士貴於獨立自信矣，依熱附炎之念不可起。

十六

人方少壯時，不知惜陰，雖知不至太愒，過四十已後，始知惜陰，既知之時，精力漸耗，故人爲學，須要及時立志，勉勵，不則百悔亦竟無益。

十七

聖人安死，賢人分死，常人畏死。

十八

方讀經時，須把我所遭人情事變做注脚，臨處事時，則須倒把聖賢言語做注脚，庶乎事理融會，見得學問不離日用意思。

十九

取信於人難也。人不信於口，而信於躬，不信於躬，而信於心，是以難。

二十

畜厚而發遠，誠之動物，自慎，獨始，獨處能慎，雖於接物時，不太着意，而自改容起敬，獨處不能慎，雖於接物時，着意恪謹，而人亦不敢改容起敬，誠之畜，不畜其感應之速已如此。

二十一

意之誠否須於夢寐中事驗之。

二十二

人不可無明快灑落處若徒爾畏縮趑趄只是死敬濟得甚事。

二十三

胸臆虛明神光四發。

二十四

爲學標榜門戶只是人欲之私。

二十五

處事雖有理而一點便已挾在其內則於理卽做一點障礙理亦不暢。

二十六

慎言處卽慎行處。

二十七

人最當慎口口之職兼二用田言語納飲食是也不慎於言語足以速禍不慎於飲食足以致病諺云禍自口出病自口入。

二十八

此心靈昭不昧，衆理具萬事出，果何從而得之？吾生之前，此心放在何處？吾歿之後，此心歸宿何處？果有生歿，歟無歟？著想到此，凜凜自惕，吾心即天也。

二十九

深夜獨坐，閤室群動皆息，形影俱泯，於是反觀，但覺方寸內有炯然自照者，恰如一點燈火，照破閤室，認得此正是我神光靈昭本體，性命即此物，道德即此物，至於中和位育，亦是此物，光輝充塞宇宙處。

三十

能教育子弟，非一家之私事，是事君之公事也；非事君之公事，是事天之職分也。

三十一

閑想客感，由於志之不立，一志既立，百邪退聽，譬之清泉涌出，旁水不得滲入。

三十二

心爲靈其條理動於情識謂之欲欲有公私情識之通於條理爲公條理之滯於情識爲私自辨其通滯者卽便心之靈。

三十三

以春風接人以秋霜自肅。

三十四

人涉世如行旅然途有夷險日有晴雨畢竟不得避只宜隨處隨時相緩急勿欲速以取災勿猶豫以後期是處旅之道卽涉世之道也。

三十五

敬生勇氣。

三十六

人當自認我體有主宰主宰爲何物物在何處主於中而守於一能流行能變化以宇宙爲體以鬼神爲迹靈靈明明至微而顯呼做道心。

三十七

百年無再生之我其可曠度乎。

三十八

人多話己所好，不話己所惡。君子好善，故每稱人善；惡惡，故不肯稱人惡；小人反之。

三十九

不可誣者，人情不可欺者，天理人皆知之，蓋知而未知。

四十

知是行之主宰，乾道也；行是知之流行，坤道也。合以成體，猶則知行是一而一，而二。

四十一

學貴自得，人徒以目讀有字之書，故局於字，不得通透，當以心讀無字之書，乃洞有自得。

四十二

戲言固非實事，然意之所伏，必露見於戲謔中，有不可揜者矣。

四十三

與人語不可大發露過傾倒只要語簡而意達。

四十四

人乞物於我勿厭我乞物於人可厭。

四十五

取信於人則財無不足。

四十六

余弱冠前後銳意讀書欲目空千古及過中年一旦悔悟戒外馳務從內省然後自覺稍有所得不自負於此學今則老矣少壯所讀書過半遺忘茫如夢中事稍留在胸臆亦落落不成片段益悔半生費力無用今而思之書不可妄讀必有所擇且熬可也只要終身受用足矣後世勿蹈我悔。

四十七

發憤忘食志氣如是樂以忘憂心體如是不知老之將至知命樂天如是聖人與人不同又與人不異。

四十八

人○心○之○靈○莫○不○有○知○只○此○一○知○即○是○靈○光○可○謂○風○霧○指○南○

四十九

少○而○學○則○壯○而○有○爲○壯○而○學○則○老○而○不○衰○老○而○學○則○死○而○不○朽○

五十

精○義○入○神○燧○取○火○也○利○用○安○身○劍○在○室○也○

五十一

心○理○是○豎○工○夫○博○覽○是○橫○工○夫○豎○工○夫○則○深○入○自○得○橫○工○夫○則○淺○易○沉○澁○

五十二

我○當○視○人○之○長○處○勿○視○人○之○短○處○視○短○處○則○我○勝○彼○於○我○無○益○視○長○處○則○彼○勝○我○於○我○有○益○

五十三

目○親○者○口○能○言○之○耳○聞○者○口○能○言○之○至○於○心○得○者○則○口○不○能○言○即○能○言○亦○止○一○端○在○學○者○之○逆○而○得○之○

五十四

續經宜以我之心讀經之心以經之心釋我之心不然徒爾講明訓詁而已
便是終身不曾讀

五十五

誠意兆於夢寢不慮之知使然

五十六

有才而無量不能容物有量而無才亦不濟事兩者不可得兼寧舍才而取
量

五十七

恩怨分明非君子之道德之可報固也至於怨則當自怨其所以致怨

五十八

人情向背在敬與慢施報之道亦非可忽恩怨或自小事起可憤

五十九

說大人則貌之勿視其巍巍然勿視在心目則熟視亦不妨

六十

我言、語、吾耳、可、自、聽、我舉、動、吾目、可、自、視、視、既、不、愧、於、心、則、人、亦、必、服、

六十一

心、要、現、在、事、未、來、不、可、邀、事、已、往、不、可、追、追、不、可、追、追、便、是、放、心、

六十二

名譽、人、之、所、爭、求、又、人、之、所、群、毀、君、子、只、是、一、實、而、已、寧、有、實、譽、勿、有、虛、聲、

六十三

天、下、人、皆、爲、同、胞、我、當、著、兄、弟、相、天、下、人、皆、爲、賓、客、我、當、著、主、人、相、兄、弟、相、愛、也、主、人、相、敬、也、

六十四

見、人、之、有、禍、知、我、無、禍、之、爲、安、見、人、之、有、福、知、我、無、福、之、爲、穩、心、安、穩、處、即、身、極、樂、處、

六十五

太、寵、是、太、辱、之、覆、奇、福、是、奇、禍、之、餌、事、物、大、抵、以、七、八、分、爲、極、處、

六十六

不○自○欺○者○人○不○能○欺○不○自○欺○誠○也○不○能○欺○無○間○也○譬○如○生○氣○自○毛○孔○出○氣○盛○者○外○邪○不○能○襲○

六十七

遠○怨○之○道○一○箇○恕○字○息○爭○之○道○一○箇○讓○字○

六十八

人○事○百○般○都○要○遜○讓○但○志○則○不○讓○於○師○可○又○不○讓○於○古○人○可○

六十九

人○不○可○無○恥○又○不○可○無○悔○知○悔○則○無○悔○知○恥○則○無○恥○

七十

勿○賣○恩○賣○恩○卻○惹○怨○勿○干○譽○干○譽○輒○招○毀○

七十一

余○少○壯○時○氣○銳○視○此○學○謂○容○易○可○做○至○晚○年○蹉○跎○不○能○如○意○譬○如○登○山○自○麓○至○中○腹○易○中○腹○至○絕○頂○難○凡○晚○年○所○為○皆○收○結○事○也○古○語○行○百○里○者○半○九○十○信○然○

七十二
尋常老人，多要死成佛，學人則當要生作聖。

七十三

前乎我者，千古萬古，後乎我者，千世萬世，假令我保壽百年，亦一呼吸間耳。今幸生爲人，庶幾成爲人而終，斯已矣。本願在此。

七十四

夢中之我，我也，醒後之我，我也，知其爲夢，我爲醒我者，心之靈也。靈即真我也。真我自知，無間於醒睡，常靈常覺，亘乎萬古而不死者矣。

七十五

志學之士，當自賴已，勿因入熱淮南子，曰：乞火不若取燧，寄汲不若鑿井，謂賴已也。

七十六

立志工夫，須自羞惡，念頭起，跟脚勿恥，不可恥，勿不恥，可恥，孟子謂無恥之恥，無恥矣，志於是乎立。

七十七

私○欲○之○難○制○由○志○之○不○立○志○立○真○是○紅○爐○點○雪○故○立○志○爲○徹○上○徹○下○工○夫○

七十八

以○真○已○克○假○已○天○理○也○以○身○我○害○心○我○人○欲○也○

七十九

不○知○而○知○者○道○心○也○知○而○不○知○者○人○心○也○

八十

聖○賢○胸○中○灑○落○不○著○一○點○污○穢○何○語○尤○能○形○容○之○曰○江○漢○以○濯○之○秋○陽○以○曝○之○皜○皜○乎○不○可○尙○已○此○語○近○之○

八十一

人○心○之○靈○如○太○陽○然○但○克○伐○怨○欲○雲○霧○四○塞○此○靈○烏○在○故○誠○意○工○夫○莫○先○於○掃○雲○霧○仰○白○日○凡○爲○學○之○要○自○此○而○起○基○故○曰○誠○者○物○之○終○始○

八十二

英○氣○是○天○地○精○英○之○氣○聖○人○蘊○之○於○內○不○肯○露○諸○外○賢○者○則○時○時○露○之○自○餘○

豪傑之士，全然露之若夫，絕無此氣者，爲鄙夫小人，碌碌不足算者爾。

八十三

寒暑榮枯，天地之呼吸也，苦樂榮辱，人生之呼吸也，卽世界之所以爲活物。

八十四

居敬之功，最在慎獨，以有人而敬之，則無人時不敬，無人時自敬，則有人時尤敬，故古人不愧屋漏，不欺閤室，皆謂慎獨也。

八十五

牧豎折腰，不得不頷，乳童拱手，亦不可戲，君子以恭敬爲甲冑，以遜讓爲干櫓，誰敢以非禮加之，故曰：人自侮而後，人侮之。

八十六

天之將雨也，穴蟻知之，野之將霜也，草蟲知之心，心之感應亦與此同一理。

八十七

我自感而後，人感之。

八十八

慎、我、感、以、觀、彼、應、觀、彼、應、以、慎、我、感、

八十九

以、口、舌、諭、者、人、不、肯、從、以、躬、行、率、者、人、效、而、從、之、以、道、德、化、者、則、人、自、然、服、從、不、見、痕、迹、

九十

志、操、如、利、刃、可、以、貫、物、不、肯、迎、合、親、人、鼻、息、古、人、云、鐵、劔、利、則、倡、優、拙、蓋、謂、此、也、

九十一

物、有、餘、謂、之、富、欲、富、之、心、即、貧、也、物、不、足、謂、之、貧、安、貧、之、心、即、富、也、富、貴、在、心、不、在、物、

九十二

凡、人、有、所、賴、而、後、大、業、可、規、也、我、有、所、守、而、後、外、議、不、起、也、若、其、妄、作、私、智、所、以、招、罪、也、

九十三

免。怨。之。道。在。謙。與。讓。于。福。之。道。在。惠。與。施。

九十四

名。不。干。而。來。者。實。也。利。不。貪。而。至。者。義。也。名。利。非。可。厭。且。于。與。貪。之。爲。病。耳。

九十五

有。實。之。名。不。必。謝。我。之。實。也。無。義。之。利。不。苟。受。我。之。讎。也。

九十六

毀。譽。一。套。也。譽。是。毀。之。始。毀。是。譽。之。終。人。宜。不。求。譽。而。全。其。譽。不。避。毀。而。免。其。毀。是。之。爲。尙。

九十七

徒。譽。我。者。不。足。喜。徒。毀。我。者。不。足。怒。譽。而。當。者。我。友。也。宜。勗。以。求。其。實。毀。而。當。者。我。師。也。宜。敬。以。從。其。訓。

九十八

毀。譽。得。喪。真。是。人。生。之。雲。霧。使。人。昏。迷。一。掃。此。雲。霧。則。天。青。日。白。

九十九

道人在敬敬固爲終身之孝以我軀爲親之遺也一息尙存可忘自敬乎

百

親歿之後吾軀即親也我之養生即是養親之遺不可認做自私

百一

人生二十至三十如日出之日四十至六十如日中之日盛德大業在此時候七十八十則衰頽蹉跎如將落之日無能爲耳少壯者宜及時勉強以成大業罔或遲暮之嘆可也

百二

老人終天數者以漸而移老漸善忘忘甚則耄矣耄之極乃亡亡即漸歸於原數矣

一齋の言志四録は我邦人の語録中に於て白眉と稱すべきものなり、
森芳洲の橘園茶話尾藤二洲の素餐録の類未だ之れに及ばざるが如し、
支那にありても恐くば薛敬軒が讀書録及び胡敬齋が居業録と伯仲の

間にあらん、宜なるかな、西郷南洲の如きは、言志四録中より百有一則を抄録して、之れを金科玉條とせしこと、秋月種樹明治二十一年を以て南洲手抄言志録一卷を出版せり、是れ即ち其書なり、但言志四録の文、往々簡約にして、讀者其旨意の存する所を逸し易し、若し再三翫讀して、之れを経験に徹すれば、漸く味あるを覺ゆ、思ふに、一齋は深智ありて、閱歴多き人、故に其言間、傾聽するに足るものあるなり、



第九章 梁川星巖

星巖名は孟緯、字は公圖、一の字は無象、詩禪道人と號し、又真逸と號し、晚年三野逸民、夏軒老人、天谷老人等の號あり、新十郎と稱す、美濃安八郡會根村の人、寛政元年を以て生まる、星巖の號は居る所の村に星が岡あるに取れり、星巖夙に怙恃を喪ひ、年甫め十九にして江戸に出で、山本北山、古賀精里等に就いて學び、學業大に進み、最も詩に長ず、其妻張氏紅蘭と共に四方に吟遊すること二十年にして、復た江戸に還り、玉池吟社を立て、諸生を教へたりしが、後京都に移り、遂に鴨川の上に住し、鴨沂小隱と號し、優遊自適、以て餘生を送る、桑榆に迫るに及んで、嘗に詩を作るのみならず、深く心を道學に潜め、自ら歎じて、吾幾錯過斯生矣、今而後知學之不可^〇以^〇已^〇と^〇い^〇へ^〇り、詩あり、云く、十九初遊學、使氣頗負抱、頽齡既六旬、方始志於道、と以て星巖の小傳となすべし、其時已に身瘦せて、髮白く、仙風道骨を帯ぶるものゝ如し、故に、瘦如[△]脯[△]腊[△]寒[△]如[△]水[△]の句あり、又其姿態の變を

歌へる詩あり、云く、

三十年前春月柳風霜變盡舊丰姿鏡中一鬢白看做他人更不疑大に
安政五年九月四日を以て歿す、時に年七十、星巖は寛政以後に於ける詩
人の大家にして、菅茶山、廣瀬淡窓、菊池五山、市河寛齋、大窪詩佛、菊池溪鶴
等の間に於て殆んど牛耳を執るの勢あり、而して其門を出るもの琴づ
沼枕山、小野湖山、森春濤、岡本黄石、遠山雲如、江馬天江、鈴木松塘等其人に
乏しからず、星巖集三十二卷は星巖及び其一派の詩を編輯したるもの
なり、星巖著は、所星巖集の外、星巖先生遺稿八卷及び春雷餘響十卷あ
り、其他尙ほ自警編、香巖集等ありといふと、雖も未だ上梓せず、誠に惜む
べしとなす、遺稿は星巖死後門人の編輯する所分ちて前編四卷、後編四
卷となす、後編は徹頭徹尾道學の詩にして、殊に最後の一卷は縦横自在
に其思想を叙述せり、星巖は朱子といはず、陸子といはず、白沙といはず、
陽明といはず、博く宋明道學の書を読讀したるが如し、然れども最も姚
江派の學を喜ぶものなること疑なきなり、後縦筆の中に言へるあり、云

く、
嗟、黃、山、紫、水、偉、哉、啓、明、功、有、白、沙、陳、子、斯、有、文、成、公、

又云く、

良、知、說、一、出、雙、賸、皆、振、發、從、鄒、孟、而、來、無、若、此、快、活、

又春雷餘響卷六に陽明の學を論ずる詩三首あり併せ見るべし星巖は皆に陽明を贊美するのみならず又遂に其圈套内に入り來たれり後縦筆の中に言へるあり云く、

天機自潑々、知行非兩途、功夫念纒動、已落死功夫、

其知行一致の説を尊信すること、以て知るべし、雜言の中に吾心の靈明を述べて云く、

靈、明、吾、固、有、有、似、鏡、蒙、塵、諸、欲、皆、除、去、常、人、即、聖、人、

後縦筆の中に心の雲霧を除去するの要を述べて云く、

東、搜、又、西、索、徘徊、雲、霧、邊、纒、離、門、戶、見、便、白、日、青、天、

又其結果を述べて云く、

心。是。一。虛。鑑。森。羅。萬。象。明。洪。鐘。虛。其。內。所。以。發。大。聲。

又後縱筆の中に誠を論じて云く、
讀得誠一字可以到聖人所云思之適方寸即鬼神

又縱筆の中に明德を論じて云く、

一入明德率土回春陽燿皆發笑瓦礫亦生光

又後縱筆の中に慎獨の要を論じて云く、

苟容些小私天地非天地聖人慎獨戒最是喫緊事

是等の言によりて之れを考ふれば星巖の姚江派に得る所多きは蔽ふべからざる事實なり星巖は又陽明に私淑せる劉蕺山を崇奉せり後縱筆の中に一首あり云く、

朱或能包陸陸不能包朱念臺皆淹貫可謂大丈夫

又春雷餘響卷八に蕺山を稱揚して云く、

文成首倡致良知未弊紛然生擬疑以實救虛虛救實蕺山學旨恰其宜

蕺山年五十一にして夢なきことをいへり然るに星巖は三十歳以來夢

なきことを得たり、蓋し涵養の致す所ならん、詩あり、左の如し、

余三十而無雜夢、爾後三十四年間、或瘧疫、或疝瘡、屢經痛患、瀕死者凡四五次、而亦嘗無有一夢、嘆豈敢謂涵養之所致乎、蓋資稟乃爾也、頃者

讀念臺先生書門之聯、因戲作絕句、

念臺五十一、自說夢寃、吾三十而得、一事似差羸、

學問の方法に就いても、星巖往々論及する所あり、縦筆の中に先づ大本を立つるの要を論じて、云く、

苟大本不立、諸餘無足言、死與草木沒生同、禽獸存

又雜言の中に唯己れが心を師とするの要を論じて、云く、

昔人師其心、今人師其迹、其惟不師心、所以不及昔、

星巖が此の如く、晩年心を道學に潜めしは、淡窓が老莊の學を好み、杏坪が宋儒の理學に耽りしと、好一對と謂ふべし、星巖は國家の事に冷淡ならず、故に「臨國家危變、也不得、不論」等の句あるなり、曾て勤王の志を抱き、國事に關して大に力むる所あり、幾もなく歿す、疑獄之れが爲めに起る、

幕吏紅蘭を召して星巖在世中の行事を擧げて之れを詰問す、紅蘭曰く、
「諸君は國家の大事を以て盡く内子に謀れるか、妾が夫の如きは外事は
婦女に謀らず、故に妾は固より夫の罪を知らざるなり」と、幕吏大に耻づ
といふ、今にして星巖の事蹟を追想するに、單に一詩人を以て目すべき
ものに、あらず、其人材を育成したるも、亦偶然にあらずるを知るべきな
り、



外○物○の○學○は○懊○惱○の○時○に○當○り○て
道○德○上○の○無○識○に○就○い○て○吾○人○を
慰○藉○す○る○こ○と○能○は○ず○然○れ○ど○も
道○德○の○學○は○常○に○外○物○上○の○無○識
に○就○い○て○吾○人○を○慰○藉○す○る○に○足○る、
バ斯卡ール

第三篇 大鹽中齋及び中齋學派

第一章 大鹽中齋

第一 事蹟

中齋は豪邁奇矯の士なり、尋常一様の儒者にあらず、其事蹟の如きは世人の多く稔聞する所にして、哲學史上詳細に之れを叙述するの必要を見ず、吾人唯、其一斑を記載して、彼れが特性の存する所を認識すれば足れり、中齋、姓は大鹽、名は後素、字は子起、平八郎と稱す、中齋は其號なり、又居る所の室を洗心洞と名づけ、自ら洗心洞主人といへり、洗心は易繫辭上に所謂、聖人以此洗心、退藏于密に本づくものなり、中齋は徳島藩家老、稻田九郎兵衛の臣、真鍋市郎の二男にして、寛政五年を以て阿波國美馬郡脇町(即ち今の岩倉町字新町)に生まる、幼にして母を喪ひ、母の緣故によりて、大阪の鹽田喜左衛門の養子となり、後故ありて之れを去り、天滿町の與力大鹽氏の養子となる、大鹽氏の祖先は今川氏に出づ、天正十八年小田原の役あるや、徳川家康の旗下に北條の將足立勘平を馬前に刺

したる一勇士あり、然るに其一勇士は即ち今川氏眞の子にして今川波右衛門と呼ぶものなり、曾て今川義元の桶狭に於て織田信長の爲めに滅ぼさるゝや、其子氏眞暗弱にして、父祖の領土を保つこと能はず、屢武田信玄の爲めに疆域を蠶食せられ、遂に遁竄の客となれり、其妾に一男子あり、是れを今川波右衛門となす、彼れ多年漂泊するの後、徳川氏の臣松平甲藏等と相識るに至り、彼等の推薦により、參州岡崎に至りて家康に謁するを得たり、既にして彼れ小田原の戦功ありて弓を賜はり、且つ邑を伊豆の塚本村に食むを得たり、家康已に天下を裁定するに及んで、彼れは越後柏崎の定番に補せられ、未だ幾ならず、家康の子義直に隨ひ、尾張に至り、[○]縣二百石を食む、後、姓を改めて大鹽波右衛門と稱し、寛永二年二月を以て卒す、波右衛門に男子二人あり、二男を政之丞と稱し、元和年間、大坂の與力となれり、其後降りて寛政の頃に至り、平八郎といふものあり、亦與力たり、中齋之れが養子となれり、時に七歳なりき、然るに養父母俱に其歳を以て歿す、是を以て彼れは教養を養祖父政之丞に

けて生長せり、此政之丞と前の政之丞とは其時代を異にするが故に其
同一人にあらざるは言ふまでもなきなり、

吾人は彼れが幼時の状況に就いて毫も知る所なし、唯彼れが幼少にし
て已に母を喪ひ、従ひて又故郷を離れ、鹽田氏の養子となり、又轉じて大
鹽氏の養子となり、其間少なからざる辛酸を嘗め、自ら激烈峻刻なる性
格を鍛鑄せられたること疑なきなり、唯一の逸事を傳ふるものあり、云
く、彼れ嘗て街上を行き、商家の二童、途上に擔荷を抛ち、拳擊格闘するを
見、走り寄りて二童の髻を執り、汝等何ぞ其主用を忽にして、私争に勇む
や、速に止めずんば、吾れ當に爲す所あるべしと叱咤一番するや、二童之
れに驚き、争を止めて倉皇謝し去れり、と、以て彼れが既に東坡の所謂食
牛の氣ありしを想見するに足るなり、

中齋は幼少の時如何なる人を師として學を講せしか、世之れを知るも
のなし、或は中井竹山に師事せしならんといふものあれども、是れ唯、臆
測のみ、何等の證左あるにあらず、兎に角中齋は少小より文武を兼修し

功名氣節を以て祖先の志を繼がんと欲するの念多く、未だ學問を以て身を立てんと欲するに至らず、與力の業を務め、獄吏囚徒の間に閱歴を累ぬるに及んで、始めて深く學問の必要を感ぜり、中齋^{中齋}是に於てか江戸に適き、林述齋の家塾に入り、儒學を講究し、刻苦勵精、其行の方正にして其進歩の速なる、常に儕輩を凌げり、是を以て述齋も大に望を屬し、他の諸生を誠むるや必ず學問躬行宜しく平八郎に則るべきを以てせり、中齋自ら祭酒^{祭酒}、林公亦愛僕人也^{愛僕人也}といへるを以て其邊消息を知るに足るなり、中齋又學問の餘暇を以て方を武術に用ひ、刀槍弓銃悉く其技を修め、殊に槍術^{槍術}に至りては其秘奥を究め、後來關西第一の名を博するに至れり、洗心洞餘瀝に云く

匹田竹翁曰く、大鹽の武術ですか、外のごとはよく知りませんが、槍術は名人でよく、さぶりを使はれました、併し鐵砲は不得手であつたのみをまして騒動の時分にも大鹽が放つた丸は大方當らなんだと申すことで、云云、

中齋が江戸に留學せしは、未だ其果して何歳の時なるやを知らず、或は十五歳といひ、或は二十歳といふ、熟其佐藤一齋に與ふる書の旨意を考ふるに、後説是に近きが如し、其留學の年數に就いても、或は三年といひ、或は五年といひ、諸説一定せず、何づれにせよ、彼れは年少の時數年間江戸に滞在して、述齋に師事し、其非凡の才學を露はせり、述齋亦特に彼れを鍾愛し、彼れにして一たび帷を上國に下さんか、余も亦聊か面目を施すに足れりと喜べり、會養祖父重症に嬰れりとの報道に接し、中齋倉皇旅裝を整へ、大阪に歸り、慰藉看護、投藥奉養、一日も怠らざりしも、祖父の齡已に古稀に近きを以て、兄孫の誠心に酬ゆるに至らず、終に文政元年六月二日を以て世を去れり、是に於て、中齋家に留まりて復た與力の業を務む、時に年二十有六、中齋が司どれる職は頗る賤陋なり、若し尋常人ならば殆んど治績の見るべきものあらざるべし、然れども彼れ本と千里の駒にして、衆に過ぐれたる氣力と才識とを有せり、故に治績の見るべきもの少しとせず、然れども若し彼れにして一の知己をも得ざりし

ならば、事此に出づること能はざりしならん、然るに幸に一の知己を得たり、文政三年十一月十五日高井山城守實徳、伊勢山田奉行より轉じて大阪東町奉行となれり、彼れ頗る鑑識に富み、竊に中齋の才氣絶倫なるを看取し、忽ち拔擢して吟味役となせり、是れ中齋が二十七歳の時なり、中齋山城守の値遇を得て、大に其驥足を伸ばすを得たり、當時大阪の吏人、不法無狀を極め、愛憎によりて刑罰を加減し、金錢によりて生殺を取捨するの風あり、是を以て市民の吏人を畏忌すること、蛇蝎の如し、中齋乃ち此弊を一掃せんと欲し、邪を折き、正を救ひ、奸を懲らし、善を助け、大に刷新の實を擧ぐるを得たり、嘗て淹滞せる一訴訟あり、數年に亘りて決せず、山城守乃ち中齋に命じて之れを斷せしむ、原告此事を傳聞し、一夜密に菓子一筐を彼れに餽りて、理を得んことを陳請す、明日中齋原被兩者を法廷に召して審問するに、兩者互に論争して相下らず、中齋之れを聽き了はり、原告の不法なるを知り、反覆辯難して、其譎詐を責めけるに、原告辭屈して遂に罪に伏す、積年の難訟も此の如く一朝にして決す

るを得たり、是に於てか中齋彼の菓子筐を出だし、笑ひて同僚に告げて曰く、諸君菓子を好むが故に、訴訟容易に決せざるなりと、乃ち其蓋を取れば、黄白内に充ち、粲然目を射る、一座皆赧顔背に汗して、其言ふ所を知らざりき、中齋が公正廉直にして同僚を憚からざること、率ね此の如し、爲めに能く時の流弊を矯正するを得たり、

文政の末に當り、京都の八坂に益田みつぎといへる妖巫あり、肥前の浪人水野軍記より妖教を傳へ、此れによりて衆庶を誘惑し、其徒漸く京攝の間に蔓延せり、當時の所謂切支丹是れなり、山城守中齋に之れを勦滅せんことを命ず、中齋乃ち自ら組同心二人を率ゐて、京師に赴き、妖巫を捕縛し來りて之れを大阪に磔殺し、其一族五十六人に永牢を命ぜり、是に於てか妖教全く其跡を收むるに至れり、其頃大阪西町の組與方に弓削新右衛門といへるものあり、已に六十歳を踰えたる老人なるに拘はらざ、多くの奸人邪徒を以て爪牙となし、市街近郷の良民を苦しむること特に甚しとなす、是に於てか怨嗟の聲、都鄙に嗷々たるに至りしも、亂

彈の職にあるものは即ち犯罪者其人なるが故に、人之れを奈何ともすること能はず、中齋山城守の命を受け、卒然衆を率ゐて彼れが宅を襲ひ、彼れに迫りて割腹せしめ、尋いて其黨與數十人を捕へて之れを獄に投ぜり、又新右衛門の家宅を搜索して得たる贓金三千兩は、悉く之れを市井の窮民に賑恤せり、是に於てか吏人は肅として警戒を加ふるに至れり、其頃僧侶の風俗、大に亂れ、其醜狀の甚しき、殆んど言ふべからざるものあり、是を以て山城守僧侶に對し、汚行禁制の令を下す、令下る再三にして猶ほ其舊行を改めざるものあり、中齋乃ち山城守の命を奉じて之れを逮捕することに決せり、此際獄に下るもの、五十餘人の上に出づ、各其罪の輕重に従ひて流竄に處せられたり、是に於てか僧侶の風俗、頓に面目を改むるを得たり、其他中齋の治蹟に關しては、人の注意を惹くに足るもの少しとせざれども、今一々列舉するに違あらず要するに、中齋は意を決すること固くして事を處するに敏なり、如何なる困難ありて前に横はるも、一刀兩斷して之れを決するの勇あり、之れを前代の學者

に比すれば、野中兼山若くば熊澤蕃山と相近きが如し、兼山蕃山皆己れが意思を決行するに急に、して共に其終を全うせず、中齋いかんぞ其終を全うするを得ん、中齋が治績大に擧がるに從ひ、其名聲遠近に震動するに至れり、齋藤拙堂が書簡に云く、

從三都以達諸州皆刮目圖視吐舌駭歎或聞風而起者有之、名聲隱然動天下矣、足下執事纒數年耳、乃能赫赫如此、

此れに由りて之れを觀れば、當時の状況略々想見するに足るなり、然れども名聲の起る所必ず嫉妬の相從ふあり、中齋之れを知らざるにあらず、彼れ曾て衆人の怨府となりて、或は不慮の禍を蒙らんことを恐れ、辭表を出だして一時整居せしことありしも、山城守強ひて彼れを起して再び事に從はしめたり、

然れども茲に中齋に取りて甚だ不幸なること出來せり、文政十三年の七月に至り、山城守齡己に七十に近く、劇職に耐へざるを以て病と稱して骸骨を乞へり、中齋の職卑賤なりと雖も、其山城守に對する關係は、蕃

山が芳烈公に於けるが如し、芳烈公の信任なつかせば、蕃山何れの處にか其滿腹の經綸を施さん、山城守の信任なかつせば、中齋いかに其驥足を伸ばすを得ん、然るに今や山城守辭職せん、是を以て中齋復た其望なきを慮り、山城守の辭職の未だ允されざるに先ちて致任し、養子格之助をして其職を繼がしめたり、時に中齋年三十有七、辭職之詩并序あり云く、

昇平二百有餘歲、上下無事、而天下不可謂全無弊也、文政十丁亥之歲、廻吾官長高井公莅任之七年也、是歲之夏四月、公命余捕索耶蘇之邪黨于京攝之間、以窮治之、不日招伏就焉、公申呈之府、府聞之于東都憲、蓋經三年之久而發落矣、妖邪煽誘庶民之害、於是乎稍息、十二年己丑春三月、公又命余糾察猾吏姦卒與豪強、潛通隱交、以蠹政害人者、而其所注連、及要路之人、臣僕、歷世之官司、非不知之、蓋有所怖且憚、而遁之、歟、若爾不憂世思民之甚者也、余感公之忠憤、終置禍福利害於度外、潛圖密策、施疾雷不掩耳之遺意、以摘其伏發其姦、魁首自刃、餘黨各就刑于藁街、殛死者若干

人舉其區有三千金，皆是民之膏血也，散之以犇建，振恤犖穢之法，蓋猶蠶蝨蝕庶民之害，於是乎又漸除，而無告人，亦庶幾蘇息矣。十三年庚寅春三月，公又命余沙汰浮屠之汚行，夫不與檢束浮屠幾年于茲，故肆然犯婦女食魚鳥焉，甚於不顧之年少，其羶腥汚穢，舉邦皆然矣，不徒此一方也。若急理之，則必不堪繁刑，故敷訓戒之令，既及再三，終逮捕其不悛者，殆數十人，盡流竄海島，使與邦人不齒，僧風於是乎一變矣。且京兆南都界浦亦風靡，其官司各黜貪饕吏，誅姦邪僧，無皆不出于公之後，然則公之舉，諸衙之嚆矢也哉。而公年垂七十，其秋七月上養病之疏，而未允，嗚呼！余齡則三十有七，職則微賤，而言聽計從，關大政，除銜蠹，民害規僧風，豈非千歲之一遇乎？而公之進退，乃如此，義不得不共棄職，以招隱，而觀陳眉公讀書鏡所載，包明之於陽岐王也，不願妻子之飢寒，棄職不往，於汪公徹之府，則余雖俗吏，讀聖賢之書，從事真知之教，能無感于心乎？將見公之去，而混樵漁之伍，故賦招隱之短篇。

昨夜閑窓夢始靜，今朝心地似儂家。誰知未乏索交者，秋菊東籬潔白花。

是れより中齋閑散の身となり専ら學を講じ書著げし併せて子弟を教授し此歳の九月に至り中齋尾張に赴き其祖先の墓に謁し宗家大鹽氏に留まること數十日歸路龍田高尾梅尾の諸勝を搜りて歸れり此時頼山陽序を作りて中齋を送る其文載せて劄記の附録にあり然れども其言忌憚多きを以て前半は處々塗抹せられ讀者其要領を得ることを能はざるを憾む余山田の足代弘訓の書類中に全文を得たり因りて左に之れを掲ぐ云く

送大鹽子起適尾張序

方今海内勢偏於三都三都之市皆有尹而大阪稱最劇且難治焉蓋地潤絕大府而爲商賈所窟富豪廢居至王侯仰其鼻息以爲憂喜尹來治者更欲非常者乃屬吏襲子孫讀故事如掌故而尹仰之成々以賄蓋于上浚于下結稍賈延閭閻黠民爲爪牙乃至藩服要人或爲之支黨聲氣交通尹心知之而主客勢懸苟媮傍觀吏雖有良焉衆寡不敵浮沈取容而已及至近時乃有吾大鹽子起奮於吏羣獨立不撓克治其姦爲國家祛二百餘年之

弊事云、蓋上有高井君之爲、尹能用子起、子起得以展其手足也。子起之始受密命也、自度事濟、補國不濟、破家令有一妾、出之使無所累。然後運籌決策、指顧親信、發摘出意外、斃其爲封豕長蛇者、駢首就戮。內外股栗、乃舉其賊、得三千餘金。曰：是民膏血、盡給之。小民因建振濟、獨法事在己。丑春先，是丁亥治妖民持蕃教者、盡挾種類。庚寅又汰浮屠汗行者、先申戒勅、不檢者流竄群邪屏息。至京、綏諸衙承風、黜貪墨、獎公廉。當此時、子起能名震三都、聞至呼其名、以相怵。而今茲七月、高井君告老請代、子起作曰：君退吾烏敢獨進、遂決意力請退得。允聞者莫不驚愕。野人有顧寧、獨曰：子起固當然。非然不足以爲子起。吾知彼其心壯而身羸、才通而志价、非喜功名富貴者。所喜在處閒讀書、吾嘗戒其過用精明、銳進易折。子起深納之矣。而不得已而起爲國家、奮不顧身而已。不然安能方壯強之年、衆望翕屬、時奪去權勢、毫無顧戀哉。唯然故當其任用、呵斥請託、鞭撻苞苴、凜然使望之者、如寒水烈日、以得成此効爾。故子起不於其敏而於其廉、不於其精勤而於其勇退。聽者以爲然。子起家系出尾張同族在焉。今將往省之。身名兩全報國報。

家○拜○其○先○墳○可○有○以○告○歟○時○方○秋○矣○欲○路○龍○田○過○中○溪○還○討○高○雄○捫○尾○諸○勝○
如○既○韜○之○鷹○御○擧○之○馬○餘○其○後○氣○健○力○自○擊○于○空○騎○于○野○快○如○何○耶○襄○拔○書○
此○獎○之○且○預○囑○其○勿○再○就○韜○也○

天保二年に於ては中齋屢有志者の需めに應じ、市中近在に出で、講筵を開き、遂には尼崎及び大槻の藝士に招聘せられて出講するに至れり、彼れが一僕を従へ、馬に跨りて尼崎街道を來往するや、道路の人其儼然たる威貌を見て、大鹽先生來れると云はざるはなし、

天保三年の六月に至りて古本大學刮目七卷を脱稿して上木せり、是れを彼れが最初の著作となす、然れども彼れ此書を「棚外不出之書」と名づけて、決して門人以外に示さざりしといふ、此歳の六月中齋、藤樹書院を訪へり、其事頗ぶる注意を惹くに足る故に、左に劄記中より抄録せん、云く、

壬辰の夏六月、予れ閑逸無事を以て、浪華を登し、伏水に至り、而して江州に赴き、湖に泛んで、以て中江藤樹先生の遺跡を小川村に訪ふ、小川

村は江西の比頁嶽の北にあり、先生は我邦姚江の開祖なり、其墓に記し、其容儀、道德を想像し、淚墜ちて臆を沾ほす、其書院存すと雖も、而も今、先生の學を講ずるものなし、其門人の苗裔醫を業とするもの、乃ち之れを監守す、守祿の如く然り、予是に於て詩を賦す、詩に曰く、

院畔古藤花、盡時泛湖來、拜昔賢碑、餘風有似比、良雲流滅、無人致此知、
歸る時大溝港口に於て復た舟を買ひ、予従がふ所の門生及び家僮と四人のみ、更に同舟の人なし、再び湖に泛んで南坂本に向ひ、將に吾郷に返らんとす、而して大溝より坂本に至る迄、水程凡そ八里ばかり、纒を解き、綯を結べば、既に未申の際にして、而して日晴れ、浪靜なり、柔風只颯々たるのみ、小松近傍に至れば、北風勃起し、湖を圍んで、四山各聲を飛ばし、狂瀾逆浪、或は百千怒馬の陣を衝くが如く、或は數仞の雪山前に崩るゝが如し、他の舟船皆既に逃れて、一も有るなし、其帆を張ること、至低三尺強にして、而して其怒馬に乗り、其雪山を踏み、以て直前勇往、箭馳の如きもの、只是れ吾が一舟のみ、忽ち鰲津に至る、嘗て聞く、

罇、津、平、日、風、な、き、時、と、雖、も、回、淵、藍、染、し、て、盤、澗、谷、の、如、く、に、轉、じ、巨、口、大、
鱗、の、游、泳、出、沒、す、る、所、乃、ち、湖、中、の、至、險、な、り、而、る、を、况、や、風、波、震、激、の、時、
を、や、遂、を、推、し、て、水、面、を、見、れ、ば、則、ち、所、謂、地、烈、け、天、開、く、の、勢、を、な、す、奇、
な、る、か、な、颶、風、忽、ち、南、北、兩、面、よ、り、吹、い、て、而、し、て、軋、る、故、に、帆、腹、表、裏、饑、
飽、定、ま、ら、ず、是、を、以、て、舟、進、ん、で、而、し、て、又、退、き、退、い、て、而、し、て、又、進、む、右、
に、傾、け、ば、則、ち、左、に、昂、り、左、に、傾、け、ば、則、ち、右、に、昂、り、踊、る、が、如、く、舞、ふ、が、
如、く、飛、沫、峻、濺、遂、に、入、り、牀、を、侵、し、實、に、至、危、の、秋、な、り、舟、子、呼、ん、で、曰、く、
「他、舟、皆、幾、を、知、る、故、に、之、れ、を、避、く、某、の、知、き、は、獨、り、誤、り、て、前、知、す、る、と、
能、は、ず、而、し、て、乃、ち、此、に、至、る、呼、命、な、る、か、な、然、り、と、雖、も、面、目、客、に、對、す、
る、な、き、の、み、と、吾、れ、其、言、意、を、察、す、る、に、共、に、魚、腹、に、葬、ら、る、の、患、を、免、
れ、ざ、る、に、似、た、り、因、り、て、却、て、舟、子、を、慰、諭、し、て、曰、く、爾、誤、り、て、此、に、至、る、
は、命、な、り、則、ち、吾、輩、の、此、に、至、る、も、亦、命、な、り、俱、に、之、れ、を、如、何、と、も、す、る、
な、し、只、天、に、任、せ、ん、の、み、何、ぞ、患、ふ、る、に、足、ら、ん、や」と、門、生、家、僮、既、に、惡、酒、
に、醉、ふ、が、如、く、頭、痛、み、眼、眩、み、其、心、覆、溺、を、慮、る、も、の、如、し、予、と、雖、も、實、

に以て死せりとせず故に憂悔危懼の念を起さざるを得ず是時忽ち藤樹書院に於て作る所の無人致此知の句を憶ひ心口相語りて曰く此れ即ち其真知を致さざるの人を責むるなり而して我れ則ち憂悔危懼の念を起す若し自から之れを責めざれば則ち躬を待つこと薄うして而して人を責むること却て厚し恕にあらざるなり平生學ぶ所將た何んか存ると直ちに良知を呼び起せば則ち伊川先生の存誠敬の言亦一時并せて起り來たる因りて其飄動中に堅坐すること乃ち伊川陽明二先生に對するが如し主一無適我れの我れたるを忘る何ぞ况や狂瀾逆浪をや敢て心に挂けず故に憂悔危懼の念は湯の雪に赴くが如く立ちに消滅して痕なし此れより凝然動かず而して飄風も亦自ら止み柔風依然として舟を送り終に坂本の西岸に着く此れ豈に天にあらずや時に夜既に二更なり門生家僅皆回生の思をなし以て互に恙なきを賀し遂に坂本に宿す明早天晴る天台山に登り四明の最高を盡くして俯して東北を視れば乃ち湖なり晴昔經歷す

る所の至險、皆眼中に入る風浪、靜にして遠邇、朗なり、實に一大圓鏡なり、漁舟、點々、騾子の如く、帆檣、數千、東去西來、平地よりも易し、危懼すべきものなきに似たり、是に於て門生余に謂つて曰く、夢、昨の憂悔、危懼抑、夢か亦天吾師を譴むるか、と、余曰く、否、夢にあらざして、眞境なり、天譴にあらざして、我を金玉にするなり、何んぞなれば、其變に逢ふにあらざれば、則ち焉ぞ眞、良、知眞、誠、敬を窺ひ得んや、又焉ぞ眞に伊川、陽、明、兩先生に對せんや、故に曰く、眞境にして夢にあらざるなり、我れを金玉にして、天譴にあらざるなり、と、然らば、則ち福にして禍にあらざるなり、賢輩亦徒に憂悔、危懼を追思するとなくして、可なり、身心に益なければなり、且つ賢輩、盍ぞ夫の城邑を視ざるや、其れ亦杖屨の底にあり、蜂窠、蟻埵の如きもの、富貴貧賤の同じく棲む所なり、故に我れば、則ち却て小魯の輿を得たり、心廣うして、身裕かなり、是に於て又詩を賦す、詩に曰く、

四、明、不、獨、盡、湖、東、西、眺、洛、城、眼、界、空、人、家、十、萬、塵、喧、絕、只、聽、一、禽、歌、冷、風、

胸中益澀々然として、一點の渣滓なきを覺ゆ、因りて謂へらく、吾輩纔に其境に即いて、良知を呼び起し、誠敬を存するも、猶ほ且つ至險を忘了す、而して嶽に登り再び萬死の處を顧みると、雖も心寒股栗せず、而して湛々悠悠、却て心は聖人と同じきの興を得たり、而るを况や伊川先生の如きは晝夜を通し、語黙を徹し、誠敬を存す、則ち堯舜の事と雖も、只是れ太虚中一點浮雲の日を過ぎるが如し、實見にして、豈論にあらざることを斷じて知るべきなり、云云、

此行や中齋、藤樹の遺跡を訪ひ深く感ずる所あり、加之、歸路颶風に遭ふて、反りて良知の旨意を體認するを得たり、其後彼れは數回小川村に赴き、藤樹書院に村民を集めて良知の學を講せりといふ、

天保四年は中齋に取りて最も收獲多き年なりき、彼れは此歳を以て洗心洞劄記と儒門空虚聚語とを脱稿して上木せり、劄記は彼れが獨得の學說を叙述せるものにて、其主義本領全く此に存すといふべきなり、劄記の成るや、彼れ其一本を伊勢の朝熊嶽の絶頂に燔き、以て天照大神に

告げ、又一本を富士岳の石室に藏め、以て人を俟たんと欲す、時に適し、伊勢の足代弘訓中齋を訪ふ、中齋之に告ぐるに、其志を以てす、弘訓乃ち神宮に豊宮崎林崎の兩文庫あることを告げ、燻かんよりは奉納するに若かずと懲憑す、中齋以て然りとなし、此歳の秋先づ富士岳に登りて割記を石室に藏め、尋いで伊勢の山田に到り、弘訓の紹介を以て割記を兩文庫に奉納せり、中齋何故に此舉に出でしかといふに、彼れ自ら曰く、是れ乃ち意の在るあり、而して人の知る所にあらざるなりと、彼れ其割記に寓せる精神を不朽に傳へんとするか、或は其記する所を以て神明に告げんとするか、抑、又將に來たらんとする災難を豫想して、其書を萬一に救はんとするか、何れにせよ、奇異なる所爲といふべきなり、中齋は割記の外、朱子文集、古本大學、及び傳習錄を豊宮崎林崎の兩文庫へ、陸象山全集を豊宮崎文庫へ、王陽明全集を林崎文庫へ奉納し、以て國家の爲めに洪福を祈れり、其跋文五篇あり、曾て「奉納書籍聚跋」と題して刊行せるも、其書多く世に傳はらず、故に左に之れを掲ぐ、

朱子文集奉納伊勢豐宮崎林崎兩文庫跋

陋撰洗心洞劄記成焉，而社弟輩刻諸家塾，後素欲以其一本燔于伊勢朝熊嶽絕頂，以告天照太神而一本藏富士岳之石室以俟人，是乃有意在而非人所知也。于時適足代弘訓訪後素，弘訓即伊勢山田御師職，而有學識人也。後素因竊語此志，弘訓詳告神宮有宮崎林崎兩文庫，而從來藏奉納之典籍，且勸以奉納焉，而止以不燔後素終從其德，遂與之結奉納之約。而今秋先登岳藏書，歸時航吉田海，到山田，寓足代氏，劄記各一部，以弘訓之紹介奉納兩文庫矣。故得一覽兩庫之牙籤，和漢之載籍，大抵略備焉。陽明王子之學，古今人情之所忌，然而其全集，既在宮崎文庫之牙籤，而世所奉承，乃朱子之教，而其全集，則反兩庫共未嘗有奉納之者也。後素於是乎益信，其奉承朱學者，只名而非實也。後素雖固奉王子致知之教，而於朱子博約之訓，寧亦廢之哉。故歸鄉之後，與社弟胥謀，慨然贖金若干，乃購和刻朱子文集二部各六十冊，復以弘訓之紹介奉納兩文庫，是非後素矯情而故爲之也。只以學力微弱，材譎拙庸，而身既隱矣，安得伸振頽助衰之志，故所

真知朱子之心誠體朱子之學而不願生死禍福以扶助世道人心之一大賢儒亦出於我扶桑之東焉。一洗陋染偏執之習而已矣。是乃與唐明宗焚香祝天以待聖人之出事固異而情則同嗟乎此願不問入之信不信惟是神明鑑焉。欽書此卷末以表赤心者也。

陸子象山全集奉納伊勢豐宮崎文庫跋

後素一覽兩文庫之牙籤之由既載於今所納朱子文集卷末故不贅焉。而納朱子文集而不納象山陸子全集則如未備者何者陸子以尊德性爲教而未嘗不道問學也朱子以道問學爲教而未嘗不尊德性也然其生前互論辨不已朱以陸之教人爲太簡陸以朱子之教人爲支離而深考之朱子以陸子之教人爲太簡耳未嘗以陸子爲太簡也陸子以朱子之教人爲支離耳未嘗以朱子爲支離也只兩家之子弟有客氣勝心者終釀朱陸同異之說以爲斯道之梗非可斲之甚乎而今讀陸集則說德性詳矣而居多。數朱文則說問學盡矣而過半。要不可兩廢者也。故後素則併收兩家之說即依然尊德性而道問學之事也。而以陽明王子致良知之教一以貫之。以是

爲學的庶幾不叛孔孟之宗者歟是故陸集亦不可不納焉也和刻固無難也且欲納王子全集固後素本志也然而古嘗有納之之人豈非先獲我志者乎嗚呼此心之同然益可信也已矣

古本大學奉納伊勢豐宮崎林崎兩文庫跋

大學有章句有補傳乃朱子之改本而非古全書也而自改本行于世禮記無大學故童而習長而講者不能得聖學之要也是以前代名儒紛起駁改本之誤在宋車氏若水董氏槐黃氏震王氏栢在明王氏禕方氏孝孺都氏穆蔡氏清皆各有說至陽明王子去章句復舊本學人終見古書以得聖學之要是乃王子之偉功也湛氏若水鄭氏曉等之諸名公皆是之而至清毛氏奇齡朱氏彝尊亦各有說毛氏曰是書在五經禮記竟削其文至今猶幸見真本者藉十三經中鄭氏註耳明嘉靖間王文成公刻古本大學當時文士在官者自中及外稱明代極盛之際尙相顧胎瞻並不信大學復有此本引爲浩嘆朱氏曰大學在小戴記中原止一篇朱子分爲經傳出於獨見自

章句盛行而永樂中纂修禮記大全並中庸大學文刪去之於是誦習章句者不復知有戴記之舊陽明王氏不過取鄭註孔義本而旁釋之爾後素故於大學則講究古本大學而不取改本之章句不敢私於王氏也實從天下之公議而已今以古本大學及王氏大學或間附錄奉納太神神庫豈有他哉古書之傳于我邦我邦亦有信之如宋明諸公者在焉而徵其知無彼此共明今然不滅也嗚呼是太神之靈德哉而陋撰古本大學刮目五卷他日復奉納焉預告於神明矣

傳習錄奉納伊勢豐宮崎林崎兩文庫跋

陽明王子之學要在致良知而良知二字出孟子孟子之良知出易之乾知孔子之言乾知非他天之太虛靈明而已矣而陋儒曲士猥疑之何也以其心不復太虛靈明故也無足怪矣若質諸我邦之往聖則亦良知之外無理矣良知之外無學矣良知之外無事矣我何以斷然決之乎陸子象山曰東海有聖人出焉此心同也此理同也東海之聖人舍天照大神而誰當之故云云今以王子傳習錄及附錄奉納大神文庫大神之靈明既符於孔孟及

王子之良知矣。王子而有靈，則何歎加之在孔孟固可知矣。嗟乎斯言也，必獲罪于人，然而不獲罪于神，則心竊自知焉耳。

陽明王子文抄奉納伊勢林崎文庫跋

豐宮崎文庫有陽明王子全集，而林崎文庫未有之也。後素故欲納之，因掇索阪城書肆，不幸無舶來之善本，雖弊篋藏之，不斯須離坐，有實我家有用之書也。舍有用之書，在獻于神，似諂神，必不受也。故不敢於是以亦所藏其文抄之別本，姑奉納焉。他日有善本出，則蓋復納之，而此本標題曰「王陽明全集」，而今改「文抄」何也。後素嘗閱之，抄其全集之文者，而標題乃清人誤也。嗚呼！後素以前賢論良知書，乃獻于大神神庫，豈亦徒然欲致之如其教也。欽冀神明祐之，後素不敢墮是志矣。

中齋は先づ洗心洞割記中七十五條を抄録し、問生（まとい）に託して、之れを佐藤一齋に送り、後又更に刊本を送り、其批評を請へり、其時中齋が一齋に寄するの書頗る参考に供すべきもあり、因りて左に之れを掲ぐ、

攝州大阪城市吏致仕大鹽後素、再拜白「一齋佐藤老先生、僕雖未獲、仰眉

字聽馨咳吾鄉間某曾傳先生愛日樓集以投諸僕僕莊讀之乃知先生學深乎淵水先生文粲乎星辰而不悖於素聞矣既又讀祭酒林公序因復了先生之閱歷與先生之不遇也慕而悲之悲而慕之孰知僕志在乎先生哉然而不投足門下負牆請教何耶是不惟山河相隔管縛吏役絆簿書寸步尺行不能恣致之也故徒翹跂耳而僕今乃辭職家居如宜東行侍函丈自在然然而不能遂其事又何耶以私讎充斥乎州內外變屈乃俟時而終無其時則聞先生年既踰六十而僕雖四十又一體孱病多安知無失遭遇之期哉然則憾無加焉故畧告僕志於未一面之先生以乞教夫僕本遐方一小吏矣只從令長之指揮而抗顏於獄訟筮楚間以保祿終年無他求可也然而不從事于此而獨自尙志以學道不容乎世而不愛乎人豈不左計乎吁知僕者憫其志不知僕者以左計罪之宜矣而僕之志有三變年十五嘗讀家譜祖先即今川氏臣而其族也今川氏已後委贖于我神祖小田原役刺將于馬前而賞之以御弓又錫采地于豆州塚本邑焉當大阪冬夏役既罷矣不能從軍以伸其志而徒戍越後柏崎堡而已建齋後終屬尾藩而嫡

子繼其家以至於今。季子乃爲大阪市吏。此即我祖也。僕於是慨然深以從事刀筆。伍獄卒市吏爲恥矣。而其時之志。則如以功名氣節欲繼祖先之志者。而居恒鬱鬱不樂之情。實與劉仲晦未得志時之念亦奚異。而非謂器比焉也。而父母僕七歲時俱沒矣。故不得不早承祖父職也。日所接非緒衣罪囚。必府吏胥徒而已。故耳目聞見莫不榮利錢穀之談。與號泣愁冤之事。文法惟是熟條例。惟是暗向者之志。欲立而不能立。依違因循。年踰二十。吏人未嘗有學問者。故雖有過失無益友誡之者。其勢不得不發欺罔非僻驕謔放肆之病也。而無是非之心。非人竊自問於心。則作止語默獲罪於理者。蓋夥矣。要與在笞杖下藉衣一聞耳。而無羞惡之心。亦非人治彼罪也。則不可不治己病也。治病奈何。當從儒以讀書窮理而後愈矣。故就儒問學焉。於是夫功名氣節之志。乃自一變矣。而時之志。則猶以襲取外求之。功望病去而心正者。而不能免輕俊之患也。乃與崔子鐘少年之態。適相同而非謂材及焉也。而夫儒之所授。非訓誥必詩章矣。僕偷暇慣習之。故不覺陷於其窠臼。而自與之化。是以聞見辭辯。掩非飾言之具。既在心目。而悠然無忌憚。似病

却深乎前日矣。顧與其志徑庭，無悔乎於此。退獨學焉，困苦辛酸，殆不可名狀也。因天祐得購舶來寧陵呻吟語，此亦呂子病中言也。熟讀玩味，道其不在焉耶。恍然如有覺，庶乎所謂長誠去遠，瘡而雖未能全爲正心之人，然自幸脫於赭衣一間之罪矣。自是又究寧陵所淵源，乃知其亦從姚江來矣。而我那藤樹蕃山二子及三輪氏之後，關以西，良知學既絕矣。故無一人講之者焉。僕竊復出三輪氏所鑿刻古本大學及傳習錄，坊本于蕪磨中更稍知用功乎心性，且以喻諸人。於是夫襲取外求之志，又既一變矣。而僕志遂在以誠意爲的，以致良知爲工焉。爾來不瞻前顧後，直前勇往，只盡力于現在吏務而已矣。以是報君恩，報祖先而報古聖賢之教，不敢讓於人也。不意虛名滿州縣，因思未有實得，而虛名如此，是乃造物者之所忌，故決然致仕而歸休矣。非徒恐人禍然也，是時僕年三十又八矣。而今乃專養性于小窓底，反觀內省，改過遷善，惟是務。然以無良師友，故恐弛其志於五六十矣。是僕之日夜所憂也。自今如何下功夫，則其志益堅立，而心歸乎太虛矣。先生亦服膺良知學者，僕因自知人如東行，以其道願相見，則不以夫子之待孺悲。

者待_ま僕、故裁是書、告志而乞教便如此、其簡率則請勿罪焉、且社弟輩梓
僕劄記、以藏家塾、畢竟代其轉寫之勞耳、不敢示大方也、然僕志亦在其中、
幸以間某頃、寓大府司天臺、託斯人以呈劄記二冊于左右、暇日賜覽、觀而
彼此但垂教諭、則幸甚幸甚、祭酒林公亦愛僕人也、先生寓其邸、故當聞知
焉、冀先生覽後、復轉呈諸林公、林公亦賜一言教、以共勵鑄僕、則愛僕之誠、
敢不感、敢不感、而僕爲求知于人、非云云也、伏先惟先生鑒其文、而厚其志、
謹再拜、

天保五年中齋は増補孝經彙註を著はせり、是に於てか四部の書成れり、
曰く、古本大學劄目曰く、洗心洞劄記曰く、儒門空虚聚語曰く、増補孝經彙
註、是れを洗心洞四部の書となす、此の如く中齋は其辭職後専ら力を講
學と著述とに用ひしと雖も、高井山城守以後に來たれる諸奉行は中齋
の威望と才學とに服し、其施政に關し、難件あるときは往々彼れに諮詢
して之れを決せしを以て、中齋の勢力は常に隱然諸奉行の上にあり、就
中矢部駿河守は中齋の最も親善せし所なり、

天保七年の春、矢部駿河守轉任して、江戸勘定奉行となり、四月二十八日に至りて、跡部山城守之れに次いで、大阪東町奉行に任ぜらる。山城守其器凡庸人を見るの明なく、遂に中齋をして亂をなさしむるに至れり、藤田東湖の見聞隨筆に云く、

丙申の秋、大阪町奉行矢部駿河守勘定奉行に轉ず、跡部山城守矢部の後任を命ぜられ、相代らんとする時、跡部は矢部に町奉行の故事并に心得なる事を問ふ、矢部如此申送りたる後云ふ、様與方の隠居に平八郎なる者あり、非常の人物なれども、譬へば、悍馬の如し、其氣を激せぬ様、にすれば、御用に足る可き事なり、若し奉行の威にて、是れを駕御せんとせば、危きなりと語るに、跡部只唯々としてありしが、退いて人に語りけるは、駿河守は人物と聞きしに、相違せり、大任の心得、振り、問ひしに、區々として一人の與方の隠居を御するの御し得め、のど心配するは、何事ぞやと嘲りけるが、翌年に至り、平八郎亂を作し、程なく誅服すと雖も、跡部奉職無狀と世大に指を彈じ、駿州の先見を稱譽せり、

此歳の秋中齋播州の甲山（甲山）に遊び詩二首を賦せり云く、

曾遊二十二年前林壑再尋依舊新。今日思深似前海彷徨。不獨爲詩篇、
人隨無事醉、明時柔脆心。腸如女兒却、衝秋熱、攀山險、誰、讖、獨、醒、獨、知、

熟、此詩の旨意を考ふるに、中齋内に激する所ありて不平に堪へず、漸く事を擧げんとするの前徴を露はせり、中齋何故に然かく内に激する所ありしか、今其來由いかんを考ふるに、天保二三年の頃より氣候不順にして五穀多く登らず、天保四年に至りて遂に全國の大飢饉となれり、此れより引き續き年々不作にして、天保七年に至り、更に一層甚しき大飢饉となり、其慘狀最も甚しとなす、中齋之れを傍觀坐視するに忍びず、格之助をして、跡部山城守に見え、大に倉廩を開いて窮民を救はんことを請はしむ、山城守之れに答ふるに、四五日を出でざる内に、必ず施恤する所あらんことを以てせり、中齋大に之れを悦び、指を屈して、其時日の至るを俟（俟）ちしに、遷延彌久し、幾日を経るも、遂に其事なし、是を以て格之助をして、其事を促さしむるも、亦其効力なし、因りて復た格之助をして、峻請

せしむ、山城守之れに答ふるに、江戸へ多量の米穀を回送すべき必要あるが故に、賑恤の舉は姑く之れを見合すべきの命あるを以てせり、中齋當路者の冷淡なる處置を慨すと雖も、復た之れを奈何ともすること能はず、因りて更に工夫を變へ、市中の豪商輩を説き、幾多の金員を借り、以て窮民を救はんことを企圖せり、然るに山城守反りて之を遮り、豪商輩をして中齋に金員を貸すこと勿らしむ、是に於て中齋大に怒り、自ら救濟する所あらんと欲し、一切の藏書を賣却せり、其部數一千二百にして價六百五十兩に上れり、乃ち一萬枚の切手を製し、盡く之れを窮民に施與せり、然るに山城守は中齋が此舉あるを聞き、直に格之助を召して、私名を賣らんが爲めに猥りに窮民に施與したるものとして、大に譴責を加へたりといふ、凡そ是等の事一々中齋を刺激し、遂に中齋をして亂をなさしむるに至れり、中齋婢妾等口書に云く、

平八郎儀平生至りて氣質堅く候處、當春より少々亂心の様子に相見え申候。

彼れが殆んど狂せんばかりに憤激せしを知るべきなり、

天保八年二月十九日中齋兵を擧ぐ、其徒數百人先づ豪商輩の家屋を焚燬し、倉庫を破壊し、金穀を四散せり、既にして山城守の兵と戦ひしも利あらず、黄昏に及ぶ比に餘ます所僅に八十餘人のみ、乃ち其徒を解散して自らも其跡を暗ませり、此日火勢熾んに引いて翌二十日に至りて益々猛烈となり、大阪市の四分の一以上を焼失せり、是れより警戒殊に嚴にして中齋の徒を探偵すること急なり、是に於てか中齋の徒にして或は縛に就くもの或は自殺するもの、或は自首するもの、前後數十人に及べり、然れども唯中齋及び格之助の踪跡未だ分明ならざるを以て、人心尙ほ恟々たり、越えて一ヶ月を経て、即ち三月の下旬に至り、中齋匿れて大阪の一商人の家にあること露はる、二十六日の黎明、吏卒數十人來りて中齋を捕へんとす、中齋吏卒の來たるを知り、格之助と共に火を放ちて焚死せりといふ、時に中齋年四十有四、

中齋が兵を擧げたるは、固より其忿怒の餘に由で、輕卒の營を免れずと

雖も其窮民を憐むの心あるに至りては、未必しも非難すべきものあるを見ず、彼れ驕慢の心なしとせざるも、窮民を憐むの心は眞に之れありしが如し、唯、名を好んで然りしと謂ふを得ざるなり、劄記に曰く、

人之嘉言善行、則吾心中之善、而人之醜言惡行、亦吾心中之惡也。是故聖人不能外視之也。

又云く、

有血氣者、至草木瓦石、視其死、視其摧折、視其毀壞、則令感傷吾心、以本爲心中物故也。

中齋は此の如き見解を有せしが故に、暴吏の暴狀を見ても、吾心中の事となし、窮民の窮狀を見ても、吾心中の事となし、到底冷淡に看過すること能はざるが故に、遂に己れを忘れて、爆裂するに至りしなり、是故に中齋が衷情決して恕すべきものなしとせざるなり、若し又中齋が幕府の苛政に反して反抗の旗を揚げ、窮民の爲めに身を犠牲に供せしことを思へば、彼れは殆んど社會主義の人なるが如し、然れども彼れ固より今

日の所謂社會主義の如き思想ありしにあらざ、但王學の結果は一視同仁の平等主義となるの傾向なしとせず、藤樹の如く分明に平等主義の觀念を有せり、故に中齋が暴擧の如き自ら社會主義に合するものなしとせざるなり、

中齋は人となり、峭酷峻厲にして、動もすれば輒ち忿恚を發し易し、若し彼れが心を激するものあれば、彼れは殆んど狂せんとするまでに、匪皆魚然の狀を露はせり、東湖隨筆に曰く、

面のあたり矢部に質せしに、矢部曰く、平八郎を叛逆人と云へども、駿河守の案には叛逆とは不存候、平八郎は所謂肝癪持の甚しき者也、與力を務むる内豪富を折し、山民を救ひ、奸僧を沙汰し、邪教を吟味したる類、天晴の吏と云ふ可し、又た學問も有用の學にて、中々黃吻書生の及ぶ可きにあらざ、某奉行在役中、度々燕室へ招き、密事をも相談し、又過失をも聞き、益を得る事、淺少ならず、言語容貌、決して尋常の人にあらず、彼れ實に叛逆を謀らんにはいかで大阪の御城へ籠らざる事あ

る可き、大阪御手薄の事門番の事年來大鹽の苦心の事なりとぞ、然るに御城へは不入して棒火矢を以て焼き拂ひたるは、何ぞや某曾て平八郎を招き、共に食を喫せし折、節金頭と云へる大魚を炙り出せり、時に平八郎憂國の談に及ぶ時、平八郎忠憤のあまり、怒髮衝冠とぞ云ふ可き有様ゆえ、餘程に慰諭しけれども、平八郎益々憤り、金頭の首より尾までワリワリ噛み碎きて食ひたり、翌日に至り、家宰某を諫めて曰はく、昨夕の客は狂人なり、ユメユメ高貴の御方可近にあらず、爾來奥通り指留め給へど、實に某が爲めと思ひて云ひけれども、汝が知らん所に非ずとて、始終交りを全ふせり、此の一事小なりと雖も、平八郎の人と爲りを知るに足れり、

其悲憤慷慨の狀、以て想見すべきなり、又幕末の遺老木村芥舟翁の著せる笑鷗樓筆談中に左の一節あり、云く、

大鹽後素、一と年彦根に至りし時、岡本黄石翁これを其家に延き、兵書の講義を聽かんことを求めしに、後素忽ち色を正うし、足下何の用あ

りて兵書の講義を望まるゝや、僕が甚だ解せざる所なり、請ふ其説を聞かんと、席を促し言ひければ、翁も意外の事に思ひ、答へけるは、御承知の如く、予が祖先は、兵學を以て藩に仕へ、余も不肖ながら、今大夫の末班に列し、祖先の志を繼がんと思ひ、幸に先生の高説を聽き、聊か國家に盡す所あらんと欲するに外ならずといへば、後素稍々顔色を和らげ、兵は活物なり、一二講論の盡す所に非ず、足下もし意あらば、余が家に孫子十解といへる珍書を藏せり、これを貸與すべし、此書を熟讀せば、思ひ半に過ぎるものあらんと辭し去れり、後素が最前辭氣の厲しきには、殆ど其答にも窮したりとて、黃石翁の語られたり、

又同翁の語に、予が少壯の時、面會したる諸先輩のうち、體貌俊偉にして、殊に立派なりしは、渡邊華山と、大鹽後素の二人なり、誰が見ても、大國の藩老なるべしとの感あらしむ、吾輩共に立ちて、慚かしく思ふ程なり、頼山陽は容貌卑野にして、思ひしとは大に違へり、又其講釋をなせるを聽くに、極めて拙にして、明晰ならず、文章の手際とは、雲泥の差

ありとなり、

又中齋の容貌に關しては彼れが門人たりし疋田竹翁の談話あり、云く、大鹽の容貌ですか、中々美男で御座りました。そふです、身の丈は、五尺五六寸少し瘠せぎすですが、凛とした風采は、そりや立派なものです。頭の鬘は短かう結ふて御坐りましたが、色は、白い方で、眼は、あまり太くなく、少し釣つて居りました。から少し怒を含まれた時などは、どんな者でも、ひりつきましたね。

中齋妻なし、唯一妾あるのみ、其名をユウといふ、尼なり、ユウも、亦頗る學識ありて、決して尋常女子の儔にあらず、大學の如きは、之れを暗記し、時ありて、中齋に代り、門生の爲めに、中庸若くは史記等の書を講せり、ユウが尼となりしことに就いては、傳説あり、中齋本と一厘半錢と雖も、唯一人より賞はざる主義にて、兼ねて家人にも之れを戒め置けり、然るにユウ或る時人より櫛を贈られ、之れを返すに由なく、竊に受けて、之れを匿せしに、偶然にも中齋に發覺せらる、中齋己れが主義を破れるを怒り、即座

に其髻を截断して尼となせりといふ、ユウに一男あり、弓太郎といふ、亂後永半に處せらる、故に、中齋の子孫は亂後に及んで、全く断滅せり、中齋の門人は多くは與力なり、然れども又他處より遊學に來たれるものも、亦之れなしとせず、門人の數は一時に四五十人を下らず、若し前後を合すれば總數千人の上に出づべし、當時最も卓絶せしものは、宇津木矩之丞にして洗心洞の塾頭たり、松浦誠之、湯川幹、松本乾知等多少將來望ありしものならん、然れども皆亂の爲めに難に死し、其器を大成すること能はざりき、是れを遺憾となすのみ、

中齋は交道廣しと謂ふべからず、猪飼敬所の如き、唯一回訪問せしのみ、足代弘訓と相識りしと雖も、其學相同むからず、未だ心交の友と謂ふべからざるが如し、篠崎小竹と一面識ありと雖も、金ずきの儒者の知る所にあらずと一言^{カク}以て侮辱せり、唯、近藤重藏とは、意氣投合するものあり、重藏は本と博識の士なれども、決して尋常儒者の徒にあらず、彼れ曾て千島探險をなして、天長地久大日本國の木標を建てたるもの、亦一の豪

傑なりと謂ふべし、彼れが弓奉行となりて大阪にある時、中齋往いて之れを訪へり、長田偶得氏著はす所の、近藤重藏中に左の一節あり、云く、初め平八郎重藏の名聲を聞き、一たび相見て胸中の奇を問はんと欲し、一夜其門を叩きて面會を請ふ、頼て一人の老僕出で來りて、此方へどの案内に連れ、書院に打通りて、設けの座に着きぬ、されど主人は何地へ行きけん、遅てどもく、其咳聲だに聞えず、燭淚堆をなして、更漸く闌なり、平八郎兼てより重藏の傲慢人を蔑にすることを聞き知りしかば、別段心にも懸けざりしかど、餘りの待遠しさに腹立しく、偕こそ聞きしに優る無禮の曲者なれど、獨語しつゝ、不圖四邊を見廻せば、床間に百目砲あり、主人の愛藏と覺ぼしく、製作頗る美、銃身爛として、燈光と相射り、硝薬も亦備はれり、平八郎大に喜び、いで傲慢者の荒膽挫き、呉れんと、鐵砲取つて、硝薬を裝ひ、火蓋切つて、放てば轟然として、百雷の墜下せる如く、屋壁震動し、硝烟室内に、充ち満ちたり、重藏靜かに襖押開かせ、左手に烟草盆を提げ、右手烟管を把り、悠として、座に着

きて曰く、一發の御手並感心仕ると、相見の禮畢りて、直ちに酒杯を喚ぶ。

既にして重藏故らに一鍋を平八郎の座側に置きて、賞味を請ふ、何心なく蓋を撤すれば、個は、そも、什麼に、一個の蠶、蠢々として鍋底に蠕動し居れり、平八郎少しも驚きたる色なく、呵々と打笑ひ、好下物、遠慮なく頂戴、任らんと小柄を抜きて、其首を搔き切り、血を啜り、つゝ痛飲しければ、流石の重藏も、其氣膽に服し、げんこれより互に相往來して、交情極めて親密なりきとぞ。

中齋と重藏、何れも非常の人物なるを以て、其相遇ふや、東嶽西嶽、相對立するの概ありしや、疑なし、然れども、中齋が最も尊重せし知己は、頼山陽なり、山陽は本と文人にして、經學あるものにあらず、中齋が之れと相交はるること甚だ奇なるが如しと雖も、彼れは竊に山陽の膽あり識ある所を喜べり、彼れ自ら辯じて曰く、

余善山陽者、不在其學、而竊取其有膽、而識矣。

後、山陽が血を吐いて病革なるや、中齋京師に之いて之れを訪ふ、其時彼れ已に永眠せり、中齋自ら山陽を追慕して曰く、

知我者莫山陽若也、知我者即我心學者也、雖知我心學、則未盡割記之、
兩卷而猶如盡之也、

中齋は此の如く山陽を以て我心學を知るものとせり、然れども山陽は毫も心學を知れるものにあらず、彼れが「讀王文成公集」の詩に曰く、

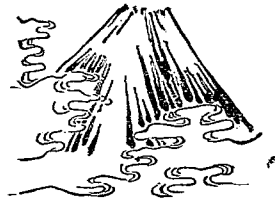
爲儒爲佛姑休論、吾喜文章多古聲、北地粗豪歷城險、盡輸講學老陽明、

是れ陽明の文章を稱揚するものなり、陽明の學問の如きは、彼れの知る所にあらざるなり、山陽又曾て中齋に謂つて曰く、

兄之學、問洗心、以內求、如襄者、外求、以內儲、而作詩、而屬文、如相、反然、

彼れと此れと實に相反するが如く、然りといふべきのみならず、眞に相反するものありといふべきなり、然れども山陽は中齋の陽明に類似せるものあるを認容し、彼れを小陽明と稱せり、然るに中齋は又山陽を以て陽明の文章と功業とに心服せるものとせり、其肝膽相照すべき共通

の跡を有せしこと、復た疑を容れざるなり。



に寄する書并に辭職の詩あり、又鳳文の評語あり、未だ其何人なるを知らず、其次ぎに池尾弼憲の跋あり、最後に載する所の烏有翁が洗心洞略傳亦一顧の價あり、

儒門空虛聚語三卷

此書は天保四年の刊行に係る、中齋此書に於て太虛の説、孔子以來之れあることを證せんが爲め、總べて此事に關する古人の言論を集録せり、猪飼敬所曾て此書を讀み、訓點の誤謬を訂正せり、中齋之れを見て其校讎の正しきに服し、之れを上欄に加へて、更に追鐫するに至れり、

増補孝經彙註三卷

孝經彙註は孝經大全中に編入せる書にして、明の江元祚が刪輯する所に係る、之れを彙註といふは、朱鴻字は子漸、孫本字は初陽、虞淳熙、字は澹然、道圓と號すの三氏の註書を刪輯するに因る、中齋、此書を以て聖人易簡の道を得たりとなし、之れを増補するに黃道周、字は幼安、石

齋と號すの說と己れ自身の說を以てし、又上欄に掲ぐるに王陽明、楊慈湖、羅近溪三氏の說を以てせり、

洗心洞學名學則一卷

此書は首に學名學則を擧げ、次に「答人論學書畧」を附載せり、余が所藏する所は「孔孟學」の印を捺せり、蓋し洗心洞所藏の書ならん、其内容は悉く儒門空虛聚語の附録にあり、學名學則は「答人問某志」を以て收結とせり、故に聚語よりは三篇少しとなす、

古本大學旁註一卷

此書は陽明著はす所の古本大學旁註に又中齋が補註を加へたるものなり、明治廿九年鐵華書院より之れを出版せり、

大學或問増註

洗心洞劄記抄録に池尾彌憲が跋あり、其中に中齋が著書中に大學或問増註ありといへり、然れども此の如き著書絶えてあることなし、是れ全く古本大學刮目の誤なり、

奉納書籍聚跋一卷

此書は中齋が天保四年九月を以て刊行する所に係る、今は多く世に傳はらず、帝國圖書館に僅に一本を存す、余亦別に伊勢の山田に於て之を集めて今之れを中齋が事蹟の中に出だせり、

洗心洞詩文二卷

此書は大阪の人水哉中尾捨吉氏の編輯する所にして、原稿は伊丹の稻川氏に出づ、稻川氏十五歳の比に洗心洞に學び、家に中齋が遺稿を所藏せり、中尾氏曾て之れを謄寫し、其最も後學に益あるもの若干を抄録し、分ちて二卷となし、明治十二年を以て刊行せり、中齋が文藻を知るには唯一の原料なりと謂ふべし、

學礎若干卷寫本

此書は洗心洞より出づるものにて、醫學博士大西克知氏の所藏なり、人或は此書を以て中齋が著はす所となす、余其書を借覽するに、一名度學と稱するものにて、全く幾何學なり、其譯書たるや疑なし、因りて

利馬竇の幾何原本と對照するに、全く同じからず、未だ其何人の手に成るものなるやを知らず、然れども中齊の著書にあらざること、斷言するを憚からざるなり、

其他中齊が王陽明全書歐陽南野文選等を評點せしものはあり、京都の宇田栗園之れを藏す、余曾て其書を見るに、欄外に評語を記入すること少しとせず、殊に其王陽明全書は本と藤樹書院に備へ置ける藤樹手澤の本なるを、中齊強ひて之れを請ひ受け、之れに評點を加へたるものなり、中齊は又趙翼が二十二史劄記を翻刻せりといふ、



第三 學 風

中齋自ら實踐躬行を務め、子弟を教導すること極めて嚴なり、故に子弟の感化を受くること亦淺少なりとせず、中齋が亂をなすに當りて二三の之れに叛くものありしと雖も、多くは留まりて中齋と死生を共にすることを辭せざりしが如き、平素の薰陶に出づるものなくんばあらざるなり、洗心洞盟約書あり、云く、

聖賢の道を學んで以て人たらんと欲せば、則ち師弟の名、正さざるべからざるなり、師弟の名正しからざれば、則ち不善醜行ありと雖も、誰れか敢て之れを禁せん、故に師弟の名誠に正しければ、則ち道其間に行はる、道行はれて善人君子出づ、然らば則ち名は問學の基なり、正さざるべけんや、某固陋寡聞と雖も、一日の長を以て其責に任ずれば、則ち師の名を辭するを得ず、而して其名の壞るゝと壞れざるとは、大率下文條件の立つと立たざるにあり、故に盟を入學の時に結び、以て

豫め其不善に流るゝの弊を防ぐ、
忠信を主として聖學の意を失ふべからず、若し俗習の爲めに牽制せ
られて廢學荒業以て奸細淫邪に陥らば、則ち其家の貧富に應じ某告
ぐる所の經史を購ひ、以て出ださしむ、其出だす所の經史盡く之れを
塾生に附す、若し其本人にして出藍の後、各其心の欲する所に従は
可なり、
學の要は孝弟仁義を躬行するにあるのみ、故に小説及び異端人を眩
するの雜書を讀むべからず、若し之れを犯さば、則ち少長どなく、鞭、扑
若、干、是れ即ち帝舜扑を教刑となすの遺意にして某の創する所にあ
らざるなり、
每日の業、經業を先んじて詩章を後にす、若し之れを逆施せば、鞭、扑、若
干、
陰に交を俗輩惡人に締ひ、以て登樓縱酒等の放逸を許さず、若し一た
び之れを犯せば、則ち廢學荒業の譴と同じ、

一宿中私に逸を出入するを許さず、若し某に請はずして以て擅に出づれば、則ち之れを辭するに歸省を以てすと雖も、敢て其譴を赦さず、
鞭扑若干、

家事變故あらば、則ち必ず諮詢す之れに處するに道義あるを以ての故なり、某人の陰私を聞かんと欲するにあらざるなり、

喪祭嫁娶及び諸の吉凶必ず某に告げ、與に其憂喜を同うす、

公罪を犯せば、則ち族親と雖も掩護すること能はず、之れを官に告げて以て其處置に任ず、願くば僮們小心翼翼、父母の愛を貽すること莫れ、

右數件忘るゝ勿れ、失ふ勿れ、此れ是盟を恤へよ、

此れに由りて之れを觀れば、中齋は盟約書に背くものあれば、長幼の別なく、鞭扑を加へて之れを懲罰せり、其事たる今日より之れを見れば、嚴辭に失するの嫌なきにあらざるも、亦當時の書生を鍛練するには効力ありしならん、若し夫れ最後の條の公罪を犯せば、云云の如きは、夫子自ら之れに背くに至れり、是れ亦自家撞着の甚しきものならずや、洗心洞

の學堂には、中齋天成篇の一文を貼付し、之れに附記して曰く、錢緒山以天成篇、揭喜義書院、示諸生、吾亦謹書、揭洗心洞、弟子日讀而心得焉、則猶躬親學於陽明先生と、其文に云く、

吾人萬物と天地の中に混處す、天地萬物の宰たるもの、吾身にあらずや、其能く以て天地萬物に宰たるは、吾心にあらずや、心何を以て能く天地萬物に宰たるや、天地萬物聲あり、而して之れが爲めに其聲を辨ずるものは誰ぞや、天地萬物色あり、而して之れが爲めに其色を辨ずるものは誰ぞや、天地萬物味あり、而して之れが爲めに其味を辨ずるものは誰ぞや、天地萬物變化あり、而して其變化を神明にするものは誰ぞや、是れ、天地萬物の聲は、聲にあらざるなり、吾心に、よりに、聽いて、斯に聲あるなり、天地萬物の色は、色にあらざるなり、吾心に、よりに、視て、斯に色あるなり、天地萬物の味は、味にあらざるなり、吾心に、よりに、嘗て、斯に味あるなり、天地萬物の變化は、變化にあらざるなり、吾心に、よりに、之れを神明にし、斯に變化あるなり、然らば、天地萬物、吾心に

あ○ら○ざ○れ○ば○靈○な○ら○ず○吾○心○の○靈○毀○て○ば○聲○色○味○變○化○は○得○て○見○え○ず○聲○色○
味○變○化○得○て○見○え○ざ○れ○ば○天○地○萬○物○亦○息○む○に○幾○し○故○に○曰○く○人○は○天○地○の○
心○萬○物○の○靈○な○り○と○天○地○萬○物○に○主○宰○た○る○所○以○な○り○

吾○心○天○地○萬○物○の○靈○た○る○も○吾○れ○能○く○之○れ○を○靈○に○す○る○に○あ○ら○ず○吾○れ○
一○人○の○其○色○を○視○る○こ○と○是○の○若○し○凡○そ○天○下○の○目○あ○る○も○同○じ○く○是○れ○
明○な○り○一○人○の○其○聲○を○聽○く○こ○と○是○の○如○し○凡○そ○天○下○の○耳○あ○る○も○同○じ○
く○是○れ○聽○な○り○一○人○の○其○味○を○嘗○む○る○こ○と○是○の○若○し○凡○そ○天○下○の○口○あ○る○
も○同○じ○く○是○れ○嗜○な○り○一○人○の○思○慮○其○變○化○是○の○若○し○凡○そ○天○下○の○心○知○
あ○る○も○同○じ○く○是○れ○神○明○な○り○徒○に○天○下○然○り○と○な○す○の○み○に○あ○ら○ざ○る○
な○り○凡○そ○千○百○世○已○上○に○前○き○な○る○も○其○耳○目○同○じ○其○口○同○じ○其○心○知○同○じ○
同○じ○か○ら○ざ○る○な○き○な○り○千○百○世○已○下○に○後○な○る○も○其○耳○目○同○じ○其○口○同○じ○
其○心○知○同○じ○か○ら○ざ○る○な○き○な○り○然○ら○ば○明○吾○れ○の○目○に○あ○ら○ざ○る○な○り○天○
之○れ○を○視○る○な○り○聰○吾○れ○の○耳○に○あ○ら○ざ○る○な○り○天○之○れ○を○聽○く○な○り○嗜○吾○
れ○の○口○に○あ○ら○ざ○る○な○り○天○之○れ○を○嘗○む○る○な○り○變○化○吾○れ○の○心○知○に○あ○ら○

ざるなり、天之れを神明にするなり、故に目天を以て視れば、明に盡く、
 耳天を以て聽けば、聰に竭く、口天を以て嘗むれば、嗜に爽はず、思慮天
 を以て動けば、神明に通ず、天之れを作し、天之れを成す、參するに人を
 以てせず、是れ之れを天能といふ、是れ之れを天地萬物の靈といふ、
 吾心、天地萬物の靈たり、惟、聖人能く之れを全うするをなす、聖人能く
 之れを全うするにあらざるなり、夫れ人の同じき所なり、聖人の色を
 視ること、吾目と同じ、而して目能く色に引かれざるもの、天視に率へ
 ばなり、聖人の聲を聽くこと、吾耳と同じ、而して耳能く聲に蔽はれざ
 るもの、天聽に率へばなり、聖人の思慮、吾心知と同じ、而して心知、思慮
 に亂れざるもの、神明に通ずればなり、吾目に引かれず、而して以て吾
 明を全うす、聖人と其視を同うするなり、吾耳に蔽はれず、以て吾聰
 を全うす、聖人と其聽を同うするなり、吾口味に爽はず、以て吾嗜を全
 うす、聖人と其嘗を同うするなり、吾心知、思慮に亂れず、以て吾神明を
 全うす、聖人と其變化を同うするなり、故に曰く、聖人學んで至るべし

ど、吾心の靈聖人と同じきを謂ふなり、然らば聖人を學ぶにあらざるなり能く自ら吾天に率ふなり、

吾心の靈聖人と同じ、聖人能く之れを全うす、學者全きを求む、然らば何を以てせんか、要あり、以て支求すべからざるなり、吾目、色に蔽はれて而して後、去るを求む、明を全うする所以にあらざるなり、吾耳、聲に蔽はれて而して後、克つを求む、聰を全うする所以にあらざるなり、吾口、味に爽ふて而して後、□を求む、嗜を全うする所以にあらざるなり、吾心、知、思、慮に亂れて而して後、止まるを求む、神明を全うする所以にあらざるなり、靈やは心の本體なり、性の徳なり、百體の會なり、動靜を徹し、物我を通じ、古今に亘り、時として、靈ならざるなく、時として、或は間つるなきものなり、或は生れて之れを知り、或は學んで之れを知り、或は困して之れを知る、皆自らは靈に率ひ、以て百物に通じ、欲に間たしむるなきのみ、其功同じからずと雖も、其靈未だ嘗て一ならずんばあらざるなり、吾れ吾靈に率つて之れを目に發し、自ら色を辨じて、而

して色に引かれず、明を全うする所以なり、之れを耳に發し、自ら聲を辨じて、而して聲に蔽はれず、聰を全うする所以なり、之れを口に發し、自ら味を辨じて、而して味に爽はらず、嗜を全うする所以なり、之れを思慮に發し、萬感萬應、聲臭を動かさず、而して其靈常に寂たり、大なるもの立て、百體通ず、神明を全うする所以なり、人一人たひ之れを能くすれば、己れ之れを百たひし人十たひ之れを能くすれば、己れ之れを千たひし、必ず是靈に率つて欲に間つるなし、是れ天之れを作し、人之れを復す、是れ之れを天成といひ、是れ之れを致知の學といふ。

學堂の西揭には王陽明が龍塲の諸生に示せる立志、勸學、改過、責善の四篇を擧げ、學堂の東掲には呂新吾の學に關する語十七條を擧げ、以て門生日夜の訓戒となせり、始めて入學するものあれば、中齋先づ之れに、吾門學道以忠信不欺爲主本の主意を告げ、塾中にありては必ず之れを守るべく、守らざれば手打にすべしといへり、疋田竹翁の談話中に云く、十二三歳の時から十六歳の頃までは藩の塾で、朱子學をやつて居り

ましたが、ほんの素讀計りで一年に二回づゝ試めしが御座りまするが、もうはや字さへ讀めば、それでよいと云ふ様な有様で、ちつどもためにはなりませんで御座りました、それから大鹽の所へまゐりましてからは、すつぱり進みます、句讀などは、少しも御座りませぬ、講義計りで、其講義も活きて働かすと云ふのが、本意で御座りまするから、中々きつう御座ります、初めて参りました時に、入吾門學道、以忠信不欺爲主、本これが陽明先生の語じや、己れが塾へきて不忠不信な行ひが、あつたり、人を欺く様な奴は、手打ちに致すが、それ承知あらば、來たれ、へい、己に門下に列りましたる已上は、固より覺悟の上で御座ります、決して自らやましいことは、御座りませんと云へば、そんなら居れど、云ふ様な風で、初めて参りた者は、皆びりつゝいて震へ上りませぬ、此れに由りて之れを觀れば、中齋が嚴厲なる教育を實行したること、以て知るべきなり、洗心洞學名學則一篇あり、是れ中齋が主義を宣告したるものなるが、故に左に之れを擧げん、云く、

弟子余に問ふて曰く、先生の學之れを陽明學といふか、曰く否、之れを程子學、朱子學といふか、否、之れを毛鄭、賈孔訓詁、註疏學といふか、曰く否、仁齋父子の古學か、抑、徂徠、詩書禮樂を主とするの學か、曰く否、然らば則ち先生の適從する所、將た何の學なるか、曰く我學、只仁を求むるにありのみ、故に學名なし、強ひて之れを名づけて、孔孟學といふ、曰く其説いかん、曰く我學、大學中庸論語を治むるなり、大學中庸論語は便ち是れ孔氏の書なり、孟子を治むるなり、孟子は便ち是れ孟氏の書なり、而して六經は皆亦孔子剛定の書なり、故に強ひて之れを名づけて、孔孟學といふなり、毛鄭、賈孔の學は則ち經書の名義を註釋するなり、程朱の學、大抵、經書の精微、性命の底蘊を説破するなり、陽明先生の學、其中に就いて、易簡の要を提ぐるなり、仁齋、徂徠は則ち特に其睡餘のみ、嗚呼、孔孟の學、一の仁を求むるにあり、而して仁は則ち遽に手を下だし難し、故に或は其訓詁、註疏を讀み、而して其影響を求め、或は其居敬窮理の工夫により、以て其精微を探り、其底蘊を窺ひ、或は良知を致

して以て其易簡の要を握り、而して畢竟各皆孔孟の學に歸するのみ。然り而して孔孟數千百歳以前、既に逆め數千百歳の後、諸儒各、意見を争ひ、宗を立て派を分ち、以て同室の鬪をなすを知る、故に孔子孝經を以て曾子に授け、之れを至德要道といふ、孟子も亦曰く、堯舜の道は、孝弟のみ、是を以て之れを考ふれば、則ち四書六經、説く所多端なりと雖も、仁の功用、遠大なりと雖も、其徳の至、其道の要、只孝にあるのみ、故に我學、孝の一字を以て、四書六經の理、義を貫く、方固より及ばず、謙固より足らず、然れども、之れを心に求めて、眞に心中の理を窮め、將に死を以て、斯文に従事せんとす、故に直に孔孟學といふ、是れ乃ち僭に似て、僭ならず、吾徒小子宜しく奉遵すべし、而して若し我學を問ふものあらば、則ち之れを以て答へて可なり、嗚呼、其所生を忝うして、靦然儒を以て自ら冒すものは、則ち孔孟の罪人にあらずして何ぞ、中齋又讀書書を擧げて、門生講學の順序を示す、亦其學風を窺ふに足るものあるが故に、左に之れを擧ぐ、

孝經 增補註本

古本大學 解序

中庸 註朱

論語 註朱

孟子 註朱

右一經四書

易 傳程

書 集蔡傳氏

詩 井呂氏讀集詩傳記

禮記 陳氏禮義疏井

春秋 傳井三

周官 疏禮三

右七經三傳

傳習錄

朱子小學

四名公語錄

近思錄

陽明子集類

王門諸子書類

程朱書類有口訣

歷代理學名賢書類有口訣

右理學

二十一史

通鑑綱目

讀史管見

名臣言行錄各口訣

右史類

八大家文集之類

杜詩及宋十五家詩選之類

右詩文

田中從吾軒は中齋を以て傲慢の人とし、其學問も素人學問にして極め淺薄なりしものとせり、其談話中に言へるあり、云く、

大鹽の學問は陽明學で、又槍を使ひまして、先づ當時では上手であつた。學問も固より傲慢な人だから威張つて居たが、素人學問ですから學問は左程ではない、大鹽は無暗に當時の學者を見下して居た、併し頼山陽などは、逆も敵はぬから、尊敬して居つて、山陽に蘆鴈の繪を贈り、山陽は又これに對して禮の詩などを贈りました、大鹽は學問の方は深くはないが、若し之れを彼れ此れ言ふ者があると直ぐに怒りてしまふ。

學問を記誦詞章の義とせば、從吾軒の言當れり、然れども若し修身誠意の義とせば、從吾軒の言誤れり、彼れ本と小説を以て専門とせるもの、如何ぞ中齋が學問の價値を論ずるを得ん、中齋が學說未だ盡さざるもの

多きは論を竣たざるも、未だ從吾軒をして鼎の輕重を問はしむるに至らざるなり、又中齋が山陽と相交はりしは、其意氣投合する所ありしに、よる、必ずしも其及ばざるが爲めにあらざるなり、從吾軒の批評甚だ僻せりと謂ふべきなり、彼れ又中齋を論じて云く、

大鹽は極く負け嫌ひの人であるから、自分の言ふことを唯々諾々ときいて居れば宜しいが、若し之れに逆ふと直に怒る、自分の弟子などは、家來の如くにして、講釋をする時、大鹽が來ればシイ／＼と警蹕の聲を掛ける、さうすると弟子がピツタリ頭を下げて拜をして居る、其くらゐ傲慢な人でございましてと云ふのは、大坂には士が少ないから、與力は賤しい役だけれども、所謂鳥なき里の蝙蝠で、市中の訴訟などを捌いて居たから、大層勢力があつて、弟子などを取扱ふのも、家來のやうであつたが、學問も何も、あるのではないと云ふことは、洗心洞劄記を見ても、知ることが出来る、それだから、小竹などに、馬鹿にされたのです。

從吾軒は洗心洞割記の旨趣を了解せしや否や疑はし小説を以て汚されたる頭腦を以て道義の書を手にするも其旨趣の存する所を曉得すること難しとなす彼れ自ら其果して然ることを表白せり俗諺に云く「猫に小判」と此れ之れを謂ふなり又小竹の如きは本と翮々たる文人のみ之れを以て中齋に比するすら已に牛麒麟鳳を同一視するの感なしとせず然るに彼れを以て此れに優れりとするが如きは眞に菽麥を辨せざるものと謂ふべきなり。



第四 學 說

第一 總 論

中齋が學說を叙述するに當り、先づ其主義及び其主義を立つるに至りし所以を一瞥せん、中齋は陽明學を奉ずるものなり、彼れ自ら學名學則中に孔孟學の名稱を用ふれども、其實、陽明學に外ならず、彼れは別に師傳あるにわらず、全く獨學によりて姚江派に歸するに至りしなり、執齋東里等歿してより數十年間王學を主張するものなし、此時に當りて中齋起りて學を講ずるも、其適從する所を知らず、偶、呂新吾が呻吟語を得て、之れを熟讀翫味し、恍然として覺る所あり、因りて又其淵源する所の姚江にあるを知り、遂に陽明全書を得て、誠心研磨するに至れり、然るに不幸にして肺病に嬰り、死せんと欲するもの再三にして湯藥効を奏し難く、病勢益々厚かりしも、何の幸か復た蘇生するを得たり、中齋殆んど以て天祐となし、是れより陽明の靈に盟ひ、身を殺して仁を成すの志を立

て、學を講じ道を修むることを務めたり、彼れ已に死生の間を往來し、人天の際を出入せり、其決心の堅きもの、抑又故あるを知るべきなり、弟子に示す文中に云く、

書○を○讀○み○道○を○講○ず○る○も○の○黙○し○て○以○て○之○れ○を○講○り○謙○以○て○之○れ○に○居○り、
而○し○て○忠○孝○の○變○に○當○り、身○を○殺○し○て○仁○を○成○す、是○れ○其○止○ま○る○所○な○り、

此の如き決心は姚江より得來たる所にして、又中齋が遂に實行せし所なり、

中齋陽明學を奉ずと雖も、決して朱子學を排するものにあらず、寧ろ朱王を併せ取ることを公言せり、朱子文集を奉納する跋に云く、

後○素○固○よ○り○王○子○致○知○の○教○を○奉○ず○と○雖○も、而○か○も○朱○子○博○約○の○訓○に○於○て、
寧○ぞ○亦○之○れ○を○廢○せん○や、

又陸象山全集を奉納する跋に云く、

陸子徳性を尊ぶを以て教となして、而して未だ嘗て問學を道はずんばあらず、朱子問學を道ふを以て教となして、而して未だ嘗て徳性を

尊ばずんばあらざるなり、然れども其生前互に論辨して已まず、朱は陸の人を教ふるを以て太だ簡となし、陸は朱の人を教ふるを以て支離となす、而して深く之れを考ふるに、朱子は陸子の人を教ふるを以て太だ簡となすのみ、未だ嘗て陸子を以て太だ簡となさざるなり、陸子は朱子の人を教ふるを以て支離となすのみ、未だ嘗て朱子を以て支離となさざるなり、只兩家の子弟、客氣、勝心あるもの、終に朱陸同異の説を醸し、以て斯道の梗をなす、歎すべきの甚しきならずや、而して今陸集を讀めば、徳性を説くこと詳なり、而して多きに居る、朱文を讀すれば、問學を説くこと盡くせり、而して半に過ぐ、要するに、兩ながら廢すべからざるものなり、故に後素は兩家の説を併せ取る、即ち依然として徳性を尊んで問學の事を道ふなり、而して陽明王子致良知の意を以て一以て之れを貫く、是れを以て學的となさば庶幾くば孔孟の宗に叛かざるものか、

中齋此の如く朱王兩氏を併せ取るの意を述ぶ、雖も是れ其公平を裝

はんが爲めの言に過ぎず、其實、全く陽明の學を祖述するものなり、竟敢の初、異學の禁ありてより以來、學者屏息して異學を唱ふるを取てせず、一齋の如き、心竊に陽明を信ずと雖も、公然之れを主張すること能はず、首鼠兩端、其主義を曖昧にし、畢竟摸稜の譬を免れず、此時に當りて、公然王學を唱へたるもの、獨り中齋あるのみ、中齋が世の非難を顧みずして、其所信を貫くの舉に出でたるは、學者の本分を盡くせるもの、其勇氣殊に愛すべしと、なす、若し其官を問へば、彼れ實に、一與力に過ぎずと、雖も、人爵は吾人の尙ぶ所にあらず、彼れが剛強にして、屈せざる所、儒夫をして起たしむるに足るものあり、薄志弱行の世、何づれの處にか、彼れが如きものを求めん、彼れは、學者と、豪傑とを、打ちて、一丸となしたる者なり、中齋王學を主張するものに、相違なきも、亦自ら一家の主義なしとせず、陽明の如く、致良知を言はざるにあらざれども、亦歸太虛を主張せり、陽明會て、良知を以て太虛に比すと雖も、未だ歸太虛を以て其主義とせしにあらず、中齋にありては、歸太虛は其學の本領となれり、是故に中齋陽

明に本づくど、雖も亦別に特色を存し、姚江一派に異彩を放つ、看なしとせざるなり、然れども中齋は之れを己れが創説と稱することを欲せず、務めて其本づく所あるを證し、以て述べて作らざるの意を表白せり、

劄記の序文中に云く、

我れの創説、則ち宜しく後慮あるべきなり、先賢の成語にして、而して吾れ特に之れを發揮するのみ、又何ぞ患ふるに足らんや、云、云、要するに、一家言なるのみ、

中齋己れが學の祖述に過ぎざるを明かにせんが爲めに、儒門空虚聚語を著はし、上は周易論語等より下は明清諸家に至るまで、凡そ歸太虚に關する言論を輯録せり、然れども支那哲學者中にありて最も太虚説を主張したるは張横渠なり、中齋或は横渠に得る所あるか、劄記の下卷に引用せる横渠の諸語、大抵中齋が歸太虚の旨意を道破せるを以て之れを察知すべきなり、然れども彼れ自らは辯じて曰く、吾太虚の説、致良知より來たる、正蒙より來たらざると、又之れを考ふるに、我邦にありては藤

樹已に分明に歸太虛の説を道破せり、戸田氏に與ふる書に天地萬物皆太虛の一氣より生ずるものなるを論じ、更に一轉して、云く、

此の如く萬物も同じく太虛の一氣より生ずると雖も、太虛、天地の全體を備ふることなし、人は其形小なれども、太虛の全體ある故に人の性にのみ明德の尊號あり、云云、天地人を三極と云ふ、形は異なれども、其神は一貫流通隔なし、理に大小なきが故に方寸太虛、本より同じ、云云、我心は則ち太虛なり、天地四海も我心の中にあり、

藤樹は此の如く方寸と太虛とを同一視し、中齋が先驅をなせり、中齋が説亦頗る佛教の空觀に似たる所なきにあらず、是故に中齋自ら聚語の序に辯じて曰く、我空と法空と本と一物、只死活の異なるのみと、此辯なかるべからざるなり、然れども先づ彼れが學說の要領を述べて然して後更に評論する所あらん、

第二 歸太虛の説

人皆彼の上において蒼々たるものを天となす、中齋思へらく、獨りこれ

れのみ天とすべきにあらず、石間の虚若くは竹中の虚と雖も、均しく天
と稱すべきものなり、然るに是れ音に外物に就いて言ふべきのみなら
ず、又己に自身に就いて言ふべきなり、吾方寸にして虚ならば、此虚は直
に口耳の虚と通じ、口耳の虚は直に身外の太虚と通じて一となり、而し
て際限なく、四海を包括し、宇宙を包含して、捉捕すべからざるものなり
と、中齋は此の如くにして、人天合一の樞紐を執へ、來たれり、今身外を見
れば、虚なり、此虚は大にしては太虚、小にしては我方寸、此れと彼れと直
に相通じて區別すべきものなし、太虚は即ち我方寸中に存し、我方寸は
太虚を包容す、是を以て、中齋は身外の虚を以て、我心の本體とし、心外の
悲喜總べて、我心中の事件となせり、其言に云く、
驅殼外の虚、便ち是れ天なり、天は吾心なり、心萬有を包含す、是に於て
悟るべし、故に血氣あるもの、草木瓦石に至るまで、其死を視、其摧折を
視、其毀壞を視れば、則ち吾心を感傷せしむ、本と心中の物たるを以て
の故なり、

陽明が所謂、心即ち理なり、天下又心外の事、心外の理らんや、と其歸を同
 うす、若し形より言へば、身心を、衰み、心本と身内にありと雖も、若し道よ
 り言へば、身心を、衰み、身反りて心内にあり、身を以て心内にありとす
 るものは常に超脱の妙を得て、我れ物を役し、物の爲めに役せらるること
 なし、然れども若し我心にして、慙あらば塞がる、塞がれば、虚にあらざ、虚
 にあらざれば、頑然たる一小物にして、即ち小人なり、
 常人有する所の方寸の虚と雖も、聖人方寸の虚と異なる所なし、氣質に
 至りては、清濁昏明の差なき能はざるも、方寸の虚は、同じからざるなし、
 猶ほ貧人室中の虚、貴人室中の虚と同一の虚にして、四面牆壁、上下屋牀
 は、美惡精粗の同じからざるものあるが如し、是故に何人も欲心を打拂
 つて、太虚に歸すれば、天、其心にあり、聖人と何ぞ擇ばん、是故に如何なる
 人も、聖人の地位に達せんと欲せば、達し得ることなし、聖人は即ち言
 あるの太虚にして、太虚は即ち言はざるの聖人なり、乃ち知る聖人と太
 虚と畢竟異なる所あるにあらざるを、然らば如何にして太虚に歸すべ

きか、必[△]ず誠[△]意[△]慎[△]獨[△]より入[△]るべし、意識なれば忿[△]懣[△]恐[△]懼[△]好[△]樂[△]憂[△]患[△]する所
あり、中[△]に存[△]するあらば、太[△]虚[△]にあらざるなり、心[△]、太[△]虚[△]に歸[△]せざれば、必[△]ず
動[△]く、何[△]んぞなれば形[△]あるものは、凌[△]雲[△]の喬[△]嶽[△]、無[△]底[△]の大海[△]と雖[△]も、必[△]ず地
震[△]に動[△]搖[△]す、然[△]れども地震[△]は太[△]虚[△]を動[△]かすこと能[△]はず、故[△]に心[△]、太[△]虚[△]に歸[△]
いて、始[△]めて不[△]動[△]を語[△]るべきのみ、又[△]形[△]質[△]あるものは、大[△]なりと雖[△]も、限[△]り
あり、而[△]して必[△]ず滅[△]す、形[△]質[△]なきものは、微[△]なりと雖[△]も、涯[△]りなし、而[△]して亦
傳[△]ふ、高[△]岳[△]桑[△]田[△]、或[△]は崩[△]れ、或[△]は海[△]となる、而[△]して唾[△]壺[△]の虚[△]は即[△]ち太[△]虚[△]の虚[△]
なり、唾[△]壺[△]、毀[△]つと雖[△]も、其[△]虚[△]は乃[△]ち太[△]虚[△]に歸[△]して、萬[△]古[△]不[△]滅[△]なるものなり、
之[△]れを要[△]するに、中[△]齋[△]は胸[△]中[△]一切[△]の妄[△]念[△]を絶[△]滅[△]して、些[△]の情[△]欲[△]を留[△]めざ
れば、即[△]ち心[△]已[△]に太[△]虚[△]に歸[△]せりとし、聖[△]人[△]の地位[△]、此[△]れに外[△]ならずとする
ものなり、此[△]の如[△]く、心[△]、太[△]虚[△]に歸[△]するを以[△]て人[△]生[△]の目[△]的[△]とせば、是[△]れ禪[△]と
其[△]歸[△]を一[△]にするものに似[△]たり、中[△]齋[△]乃[△]ち之[△]れを辯[△]じて曰[△]く、
人[△]心[△]、太[△]虚[△]に歸[△]するも、亦[△]慎[△]獨[△]克[△]己[△]よりして入[△]る、若[△]し慎[△]獨[△]克[△]己[△]よりし

て入らざれば、禪學の虛妄所謂、毫釐千里、故に心學者、動もすれば之れを誤まるなり、

又之れを考ふるに、中齋が虛と、佛教の空と、異なるは、唯之れに到達する方法の如何にあるのみならず、又虚に歸したる状態にあるなり、佛教は情欲を斷滅して人倫を離れんとするなり、即ち解脱を期するなり、然るに中齋は到底人倫を離るゝを欲せざるなり、故に辯じて曰く、

五倫太虚にあらざれば、皆儒のみ太虚なれば、五倫各其正を得て、而して道徳其中を貫く、

又曰く、

儒中の聖賢、古嘗て克己復禮、以て本然の空を全うするあり、而して中なり、仁なり、皆慈なし、孝弟忠信、喜怒哀樂、齊家治國平天下の事、盡く此空中より出づ、以て位育の功を遂ぐるを獲たり、佛氏の徒侶、大抵鑿心冽性、終に稿寂の空をなす、而して中なり、仁なり、皆滅せり、故に孝弟忠信、喜怒哀樂、齊家治國平天下の事、發出すると能はず、豈に亦位育の功

を遂ぐるを獲んや、是に於てか見るべし。我空と彼空と相去ること千
萬里なるを。

此れに由りて之れを觀れば、中齋が學は禪に酷似すと雖も、亦禪と同一
視すべからざるものあり、

中齋が所謂太虚は胸中の雲霧を一掃して、何等の情欲をも有せざる心
境を意味するが故に、全く消極的のものなるが如し、然れども其實、決し
て消極的のものにあらず、換言すれば、太虚は心的作用の停止せるを謂
ふにあらず、中齋は乃ち、眞知を以て太虚とせり、其言に云く、

夫れ眞知は只是れ太虚靈明のみ。

又云く、

眞の眞知は他にあらず、太虚の靈のみ。

又云く、

眞知の虚便ち是れ天の太虚、眞知の無便ち是れ太虚の無形。

然らば如何にして眞知を養成するを得べきか、中齋思へらく、唯、胸中

の雲霧を一掃せば、良知自ら其光を放ちて來らんと、彼れ蓋し吾人々類の心の本体を以て太虚とするなり、是故に情欲を絶滅すれば、自ら太虚に歸す、太虚は即ち一靈明に外ならざるなり、其言に云く、

夫○れ○太○虚○は○一○靈○明○の○み○是○靈○明○即○ち○晝○夜○に○通○じ○古○今○に○亘○り○て○泯○せ○ざ○る○の○明○な○り、

此れに由りて之れを觀れば、中齊が所謂太虚の消極的ならざること、以て知るべきなり、彼れ亦天地間一切のものは悉く太虚より分出すとせり、其論旨、口力論師説く所と一致するものあるは、亦一奇と謂ふべし、中齊は又太虚を以て一切道德の因りて出づる所とせり、是故に太虚は太極の異名と謂ふも不可なかるべきなり、

第三 致良知の説

中齊が歸太虚を説くは即ち致良知を説く者なり、太虚と良知とは、畢竟一物の異名に過ぎざればなり、然れども太虚は心境の澄徹して些の陰翳をも留めざる状態にして、良知は其中善惡を識別する自然の靈明あ

るを指して之れを言ふなり、良知は各自先天的に之れを有して生れ來たれり、是ち即ち天地の徳の各自方寸の中に宿れるなり、然れども邪念ありて方寸の虚を塞がば、良知の光之れが爲めに明かならず、若し邪念を打ち拂へば、良知の光自ら明かにして、善惡正邪、其當を得ずといふことなし、此の如くなれば、聖賢なり、君子なり、弟子の質疑に答ふる書に此意を述べて云く、

只○幸○と○す○る○所○は○天○地○の○徳○性○方○寸○の○虚○に○舍○る○故○に○其○獨○り○を○愼○ん○で○其○虚○を○塞○が○ざ○れ○ば○則○ち○徳○性○の○一○知○乃○ち○大○君○と○な○り○四○知○即○ち○知○覺○聞○見○情○識○意○見○を○使○用○し○以○て○崇○り○を○な○さ○し○む○是○れ○を○聖○賢○と○い○ふ○是○れ○を○君○子○と○い○ふ○是○れ○を○仁○者○知○者○と○い○ふ○

是れ即ち良知をして其官能を全うせしめば、己れを律するの綱柄、己に手中にあるを説くものなり、中齋は又良知に種々なる名稱を付せり、或は之れを無極の真といひ、或は之れを心の精神といひ、又之れを神明といへり、彦藩の宇津木共甫に答へて心理を論ずる書に、周子の所謂無極

の眞を論じて云く、

其、無極の眞、別名之れを虚靈といふ、虚靈の人に賦する之れを心の精神といひ、又神明といふ、不學不慮にして固より有り、故に別名を良知、良能といふ、其良知良能は乃ち天地易簡の知能と本と一物にして、即ち無極の眞なり、惟聖人は則ち赤子の心を失はず、故に無極の眞全し、而して其易簡の徳業は天地と參す、

又朱子の如く心と理とを分ちて二とみなすの謬見たるを論じ、更に斷案を下だして云く、

弊源他にあらざ、心の本體何物たるを知らざるを以ての故なり、若し眞に心の本體は無極の眞にして、所謂虚靈なるものたるを認め得ば、則ち復た必ず孔子の所謂心の精神是れを聖といふの言を了し得ん、心の精神是れを聖といふの言を了し得ば、則ち良知良能の義亦當に融釋すべし、而して之れを總ぶるに、其靈親に遇へば、則ち孝となり、君に遇へば、則ち忠となり、夫婦に發しては、別となり、長幼に發しては、序

となり、朋友の交りに發しては、信となり、此れより、以往、萬變に、酬、酢するは、只是れ、一靈のみ、故に、程子、王子、皆曰く、性、一のみ、夫れ、天地、易、簡の知能、亦只是れのみ、是故に、眞に、眞知を致せば、則ち、眞能、其中にあり、

無極の眞といふは、即ち世界の實在なり、眞知を以て世界の實在とし、此の如き實在は我方寸の中にあるものとせり、是故に、婆羅門教の「ブラフマン」に於けるが如く、我れ、即ち世界の實在にして、世界の實在は、即ち我れなり、中齋が「人心の太虚」と一般にして、二様なし、といひ、又、身外の虚は、即ち吾心の本體なり、といふが如き、皆此意を述ぶるものなり、中齋此の如き見解を有するが故に、眞知を以て、皆に道徳の由りて出づる所とするのみならず、又、天地萬物を生ずるものとせり、由比計義に答ふる書に云く、

夫れ、眞知は、天を生じ、地を生じ、仁を生じ、義を生じ、禮智を生ずるの主宰なり、

眞知が仁義禮智を生ずることは、理會すべきも、天地萬物を生ずること

は理會すべからざるが如し、然れども中齋は、眞知を以て、世界の實在とせり、世界の實在は個人に於ける眞知の如く、世界の精神なり、即ち周子の所謂無極の眞なり、是故に眞知を以て、天地萬物を生ずるものとせり、松浦誠之の間に答ふる書に曰く、

眞知は則ち之れを一貫するの靈光なり、故に易を生じ、詩を生じ、書を
生じ、春秋を生ずるもの、盡く聖人の眞知にあり、而して人々之れを經
に學ぶもの、亦只眞知を致すのみ、

中齋は此の如く經書は眞知の生ずる所に於て之れを學ぶは唯、我眞知
を致す所以なりとせり、彼れ又眞知と他の知識とを區別して之れを説
けり、郡山藩臣藤川晴貞に答ふる書に云く、

眞知は武王の所謂人は萬物の靈なりの靈にして、知覺聞見情識意見
の知識にあらざるなり、故に若し能く後天の形氣を忘れ、眞に志を立
てば、則ち先天の靈心にありて、照々明々、未だ嘗て涙、次ざるなり、默し
て之れを知る可なり、而して眞に其眞知を致さば、則ち四書六經の言

々語々皆其用をなすや、斷じて疑なし、可もなく不可もなく、適もなく莫もなく、惟義是れ従ふの妙用神通自然に手に入る云云、眞に眞知を致さば、則ち左右其源に逢ふて而して拘縛すべからざるなり。

中齋は知覺聞見情識意見を名づけて四知と稱し、是等四知の眞知に書あることを痛論し、終に講學の正路を示して曰く、

海○の○東○西○南○北○ど○な○く○人○た○る○も○の○是○心○あ○り○是○理○あ○り○而○し○て○學○に○志○さ○ば○則○ち○彼○四○知○の○邪○障○を○掃○ふ○て○是○一○知○を○明○か○に○せ○さ○る○べ○か○ら○さ○る○な○り。

中齋は又眞知を以て天理となし、假令ひ先天の天理を全うするも、後天の人欲を失ふを要せざる所以を論じて云く、

夫○の○虚○靈○全○幅○を○以○て○之○れ○を○其○方○寸○内○に○賦○與○し○て○毛○髮○の○末○に○徹○す○聖○人○は○則○ち○未○だ○曾○て○後○天○の○人○欲○を○奪○は○ず○而○し○て○先○天○の○天○理○を○全○う○す○其○本○只○虚○靈○を○失○は○さ○る○に○あ○る○の○み。

此れに由りて之れを觀れば、中齋は徹上徹下、眞知を以て一貫せば、後天

の入欲あるも、不可なしとするものなり、斯る場合にありては人欲も自ら其正に歸すべければなり、中齋が説の佛、教に酷似せるは、論を俟たざるも、亦決して之れと混同すべからざるものあるを知るべきなり、

中齋は又良知を以て鬼神とせり、曾て子弟鬼神泣壯烈この義を問ひしに、之れに答へて「良知即ち鬼神何ぞ別に鬼神あらんや」といひ、又曾て司馬溫公の「事神」の論を評して「夫れ心の神は他にあらず、太虚一團靈氣の人の方寸に入るもの、孟子の所謂良知なり」といへり、

第四 理氣合一の説

中齋は陽明の學に本づき、理氣合一の説を主張せり、朱子は心と理とを以て別物とせり、故に我心を明かにすれば、我心即ち理なりと説くこと能はず、是を以て其修徳の工夫未だ適切ならざるものあり、是を以て中齋は乃ち理氣の合一を説いて、短刀直入、聖賢の域に達すべきことを言へり、割記の上に論じて云く、

先天は理のみ、而して氣、其中にあり、後天は氣のみ、而して理、其中にあ

り、要するに、理と氣と一にして二に、二にして一なるものなり。實に易を知るものにあらざれば孰れか能く之れを見んや。

又劄記の下に云く、

後、天よりして之れを視れば、則ち理と氣と當に分つべきに似たり。先天にありては固より理氣の分つべきなし。獨りを慎み性に復へるは便ち是れ先天の學にして、而して猶ほ理氣を以て二となす可ならんや。故に終身性に復へること能はず、此れを以てなり。

蓋し各自は理と氣とを合一して之れを其身に有せざるはなし。然れども唯、其氣あるを知りて理あるを知らざれば、道の本體に歸すること能はず。唯、其理あるを知りて氣あるを知らざれば、其意を斷行すべき勇氣に乏しきの弊あり。是故に中齋は理と氣とを體認して實際上之れを合一するの要を論せり。劄記の上に云く、

勇士氣を養ふて理を明かにせず、儒者理を明かにして氣を養はず、常人は則ち亦氣を養はず、亦理を明かにせず、榮辱禍福惟、是れ趨避のみ。

理氣合一。天地と徳を同うし、陰陽功を同うするもの、其れ唯、聖賢か
中齋が學にありては、理は、即ち、太虚なり、理を體認すれば、其人、即ち、太虚
にして、凡そ世界に存するもの、其心中に歸せざるはなし、宇津木共甫に
答ふる書に云く、

吾子亦孟程云ふ所の形色天性心理一なるの説を信じて、獨りを懐み
虚に歸し、以て無極の眞を喪はざれば、太虚即ち吾子、吾子即ち太虚眞
に此境に臻れば、則ち萬千の世界概ね其心中にあり、

中齋が理氣合一の説を立つるは畢竟説いて是廣大無邊の境界に至ら
んが爲めなり、若し心と理とを分別するときは、此直截易簡の工夫をな
すこと能はざるなり、

第五 氣質變化の説

中齋の學によれば、常人方寸の虚も、聖人方寸の虚も同一の虚にして、何
等の異なる所もなし、即ち衆生皆佛性を具するの意なり、此の如くなれ
ば、萬人同性の説にて、何人も聖人とならんと欲すれば、なり得べき性質

を有するなり、換言すれば、人皆良知を有す、即ち知るべし、人性本と善ならざるなきを、中齋此意を述べて曰く、

良知各具備す、地中の水の如く、あらざるなし、之れを致すの難きこと、逆水の舟の如し、惰なれば、則ち退いて進まず、荀子之れを致すの難きを、親て遂に性悪といふ、孟子、あらざるなきを見て、断じて性善といふ、夫れ之れを致すこと難しと雖も、然れどもあらざることなれば、則ち本來の性、固より善なるのみ、故に性善の説、萬世に冠たり、確乎として、其れ易ふべからざるなり、

又曰く、

水性本と寒し、火其下にあれば、則ち沸々然化して湯となり、下はる其時に當りて、水ありと雖も、寒は絶えてなきなり、人性本と善なり、物其外に誘はるれば、則ち俛々然化して悪となり、了はる其時に當りて、入存すと雖も、善或はなきなり、然れども、其火を去れば、則ち寒復た依然たり、其物を拒げば、則ち善亦現存す、若し火を去ること早からざれば、

則ち焦枯して水性と俱に滅す物を拒むこと嚴ならずれば則ち壞亂して人性と俱に亡ぶ是れ當然の理なり

人性本と此の如く善なりと雖も唯人に軀殼あり是故に氣質あり是を以て私欲を生ずるを免れず換言すれば私欲は氣質あるが爲めに起るなり然るに中齋は氣質を以て變化し得べきものとせりシヨツペンハウエル氏の如く變化し得べからざるものとせざるなり其言に云く方寸の虚は便ち是れ太虚の虚にして太虚の虚は便ち是れ方寸の虚なり本と二なし畢竟氣質之れを牆壁するなり故に人學んで氣質を變化すれば則ち聖人と同じきもの宛然として徧布照耀し包涵せざるなく貫徹せざるなし嗚呼氣質を變化せずして學に従事するもの其學ぶ所將た何事ぞ陋といふべし

氣質は一定不變のものにあらずして能く變化すべきものなり能く變化すべきが故に君子となり小人となるもの其人の所作如何に存するなり中齋曰く

君子の善に於けるや、必ず知行合一、小人の不善に於けるや、亦必ず知行合一、而して君子若し善を知りて行はざれば、小人に變ずるの機、小人若し不善を知りて行はざれば、則ち君子に化するの基、是を以て君子亦恃むに足らず、小人亦鄙むべからざるなり、

此れに由りて之れを觀れば、中齋は人は根柢より改造し得べしとするものなり、若し此事なければ、教育は其効力甚だ少きものとなる、何んとなれば不善者を化して善者とならしむること能はざればなり、殊に感化院の如きいかにして其功を奏するを得ん、人々の特性は容易に改變すべからざるものなるは事實なり、然れども不善者が一變して善者となること之れなしとせず、則ち龍樹の如き、アウグスティヌスの如き、ポニアンの如き、ハマンの如き、皆然らざるなし、果して然らば、氣質變化の説、亦教育上に裨補する所なしとせざるなり、

第六 死生の説

中齋は死生に關しては、甚だ佛敎の涅槃に類するの説を持せり、彼れ已

に太虚を以て吾人の本體とし、吾人の方寸にして私欲の爲めに塞がるゝことなければ、吾人乃ち太虚に歸するを得べしとせり、然るに太虚は常住不滅のものにして有形物の如くに生々して已まざるものにあらず、是故に吾人にして已に太虚に歸するを得ば、吾人は不生不滅の域に入るものなり、是れ莊子の所謂不死不生にして佛教の涅槃と何等の異同かある、中齋が太虚は一切の心的作用を絶滅したる消極的の狀態を謂ふにあらず、唯私欲の情を撤去したる狀態なるのみ、私欲の情を撤去すれば、良知の光炯々として發射し來たる、是れを仁となす、仁は永遠に滅することなきものなり、劄記の上に云く、

生を求めて以て仁を害することなし、夫れ生は滅あり、仁は太虚の徳にして、而して萬古不滅のものなり、萬古不滅のものを捨て、而して滅することあるものを守るは、惑なり、故に志士仁人、彼れを捨て、此れを取る、誠に理あるかな、常人の知る所にあらざるなり、

又劄記の下に曰く、

太虚なり、氣なり、萬物なり、道なり、神なり、皆一物にして、而して聚散の殊なるのみ、要するに太虚の變化に歸するなり、故に人神を存して、以て性を盡くせば、則ち散じて死すと雖も、其方寸の虚は太虚と混一して、同流朽ちず、亡びず、人如し、虚を失はずして、此に至れば、亦大なり、盛なり、

中齋が學によれば、人其形體を頼んで私欲を逞うすれば、滅びざるを得ざるも、若し私欲を打ち拂つて太虚に歸すれば、已に不生不滅なるものなり、換言すれば、長在不滅なるものなり、我れ已に長在不滅の境界にあれば、如何なる危難も、毫も畏るゝに足らず、能く其確然不動の状態を持するもの、此に因由せずんば、あらざるなり、劄記の上に云く、

常人天地を視て無窮となし、吾れを視て暫となす、故に欲を血氣壯時に逞うするを以て務となすのみ、而して聖賢は、則ち獨り天地を視て無窮となすのみならず、吾れを視て亦以て天地となす、故に身の死するを恨みずして、心の死するを恨む、心死せば、則ち天地と無窮を

争ふ。是故に、一日を以て百年となし、心、凜乎として、深淵に臨むが如し、須臾も放失せざるなり、故に、又嘗て物を以て志を移さず、欲を以て壽を引かず、要するに、人欲を去り、天理を存するのみ。

心已に太虚に歸すれば、身死すと雖も、滅びざるものあり、故に身の死するを恐れず、唯、心の死するを恐るゝなり、心果して死せざるを知らば、世に於て恐るゝ所なし、是に於てか決心あり、此決心は如何なるものも動搖すること能はざる所なり、此の如くなれば、是れ天命を知るものと謂ふべきなり、劄記の下に云く、

利害生死の境に臨み、眞に趨避の心を起さざれば、則ち未だ五十に至らずして、乃ち天命を知るなり、而して其心を動かして、以て趨避するものは、則ち百歳の老人と雖も、實に夢生のみ云云、

中齋死生の間に於て、其決心をなすべき根柢を發見せり、蓋し死生は最も人をして迷はしむる所なり、中齋此點に就いて動搖せざるの工夫をなせり、其萬難に當りて趨避せざるもの、誠に故ありと謂ふべきなり、

第七 虚偽を去るの説

誠實を尙び虚偽を賤むこと、是れ古今の通則にして、東西の一致する所なり。佛敎の十戒に「妄語」といひ、シャイナ派の五戒に「欺騙する勿れ」と云へり。又摩西の十戒にも、爾の隣人に「妄證する勿れ」とあり。凡そ聖人として尊崇せらるゝもの虚偽を戒めざるはなし。中齋殊に虚偽を戒め、誠實を守ること嚴なり。學堂の西掲に「入吾門學道以忠信不欺爲主本」の文字を記し、入門の學生には先づ此事を盟はしめたり。中齋が學良知を以て其主義となすが故に、己れを欺き人を欺かんか、是れ良知に反するの所行なり。己れを欺かず、人を欺かず、唯誠實の心を以て萬事を貫かば、良知の功用顯はれずといふことなし。是れ彼れが虚偽を去るの説を立つる所以なり。劄記の下に云く、

良知を致すの學、但、人を欺かざるのみならず、先づ自ら欺くことなきなり。而して、其功夫、屋漏より來たる戒慎と恐懼と、須臾も遺るべからざるなり。一旦豁然として、天理を心に見る。即ち人欲氷釋凍解す。是に

於て當に酒脱の妙、此れに超ゆるものなきを知るべし、

又劄記の上に中庸の語を引いて云く、

これを身に本づけ、これを庶民に徴し、これを三王に考へて繆らざ、これを天地に建て、悖らざ、これを鬼神に質して疑なく、百世以て聖人を俟ちて惑はず、一言一動必ず此の如くにして心性晶亮廣大天地日月と一般云云、

是れ誠實の心を以て萬事を貫き、其思惟する所、其行動する所、寸毫も不善の痕迹なきを以て能く此に至るを得るなり、中齋は胸中の誠實、自言貌に現はるゝが故に到底隠蔽すべからずとせり、劄記の下に云く、

言貌の文のみ、則ち君子親信せず、而して情と誠とあらば、則ち言貌の文なしと雖も、必ず之れを親信するなり、况んや其言貌に見はるゝを也、呂新吾先生曰く、情足らずして而して之れを文るに言を以てす、其言親むべからざるなり、誠足らずして而して之れを文るに貌を以てす、其貌信ずるに足らざるなり、是を以て天下の事、眞を貴ぶ、眞掩ふべ

からずして之れを言貌に見はす、其れ親むべく信ずべきなるかな、と、
吁是言や人を知るの鑑なり、

是れ孔孟の已に道破する所にして、殊に大學に所謂誠於中形於外は即ち此事に外ならざるなり、ヤエフ、ボエム氏曰く、

天地間にあるものは一として其内面的の情狀を外面に發現せざるはなし、何んとなれば内面的のものは常に外面に表出せんとする傾向あればなり、

是れ氏が萬物に就いて立論せし所なれども、人類の相貌の如きも亦此傾向なしとせざるなり、

第八 學問の目的の說

中齋にありては、詞章記誦は學問の目的にあらず、學問は唯我心を正うするを以て目的とすべきものなり、何故に我心を正うするを要するかなれば、是れ道德の由りて立つ所なればなり、中齋は獨り道德を闡明するを以て學問唯一の職分なりと思惟せり、劄記の上に云く、

學多端なりと雖も、要するに心の一字に歸するのみ、一心正しければ、則ち性と命と皆了すべし。

又劄記の下に云く、

聖學の要讀書の訣、只放心を求むるのみ、此外更に學なし、亦奚ぞ疑ふに足らんや、

若し學問によりて我心を正うするを得ば、良知是に於てか光を放ちて來たり、仁といひ愛といふもの、我方寸の中に萌ざらずといふことなし、然れども東亞諸國の如く古來家族制 *Patrilial potesta* の行はるゝ處にありては、先づ一家の中に於て家長に對して仁愛の情を表すること最も重大の事件たり、故に孝を以て第一となす、學名學則の中に言へるあり、云く、

四書六經、説く所多端なりと雖も、仁の功用遠大なりと雖も、其徳の至、其道の要、只孝にあるのみ、故に我學、孝の一字を以て、四書六經の理、義を貫く、云云、

又藤川晴貞に答ふる書に云く、

博愛なり、徳義なり、敬讓なり、禮樂なり、好惡なり、忠孝の一徳に歸す、驕
なり、亂なり、争なり、總べて不孝に歸す、萬善萬惡要するに孝と不孝と
に歸するのみ、

此れに由りて之れを觀れば、中齋は藤樹の如く孝を廣義に解するもの
なり、彼れ此の如く我心を正うし、孝徳を全うするを學問の正鵠とする
が故に、博く外界の萬物を究明するの餘裕を有せず、單刀直入、我精神上
に向つて工夫を下だし來たる、之れを要するに、實踐躬行を期するもの
なり、劄記の下に云く、

書を讀まば、則ち心得躬行を實ぶ、

是れ其意を述ぶるものなり、劄記の二卷、徹頭徹尾、道義に關するの論に
して絶えて閑文字なきもの、之れが爲めなり、唯、私欲といふものありて
學問を妨げ、人をして薄志弱行ならしむ、故に學問に志さば、先づ私欲を
打拂はざるべからず、中齋乃ち之れを論じて云く、

眞に學に志すものは則ち先づ斯慾を去らざるべからざるなり斯慾を去るの工夫亦只其義に當りてや其身の禍福生死を顧みずして果敢之れを行ひ其道に當りてや其事の成敗利鈍を問はずして公正之れを履まば則ち其慾日に薄うして道義終に家常茶飯となる、

假令ひ私欲を打拂ふも若し學問の目的を誤りて詞章記誦を事とせば、遂に邪路に陥らざるを得ず中齋乃ち博物の學の徒爲なるを論じて云く、

太虚の理を知らずして、而して草木の花を精算し、又其蕊を縷析し、玉石の文を細看し、又其理を織別す、便ち是れ日も亦足らず、勞して功なし、學の此れに類するものあり、知らざるべからざるなり、如し亦太虚の理を了し得ば、則ち萬物皆其中にあり、花蕊文理なるもの、其陶鑄の然らしむる所なり、故に精算と縷析と、細看と織別と、勞せずして其効を見る、

此の如くなれば、動植物學を始めとし、凡そ外界の現象を攻究するの學

科は悉く無用とならん、古來儒教の通弊は實に自然科學を賤視するにあり、然れども陽明學派を以て最も甚しとせず、是れ矯正せざるべからざる所なり、中齋が太虚の理さへ了解すれば、自然科學を學修せざるも、其理は自ら明瞭なるに至るものとすは荒誕無稽取るに足らざるの説なり、然れども徒に識知の一方に馳せて、我心を正うするの要を思はざれば、學問の法を誤まらざるを必とし難し、劄記の上に云く、

書は固より道に入るの具なり、然れども要を知らずして、泛觀博覽せば、則ち徳壞れて、惡殖ゆ、亦已れを敗り、世を亂る、慎まざるべけんや、又云く、

若し私情に従ひ、我意に任せ、以て言動せば、則ち胸萬卷に富むと雖も、要するに、書庫のみ、實ぶに足らざるなり、

寛政以後、世の學者詩文に耽けらざれば、考證に流れ、道德を以て自ら任ずるもの、寥々として、曉天の星の如し、斯時に當りて、中齋此の如き痛快の言をなす、萬綠叢中一點紅と謂ふべきなり、中齋は唯、道德を修めて、聖

賢の域に躋らんと欲するのみ、是故に富貴利達は其志を奪ふに足らざるなり、劄記の上に云く、

丈夫の業は、聖賢惟是れを期するのみ、何の富貴利禄をか羨まん、

中齋己に此の如き志あるが故に、世の英雄豪傑と稱するものの、道徳心より起らずして、情欲上より動くを罵倒して、夢中の伎倆といひ、禽獸の爲に踰ゆといへり、劄記の上に云く、

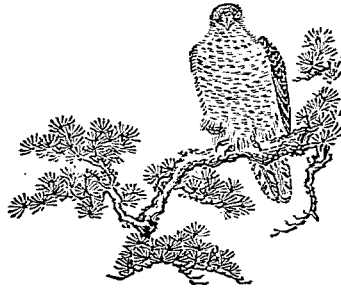
夫れ、古今の英雄豪傑は、多く情欲上より倣し、來たる情欲上より倣し、來たれば、則ち驚天動地の大功業と雖も、要するに、夢中の伎倆のみ、

又劄記の下に云く、

欲路上の大英雄は、志を一時に得と雖も、而も醜を千歳に流し、父母の名を毀ち、禽獸の爲に踰ゆ、三尺の童子と雖も、其惡に切齒す、云云、

中齋が此言洵に適中せり、英雄豪傑の事業、爽快の感なきにあらざるも、道徳心より起らざる以上は、毫も稱揚するに足らず、拿破列翁の如きも、畢竟制すべからざる大盜に過ぎず、道徳を以て自ら任ずるものより之

れを見れば、何ぞ稱揚するに足らんや、况んや拿破列翁に及ばざるもの
に於てをや、



第五 批判

古來和漢の學者は經學を以て第一となし、最も力を經學に盡くせり、經書の中には千古不磨の格言多く、研究いかんによりては身を立て道を行ふに餘ありと謂ふべし、是を以て當時の學者が力を此に用ひたるは決して不可なりとせず、然れども經學を重んずる所より或は一轉して讀書の一方に走り、遂に終身訓詁の研究に埋没して反りて德行に於ては缺くる所あるものあり、是を以て古人已に之れを戒むること切なり、

陸象山曰く、

讀書固より文義を曉らざるべからず、然れども只文義を曉るを以て足れり、とせば、只兒童の學、須く意思のある所を看るべし、

王陽明も亦曰く、

只心を解するを要す、心明白なれば、書自然に融會す、

其説の是非は姑く之れを置き、讀書に耽り、字句に泥み、毫も精神を取る

能はざるの弊を道破せるは自ら痛快の感なしとせず、中齋も亦大に此に注意し、浮觀博覽の弊を打撃せり、(學問の目的の説を參看せよ)彼が學問の膚淺なるに拘はらず、道義の一點に於ては當時の學者をして後に踰若たらしむるに足る者ありしは、全く講學其法を得たるが爲めなり、中齋が學は詞章を主とするにあらず、文義を主とするにあらず、唯、心をみ明かにするを主とす、而して其目的は道義を實行して、聖賢の域に躋るにあるなり、此の如くなれば、彼れが問學の工夫、固より不可なりとせず、然りと雖も、唯、心をのみ明かにするを主とするが故に、其他迂廻せる研究は排して取らず、要するに、客觀的研究は悉く之れを度外視するの傾向あり、唯、主觀的に心を明かにすることを務むるのみにて、道德上得る所多きは疑なし、又迂廻せる客觀的研究の結果を參酌するよりは、直接に我方寸中に於て道德的修練をなすの捷徑なることも亦明かなり、然れども、客觀的研究は心を明かにするに不用なりといふを得ず、客觀的事實の心理を解釋するに、如何に重要なるかは、今日の實驗、心理證

して餘りあるなり、客觀的研究を輕視するは、東洋哲學の通弊とはいへ、陽明學派にありては特に甚しく其害の及ぶ所決して鮮少なりとせざるなり、即ち中齋が動植物の學を無益とするが如き、謬見の甚しきものなり、學問は、獨り倫理に限らず、倫理以外に種々なる學科あるなり、倫理の必要は他の學科の必要を否定するものにあらざるなり、彼れ此點に於て眼、明を缺けりと謂ふべきなり、

中齋此の如く客觀的研究を輕視する所よりして、概して物理に暗く、特に迷信に類することなしとせず、彼れ以爲く、心、太虚に歸するの人は、水に溺るゝことなしと、劄記の上に云く、

内に虚なるものは誤まりて水に墮つれば、則ち皆浮んで沈まず、此れ特り蟲、禽、獸のみならず、人と雖も亦然り、然れども人は則ち沈んで浮ばずして死す、千人にして十人、百人にして百人、曾て一の活者あるなし、何ぞや、此れ他なし、其水に墮つる、即ち生を欲し死を惡むの念を起すこと、彼れより甚し、而して其念既に方寸に塞がる、故に方寸實に

して虚にあらざ、况んや手を振ひ、脚を動かし、咽を破りて叫號するをや、沈んで浮ばずして死す、此れを以てなり、如し其念と動叫となれば、則ち必ず浮んで沈まずして活く、是れ天理なり、又奚ぞ異ならんや、人水中に入りて靜かなれば、自ら浮ぶこと中齋が言ふ所の如し、然れども彼れは尙ほ一步を進めて奇殆なることを敘述せり、云く、

或の曰く、裸程なれば、則ち子の言の如き、或は然るものあらん、衣裝にして墮ちなば、則ちいかん、曰く、心誠敬を存して太虚に歸するの人は、則ち數萬仞の海底と雖も、徐に其帶を解き、其衣裳を脱す、是れ難なし、嗚呼、此れ獨り水に墮る時の術のみならんや、

中齋歸太虚の功を過大にして、遂に此言をなす、其信念の厚きは固より稱揚すべしと雖も、亦迂濶の極、遂に迷信に界するものあるを自覺せざるに至れり、

中齋が所謂太虚は、或は佛教の空に類するが如きことあるも、到底之れと同一視すべきものにあらず、佛教の虚は、現象を超絶せる空にして、形

而上的の旨趣あり、然れども中齋の觀念は徹頭徹尾具體的なり、是故に其太虛の如きも、寧ろ現象界の空間を指して言ふに過ぎず、是故に太虛と個人の關係を説く所、頗る婆羅門教の「ブラーフマン」の説に類すと雖も、婆羅門教の如く、形而上的ならず、哲學としては、尙ほ幼稚なる觀念あるを免れざるなり、劄記の上に云く、

眼を開いて天地を俯仰して以て之れを觀れば、則ち壤石は則ち吾が肉骨草木は則ち吾が毛髮、雨水川流は則ち吾が膏血精液、雲煙風籟は則ち吾が呼吸吹嘘、日月星辰の光は、則ち吾が兩眼の光、春夏秋冬の運は、則ち吾が五常の運にして、太虛は則ち吾が心の蘊なり、嗚呼人七尺の軀にして、天地と齊しきこと則ち此の如し、三才の稱、豈に徒然ならんや、宜しく氣質を變化し、以て太虛の體に復すべきなり、

此れに由りて之れを觀れば、中齋は世界を大なる人體の如くに思惟せり、「ブリハド、アトラニヤカ、ウバニシヤド」の初めに世界を供鬘馬 Oplek-loss の身體として形容せる處、甚だ之れに似たるものあり、又大自在天派

が世界を大自在の身體とする觀念も亦之れと相類するものあり、(百論疏上中を參看せよ)要するに是等の想像は奇は太だ奇なれども思想の幼稚なるより起るものなり。

中齋は身外の虚を心の本體とせり、然るに身外の虚は即ち無限の空間にして一切萬物を包容す、是故に身外の虚を以て心の本體とせば、心の本體は一切萬物を包容するものなり、其世界觀たる殆んど唯心の如くにして未だ全く唯心論といふを得ず、彼れが觀念餘りに具體的にして唯空間を以て心の本體とするを知りて未だ一切萬物も亦心の所現といふに至らざればなり、空間が果して心の本體ならば、空間中に填塞する一切萬物は何等として解釋すべきか、空虚 *Yanmu* の心たることは、姑く之れを許容せん、然れども充塞 *Pleum* の何たるかは、遂に了解し得られず、若し中齋にして一層深く推論せば、更に一轉して充塞も亦心に過ぎず、道破し、心外無別法と同一の結論に到達せしならんも、彼れは終局まで現象を超越するの眼光を有せざりき、是れ其思想家として淺

薄の訾を免れざる所以なり、

其他太虚主義に就いて尙ほ誤謬の指摘すべきものあり、何ぞや、中齋は物質界の空虚と精神界の空虚と混同して、其差別を看過せり。中齋の考にては吾人方寸の虚は直に身外の太虚に通じ、彼れと此れと區別なしとするものなり、然るに吾人方寸の虚とは情欲を打拂つて鑑空衡平に歸したる心を謂ふなり、然れども此の如き虚は全く精神上の虚にして、身外の虚に通ずといふべきに、あらず、若し、身外の虚と相通ずるものを求めば、心臓中の虚に於てせざるべからず、然れども斯くするときは、何れの虚も物理上の虚たるに止まりて、道徳上の旨趣は遂に得らるべくもあらざるなり、劄記の上に云く、

心は即ち五臓の心にして、別に心なるものあるにあらざるなり、其五臓の心は僅に方一寸にして、天理を蘊蓄す、

劄記の下に云く、

口耳の虚より五臓方寸の虚に至るまで、皆是れ太虚の虚なり、而して

太虚の靈は盡く五臟方寸の虚に萃まる、便ち是れ仁義禮智の家する所なり、云云、

中齋は此の如く、物理上の虚たる心臓の虚と無形に屬する精神上の虚とを混同せり、假令ひ心臓の虚は、身外の虚に通ずと、するも、此れに由りて、精神上の虚も亦身外の虚に通ずといふを得んや、是れ中齋が心てふものい、觀念に於て曖昧模糊なりしが爲めに起れる結果なること、疑なきなり、

中齋は又形質あるものは、如何に廣大なるも生滅を免れず、獨り虚は滅することなし、唯壺の虚と雖も、其虚は太虚に歸して萬古不滅なるものなりとせり、虚の滅せざること、何人も否定せざる所にして、固より論證を缺たざるなり、然れども唯、虚のみ不滅なりと、するは、謬見なり、現象界の生滅は盡く假現的 apparent にして、眞に生滅あるにあらず、一塵と雖も、悔るべからず、是れ永遠不滅のものなればなり、吾人は一粒の米と雖も、造ること能はず、又滅すること能はず、凡そ造るといふもの、眞に造るに、

あらず、凡そ滅すといふもの眞に滅するにあらず、造るといひ、滅すといふものは皆變化に過ぎず、變化は變化するもの、實質に關するにあらず、實質は去來今に涉りて變化せざるものなり、物質不滅論の如き、勢用保存説の如き、皆實質の不變を證するものなり、是故に獨り虚のみ、不變といふべきにあらず、形質あるものも、亦不變なり、状態は變化すべきも、實質は之れに拘はらざるなり、果して然らば、唯、唾壺の虚のみ、太虚に歸して不滅なるにあらず、唾壺の實質も世界の實質に歸して不滅なるものなり、是に至りて中齋の學の未だ備はらざるもの少しとせざるを知るべきなり、



第六 中齋門人

宇津木、名は靖、字は共甫、矩之丞と稱す、彦根の人、

松浦、名は誠之、字は千之、

湯川、名は幹、字は用譽、

松本、名は乾知、字は道濟、

但馬、名は守約、字は直養、

白井、名は履、字は尙賢、

橋本、名は貞、字は含章、

磯矢、名は信、字は子行、

岡本、名は維純、字は大假、

渡邊、名は漸、字は正邦、

分部、名は復、字は天行、

志村、名は善繼、字は周次、

大鹽、名は尙志、字は士行、格之助と稱す、中齋が養子なり

林良齋、名は中久、讃州の人、後に出だす、

大井正一郎、

秋田精藏、阿波の人、

稻川某、

疋田竹翁、攝州の人

山口平吉、

渡邊重左衛門、

瀬田犀之助、

小泉延次郎、

橋本忠兵衛、

橋本梶五郎、

田能村直入、

田結莊千里、

分部簡齋、加賀の人、

第七 中齋關係書類

鹽逆述十五卷 寫本

大鹽平八郎始末之記一卷 寫本

大鹽平八郎一件二卷 寫本

右三書は中齋暴舉の顛末を記述せるものなり、就中鹽逆述は資料を
收載すること最も豊富なり、

大鹽平八郎一卷 國府種徳著

此書は偉人史叢中に收載せり、

大鹽中齋の性行及び著述 大西照

六合雜誌第二百一號乃至第二百二號にあり、

大鹽中齋の學說 大西照

六合雜誌第二百三號乃至第二百五號にあり、

日本之陽明學 高瀬武次郎著

陸象山 建部遜吾著

大鹽平八郎 猪俣爲治著

明治三十一年九月十六日以下の東京朝日新聞に連載せり、

大鹽平八郎の哲學を論ず井上哲次郎

國民之友第百六十三號の附録に掲載せり、

大鹽平八郎の話 田中從吾叙述

名家談叢第十二號にあり、

再び大鹽平八郎に就て全上

名家談叢第十號にあり、

笑鬪樓筆談 木村芥舟著

洗心洞餘瀝

反省雜誌第十三年第一號及び第三號にあり、

見聞隨筆 藤田東湖著

大鹽平八郎 松村介石著

井上博士講論集第二編

近世偉人傳初編〔卷下〕蒲生重幸著

陽明學階梯高瀬武次郎著

近世德育史傳足立翠園著

大鹽平八郎檄文一卷

史籍集覽及び史料叢書の中に收載せり、

大鹽中齋の哲學征木祖淳

東洋哲學第三編の第一號以下に連載せり、

實事譚松村操編輯

青天霹靂

大阪一揆録

天保日記

日本名家人名詳傳〔卷之上〕



第二章 宇津木靜區

中齋を言へば、必ず靜區を思ふ。靜區と中齋と到底絶つべからざる關係ありて存す。是を以て中齋に次いで靜區を論ぜざるを得ず。靜區、姓は宇津木、名は靖、字は共甫、矩之丞と稱す。靜區は其號なり。後又名を峻、字を東昱に改むといふ。彦根藩老職某の次子にして、實に詩人岡本黃石の實兄たり。幼にして越前某寺の養子となりしも、十七歳の時に至りて慨然として曰く、大丈夫、士大夫の家に生まれ、自ら激昂して以て一世に馳聘すること能はず。碌々として浮屠氏に終へんやと、遂に辭し去りて京都に寓し、備書以て自ら給すれども、貧困殊に甚しく、冬日衣を重ねず、食饈或は缺くことあり、人或は之れを憐んで衣を贈るも、敢て受けず。時に頼山陽、中島棕隱の文名、京師に喧し、困りて往いて學ぶ。嘗て陸象山集を讀み、其自立の説を見、嘆じて曰く、儒者當に此の如くなるべしと、是に於て專精覃思、之れを學ぶこと年あり、會、大鹽中齋が姚江の學を大阪に唱ふ

るを聞き即ち往いて之れと心理を論じ、頗る其説に服し、竟に弟子の禮を執るに至れり、中齋平生高く自ら標置し、人に於て許可する所なし、獨り、靜區を待つに朋友を以てし、敢て之れを弟子視せざるなり、靜區洗心洞に居ること數月にして、將に去りて四方に游ばんとす、行くに臨んで中齋名刀一口と金十兩とを贈り、深く屬望する所あり、靜區乃ち中國及び鎮西に歴游し、遂に長崎に寓し、生徒を教授す、生徒六七十人あり、居ること八月にして、僕友藏を從へて郷里に歸省せんとし、復た大阪を経て中齋を訪ふ、時に二月十七日の黄昏なり、斯時に當りて中齋は方に亂を作さんとしつゝありければ、其夜靜區に告ぐるに密謀を以てして其加盟を促がせり、靜區乃ち其亂民の爲たるなからんかを述べ、且つ加盟の諾否は熟考の後、明夜に至りて答へんことを約し、翌日筆を掬いて一書を草して云く、

一筆申殘候、追日暖和相成候處、御兩親様奉始益御機嫌克可被成御坐奉、恐悅候、然者私儀先達而小倉表より申上候、通雨天勝に候得共、日積

大體十七日夕刻大阪安治川へ着船仕、四ヶ年以前出立之砌、師弟之契約仕候。平八郎魔身に入り候哉、存外之企有之。大阪町奉行を討取、其外市中放火致し候而、御城をも乗取可申杯と企候。謀反にて私荷擔可致被申強て申聞候に付、種々諫言致し候得共、申出候事返さぬ氣性故、容易には承知も仕間敷奉存候。乍去此儘見捨歸り候ては、武士道不相立。其上斯の如き大望相明し候事故、生きては返し申間敷。乍去荷擔仕候得ば、第一に御家の御名を穢し、忠孝の道に背き、師を見捨ては、義理立不申。無據一命を差出し、今夜平八郎始め徒黨の者共へ、篤と利害を申聞。忠孝仁義相立候襟、仕度奉存候。何共重々御前襟、萬端宜敷奉願候。是迄厚き御慈愛を蒙り、私歸國も無程と御待も被下候儀と奉存候。得者猶更歸國難忘事、未練の者と思召も恥入候仕合に、御座候斯る時節に、乗り合せ候は私武運に盡候儀と奉存候。襟々具に申上度候得共、何れ即日様子は御地へ相知れ可申候間、不申候。大阪騒動と御承知被下候へば、矩之丞、義は相果候。義と被思召被下候。最早時刻に可相成心急ぎ

荒増申上候、餘は御察奉願候、以上

二月十八日

宇津木矩之丞

尙々友藏儀、永々旅中厚く世話致吳候、未だ一禮も不致相別れ申候間、宜敷御傳、可被下候、以上、

其夜の深更に及んで死を決して、中齋を諫め、其舉の非なるを痛論す、然れども中齋之れを容るゝこと能はず、十九日の早曉、靜區書を友藏に託して、郷里に達せしむ、友藏共に去らんことを請ふ、靜區曰く、賊余に注目す、逃避するに地なし、汝は妙齡なれば、賊必ずしも意を留めず、宜しく速に去るべしと、友藏乃ち共に死せんことを請ふ、靜區曰く、余、汝と皆死せば、天下誰れか我れを以て亂民賊黨となさざるものぞ、則ち辱君父に及ぶ罪、これより大なるはなし、汝果して能く書を郷里に達し、我母及び兄弟をして、吾が義に死するを知らしめば、則ち汝の我れに報ゆる所以のもの、厚しと、會大井正一郎等數人刀を提げて來たる、靜區從容として頭を伸べて之れを受く、時に年二十有九、最も惜むべしとなす、靜區學實行

を以て先となし論議を貫ばず、初め朱子を以て宗となし、後象山、桃江を主とす、其弟子を教ふる極めて嚴なり、門人岡田恒庵あり、長崎の人、今尚ほ生存して、醫を業とす、是れ即ち當時の僕友藏なり、靜區の詩集一卷あり、題して浪迹小草といふ、岡本黄石の刊行する所に係る、其中琅々誦すべきものあり、今左に三首を掲ぐ、

逢坂關

斜陽古關路、渺渺客心悲、故國殘山坼、前途老樹危、一身甘棄物、多病遇清時、可笑水雲跡、仍將書劍隨、

海樓

茫茫千萬里、豪氣箇中橫、山向中原斷、潮通異域平、生涯佩一劍、海內任孤征、天地容微物、臨風恥聖明、

客中除夜

沾沾潛思逐清塵、苦學何時始立身、二十六年將盡夜、三千餘里未歸人、寒燈照影瘦相顯、凍筆寫情愁更眞、韓子辛勤廬未、有何堪客裏、又迎春、

詩は反りて中齋に優れり、卷末に贈別於子栗、擇言の一文あり、云く、

吾夫子太虛良知之說、人多疑之、偶有左袒之者、則或引袖而笑之、或叩席而排之、甚焉、則側目於坐隅、如視酷吏之虐人者、此所謂意見作障者、而僕所目擊也、如爭之、則徒援彼怒心、我亦不能不生求勝之心也、其亦害道者不勸、足下歸國後、其或有此事、當此時、願一思僕言、夫人不知不慍、則君子也、而如吾夫子之教、固亦唯在信我知耳、又將何求勝之爲、然如親故及朋友、或欲開諭之、亦當有法、所謂就其良心發見之處、而拈點之者歟、其他亦在願足下之知何如矣、僕竊謂足下之性甚直、故所不措物者亦在矣、雖然、如容他忠言、則亦有人之所不及者、是因足下之管容、僕言而知之、所以區區婆心、敢以告焉、嗚呼、如開諭於人、則難甚、足下願一就夫子質之、庶幾乎自當有所安也、是僕欲自初告之言也、足下請擇焉、

文中吾夫子とあるは中齋の事ならん、靜區が區々として中齋の學を辯護するを以て之れを觀れば、其尊信の深かりしこと、以て想見すべきなり、然れども中齋が亂をなすに當りて靜區之を非として加盟せず、斷然

反抗して師弟の義を絶ちしと見え、彼れを呼ぶに賊を以てせり、抑、靜區が中齋に反抗せしは、大義名分を重んずるが爲めなり、彼れ中齋が擧を以て叛逆ハとなせり、故に之れに與みするは不忠不孝なりと思惟し、肯て加盟せざりき、今日よりして之れを見れば、中齋が擧必ずしも然く不正不義なるにあらず、固より亂をなすといふことは宜しからず、然れども幕府の壓制に對して起るは是れ義憤なり、即ち人民を助けて強者に敵するなり、即ち上の不正不義に對して鬱屈せる下情を達するなり、中齋は決して天皇に向つて亂をなすにあらず、唯、幕府の暴虐に對して起るものなり、幕府は一時天皇の權を奪掠せるものなり、之れに向つて中齋が義憤を洩すも何ぞ必ずしも咎むるに足らんや、然るに靜區之れを呼ぶに賊を以てす、其、譏見の狭小にして、倒逆せるものあるは遺憾なりとす、然れども彼れが人生の大節に臨んで死を決して毫も惑はず、氣象凛として千秋を貫くものあるは稱揚せざらんとするも能はざる所なり、

第三章 林良齋

林良齋名は久中字は□□良齋は其號なり又自明軒と號す讚州多度津の人其先世藩老たり良齋亦初め藩主に仕ふ然れども早歳多病にして仕ふること能はず因りて其職を致して堀江の弘濱の原に弘濱書院を立て此に居り力を姚江の學に專にし吉村秋陽春日潛庵池田草庵等と交を結べり草庵の如きは良齋を以て千古の心友となせり良齋嘉永二年五月四日を以て歿せり鹽逆述に中齋門人として良齋を擧げ注して云く、

是[△]は[△]醫[△]師[△]の[△]積[△]り[△]に[△]て[△]讚[△]州[△]に[△]仕[△]へ[△]内[△]弟[△]子[△]と[△]成[△]る、

此れに由りて之れを觀れば良齋は中齋を師とせしなり草庵嘗て弘濱書院記を作り良齋を形容して曰く、

君[△]容[△]貌[△]清[△]癯[△]風[△]神[△]蕭[△]疎[△]鬚[△]毛[△]除[△]か[△]ず[△]被[△]服[△]民[△]庶[△]に[△]類[△]す、

其超脱の狀觀るが如し良齋著はす所自明軒文鈔一卷あり彼れ嘗て潛

庵に與ふる書に曰く、

聖人の聖人たる所以のもの無我なるのみ而して吾人の獨知一點天機の自然人力得て與からず則ち本ど無我なり其我あるもの乃ち意欲のみ今意をして消せしめんと欲し其本無の天を復せんと欲するは他なし其獨りを慎むにありのみ書を讀み義を求むること亦廢すべからずと雖も苟も獨の以て之れに主たるなくんば則ち玩物喪志たらざるもの幾ど希なり、

又秋陽に與ふる書に云く、

竊に謂へらく聖人之學無我を以て的となし慎獨を以て功となす聖賢時によりて教を立て其言同じからざれども其要領歸宿を求むるに獨に事あるにあらざるはなし學者苟も徒に博渉して其要を知らざれば適以て傲を長じ詐を滋すに足る固より其れ我れの私あるのみ、

其言甚だ味あり此れに由りて之れを觀れば亦胸中獨り得る所なりし

こと疑なきなり、吉村秋陽が良齋に答ふる書に云く

往年但馬の池田子敬、弊虚を過ぎ、具に高明篤信、好學の狀を説く、私心
翹企既に久し、云云、凡そ吾黨將に相與に志を同うし、先賢の墜緒を繼
がんとす、宜しく肝膈を洞開し、謙虚善を樂むの誠之れを鬼神を質し
て愧ぢなかるべきなり、來教に所謂形軀論ずるに足らざるもの實に
我心を獲たり、此の如くにして而して後千里も亦同黨なり、嗚呼、此學
乾坤の正氣なり、之れを身に體して立つ所あらんか、即ち所謂丈夫落
々天地を掀かすものにあらざるか、即ち所謂往を繼ぎ來を開くの功
にあらざるか、豈に人生の一大快事にあらざや、區々たる窮達榮辱、何
ぞ言ふべけん、云云。

り、其相許すこと此の如し、乃ち彼我交情の密なる、畧想見するを得べきな



汝知らずや、予の正義を、
守する一歩も、亦人に譲ら
ず、予は死を怖るしもの、
あらず、直に死すと雖も、節
を變せざるなり、

ソクラーテス

第四篇 中齋以後の陽明學派

大鹽中齋以後陽明學派の人として算ふべきもの甚だ少きが如しと雖も、精細に考察し來たれば、亦時に篤學の人なきにあらず、彼の間接に陽明學の影響を受けたるものに至りては頗る吾人の注目を惹くものあり、山田方谷の如きは、經濟の才ありて、治績の見るべきもの少しとせず、吉村秋陽、奥宮體齋、春日潛庵、池田草庵、東澤瀉の徒は皆篤學の士にして力を心術に用ふることを主とせり、横井小楠、佐久間象山、西郷南洲、及び吉田松陰の如きは、直に陽明學派と稱すべからざるも、亦陽明學より得來たる所あるは疑なし、果して然らば陽明學の近く維新の大革新に關係あること決して偉大ならずとせず、因りて其梗概を敘述し、以て思想の伏線を明晰にせんと欲す、



第一章 吉村秋陽 附吉村斐山

佐藤一齋の門、人材を出だすこと少しとせず、吉村秋陽亦其一人なり、秋陽名は晋、字は麗明、重介と稱す、秋陽は其號なり、安藝の人、父は小田三左衛門、吉村氏の養子となる、故に其姓を冒す、秋陽生まるゝの歲、三左衛門歿す、秋陽乃ち母氏の教督により、幼より師に就いて書を讀む、十八歳にして京師に遊び、壯なるに及んで、又江戸に遊び、佐藤一齋の門に入り、始めて陽明の學を修め、終身其主義を守りて渝らず、秋陽江戸より還るに及んで、始め廣島に居り、子弟を家塾に教ふ、後又三原に移り、専ら力を講學に用ふ、又嘗て江西に赴き、藤樹書院に謁し、古本大學を講ず、士民之れを聽いて、涙を流すものありしといふ、慶應二年十一月十五日、疾を以て歿す、享年七十、城西の香積寺に葬る、秋陽著はす所、格致臆議一卷、大學臆議一卷、王學提綱二卷、讀我書樓遺稿四卷あり、男駿の撰に係る先子行狀には、所著讀我書樓文章四卷、詩草三卷とあり、遺稿四卷は蓋し其抄録を

刊行せるものならん、其他尙ほ纂定する所、戦國策八卷、校點する所、汪武曹四書大全、及び儒門語要あり、

秋陽一たび王學を一齋に受けしより、深く之れを崇信し、終身其圈套中に留まれり、池田草庵、秋陽が墓碑を作りて曰く、

佐藤氏之學、主姚江、故先生終始遵守不渝、惟其間矯弊歸正、動靜一致、而以靜爲入手之要、亦可謂善學者矣、

秋陽別に一家の創見あるにあらざるも、其志は頗る厚し、曾て讀書吟を作る、云く、

處世斯須爾、蘇化北邙塵、及時宜自立、卓識古之人、古人真可學、豈由富與貧、每怪沈迷徒、終年苦不足、戚戚攪中腸、如身在桎梏、物類有同異、變蛟適相憐、只應隨所好、勿耕佗人田、吾安一枝安、緜閑度寒暑、久已甘迂腐、區區空期許、

秋陽深く中江藤樹を追慕し、曾て藤樹先生真蹟の跋を作る、其文に云く、右藤樹先生書蹟、凡そ六十八字、大溝藩恒河子健の藏する所、端、慤、温、粹、

有道の氣象楮墨間に流露す人をして仰企己まざらしむ方ち固より楮墨を以て視るべからざる者天保十四歳晋西江に適き先生の墓に展謁し所謂藤樹書院なる者を問ひ堂に躋りて神主を拜し遺物を覽る昔方に春季風日曠臨屋後の簾既に老いて花なし亦舊物なり曩昔を追想し低徊悲佇去るに忍びず己に旅次に還る子健偶此幅を出だし其後に題識せんことを請ふ操觚の際涙潸々として下る猶ほ書院に過ぎる時のごときなり蓋し夫の有形の屬時ありて必ず聚散す獨り形を待ちて後立たざるもの終に窮盡なし故に能く曠世にして相感ずるものあり是れ果して何物ぞや因りて又慨焉として之れを久らす

遺稿の末語錄廿六條を附存せり左に其最も學者に適切なるもの七條を擧げん

一 學に力むるもの善に循ひ惡を除く所以なり必ず善に循ひ惡を除か

ん、と欲せば、則ち之れを事に求むるを待たずして、先づ之れを心に求む。心は乃ち學者用力の地にして、靈昭の機存す。一念の發する所善たり、惡たり、能く自ら其眞妄曲直の分を辨ずるものあり、故に凡そ應事接物一言一動の際より大となく小となく、必ず之れを此に扼す。苟も其れ善ならんか、輒ち従つて之れを養ひ之れを充たし、其善を遂げしめて後止む。敢て利害得喪の牽く所とならざるなり、苟も其れ惡ならんか、輒ち従つて之れを遏め之れを絶ち、其惡を消さしめて後止む。敢て利害得喪の牽く所とならざるなり、凡そ居る所にして其功を用ひざるはなし、其前賢の訓誨を誦し、歴世の成敗を鑑みるは、皆之れを用ひ力の地に約して、以て己れに切にす。則ち夫の靈昭の機日に益熟し、眞妄の辨日に益明かなり、然して後始めて進取の功を見る。是れ所謂精一の學。堯舜已來聖々相承の要訣、實に此に外なる能はざるなり。夫れ書を読み古を考ふるは、固より學の第一件、然れども徒に文字言語を求めて、己れに融會貫通する所なければ、日に數千言を記すと雖も、士

君子心を立て行を制するの學に非ず、我れの知る能はざる所なるのみ、

二

事物は見るべきの性、命性命は見るべからざるの事物、一原間なきの妙此の如し、故に善く功を用ふるもの時に係はず、境に著かず、常々一點の獨知を慎むのみ、

三

聖門の學、人天を統べ、古今を貫き、其體備はらざるなし、之れを天徳といふ、其用達せざるなし、之れを王道といふ、合して之れを言へば、道といひ、分ちて之れを言へば、義といふ、而して皆一心なり、心は神化の會にして、道義の由りて出づる所、人の人たる所以なり、是故に大にして綱常小にして起居語默より以往、其端緒窮むべからざるに至るも、亦我心に外ならず、心の至貴至重なる原と此の如し、而して一たび私己に蔽はるれば、則ち百病即ち此に聚る、其患勝けて道ふべけんや、是れ

人生の學なかるべからざる所以なり。學は其私を治めて其本に復するの功なり。用功の目一にあらざりて其歸宿する處敬といふに過ぎざるのみ。斯一字實に聖々相承の一滴血。惟反躬實踐の者に於て然して後、其之れを得るに庶し、世間多少の學人若し時に及び志を立つる能はざれば惜むべし。終身憧擾精神を錯用し、直ちに風過花飛の時に到りて後平生を回顧すれば、黯然消沮亦傷しからずや、噫。

四

學は自反するのみ切に物と對をなすべからず、百般の病痛皆此に生ず。夫れ物と對せざれば物なし。物なければ我なく、物我混同す而して其感應の際只一箇己むを得ざるの心を盡くす。孝は以て自ら孝を成し、悌は以て自ら悌を成し、故らに孝ならんと欲し、悌ならんと欲するにあらざるなり。日用萬變にして吾が操る所一なり。自反するもの此の如くなるに過ぎず。

五

一毫懈心の生ずるは即ち百惡の發る所、

六

聖人毎に人の多言を喜ばず、教戒切に至るは、何ぞや、多言すれば、精神外に洩る、氣象浮泛、與に道に進むに足らず、言寡ければ、則ち思深し、思深うして後、才に自己、多少の病痛を覺ゆ、始めて功を著くる所の處あり、此意惟、己れに反るもの、自ら之れを知る、

七

夫子云く、習相遠しと、間、管て自ら點檢するに、平生全く志なしといふべからず、而して道進まず、徳修まらず、患は大抵流俗に習ひ、自ら抜くこと能はざるにあるのみ、妻子僮僕は習人なり、居養常あるは習境なり、其間執る所皆習事なり、且つ古人尤も師友の益を重んず、先師夢奠の後、儀、刑日に、遠く朋友星散し、復た集むるに由なし、習人に接し、習境に對し、習事に安んじ、今日此の如く、明日此の如く、一月一年亦此の如くならずば、將た何を以てか、進修の効を望まんや、然れども、豪傑の士は、

女○王○な○し○と○雖○も○猶○ほ○興○る○乃○ち○知○る○眞○志○あり○て○力○を○極○む○る○も○の○果○し○
て○智○の○能○く○圍○す○る○所○に○あ○ら○ざ○る○な○り○殘○年○幾○も○な○し○當○に○心○に○失○ひ○て○
自○ら○勵○む○べ○し○、

是等秋陽の言、皆姚江より得來たるもの、人を驚かすの奇論なしと雖も
精細に翫讀すれば、亦學者の弊を救ふに適切なるものあるを知るべき
なり、

嗣子、斐山、名は駿、字は景松、隆藏と稱す、本と門人なり、養はれて嗣子と
なる、明治十五年を以て歿す、享年六十有一、斐山嘗て曰く、良知は是れ
乾坤の正氣、孔孟と雖も、自ら之れを私するを得ず、况んや程朱、陸王を
やと、亦秋陽を紹いで、能く家學をなせるものなり、



第二章 山田方谷 附河井繼之助

方谷、名は球、字は琳卿、通稱は安五郎、方谷と號す、備中哲多郡西方村の人なり、文化二年を以て生まる、父は重美、母は西谷氏、幼にして聰明、八九歳にして九川松陰の門に入り、程朱學を受け、兼ねて詩文を屬す、老輩と雖も、能く及ぶことなし、時人稱して以て神童となす、客あり問ふて曰く、兒學問して何事をかなすと、彼れ乃ち聲に應じて曰く、治國平天下と、客驚嘆して大に望を屬す、父曾て家本と武門なるも、中葉衰落して久しく農伍に混ざるを痛み、屢、彼れを戒むるに家を興すの事を以てす、母必ず傍より之れを贊し、一日、彼れが髮を撫し、告げて曰く、佳兒、必ず克く父の志を成せ、然れども、曷、起勢に、乘すれば、頭、躓せざるもの、鮮し、汝に、して、終を、全くせば、吾、願、足れりと、乃ち、銘肝、忘れずといふ、十四歳の時、述懐の詩を作る、云く、

父○兮○生○我○母○育○我○天○兮○覆○吾○地○載○吾○身○爲○男○兒○宜○自○思○茶○茶○寧○與○草○木○枯○憐

慨○難○成○濟○世○業○蹉○跎○不○奈○隙○駒○駢○幽○愁○倚○柱○獨○呻○吟○知○我○者○言○我○念○深○流○水
不○停○人○易○老○鬢○無○緣○啓○胸○襟○生○育○覆○載○真○罔○極○不○識○何○時○報○此○心○

此れに由りて之れを觀れば、彼れが早熟の兒たりしこと、復た疑ふべからず、彼れ是歳を以て母を喪ひ、翌年に及んで又父を喪ふ、是を以て父母平生の訓を憶ふ毎に、悲憤胸に填つ、乃ち暇あれば誦讀懈らず、講學頗る勉む、備中の松山藩主寛隆公之れを聞いて學資を給し、淮中扈從に班し、藩學會頭となる、時に年二十五、居ること二年にして、請ふて京師に遊び、時の諸儒と交り、尋いで江戸に至り、王學を佐藤一齋に受け、佐久間象山、鹽谷宏陰等と相共に研精し、凡そ八年にして歸り、業大に進む、祿六十石を賜ひ、學頭となる、彼れ乃ち循々として教授す、闔藩の子弟始めて學に嚮ひ、遠近の生徒亦麇集し、家塾恒に盈つ、其示某生の作に云く、

吾○氣○浩○然○同○太○虛○何○曾○半○點○落○形○軀○纔○持○私○見○分○彼○我○究○竟○鍛○成○小○丈夫○
弘化元年松叟公世子を以て國を監するに及び、方谷をして經史を侍讀せしめ、其論説を聽いて始めて大に用ふべきを知る、幾もなく公、封を襲

き先づ方谷を拔擢し、藩の財政を革めしむ、彼れ乃ち財政を整理し、宿弊を一洗せり、公又彼れをして郡宰を兼ね、民政を革めしむ、彼れ乃ち賄賂を絶ち、奢靡を禁し、郷校を設け、貯倉を置き、道路の隘きものは之れを拓き、川溝の塞がるものは之れを疏し、巡吏を嚴にし、郷兵を編み、以て不虞を戒め、之れを行ふこと十年、是に於てか風俗一變、治績大に顯はる、當時昌平日久しく列國奢侈に趨き、文武の何事たるを知らず、偶、松山藩の刷新功を奏するを聞いて、四方より來觀するもの跡を絶たず、殊に方谷に就いて理財を問ふもの最も多し、文久元年彼れ公に従ひて江戸に如き、始めて咯血を患ふ、乃ち歸り養ふ、然れども天下多事の秋に際するを以て久しく閑處に留まること能はず、或は進んで公の事業を助け、或は退いて藩の兵備を嚴にし、國家の爲めに精力を竭盡し、成功多からず、せざ、方谷の松巽公に於けるは、猶ほ、番山の芳烈公に於けるが如く、管に水魚の交のみならず、ざるなり、方谷年老いて益、世事の煩はしきを厭ひ、去りて刑部山中に寓す、時に四方より來たり學ぶもの實に數百人の多きに

及ぶ備前の開谷、爰は本と芳烈公の創設する所と雖も、弛廢已に久しかりしに、時人方谷を迎へて之れを再興するを得たり、是を以て方谷時々往いて之れを監督せり、開谷は蕃山と近く、山下に蕃山が邸宅の址あり、衆乃ち小廬を此に築き、以て彼れが遊息の所となせり、彼れ此に來たる毎に景慕の念起り歸ることを忘れたりといふ、詩あり云く、

晩年操節潔於霜、殘礎荒涼古寺傍、身竄天涯窮益固、名傳海內久愈芳、聊將新築存遺趾、莫是舊魂還故鄉、留宿連宵無限恨、隔林鐘磬斷入腸、

明治九年の冬に至りて、宿痼再び發し、明年の夏に至りて終に癒えず、將に寶を易へんとするに當り、家人に命じて陽明全集と公賜ふ所の短刀を陳列し、香を焚き、默謝して長逝せり、享年七十有三、春日潛庵の死に先つこと一年にして即ち西郷南洲亂をなすの歳なり、

方谷は學理よりは事功に力を用ひたり、故に彼れが學說として別に敘述すべきものなし、著述としては方谷遺稿三卷ありと雖も、收載する所、詩文の外に出でず、其中差注目すべきものを擧ぐれば、答友人某書に

云く、

古の賢者は、内に實得あり而して後、一家の言を立つ、周の靜を主とする程の敬を持す、陸の徳性を尊ぶ、朱の間學を道ふより、以て王氏の良致を致すに、至るまで、其言各殊にして、其道に得るあるは一なり、所謂途を殊にして歸を同うするものなり、故に後の其言を觀るもの亦内に得る所あり、則ち靜を主とする可なり、敬を持す可なり、徳性を尊ぶ可なり、問學を道ふ可なり、良知を致す、固より可なり、將に自ら辯説の容るべきなからんとす、若し猶ほ未だ得る所あらずして、遽に其失を議せば、獨り周程朱陸の議あるを免れざるのみならず、則ち王氏の説と雖も、癡疵なきを得んや、

此れに由りて之れを觀れば、方谷の見る所決して偏狭ならず、陽明の學と雖も、完璧とせざるなり、然れども彼れが純然たる王學者なることは、到底否定すべからず、讀陽明集の詩に云く、

畢生事業自眞儒、善惡何須爭有無、四句一傳成妙訣、枉教後學費工夫。

方谷の陽明を尊崇すること至れりといふべし、彼れは亦頗る禪味を帯ぶる所あり、曾て歲晚書懷十篇を作る、殆んど禪家の偈を讀むが如し、其序に云く、

悟○則○法○身○迷○則○色○身○本○非○有○分○界○一○切○平○等○渾○融○大○小○

佛敎の教義を知るにあらざるよりは此妙理を道破する能はず、冬夜讀書の詩に云く、

顏○壁○雪○三○尺○寒○空○月○一○輪○堅○凝○天○地○氣○聚○在○讀○書○人○

又論學擊賦似諸生の作に云く、

一○圓○大○鏡○是○吾○神○只○有○工○夫○拂○點○塵○更○向○鏡○中○求○鏡○去○鏡○平○却○誤○幾○多○人○

此の如く彼れが詩を讀み來れば、往々禪氣に襲はるゝの感なしとせず、川田斐江曰く、先生初め宋學を尙、次後佐藤一齋に従つて、良知の説を講じ、參するに禪旨を以てし、豁然として自得する所ありと、蓋し此に見るあるなり、

方○谷○蕃○山○と○相○似○た○り○密○に○其○學○問○蕃○山○と○同○じ○き○の○み○な○ら○ず○其○事○蹟○も○亦○

蕃山に類せり。而して其出處の如き殊に蕃山の舊跡に接せり。是を以て世人稱して以て小蕃山となす。藝江曰く、藤樹道徳ありて功業なし。蕃山功に豊にして文に蕃なり。齋文を能くして而して徳と功とは及ばず。先生三子に於て長を取り短を補ひ別に一家をなす。豈に曠世の偉器ならずやと。推獎過當固より論を埃たす。思ふに方谷は潜庵と伯仲の間にあり。唯其見る所は差之れと異にして。良知よりは寧ろ誠意を尙べり。

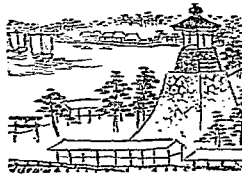
〔復春日潜庵書に曰く、

王氏の學誠意を以て主となす。致良知は即ち誠意中の事のみ。然れども必ず格物を以て之れに配す。蓋し致良知にあらざれば以て誠意の本體を觀るなし。格物にあらざれば以て誠意の功夫を成すなし。二者並び進んで而して後意誠なり。今足下の言致良知に專にして格物に及ばず。乃ち王氏の學と異なるなからんか。

此れに由りて二氏取る所の必ず同一ならざるを知るべきなり。

方谷の門人に河井繼之助あり。亦陽明學を崇奉せるものなり。繼之助

名は秋義、繼之助と稱す、長岡の人なり、事蹟の觀るべきもの多し、三
中洲其碑文を作れり、明治碑文集卷一及び如蘭社話卷廿一に見じ、



濤○消○除○經○營○心○超○達○即○人○豪○

吾○慕○紫○陽○學○學○脈○淵○源○深○洞○通○萬○殊○理○一○本○會○此○仁○進○退○任○天○命○從○容○養○道○
心○嘆○息○千○秋○久○傳○習○有○幾○人○

圖○基○何○其○變○顏○面○一○不○同○人○事○率○如○此○變○態○誠○無○窮○何○以○應○無○窮○靈○活○方○寸○
中○果○知○君○子○學○總○在○格○知○功○

心○官○只○是○思○思○則○真○理○生○或○在○一○身○上○又○入○天○下○平○古○今○天○地○事○莫○不○關○吾○
情○寂○然○一○室○中○意○象○極○分○明○

第二首の初めに「吾慕紫陽學」とあるを以て之れを觀れば、小楠は朱子派の人なるが如し、然れども第三首に「何以應無窮靈活方寸中、果知君子學、總在格知功」とあり、乃ち知る、彼れ實際に於ては、王學風の工夫をなせるを、彼れ自ら姚江派なりとは稱せざれども、其身を處し、行を修むるは、致良知の心法によれり、學而篇の講義に云く、

此章は開卷の第一義にして、尤も大切な義なり、修學の一字經に見えしは、傳説より初まりて以來申來りて古來聖賢の心を用ひ玉ひし

處なり、學の義い、かん、我心、上に就いて、理解すべし、朱註に、委細備はれ、ども、其註によりて、理解すれば、則ち、朱子の奴隸にして、學の眞意を知らず、後世學者と言へば、書を讀み、文を作る者を指して、云ふ様なれ共、古を考ふれば、決して左様の義にてはなし、堯舜以來、孔子の時にも、何ぞ曾て當節の如き、許多の書あらんや、且つ又古來の聖賢、讀書にのみ、精を勵み、玉ふとも、曾て聞かず、然れば、則ち、古人の所謂、學なるもの、果して、如何と見れば、全く、吾方寸の修行なり、良心を擴充し、日用事物の上にて、功を用ふれば、總て、學にあらざるはなし、父子兄弟夫婦の間より、君に事へ、友に交り、賢に親づき、衆を愛するより、百工技藝農商の者と、咄し合ひ、山河草木鳥獸に至るまで、其事に即いて、其理を解し、其上に、書を讀んで、古人の事、歴成法を考へ、義理の窮まりなきを、知り、孜孜として、止まず、吾心をして、日々、靈活ならしむる、是れ、則ち、學問にして、修行なり、堯舜も、一生、修行し、玉ひしなり、古來、聖賢の學なる者、是れを、置いて、何くにあらんや、後世の學者、日用の上に、覺りなくして、唯、書に

就いて、理會す、是れ、古人の學ぶ所を學ぶに、非ずして、所謂、古人の奴隸と云ふ者なり、今朱子を學ばんと思ひなば、朱子の學ぶ所如何と思ふべし、左はなくして、朱子の書に就くときは、全く朱子の奴隸なり、譬へば詩を作る者、杜甫を學ばんと思ひなば、杜甫の學ぶ所如何と考へ、漢魏六朝まで、汭つて可なり、且つ、又尋常の人にて、一と通り、道理を聞い、ては、合點すれども、唯、一場の、話説となり、踐履の實なきは、口耳三寸の學とやいはん、學者の通患なり、故に學に志すものは、至極の道理と思ひなば、尺進ありて、寸退すべからず、是れ、眞の修行なり、忘るべからず、云云、

其、方寸の、修行を、説く、處、全く、姚江派の、心法なり、小楠本と大塚退野の遺稿に就き、得る所多し、退野の學朝鮮の李退溪に出づ、退溪の學、伊洛を宗とす、故に小楠亦伊洛の學を信ず、然れども、後、其、範圍を、超脱して、古學に類する、見解を、有し、殆んど、縱横無礙の概あり、然れども、其、己れを、持するの、心術に、至りては、王學の、痕迹、最も、顯著なるもの、あること、其、所謂、方寸

の修行によりて知るべきなり、小楠又人天の關係を論じて曰く、
 人は三段階あると知るべし、總て天は往古來今不易の一天なり、人は
 天中の一小天にて我れより以上の前人、我れ以後の後人、此三段の
 人を合せて初めて一天の全體を成すなり、故に我れより前人は我前
 世の天工を亮けて我れに譲れり、我れ之れを繼いで我れ後に譲る、後
 人は是れを繼いで其又後人に譲れり、前世今世後世の三段おれども皆
 我一天中の子にして此三人ありて、天帝の命を任課するなり、仲尼祖
 述堯舜、繼前聖、開來學、是れ孔子のみに限らず、人と生れては、人々天に
 事ふる職分なり、身形は我一生の假託、身形は變々生々して、此道は往
 古來今一致なり、故に天に事ふるよりの外、何ぞ利害禍福榮辱死生の
 欲に迷ふことあらんや、

彼れ己に小我の見地を打破して、直に大我の見地に接近し、其往古來今
 を一貫せる根本主義を取へ來たれり、故に其心胸の壯快なる、眞に天空
 海濶の看なしとせざるなり、彼れ又處世の工夫を論じて曰く、

當世に處しては成るも成らざるも唯正道を立て世の形勢に倚るべからず道さへ立て置けば後世子孫殘るべきなり其外他言なし、

又曰く、

我れ誠意を盡くし道理を明かにして言はんのみ聞くぞ聞かざるどは人に在り亦安んぞ其人の聞かざることを知らん預め計りて言はざれば其人を失ふ言ふて聞かざるを強く是れを誣ふるは我言を失ふなり、

是れ皆彼れが心法を修めたるの餘に出づるもの乃ち其己れを處するに根柢あるを知るべきなり、

又偶作二首あり云く、

帝生萬物靈使之亮天功所以志趣大神飛六合中、

道既無形體心何有拘泥達人能明了渾順天地勢、

殆んど圓融無礙の趣あり以て其涵養の至れるを知るべきなり、

小楠西洋の學に關しては左の如く言へり云く、

西洋の學は唯事業の上の學にて心徳上の學にあらず云云心徳の學ありて人情を知らば當世に到りては戦争は止むべきなり

西洋固より心徳の學なきにあらず然れども我邦傳ふる所の心徳の學の如きは之れを西洋に求むるも得べからざるなり小楠又左大二姪の洋行を送る語あり云く

明堯舜孔子之道盡西洋器械之術何止富國何止強兵布大義於天下耳殆んど世界を吞吐するの氣象あり殊に其大義を天下に布くといふが如きは我國民の方針として決して變ずべからざる所なり



第四章 奥宮慥齋 附岡本寧齋、市川彬賢、

奥宮慥齋名は正、字は士道、土佐の人、文化八年七月四日を以て生まる、二十一歳の時即ち文政十二年祖父正樹に従ひて江戸に赴き、佐藤一齋の門に遊び、始めて陽明學の講論を聞いて、其聖學の正宗なることを知り、一齋の門にあること二年にして、土佐に歸り、聖學問要を著はして、王學を主張せり、其後再び江戸に赴き、一齋の門に學ぶこと數年、業成りて歸國し、帷を垂れて教授し、益々王學を主張せり、土佐に於て、王學を唱ふるは、慥齋を以て嚆矢となす、慥齋中年以後、禪理を好み、土佐の大休和尚兵庫の匡道和尚、鎌倉の洪川和尚に歴參せり、陽明學派の中にて、殊に王龍溪の說を喜べり、龍溪は、最も禪に、近きものなれば、なり、晩年に至りて、其見地更に一變せりといふ、嗣子奥宮正治の口演陽明學第卅三號に云く、

亡父晩年の頃に至りては、學見少々變化し、學は宇宙の眞理を究め、且

つ〇人〇の〇人〇たる〇を〇學〇ぶ〇べき〇もの〇な〇れ〇は〇程〇朱〇陸〇王〇と〇門〇戸〇を〇標〇榜〇して〇互
に〇宗〇旨〇を〇立〇つ〇べ〇き〇筈〇の〇もの〇に〇あ〇ら〇ず〇と〇て〇其〇見〇所〇す〇こ〇ぶ〇る〇卓〇偉〇に〇し
て〇和〇漢〇今〇古〇神〇儒〇佛〇耶〇を〇打〇して〇一〇片〇と〇な〇す〇べ〇し〇と〇説〇か〇れ〇たり〇云〇云〇

慥齋明治十五年五月三十日病を以て歿す、年六十有五、著は「所聖學問
要慥々齋省錄神魂問答等あり、就中聖學問要は載せて陽明學第十五號
乃至第二十一號にあり、

慥齋聖學問要の末に如何にして一旦の見處を期すべきや、問に答へ
て曰く、

夫れ學者平生疑ふ所に就き、參去參來して而して其疑ふ所愈々窒礙し、
日を積み、月を累ぬ、造次顛沛須臾も或は思はざること莫うして、時々
發憤激昂し、以謂く、均しく是れ人なり、或は聖賢となり、或は愚不肖と
なる、我れ亦堂々たる一男兒にして、志す所未だ遂げず、疑ふ所未だ開
けず、人となりて、未だ人たるを得ず、枉けて一生を費やせり、是の若く
にして斃ふるゝを俟たば、則ち眞に夢生、夢死、草木蟲豸と同じく朽ち

ん我れ若し此疑を打破せずんば則ち生きて果して何の益あらん死
 して亦何をかなさん力を着けて此に到り日用云爲咳唾息動靜語
 默時どなく處どなく此一念をして毎に胸中に置在せざらしめずん
 ば則ち必ず心胸熱悶し黑宰々地にして進むこと得ず退くこと得ず
 仰ぐこと得ず俯すこと得ず思ふこと得ず思はざること亦得ざるの
 時節あらん而して其疑ふ所益大に思ふ所益窮して頓より踵に至る
 ままで通身渾べて是れ一大疑團となりて思竭き意喪ひ心斷え神失ひ
 然うして後恍然脱然乍ち此疑團を打破せば則ち悶々黑宰進退俯仰
 皆得ざるの地離りて清凉輕快自主自由の別境界となし心志爽然と
 して精神發越し生來未だ曾て夢見せざるの一大活路を得ん是れ即
 ち夫子の所謂一貫孟子の所謂覺程朱の所謂一旦貫通龍溪の所謂悟
 どいふものにして斯に始めて以て上の路徑に進步すべきなり是れ
 より以往は上に徹し下に徹し始に徹し終に徹し初學より以て聖人
 に至るまでの一條の路程たるのみ故に曰く學者此れ一旦の見處な

くば假令ひ篤志力行なること司馬温公の如しと雖も尙ほ未だ俗儒たることを免れず夫れ苟も一旦此に見るあらば則ち其行掩はず其質未だ化せずと雖も蓋し其見る所は則ち鬼に質し聖を俟ちて復た疑惑すべきことなし而して經傳に説く所を視るに千言萬語盡く吾れの舊言陳語の如けん是に於てか始めて従前のなす所冥搜妄索ならざることなきを知らん是に於てか始めて跛者の杖を獲聾者の楔を徹し盲者の明を得夢者の覺を得るが如きを知らん云云

此れに由りて之れを觀れば體齋は我邦の王學者中最も禪に近きものなり否兼ねて禪に通曉せり故に又一方に於ては禪學者として名あり荻野獨園が撰述せる近世禪林僧寶傳(卷之下)に體齋が傳記を掲ぐるを以て之れを知るべきなり今北洪川が著に係る蒼龍廣錄卷之二に祭奥宮體齋居士文あり頗る體齋が事蹟を詳悉す最後に偈あり云く拳頭擊碎頑虛空脚踏躑躅兜率宮不道不言君已逝蘭花長在夏山紅

體齋が友人に岡本寧齋市川彬齋等あり皆土佐にありて體齋と共に

心術を砥礪し、一時王學を海南に唱道せり。



第五章 佐久間象山

佐久間象山、名は啓、又の名は大星、字は子明、啓之助と稱し、後修理と改稱す、信州の人、松代藩に仕ふ、元治元年刺客の爲めに殺さる、時に年五十四、嘗て佐藤一齋に學次、陽明の學を奉ずるものに似たり、門人吉田松陰、小林寒翠、加藤弘之等あり、松陰が海外に遊ばんとするに當りて之れを送るの詩あり、云く、

之子有靈骨、久歷蹙蹙、詳奮衣、萬里道、心事未語、人雖則、未語、人付、度、或有
因、遂行出郭門、孤鶴橫秋、吳、瑤海、何茫茫、五洲自爲隣、周流究形勢、一見超
百聞、智者貴投機、歸來須及辰、不立非常功、身後誰能賞、

松陰囚はるゝに及んで象山亦嫌疑を受けて執はる、象山著はす所、和蘭語彙、砲卦女訓、省營錄、葬禮私説等若干卷あり、然れども今や省營錄一卷獨り世に行はる、省營錄は蓋し獄中の作に係るなり、其中左の如き言論あり、

一 行ふ所の道以て自ら安んずべし得る所の事以て自ら樂むべし罪の有無我れにあるのみ外より至るもの豈に憂戚するに足らんや、

二 人の知るに及ばざる所にして我れ獨り之を知る人の能くするに及ばざる所にして我れ獨り之れを能くす是れ亦天の寵を荷ふなり天の寵を荷ふこと此の如くにして惟一身の計をなし天下の計をなさいれば則ち其天に負くや豈に亦大ならずや、

三 縦ひ予れ今日死するも天下後世嘗に公論あるべし予れ又何をか悔い、何をか恨みん、

四 身囿圍にありと雖も心愧怍なく自ら方寸の虛明平日に異ならざるを覺ゆ人心の靈天地と上下同流夷狄患難他を累はし得ざるも亦驗

すべきなり、

五

吾れ此境を履まざれば此省覺なし。一跌を經れば一知を長ずと果して虚語にあらざ、

六

身を行ふの規矩は則ち嚴ならざるべからず此れ己れを治むるの方なり己れを治むるは即ち人を治むる所以人を待つ所の規矩は則ち嚴に過ぐべからず此れ人を安んずるの道なり人を安んずる即ち自ら安んずる所以

七

君子五樂あり而して富貴與からず一門禮義を知り骨肉聲隙なし一樂なり取予苟もせず廉潔自ら養ひ内妻孥に愧ぢず外衆民に忤ぢず二樂なり聖學を講明し心大道を講り時に隨ひて義に安んむ險に處ること夷の如し三樂なり西人理窟を啓くの後に生れて古聖賢未

だ。管て講らざる所の理を知る、四樂なり、東洋の道德、西洋の藝術、遺さず、表裏兼該す、因りて以て民物を澤し、國恩に報ず、五樂なり、

八

日晷一たび移れば千歳再來の今なし、形神既に離るれば萬古再生の我なし、學藝事業豈に悠々なるべけんや、

九

人已れを譽るも、己れに於て何をか加へん若し、譽れによりて自ら忘らば、則ち反りて損す、人已れを毀るも、己れに於て何をか損せん、若し毀りによりて自ら強うせば、則ち反りて益せん、

十

讀書講學徒に空言をなして當世の務に及ばざれば、清談事を廢するど一間のみ、

此最後の言に由れば、象山が實際の應用を期し、總べて迂疎の空論を斥くるの意ありしこと、以て知るべきなり、贈小林炳文書(求志洞遺稿の初

めに附すに云く、

宇宙間の實理二なし、斯理の在る所天地此れに異なること能はず、鬼神此れに異なること能はず、近來西洋人發明する所の許多の學術要するに皆實理祇以て吾聖學を資するに足る、而して世の儒者類ね皆凡夫庸人窮理を知らず、視て別物となし、管に好きざるのみならず、動もすれば之れを寇讎に比す、宜なるかな、彼れの知る所之れを知るなく、彼れの能くする所之れを能くすることなし、蒙蔽深固、永く孩童の見を守る、此輩哀愍すべく、以て商較をなすに足らず、大丈夫當に大塊ある所の學を集めて以て大塊なき所の言を立つべし、云云。

世界の衆智を集めて打ちて一塊となすの論旨讀み來たりて、壯快言は心方なし、象山も亦豪傑の士なるかな、門人乾堂北澤正誠嘗て象山の遺稿に就いて其詩を抄録し、之れを刊行せり、名づけて象山先生詩鈔といふ。

象山關係書類

象山言行錄一卷 松村操撰

慨世餘聞一卷 齋藤丁治編

非凡人物列傳一卷 波邊修二郎著

近世偉人傳三編卷之下 浦生重章著

慷慨家列傳 西村三郎編輯

近世百傑傳一卷 千河岸其一編

佐久間象山一卷 林正文著

佐久間象山一卷 小此木信一耶著

日本名家人名詳傳〔卷の下〕

大日本人名辭書

日本偉人傳 西村富次耶著



第六章 春日潜庵

春日潜庵、姓は源、名は仲襄、字は子養、潜庵は其號なり、文化九年を以て生まる、甫め九歳にして父を喪ひ、零丁艱苦稍、長じて句讀を受け、十八の時鈴木恕平に就いて程朱學を修め、嶄然頭角を露はし、二十七歳に及んで始めて王陽明ヲ錄を讀み、大に警發する所あり、喟然として曰く、人となりては當に是に至りて止まるべく、學をなしては當に是に至りて止まるべしと、是れより篤く餘姚を信じ、沈潜反覆、其源流を究め、道德氣節、事業、一として、良知の工夫に出でざ、はなし、潜庵資性俊邁、峭直、容貌魁梧、音吐鐘の如く、目光爛々として人を射る、其身を持するや嚴正にして、圍門の間、儼として朝廷の如し、然れども彼れ一概に格法に泥むるのには、らず、常に世の拘々乎として、堯行禹趨するものを卑めて曰く、大海時ありてか、狂瀾を起し、大川時ありてか、横流を生ず、區々として常を守るの士は、與に語るに足らずと、其見る所此の如くなりしが故に、終身連遼す

と雖も、大に其志す所を行ふこと能はず、其言行の卓犖なる、決して庸儒の及ぶ所にあらざるなり、潜庵嘗て久我通明公に事へ、其家政を整理して功あり、然れども、其事を處する嚴正にして、毫も假借せず、是を以て諸臣之れを便とせず、陰に就殺せんことを謀る、幸にして事覺はる、然れども、潜庵捨て、問はず、竟に讒者の中傷する所となり、罪を得て屏居するもの十年、久我建通公家を嗣ぐに及んで、歳計又支へず、公其事を用ふるものを黜けて、復た潜庵を起す、潜庵乃ち家政を整理し、未だ十年ならずして、收入往日に倍蓰するに至る、是を以て京師の人藉々久我公の潜庵あるを稱せり、潜庵頗る先見ありしと見え、左の説話あり、

潜庵嘗て建議して曰く、古より五六十年にして必ず凶災あり、天明より今日に至り、此數將に周からんとす、是を以て豫め備へざるべからざるなりと、乃ち穀を洛西の別邸に蓄積せしむ、人皆之れを笑ふ、嘉永六年四月大内火あり、延焼數萬戸に及び、久我家も亦災に罹る、是に於てか潜庵向きに穀を蓄積せる別邸に就く、人始めて其先見に服すと

又米國の使節浦賀に來り互市を乞ふに當り、潛庵建議して曰く、聞く
 洋人甚だ茶を嗜むと、互市一たび開かば、茶價必ず騰貴せんと、因りて
 土地數段を開墾し、茶種を宇治に採りて之れを種ゆ、其後諸國互に茶
 利を競ふに及んで、潛庵種ゆる所のもの、年に數千斤を收め、奇利を得
 たりといふ、

鎖國開港の論起るに及んで、幕府堀田間部の兩閣老をして前後京師に
 至り事を奏せしむ、潛庵乃ち梁川星巖と往來し、竊に謀る所あり、一日三
 條内府勅命を受け、使者をして密書を傳へ、之れを潛庵に致さしむ、潛庵
 乃ち感泣して之れを拜受す、是に於て先帝の顧問に備へられ、屢、龍顏に
 咫尺し、時事に關し、補翼する所あり、攘夷内勅の水戸に降るや、潛庵之れ
 を聞いて愕然として曰く、「機事必ず漏れん、奇禍此に始まらんと、乃ち使
 者を呼び返さんとして及ばず、未だ幾くならず、幕府大に索めて水戸に
 黨するものを執ふ、頼三樹橋本左内等逮捕せらるゝもの三百餘人、潛庵

も亦執へられて江戸に檻送せられ岸和田邸に禁固せらる。擬するに死を以てするものあり、竟に一等を減じ、禁固終身に處せらる。文久三年禁固始めて解け、官職を復せらる。明治元年久我通久公大和國の鎮撫總督に任せられ、府を奈良に開き、訟獄を聽斷す。潜庵實に其參謀たり、既にして朝廷奈良縣を置き、潜庵を以て知事に任ず。潜庵政をなすこと嚴明にして、姦人戰栗す。時に東北未だ平ならず、彼れ幕府の親藩郡山等の疑懼を解かんと欲し、頗る之れを優待す。是を以て彼れを忌むもの誣ふるに賊に通ずるを以てす、之れが爲めに二子と同じく逮捕せられて獄にあること六月にして遷る。然れども嫌疑未だ解けず、鹿兒島人横山正太郎時事を慷慨し、集議院門に自殺す。其上書中潜庵の清潔廉直を辯白す。然れども當局者之れを忌む故に遂に冤枉を蒙るといふ。潜庵是れより意を仕途に絶ち、屏居道を講ずるに門人日に進む。西郷南洲深く彼れを信じ、弟小兵衛及び門下の士十餘人をして來りて業を受けしむ。其將に東京に出で大政を釐革せんとするや、村田新八をして時事要領十二條を

諮問せしむ、後其議に採る所ありといふ、潜庵が寄南洲西郷翁書に云く、
 爾來音問を奉せず、貴國の士時に此地に往來するもの、動履佳勝、確然
 の操、往跡に變ずるなきを言ふ、欽慕羨企す、向きに執事國事を議して
 合はず、身を奉じて勇退、未だ其委曲を詳にせずと雖も、世人嘆惜して
 置かず、執事にありては、進むべく退くべく、進退綽々然として餘裕あ
 るなり、獨り惜む所のものは、其世道の患を奈何せん、僕竊に謂ふ、方今
 士風の振はざる、此時より甚しきはなし、廉耻退讓、衰頹して地を拂ひ
 士の稍、才幹あるものは、意を營利に專にして、汲々然として商賈の業
 を習ひ、醜として其耻を知らざるなり、風俗人心、日に以て陷溺し、返る
 を知らざるなり、夫れ亦何ぞ士人の業を講ずるを知らんや、士人の業
 は、上主を尊び、下民を安んずるのみ、主を尊び、民を安んずるは、乃ち其
 大綱なり、而して數目條件は、筆端の悉くすべきにあらざるなり、然り
 而して士風を起振するにあらざれば、不可なり、士風を起振すること
 學にあらざれば、亦不可なり、夫れ、學は、詞章訓詁の謂にあらざるは、固

よりなり、故に堅苦の志、刻厲の操ありて、而して命世の俊にあらずれば、則ち能くすることなし、嗟乎士風の振はざる、亦宜なり、執事は豪傑の士にして、平生聲色財利に淡なり之れに加ふるに、艱難困苦練磨の功を経ること、既に已に尋常にあらずるなり、其天下士風の衰を興起振作する、甚だ難きにあらずるなり、此事執事にあらざれば、誰れに可望まん、僕や生徒を散遣し、門を杜ちて却掃し、村落にありと雖も、深山の中に居るが如く、窮居寂寞、特り志未だ屈せざるのみ、執事尙ほ我れを教へんか、頃ろ側に聞く、左府老公再び東京に出づと、所謂主を尊び民を安んじ、士風を振起するは、庶幾くば此時にあるか、今日執事の講ずる所以、安んかあるや、乃ち願くば其緒餘を聽かん、令小弟恙なきや否や、爲めに意を致せ、

潜菴書を讀むに、章句を修めずして、義理に通ずるを主とす、其論孟周易傳習錄等を講ずるや、語々靈活、聽者をして躍如たらしめたりといふ、彼れ又好んで資治通鑑を讀み、反覆數回にして曰く、天下を經綸するは此

一書にして足れり、何ぞ多きを要せんと、其門人を遇すること甚だ嚴にして、殆んど君臣の禮の如し、第内竹林あり、夏日書を講ずる毎に、衆蚊來り襲ふ、侍坐する者皆俯伏し、手を以て蚊を拂ふものなし、第宅狹隘にして家人僕婢常に數十人、内外靜寂にして聲なし、唯、微風の竹葉を度るを聞くのみ、門生互に相語りて曰く、先生の門に入る毎に懽々乎として獄に入るの懣あり、而して一たび其顔を仰げば、客氣自ら挫け、鄙吝の心自ら消すと、潛菴最も鑑識に長じ、一見して人の肺腑を洞視せり、其本戶孝允西郷隆盛に就いて豫言する所皆當れり、彼れ晚年風疾に罹り、昏迷して人事を省みず、一日忽ち目を張り、嗣子淵を呼んで曰く、吾れ死するの後碑文を刻する勿れ、大丈夫の宇宙を昭映する所以のもの區々たる碑上の文字にあらざるなりと、其事たるシヨッペンハウエル氏が遺囑と差、相似たり、氏の墓碑には氏の遺囑により唯、亞爾德爾、芍邊哈爾とあるのみ、其他には一字もなく、歲月も何も記載せず、門人グヴァンテル氏死骸は何處に埋むべきかと問ひしに、何處にても宜し、世人我れを見出だす

べしといへり、皆其抱負の大なるを見るに足るなり、潜菴明治十一年三月二十二日を以て歿す、享年六十有七、著はす所潜菴遺稿三卷あり、潜菴は曾て山田方谷に接し、又佐藤一齋、林眞齋等に書を贈りて交を結び、然れども莫逆の友とも稱すべき唯一の親交は、池田草菴なり、彼れが草菴に與ふる書中に云く、

僕邇來門を杜ぢ客を絶ち、人情に近かゝらざるに似たり、而して大に足らざるものあるなり、蓋し是の如くならざれば、以て吾徳を養ふに足らざるなり、是の如くならざれば、以て斯學を講ずるに足らざるなり、然れども吾れ群を離れて索居するを懼る、故に子敬と往來周旋す、云云、

此れに由りて其交情の厚きを察知すべきなり、
潜菴陽明の學を奉じ、之れを見ること極めて高し、其言に云く、姚江眞知の教、眞に千古の秘を聞き、値にして盡くせりと、又云く、後儒、聖人の道を學ぶ、柱に膠して、瑟を鼓するが、若きのみ、姚江出づるに及んで始めて琴

聲の正しきを聽くを得たりと然れども彼れ又深く劉蕺山を尸祝せり、池田子敬に與ふる書に云く、

子敬足下頃る襄明の劉蕺山先生著はす所の人譜を得たり、先生名は宗周、字は起東、所謂念臺先生なるものなり、先生精忠大節、鼎革の際、食はざること二十餘日にして卒す、蕺嘗て其平生を考へ、悚然として敬嘆し、潸然として悲慕す、乃ち思ふ、吾れ其人を見るを得ざるも、其書を見るを得ば、則ち我れ亦當に努力して以て古人の域に造るべきなり、今其書を獲たり、我れ以て吾懷を慰すべし、蓋し蕺山の學、姚江を以て宗となし、致知を以て要となし、而して愼獨を主となし、人譜を作りて以て學者に授く、其功を用ふるの精はしき、條分縷析一以て之れを貫く、夫れ姚江致良知の教、之れを孟子に本づけ、委曲明瞭、然れども末學の弊徒に良知を知りて之れを致すを知らず、狂肆放蕩、良知を變じて私知となす、人譜の一書、此れ以て其弊を救ふべきなり、然れども姚江の學、確然信じて惑はざるもの、方今天下寥々たり、且つ其信するもの猶

は未だ必ずしも確然ならざるなり、而るを况や其信ぜざるものをや、
嗚呼子敬足下、人の本心を失ふてより名利の習、天下を陷溺し、聰明英
特才智の士と雖も、奮然自ら其中に抜くこと能はず、汲々營々、其心を
讀書講學に用ふるもの、亦惟夫れ名利のみ、姚江の學、以て名利の習を
除いて、天下の陷溺を救ふに足る然り、而して慎獨の功、なれば、則ち
私智を以て、良知となさざるもの、亦鮮し、王門の諸子、龍溪、心齋の如き、
致良知の旨を聞かざるなし、然れども、往々弊なきこと能はざるなり、
東廓、兩峰、念庵、姚江の如き、皆師の旨を失はず、而して戴山に至りて、姚
江の粹を得たり、其大節を立て、食はずして卒するもの、豈に偶然なら
んや、慎獨の功、熟して、良知を致すもの、然るなり、襄常に書を讀み、古人
の偉功、俊節を觀る、毎に慨然として、思慕し、乃ち其平生の學術、文章を
問ふ、得ざれば、則ち咨嗟するもの、累日にして止まず、皇々焉として、飢
餓して、食を得ざるが如し、夫れ戴山は、一代の名儒にして、大節、此の如
く、學術、此の如し、而して、人譜の一書、其平生の學術、具に此に備はる、今

既に之れを獲たり、吾心如何となすや、若し天下の人之れを信ずると否とは、何ぞ道ふに足らんや、子敬足下、冬盡きて而して春、京に歸らば、必ず來たりて我れを訪へ、窮居索莫、一室の内、獨り寒梅あり、苦茗を煮、机案を掃ひ、乃ち此書を出だし、相共に切磋講明すること、豈に亦天下の快ならずや、

本邦の儒者中に於ては、潜菴最も藤樹を推尊せり、藤樹先生手簡序に云く、
先生の徳の如きは、斷編片簡、隻字の餘と雖も、湮沒せざるものあり、なり、

又岡本經恐に與ふる書に云く、

今藤樹の超然獨り興るが如き、孟子の所謂豪傑の士にあらずや、

又藤樹先生文集序に云く、

今先生の集を讀み、慨然として予を起すものあり、夫れ天下の書を讀むもの千百輩、其人少しとせず、而して超群拔秀の才、何ぞ其れ多く見

ざるや、豈に躬行勉めざるを以てにあらざるや、予嘗て謂ふ先生の躬行の如きは固より倫比なし而して其識見の超卓なる學術の正大なる、亦古今に絶す然らば則ち今世の躬行勉めざるもの蓋し識の庸陋齷齪、學術の偏狹を以てなり此れ亦重ねて嘆すべからざらんや、
潜庵遺稿の卷末に語録を載す今左に其佳なるものを摘記せん、

一
藏書萬卷に盈つと雖も徒に豪具のみ善讀者は多きを以てするにあらざるなり要は自得如何にあり、

二
大海時ありてか狂瀾を起す、大川時ありてか横流を生ず、區々として常を守るの士以て語るに足らず、

三
門を杜ちて却掃し、偃仰書を讀み、寵辱聽くなく、得喪關するなし、人世の樂何物か之れに如かん、此れ清福の人にあらざれば乃ち得べから

ざるのみ、

四

世間の紛華剝落し盡くるは大夢一覺の頃なり、人生只夢覺を争ふ、

五

道を得れば無窮の樂あり、道を得るは一物を得るにあらす、即ち元來の心是れなり、

六

一念清淨なれば、天地始めて開く、一念昏覆なれば、天地皆閉づ、

七

欲を除くは外物の上にあらず、一念の微の上にあり、

八

一念克復すれば、即ち是れ天空海濶の氣象、

九

史を讀めば無窮の懷あり、千古を洞觀し、古今を一視するは、人生の

大快事

十
大○丈○夫○は○卓○然○と○し○て○自○立○す○る○を○要○す○。○斯○か○さ○る○も○の○其○本○な○り○。

十一

胸○懷○逼○窄○な○る○は○小○人○の○事○。○濶○大○遠○深○な○る○は○君○子○の○境○な○り○。

十二

今○世○短○處○の○數○ふ○べ○き○あ○れ○ば○。○便○ち○是○れ○第○一○等○の○人○。○(東○萊○の○語○を○引○く○)

十三

人○生○百○年○。○一○事○の○心○に○愧○づ○る○な○き○も○の○幾○。○何○人○か○あ○る○愧○あ○り○て○知○ら○ず○。○
懵○懂○一○世○を○終○る○も○の○比○々○皆○然○り○。○豈○に○哀○か○ら○ず○や○。○上○士○は○然○ら○ず○愧○あ○
れ○ば○改○め○愧○な○け○れ○ば○進○む○。○進○ん○で○止○ま○ず○。○身○を○愧○る○の○み○。

十四

老○佛○の○俗○儒○に○超○上○す○る○も○の○其○累○な○き○を○以○て○な○り○。○其○儒○道○に○如○か○さ○る○
も○の○事○物○を○去○る○を○以○て○な○り○。○事○理○一○致○は○道○の○極○な○り○。

十五

人生の富貴貧賤は花の開落なり、生死は即ち晝夜なり、達人以て一笑すべし、

十六

夙に興き夜に寝ぬ、徳業を勤むるもの知らざるべからず、精神俊爽は夙に興きるにあり、志氣深遠は夜に寐ぬるにあり、

十七

人を責むるに易きは己れを責めざるの罪なり、

十八

自ら責むること厚ければ、何ぞ人を責むるに暇あらんや、終身自ら責むれば、緘々然として餘地あるかな、

十九

謹言は自ら責むるより來たる尤も好し、

二十

人生百年大凡そ二十年前は蒙々焉たるのみ、二十載后六十に至るまで、中間四十年なり、此れを過ぎて以て往、縦令ひ衰へざるも、究竟用を盡さざるなり、此れを以て之れを觀れば、百年の中久しと雖も、四十年間に過ぎず、其餘は蒙々焉たるのみ、悲いかな、悲いかな、此四十年間徳を立て業を立つるもの、其れ幾何人ぞや、其餘は腐草朽木と泯滅して止む、苟も志あるもの、其れ悲むべきか、其れ悲むべからざるか、

廿一

人生劈頭一箇の事あり、立志是れなり、

廿二

君子も亦其遭ふ所に安んずるのみ、蓋し君子の心、一身の計にあらざり、一家の爲めにあらず、嗚乎、其見る所や遠し、其期する所や大なり、小園の風月襟懷と適し、一室の靜觀、浩然として自得す、

廿三

門を杜ぢ書を讀み卷を掩ふて省察す、一室の樂、此れより善きはなし

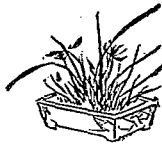
此れ少壯の業にして老大に至りて尤も善し若し夫れ門を出でい
隠し世を救ひ民を撫するも亦一室の中にありて既に了々然たり然
して後以て經世の業を語るべきなり

廿四

唯義理の窮なきを知りて物我の間あるを見ず此れ是れ萬物一體の
心

廿五

士君子塵世の中に入りて擺脫開くを得て束縛する所とならず擺脫
淨きを得て汚穢する所とならず此れ之れを天挺の人豪といふ



第七章 池田草庵

池田草庵、名は緝、字は子敬、禪藏と稱す。草庵は其號なり、但馬國養父郡宿南村の人。文化十年七月廿三日を以て生まる。農家の子なり、幼にして字を郡の十二所村の滿福寺に學ぶ。僧之れに勸めて披剃せしむ。十八九歳の頃に、慨然として鄒魯の風を慕ふて曰く、丈夫豈に緇流に老ゆべけんやと、遂に京師に出奔し居ること四年にして、京西の松尾山中に入り、祠官の家に寓し、専ら餘姚の學を攻め、春日潛庵と與に交り、往復切劘し、後又吉村秋陽、山田方谷、林良齋等と交を結び、講究益務む。其松尾にあること凡そ六年、其間一室に兀坐し、庭園を窺はざるもの、往々數月に涉るといふ。嘗て自ら其抱負を道破して曰く、

埋身於千巖萬壑之中、默々獨求古道於遺經、將以爲千歲不磨之圖、此予之所私心自期者、不知果能得遂其志乎否、

又去るに臨んで詩を賦して曰く、

堅、坐、六、年、松、尾、山、偶、然、今、日、向、人、間、身、如、流、水、隨、絲、動、心、與、孤、雲、到、處、閑、
 寓を京師に移して、生徒を教授す。時に天保十一年三月なり、十四年四月
 計を決して故山に歸り、郡の八鹿村西村氏の山館に居る。生徒稍來學す、
 後館容るゝ能はざるに至る、因りて地を宿南村の西に相し、一の書堂を
 興す。堂、山に倚り、左は青山村を嶺上に望み、右は蓼川の巨流に俯し、前は
 近く夜氣山に對し、青山川、其趾を繞る、故に名づけて青溪書院といふ。業
 を請ふもの、常に數十人、是に於て寂寞の郷、變じて絃誦の域となり、樵歌
 鳥韻、啾唔の聲と相和し、宛も武陵仙源の趣あり、又別に小室を構へ、游息
 の處となし、松風洞と號す。草庵意を任途に絶ち、育英を以て自ら任じ、身
 を持すること、嚴格常に禮節を尙ひ、每晨香を炷き、端座數刻、然して後、諸
 生に接す。諸生長幼を以て講堂に序列し、先づ先生を拜し、畢りて互に禮
 を行ひ、而して各業に就く、其將に寢に就かんとするや、亦復た此の如し、
 始終易はらず、循々として惟れ謹むこと、子の嚴君に事ふるが如し、諸生
 過あれば、訓誨懇切、之れに繼ぐに涙を以てし、至誠人を動かす、草庵平生

婢僕を蓄へず、薪炊酒掃の事は、諸生交、迭に之れを辨ず、北地寒強く、積雪、
屋を壓し、堅氷、石の如し、然れども諸生毫も其勞苦を厭はず、其信服想ふ
べきなり、

草庵人となり清癯、軀幹短小なりと雖も、端莊にして自ら威容あり、名利
に近づかずして清淡自ら甘んぜり、明治十年瘡を患ひ、百方治療して瘡
えず、翌年九月廿四日に至りて歿す、享年六十六、草菴の生まるゝ、潜庵よ
り後るゝこと一歲にして、其終焉は潜庵と同年に於てす、偶然も亦奇異
なりといふべし、

草庵嘗て風俗頹敗を慨して曰く、天下の風俗を挽回せんと欲せば、先づ
一郷の風俗を教うせざるべからず、と、因りて養老會を創設し、毎春佳辰
を卜して、閭里の耆老を邀へ、酒を置いて供具し、團欒、献酬、豊凶を問ひ、桑
麻を話し、朴茂、淳厚の風、萬々掬すべく、一郷之れに化すといふ、

草庵京師にあるや、象山陽明を以て宗となす、其郷に歸るに及んで、蕺山
劉子全書を讀み、大に悟る所あり、遂に朱子の學に和通し、慎獨を以て宗

となし、特に人譜の一書を尊信し、之れを小學に參し、以て諸生に課して曰く、大節劉子の如く、學識劉子の如く、人となり、劉子の如くなるを得ば、遺憾なしといふべしと、此れに由りて之れを觀れば、彼れは劉子を以て其畢生の理想とせしものなり、(以上草庵の傳は主として土屋 鳳 草菴著、はす所、讀易錄三卷、尙書蔡傳費說三卷、古本大學略解一卷、中庸略解一卷、文集十二卷、日錄若干卷あり、皆青溪書院に藏すといふ、草庵の書類多くは印行せられず、故に今は甚だ得がたし、但、古本大學零解は、陽明學の古本大學集解中に採録せり、草庵又嘗て林良齋、春日潜庵、吉村秋陽と贈答の書を集めて一卷となし、題して鳴鶴相和集といへり、

春日潜庵、林良齋に復する書に、草庵が事を記して云く、
 其人外貌朴陋にして、其内識趣極めて高く、操履甚だ正し、

又池田子敬に贈る序に云く、

子敬、廬を松尾山下に結び、窮苦寂寞、而して少しも其志を變ぜず、其廬を訪ひ、其學を叩くに、深沈掩抑、其光を顯はさず、而して精神の氣馴

るべからざるなり、

其學問行爲共に侮るべからざるものありしこと推して知るべきなり、
草庵が語録を肄業餘稿といふ、其中往々人を警醒するに足るものあり、
今左に其最も適切なるを擧げん、

一

人、壽、百年、赫奕、たる、富貴、假令、ひ、以て、平生、の、懷抱、を、快、う、する、も、達、者、よ
り、之、れ、を、視、れば、亦、是、れ、岩、前、の、雲、草、上、の、露、曾、て、以て、吾、胸、中、に、掛、く、
に、足、ら、ざる、なり、而、して、世、人、役、々、ど、して、之、れ、を、求、め、て、止、ま、ず、適、以て
其、惑、を、見、る、のみ、

二

人、の、過、惡、は、其、自、ら、知、ら、ざる、を、恐、る、なり、之、れ、を、知、れば、又、其、或、は、切
な、ら、ざる、を、恐、る、なり、之、れ、を、知、る、こ、と、苟、も、切、な、れば、則、ち、一、旦、感、激
憤、勵、奮、策、を、脱、出、し、て、更、に、新、功、を、圖、る、古、人、言、へ、る、わ、り、猶、ほ、日、月、の、食
の、ご、ど、し、ど、其、改、む、る、に、及、ん、で、や、嘗、に、其、奮、を、存、せ、ざる、のみ、な、ら、ず、特

に光明耀靈、反りて一段の精采を加ふるを覺ゆ、

三

怒りの克ち難き猶ほ烈火の撲滅し易からざるがごとし、克ち得て容易なる乃ち其勇を見る、

四

志氣一たび奮へば萬夫も避くるなし、前面何ぞ復た艱阻の言ふべきあらんや、然らざれば培塿曲徑亦皆隔礙をなし、消沮屏息氣を出だすこと能はず、豈に以て男子の眉目に愧ぢざらんや、

五

一物を以て耻となすを知らず、是れ特に耻の小なるもの蓋し耻此れより大なるものあり、今大耻を耻ぢずして小耻を以て耻となす、所謂其耻づべきを耻ぢずして耻づべからざるを耻づるもの、是れ乃ち耻の免れざる所以なり、

六

所謂仁者は人を視ること猶ほ己れのごとし其窮するや家國天下の事を擧げて己れが分内にあらざるはなし所謂不仁者は纒に驅殼を認めて以て己れとなして親戚兄弟視て猶ほ路人のごとし况や家國天下の事をや是故に大人は其世にあるや天下の人を尊び之れを親む其没するや後世の民之れを哀み之れを慕ふ而して不仁の人は人皆其生に苦み其死を幸とす

七

夫れ人須く自ら知るべし自ら知らざれば以て其功を用ゆるなし

八

人欺くべきなり自ら欺くべからず人瞞すべきなり自ら瞞すべからず欺くべからざる處敢て自ら欺かず瞞すべからざる處敢て自ら瞞せず慎獨戒懼收攝保任是れ靜中功を用ふるの法

九

私念稍しく主宰稍明かに澄々澄々漸く佳境に入る所謂大本未發の

中、寂然不動の體、此れより手を得、此れより基を建つ方に、是れ聖賢深造自得の學問。

十

學者其身を奉ず、當に金玉の如く然るべし、微に闕失あらば、以て天下の至寶となすべからず。

十一

徳苟も立ち、名苟も成らば、則ち其世間に處する、宛も野鶴の鷄群中にゐるが如し。

十二

余一人と謂ふ莫れ、天下自ら多少般の人あるなり、僅に百年と謂ふ莫れ、身後の歲月甚だ長きなり、而して公論の掩ふべからざる、猶ほ日を掲げて行くがごとし。



第八章 柳澤芝陵

柳澤芝陵、名は信兆、字は伯民、太郎と稱す。芝陵は其號なり。島原の世臣、藩邸留守信行の長子なり。芝陵幼き時、父に従つて江戸にあり、父嘗て引北温山に請ふて曰く、予老いて學の勤めざるべからざるを知る、願くば之れを帷下に託せんと、温山之れを諾す。温山の人を教ふる、自ら家規あり、凡そ來たりて門に游ぶもの、先づ命じて詩を作らしめ、以て其才を試む。芝陵天資明敏、黽勉倦むなく、清辭清麗にして、命意典雅なり。温山大に悦び、孫子教ふべしといふ。後藩主に仕へ、近侍に命ぜらる。出入匆忙なりと雖も、勤業懈らず、夜以て日に繼ぐ。時に或は友を會して、義を講じ、意の合はざるあれば、明快辯析、少しも假借せず。又涑水通鑑を讀み、慨然として腕を扼し、古今の得失を論ず。是に於て君侯其才を愛し、擢んで留守助員となし、以て父の職を繼がしめんと欲す。芝陵友人に謂ふて曰く、聖賢の學、他なし、唯實學實行のみ、是れ朱學の本旨。温山先生の導く所なり、世の

書生と稱するものを見るに、浮薄ならざれば、固陋にして、往々世態事情に通ぜず、何ぞ之れを實學實行といはんや、今留守の職たる、俗務中の最も俗なるものなり、不學無術のなす所、難を割くに何ぞ牛刀を用ひん、然りと雖も、公の命廢擱すべからず、温山先生の意測るべからずと、職を守ること三歳にして病を以て辭す、温山乃ち之れをして海鷗文社に入りて諸大家の眷顧を請はしむ、是に於て其學日に獎み月に就り、聲譽甚だ藉く、温山尙ほ未だ足らずとなし、佐藤一齋に誘ふて昌平齋に入らしむ、芝蔭乃ち覺中の諸才子と、案を聯ねて學を講じ、憤勵困苦、時に傳習録を讀んで、始めて餘姚王氏の學あるを知り、豁然開悟し、友人に謂ふて曰く、文公の學之れを全龍を畫くに譬ふ、爪牙詳に備はると雖も、未だ其眞を見ず、王子出づるに及んで始めて其兩暗を點す、朱王趣を異にすと、いふと雖も、本と是れ一揆、所謂百尺竿頭、一步を進むるものなり、

周年にして歸り、幾もなく、肺疾を患ひ、血を吐くこと數瓶、志氣少しも屈せず、仰臥書を寫し、十餘月を経て、竟に沒す、實に弘化二年八月五日なり

時に年三十著はす所芝陵遺稿一卷あり友人佐久間訥庵の刊行する所に係る、其中左の詩あり云く、

八月初六倍一齋先生遊箭庫別業

許排殘熱入幽區、寬句徘徊短髮遺愛軒、焦思學士署名楯扁識鴻儒、
侵入竹氣秋潛至、際若梧陰意頓蘇、欲頌嚴師今日德、千年嶽雪聳天隅、
其一齋を崇敬するの情極めて篤しといはざるを得ざるなり、



第九章 西郷南洲

西郷南洲は世人以て豪傑となして、其學のいかんを知らず、故に徒に其
痕迹を見て其精神の存する所を窺ふ能はざるなり、彼れ嘗て佐藤一齋
の言志四録中より百有一則を抄録して金科玉條とせり、其心を修め、膽
を鍊るもの、全く陽明學より來たれり、著はす所、南洲遺訓一卷あり、片淵
琢氏明治二十九年を以て出版せり、其中左の如き言論あり、

事大小となく正道を蹈み至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず、人
多くは事の差支ゆる時に臨み、策略を用ひて一旦其差支を遁せば、跡
は時宜次第工夫の出來る様に思へども、策略の煩、脆、度、生、じ、事、必ず、敗
るゝものぞ、正道を以て之れを行へば、目前には迂遠なる様なれども、
先きに行けば、成功は早きものなり、

道は天地自然の道なるゆゑ、講學の道は敬天愛人を目的とし、身々修むるに克己を以て終始せよ、己れに克つの極功は、毋意毋必毋固毋我と云へり、總じて人は己れに克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るゝぞ、能く古今の人物を見よ、事業を創起する人、其事大抵十に七八迄は能く成し得れども、残り二つを終り迄成し得る人の希なるは、始めは能く己れを慎み、事をも敬する故、功も立ち、名も顯はるゝなり、功立ち名顯はるゝに隨ひ、いつしか自ら愛する心起り、恐懼戒慎の意弛み、驕矜の氣漸く長じ、其成し得たる事業を負み、苟も我が事を任ぜげんとてまづき仕事に陥あり、終に敗るゝものにて、皆自ら招くなり、故に己れに克ちて、勝ず、聞かざる所に戒慎するものなり。

三

道は天地自然の物にして人は之れを行ふものなれば、天を敬するを目的とす、天は人も我れも同一に愛し給ふゆゑ、我れを愛する心を以て人を愛するなり。

四

人^〇を^〇相^〇手^〇に^〇せ^〇ず^〇、天[△]を[△]相[△]手[△]に[△]せ[△]よ[△]、天^〇を^〇相^〇手^〇に^〇し^〇て^〇、己^〇れ^〇を^〇盡^〇く^〇し^〇、人^〇を^〇も^〇咎^〇め^〇ず^〇、我^〇誠^〇の^〇足^〇ら^〇ざる^〇を^〇尋^〇ぬ^〇べ^〇し^〇、

五

己^〇れ^〇を^〇愛^〇す^〇る^〇は^〇善^〇か^〇ら^〇ぬ^〇こ^〇の^〇第^〇一^〇な^〇り^〇、修^〇業^〇の^〇出^〇來^〇ぬ^〇も^〇、事^〇の^〇成^〇ら^〇ぬ^〇も^〇、過^〇を^〇改^〇む^〇る^〇こ^〇の^〇出^〇來^〇ぬ^〇も^〇、功^〇に^〇伐^〇り^〇驕^〇慢^〇の^〇生^〇ず^〇る^〇も^〇、皆^〇自^〇ら^〇愛^〇す^〇る^〇が^〇爲^〇め^〇な^〇れば^〇、決^〇して^〇己^〇と^〇愛^〇せ^〇ぬ^〇もの^〇な^〇り^〇、

六

過^〇を^〇改^〇む^〇る^〇に^〇、自^〇ら^〇過^〇ち^〇た^〇と^〇さ^〇へ^〇思^〇ひ^〇付^〇か^〇ば^〇、夫^〇れ^〇に^〇て^〇善^〇し^〇、其^〇事^〇を^〇は^〇棄^〇て^〇、願^〇み^〇ず^〇直^〇に^〇一^〇歩^〇踏^〇み^〇出^〇だ^〇す^〇べ^〇し^〇、過^〇を^〇悔^〇や^〇しく^〇思^〇ひ^〇取^〇り^〇、繕^〇は^〇んと^〇て^〇心^〇配^〇す^〇る^〇は^〇譬^〇へ^〇ば^〇、茶^〇碗^〇を^〇割^〇り^〇、其^〇缺^〇け^〇を^〇集^〇め^〇合^〇せ^〇見^〇る^〇も^〇、同^〇じ^〇以^〇て^〇登^〇も^〇な^〇き^〇こ^〇と^〇な^〇り^〇、

七

道^〇を^〇行^〇ふ^〇者^〇は^〇固^〇より^〇困^〇厄^〇に^〇逢^〇ふ^〇者^〇な^〇れば^〇、如^〇何^〇な^〇る^〇艱^〇難^〇の^〇地^〇に^〇立^〇つ

ども事の成否身の死生杯に少しも關係せぬものなり事に上手下手あり物には出来る人出来ざる人あるより自然心を動かす人もあれども人は道を行ふものゆえ道を陥むには上手下手もなく出来ざる人もなし故に只管ら道を行ひ道を樂み若し艱難に逢ふて之れを凌がんとならは彌道を行ひ道を樂むべし予壯年より艱難といふ艱難に罹りしゆえ今はどんな事に出席ふとも動搖は致すまじ夫れだけは任せなり、

八

命もいらず名もいらず官位も金もいらぬ人は始末に困まるものなり此始末に困まる人ならでは艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり云云、

九

道を行ふものは天下舉て毀るも足らざるとせず天下舉て譽るも足れりとせざるは自ら信ずるの厚きが故なり、

十

平、日、道、を、踏、ま、さ、る、人、は、事、に、臨、ん、で、復、頼、し、處、分、の、出、來、ぬ、も、の、な、り、云、

十一

人、を、籠、絡、し、て、陰、に、事、を、謀、る、も、の、は、好、し、其、事、を、成、し、得、る、も、の、慧、眼、よ、り、之、れ、を、見、れ、ば、醜、狀、著、し、き、ぞ、人、に、推、す、に、公、平、至、誠、を、以、て、せ、よ、公、平、な、ら、ざ、れ、ば、英、雄、の、心、は、決、し、て、攪、ら、れ、ぬ、も、の、な、り、

十二

聖、賢、に、成、ら、ん、と、欲、す、る、志、な、く、古、人、の、事、跡、を、見、逆、も、企、て、及、ば、ぬ、と、云、ふ、様、な、る、心、な、ら、ば、戰、に、臨、ん、で、逃、る、よ、り、猶、ほ、卑、怯、な、り、朱、子、も、白、刃、を、見、て、逃、る、も、の、は、ど、う、も、な、ら、ぬ、と、云、は、れ、た、り、誠、意、を、以、て、聖、賢、の、書、を、讀、み、其、處、分、せ、ら、れ、た、る、心、を、身、に、體、し、心、に、驗、す、る、修、行、致、さ、ず、唯、个、様、の、言、个、様、の、事、と、云、ふ、の、み、を、知、り、た、る、も、何、の、詮、な、き、も、の、な、り、予、今、日、人、の、論、を、聞、く、に、何、程、尤、も、に、論、ず、る、も、處、分、に、心、行、き、渡、ら、ず、口

舌の上のみならず、少しも感ずる心之れなし、眞に其處分ある人を見れば、實に感じ入るなり、聖賢の書を空しく讀むのみならず、譬へば、人の劍術を傍觀するも、同じにて、少しも自分に得心出來ず、自分に得心出來ずば、萬一立ち合へど、申されし時、逃るより外あるまじきなり、

十三

天下後世迄も信仰悦服せらるゝものは、只是れ一箇の眞誠なり、古より父の仇を討ちし人、其數擧げて算へがたき中に、獨り曾我の兄弟のみ、今に至りて兒童婦女子迄も知らざるものあらざるは、衆に秀で、誠の篤き故なり、誠ならずして世に譽めらるゝは、僥倖の譽なり、誠篤ければ、縱令ひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり、

十四

世人の唱ふる機會とは、多くは僥倖の仕當てたるを言ふ、眞の機會は、理を盡くして行ひ、勢を審かにして動くこと云ふにあり、平日國天下を憂ふる誠心厚からずして、只時のはづみに乘じて成し得たる事業は、

決して、永續せぬものぞ、

十五

今の、人、才、講、あ、れ、ば、事、業、は、心、次、第、に、成、さ、る、も、の、思、へ、ど、才、に、任、
せ、て、爲、す、事、は、危、く、し、て、見、て、居、ら、れ、ぬ、も、の、ぞ、體、あ、り、て、こ、そ、用、は、行、は、
る、な、れ、

是等の遺訓を讀むに、南洲は決して軒昂凌厲、一世を侮慢するが如き人
物にあらずして、其心胸は、反りて至誠を以て充たされ、其決心して動く
や、死生を眼中に置かざりしこと、想見するに餘りあるなり、南洲固より
學者を以て見るべからざるも、其自得する所の見解に至りては、決して
庸儒の及ぶ所にあらず、蓋し社會的衝突の烈火中に於て鍛鍊せしもの
ならん、故に其遺訓の如き管に趣味多しといふ而已ならず、實に人をし
て案を拍ちて快と呼ばしむるに足るものあるなり、南洲曾て述懐の詩
あり、云く、

幾○歴○辛○酸○志○始○堅○丈○夫○玉○碎○愧○頓○全○一○家○遺○事○人○知○否○不○爲○兒○孫○買○美○田○

此れに由りて之れを觀れば、彼れ志を名利の外に立て、屹として巨嶽の如く牢として拔くべからざる者あるを知るべきなり、彼が最後に亂を作して斃れ、逆賊の名を千歲に遺し、は誠に惜むべしと雖も、亦後人の彼れに負ふ所少しとせず、彼れ征韓論を廟堂に唱へて議合はず、退いて其不平を抑する能はず、遂に暴舉に及べり、暴舉の思むべきは言ふまでもなけれども、彼れ此れによりて活氣を惹起せり、士氣を鼓舞せり、實際の演習をなさしむるを得たり、南洲の兵の如き、慄慄なるものを敵として戦いたればこそ、我兵も眞に其膽ど其術どを鍛鍊するを得たるなれ、此の如くにして鍛鍊し得たる其膽ど其術どは、確に日清戦争に應用せられ、其勝を制する一大原因たりしと疑なきなり、果して然らば、後人豈に南洲に負ふ所なしとせんや、然り而して是れ本ど彼れが方寸の中に養成したる炯々たる一點良知の光より來たれるを知るべきなり、



第十章 吉田松陰附高杉東行

吉田松陰名は矩方字は子義寅次郎と稱す、松陰は其號なり、又二十一回
猛士と號す、長州の人管て佐久間象山に學ぶ、其學未だ必ず姚江に限ら
ずと雖も亦甚だ姚江に近し、自ら辯じて曰く、

吾曾讀王陽明傳習錄、頗覺有味、頃得李氏焚書、亦陽明派言々、當心、向借
日、改以洗心洞、劄記、天鹽、亦陽明派、取觀爲可、然吾非專修陽明學、但其學
真往々與吾真會耳、

且つ其學の系統を言へば、姚江に關係なきこと能はず、彼れ本と象山門
下に學を修むるものなればなり、松陰著はす所頗る多し、其重要なるも
の、左の如し、

幽室文稿六卷

照顔錄一卷

坐獄日錄一卷

宋元明鑑紀奉使抄二卷

儲糗話一卷

回顧錄二卷

松陰詩集二卷

講孟劄記十卷

武經講錄二卷

留魂錄一卷

東北遊日記一卷

松陰遺險一卷

俗簡雜集一卷

幽囚錄一卷

鴻鷗志一卷

松陰傳には著書五十七種を列舉せり、松陰の自得の思想としては、坐獄日録の末に附載せる七生説最も見るべし、故に左に之れを掲出す、云く

天の、乾々たる、一理ありて、存す、父子、祖、孫の、綿々たる、一氣ありて、屬す
 人の、生や、斯理を、養して、以て、心となし、斯氣を、稟けて、以て、體となす、體
 は、私なり、心は、公なり、私を、役して、公に、殉するもの、を、大人となし、公を
 役して、私に、殉するものを、小人となす、故に、小人は、體滅し、氣竭くれば、
 則ち、腐爛潰敗、復た、收むべからず、君子は、心と、理と、通ず、體滅し、氣竭き
 て、理獨り、古今に、亘り、天壤を、窮めて、未だ、嘗て、暫くも、歇まざるなり、余
 聞く、贈正三位楠公の、死するや、其弟、正季を、顧みて、曰く、死して、何を、か
 する、曰く、願くば、七たび、人間に、生れて、以て、國賊を、滅せん、公欣然とし
 て、曰く、先づ、吾心を、獲たりと、刺して、逝く、噫、是れ、深く、理氣の際に見
 るあるか、此時に、當りて、正行、正朝、諸子は、則ち、理氣、並び、屬するものな
 り、新田、菊池の、諸族は、氣離れて、理通ずるものなり、是れに、由り、之れを
 言へば、楠公、兄弟、徒に、七生のみならず、初めより、未だ、死せざるなり、是
 れより、其後、忠孝、節義の、人、楠公に、觀て、興起せざるものなし、則ち、楠公
 の、後、復た、楠公を、生ずるもの、固より、計り、數ふべからざるなり、何ぞ、獨

り七たびのみならんや、余嘗て東遊三たび湊川を經、楠公の墓を拜す、
涕淚禁ぜず、其碑陰、明の徵士朱生の文を勒するを觀るに及んで、則ち
復た涙を下だす、噫、余楠公に於て骨肉父子の恩あるに、あらず、師友交
遊の親あるにあらず、自ら其涙の由る所を知らざるなり、朱生に至り
ては、則ち海外の人反りて楠公を悲んで、吾れ又朱生を悲む、最も謂は
れなきなり、退いて理氣の説を得たり、乃ち知る、楠公朱生及び余の不
肖、皆斯理を資して以て心となす、則ち氣屬せずと雖も、而も心は則ち
遙ず、是れ涙の禁ぜざる所以なり、余の不肖聖賢の心を存し、忠孝の志
を立て、國威を張り、海賊を滅するを以て妄に己れが任となし、一跌再
跌、不忠不孝の人たり、復た面目の世人を見るなし、然れども斯心は已
に楠公諸人と同じ、斯理安んぞ氣體に隨ひて腐爛潰敗するを得んや、
必ずや後の人をして亦余に觀て興起せしめ、七生に至りて後、可なり
となすのみ、噫、是れ我れにあるなり、七生の説を作る、

松陰又死生の説あり、品川彌次郎に贈る書東に見ゆ云く、

死生の悟が開けぬと云ふは、餘り至愚故、詳に云はん、十七八の死が、惜しければ、三十の死も惜し、八九十百になりても、是れで、是りたど、云ふことなし、草蟲水蟲の如く、半年の命のものあり、是れを以て、短しとせず、松栢の如く、數百年の命のものあり、是れを以て、長しとせず、天地の悠久に比せば、松栢も一時蠅なり、只伯夷などの如き、人は固より、漢唐宋明を經潜に至りて、未だ滅せず、若し當時、太公望の恩に、感じて、西山に餓死せずば、百迄死せずとも、短命と云ふべし、何年限り生きられば、氣が濟むことか、前の目あてもあることか、蒲島武内も、今は死、人なり、人間僅か五十年、人生七千古來、稱何か腹のいえる様な事を遣りて死なねば、成佛は出來ぬぞ、云云(維新史料 第八編)

是れ豪傑の死生觀にして、甚だ痛快なるものあり、夫の迂廻せる、煩瑣的理論に優ること、萬々なりといふべし、

松陰、國家多難の時に生まれ、心を政事に用ひ、靜に學理を講究するの餘裕を有せず、年僅に廿九にして、大辟に遇ふ、故に時務に關する論著は多

きも、學理の見るべきもの幾んど稀なり、左に詩二首を擧げて其志の存する所を示さん、

自警詩

士○苟○得○正○而○斃○何○必○明○哲○保○身○不○能○見○幾○而○作○猶○當○殺○身○成○仁○道○並○行○非○不
悖○百○世○以○俟○聖○人、

書感

始○吾○已○許○之○豈○死○以○負○之○脱○去○帶○冢○樹○寶○劍○值○千○金○况○逢○天○步○艱○更○感○君○恩
深○昔○謂○死○如○飴○今○豈○更○啣○吟○後○視○今○猶○古○吾○視○古○猶○今○世○上○紛○々○者○寧○知○伯
牙○責、

其決心の強固なる、學の素養なければ、此に至ること能はざるは、論を竣たざるなり、松陰又嘗て孟子を講じ、講孟劄記を作り、卷之四の初めに記して曰く、爰修劄記、記歲月日傳、千萬年、と其抱負の大なる人をして驚嘆せしむるに足るなり、

松陰門下に高杉東行てふ人あり、亦陽明の學を喜べり、東行名は春風、

字は暢夫、晋作と稱す、嘗て松下邨塾にあるや、傳習録の後に書して云く、

王學振興聖學新古今雜說沈湮唯能信得良知字即是義皇以上人、彼れ嘗て長崎にあり、時に耶蘇教の書を閱し、慨然として嘆じて曰く、其言頗る王陽明に似たり、然れども國家の害寧そ之れに過ぎるものあらんや、其城を傾け、國を覆すこと、豈に管に大碩巨礮のみならんや、と耶蘇教の我國體の精髓を盡毒すること、眞に東行の言の如し、東行亦卓見の士と謂ふべきなり、

松陰關係書類

吉田松陰傳五卷 野口勝一、富岡政信編次

吉田松陰一卷 徳富猪一郎著

吉田松陰先生文稿二卷

吉田松陰先生野山獄文稿二卷

殉難十傳、卷上、馬杉繁著

概世餘聞齋藤丁治編纂

維新史料

慷慨家列傳西村三耶編輯

續國史略後編卷之三小笠原勝修編

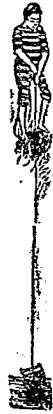
日本名家人名詳傳卷之上

大日本人名辭書

靖獻事蹟卷上近藤清石著

近世百傑傳于河岸真一編撰

日本偉人傳西村富次耶著



第十一章 東澤瀉 附栗栖天山

東澤瀉、名は正純、字は崇一郎と稱す、澤瀉は其號なり、又白沙と稱す、周防國岩國の人なり、天資俊邁にして文章を好む、安政年間、江戸に遊び、佐藤一齋に學ぶ、又山陰山陽を歴て、老儒碩學を訪ひ、學徳日に進み、自ら悟る所あり、姚江の學を尸祝して、聖學の正宗となし、常に道義を講明するを以て己れが任となし、嘗て罪を得て南島に謫せらる、明治元年赦されて郷里に歸り、帷を窮蹙に下だし、講習倦まず、晩年塾を鎮し、諸生を謝絶し、獨り易を讀んで樂となし、自ら髪を斷ちて老ゆ、明治二十四年三月を以て病歿す、時に年六十、著はす所、證心錄二卷、禪海醜瀾一卷、儒門證語一卷、傳習錄參考二卷、近思錄參考二卷、周易要略二卷、學庸正文寫本二卷、論孟撮說寫本二卷、鄭延平事略一卷、國史臆議二卷、文章家訓二卷あり、

證心錄の中に致良知の説三篇あり、今左に其第一篇を擧げん、

主靜の説出づ、則ち居敬の説なかるべからず、居敬の説出づ、則ち窮理

の説なきこと能はず窮理の説出づ則ち又何ぞ致良知の説なかるべけんや故に周子ありて而して後程朱あり程朱ありて而して後陽明子あり皆勢の已むべからずして而して人極を立つる所以なり夫れ主静の旨微なり其静に徧するを恐るゝなり故に居敬を説いて之れを救ふ而して敬も亦静なり故に更に窮理を説いて之れを補ふ而して其説をなすもの必らず天下事物の理を窮盡して後之れを踐履力行に實にせんと欲す故に之れを援くるに先知後行を以てし之れを博うするに一草一木を以てし絲毫分析終に命脈を傷づく窮理の説亦弊あり是に於て陽明子直に之を斥くるに俗學を以てして曰く惟精は是れ惟一的功夫博文は是れ約禮的功夫道問學は是れ尊德性的功夫格物致知は是れ誠意的功夫即ち行は即ち知即ち修は即ち悟即ち功夫は即ち本體即ち下學は即ち上達支離繚葛の習を一洗して而して其要之れを致良知の三字に歸す霹靂手段といふべし蓋し静なり敬なり理なり皆所謂良知なり主なり居なり窮なり皆所謂致なり乃

○ち○周○程○朱○子○の○本○旨○を○明○か○に○す○る○所○以○に○し○て○豈○に○故○ら○に○異○を○標○し○奇
 を○立○つ○る○も○の○な○ら○ん○や○抑○後○の○良○知○の○説○を○な○す○も○の○如○き○は○放○縱○を
 以て自然となし、善惡を以て應迹となし、云云、嗚乎、議にあるもの、何ぞ
 以て陽明を知るに足らん、而して其の學をなすもの、如き、亦豈に之
 れを良知の教に負かずといはんや、嘗に周程朱子の心を倣なまづくるの
 みならず、又將に陽明在天の靈を欺かんとするなり、陽明子嘗て言ふ、
 我、良知の二字は、九死、一生の中より得來ると、嗟、後の良知を學ぶもの、
 九死、一生、果して何んかある、果して何んかある、

此れによりて其思想の一斑を知るべし、

澤瀉の友人に栗栖天山てふものあり、亦王學を奉ず、天山名は靖、字は
 子共、平次郎と稱す、澤瀉と共に罪を得て南島に謫せらる、天山時を憤
 りて自ら禁ずること能はず、南島を脱して歸り、所思を同志に訴へ、屠
 腹して死す、時に年二十有八、衆其勇決に感ずといふ、

第十二章 眞木保臣、鍋島閑叟等

陽明學派中學說若くは事功の觀るべきものは略、擧げて之れを論ぜり、然れども未だ盡くせりといふにはあらず、尙ほ左に二三の看過すべからざるものを擧げて、缺漏を補はん、

眞木保臣は和泉と稱し、紫灘と號す、筑後の人にして目覺しき事蹟多し、靖獻事蹟卷下並に維新史料第二編に詳なり、權藤高良氏又眞木和泉が傳を作る、偉人史叢中であり、和泉本と會澤正志に學びたるものなれども、後、自ら陽明學を修め、子孫の爲めに何傷録一篇を著はせり、其他著はす所紫灘遺稿二卷あり、

鍋島閑叟公は佐賀の藩主にして、卓見の聞えあり、嘗て陽明學を喜び、陽明を萬世の英雄と稱せり、詩あり、云く、

堂々大路久荆榛、天以蒼生付此身、腰下空橫三尺劍、胸間纔蓄一團春、千
年學術推元晦、萬世英雄見守仁、塞々小窓底、焚香默坐養精神、

其陽明を推尊すること至れりといふべし、偶、公の侍臣永山、二水も亦熱心に陽明を尸祝せしを以て、藩の學問大に陽明學に傾き、朱子學將に廢せられんとするに至れり、是を以て草塲珮川一篇の諫草を公に呈して其事の非なるを論ぜり、藩の學問之れが爲めに變更なきを得たり、廣瀬淡窓、草塲珮川を訪ふ詩に云く、諫草成時、殘月落、講筵、回處、夕陽空、と、其諫草は、即ち珮川が閑叟公に呈せしものなりといふ、

雲井龍雄は東北の一奇士なり、悲壯淋漓詩を作りて其の情を述ぶ、維新後、竊に幕府を恢復せんと企圖し、事敗れて執へられ、小塚原に刑せらる、時に年二十有七、事は雲井龍雄全集に詳なり、中村忠誠氏又雲井龍雄が傳を作る、舊幕府第二卷第九號に見ゆ、龍雄本と安井息軒に學ぶと雖も、陽明の學を尊奉せり、人見寧が撰に係る龍雄の碑文に云く、

居る常に力學、夜に方りて書を読み、眠りを思ふ、或は冷水を以て、面に澀ぎ、或は辛味を含んで、以て之れを驅る、猶ほ尙ほ堪へず、乃ち一木棍を製し、自ら頭上を連環し、殆んど滿頭瘤を生ずるに至る、嘗て左氏傳

を讀み、一夕にして竟はる其勳、此の如し、後博く群書を總べ、最も王氏の學に通ず、君人となり、矮身、廣額、婦人の如くにして、天資沈毅、個儻大志あり、云云、

亦以て其尋常人ならざるを想見すべきなり、偶、五十名家語録を見るに、谷隈山氏雲井龍雄を評して曰く、

雲井龍雄は左程の人物にあらず、猶ほ今日の壯士の頭、の如かりき、其大看板を掲げて、金を強請り歩きたる、工合など、酷だ、肖たりと謂ふべし、只東北には近時人材の出でざりしが、爲め推稱して以て傳ふるに至りたるならん、

氏の評は酷に失す、今の壯士の首領、豈に彼れが如き氣象あらんや、豈に彼れが如き詩才あらんや、

島義勇は佐賀の人、明治七年江藤新平と亂をなして罪に伏す、彼れ深く陽明學を好み、蒼海閑話に云く、

島と兄とは従兄弟である、さうして同年である、島は少々違つて陽明

學を喜んで居られた云云、島と云ふ男もなか／＼えらいところの、ある人で、矢張天然にあれだけの信用で朝廷にも用ひられた、勉強家で、勤勉と云ふ性質で、強ち才の缺けて居ると云ふ方でもないさうして、陽明學で、一種の決斷を好まるゝで、そこで元とからあの人は佐賀で暴動する積りでも何でもないけれども、人を助けるといふ積りか、人から請求されたか、其決斷が早過ぎる事を能く苦慮せぬ中に、決斷が現はるゝ、大鹽平八郎等も同様である云云、其島が陽明學家であつたに依つて、其舍弟重松元右衛門、副島權介、是等も矢張陽明學をされたさうして、同じ佐賀騒動の禍に係られた、

果して然らば、島も亦陽明學によりて心膽を鍛鍊せる一人物なりしこと疑なきなり、

明治三十二年一月を以て歿せる海舟勝安房の如きも、頗る王學に近、似せる、觀念を有したり、彼れ少壯の時、島田見山の門に入りて劍術を學べしことあり、見山夙に禪學を修め、其妙味を解す、因りて彼れに勧めて之

を學ばしむ彼れ乃ち牛島の廣徳寺に至りて禪學を修めたりといふ其禪學を修めたる結果なりや否やを知らずと雖も、兎に角方寸の工夫によりて一身の操縱をなししこと、王學者に異なる所なきなり、嘗て處世の要を論して曰く、

此心をして湛然止水の如く、瑩然明鏡の如くならしめば、所謂物來たりて順應したとへ、萬變に酬酢すと雖も、天機靈活入るとして自得せざるは無けん、

是れ其胸中の消息を洩すものなり、又曰く、

世間の人は動もすると、芳を千載に遺すとか、臭を萬世に流すとかいつて、それを出處進退の標準にするが、そんなけちな了見で、何が出来るものか、男子世に處するたゞ正心誠意を以て現在に應ずるだけの事さ、あてにもならない、後世の歴史が、狂といはうが、賊といはうが、そんな事は構ふものか、要するに處世の秘訣は、誠の一字だ。

其所謂誠は王學者より之を言へば、良知に外ならず、又王陽明を論して

曰く、

王陽明は孟子以來の大賢だ、致良知の説や知行合一の論が哲學界に一種の異彩を放ちたのは勿論の事として、詩書などの末技に於ても獨特の妙があるのみならず、その文章は唐宋八家以外に、おのづから一旗幟を翻して居る、

海舟が如何ほどまで姚江の感化を受けしやを知らずと雖も、其心術性行頗る王學者に類似せるものあり、吾人が彼れを此に附記するもの、其故なきにあらざるを知るべきなり、海舟の見解は氷川清話全續篇及び續々篇に見え、事蹟は勝海舟勝海舟翁勝伯昔日譚等に見え、又詩文歌の如きは載せて海舟遺稿にあり、



結 論

陽明學は一たび中江藤樹によりて唱道せられてより、其命脈縷々として絶えず、其間或は官府の壓抑を受けたりと雖も、人物を出だせる一點に於ては、反りて朱子學に優れるものあり、如何なる種類の人物が陽明學によりて陶冶せられたるかは、上來叙述する所によりて明かなり、唯、其主要なる學者のみを擧ぐるも、二十有餘人に下ならず、而して一人として學問若くは事功を以て世に顯はれざるものはあらず、是を以て之れが史的研究は、決して其勞に酬ゆるものなしとせざるなり、但、尙ほ吾人の看過せしものありとせば、是れを遺憾となすのみ、然れども恐くば之れあざらん、三島中洲嘗て學士會院に於て、仁齋學の話をなし、仁齋學は陽明の氣學に淵源すといひて、恰も仁齋を陽明學派の人の如くに論ぜり、學士會院雜誌第十八編之八を見よ、然れども是れ謬見に屬す、天地を一元氣とするは、漢以來の事にて、仁齋之れを唱道したりとて、必ず

し、陽明に本づく、と謂ふを得ざればなり、况んや仁齋は陽明を非とするをや、彼れ論じて曰く、

王陽明亦以見聞學知爲意見、以良知良能爲眞知、其以良知爲眞知、似矣。然以見聞學知爲意見者、亦猶佛氏之見也。(古學先生文集卷之五)

以て其立脚地の那邊にあるかを知るべきなり、

或は朱舜水を以て陽明學派の人の如くに言ふものあれども、是れ亦甚だ疑はし、舜水が安東省菴に向ひて我無他長、只一誠而已矣といひたるは、稍致眞知の説に似たるも、未だ必ずしも然りといふを得ず、誠を致すは、本と中庸に出づればなり、且つ彼れ分明に陽明の病處をも指摘せり、いかんぞ以て陽明派の人とするを得んや、藤田幽谷及び其子東湖の如きは、いづれも菴山を追慕し、多少菴山に得る所多かりしが如し、幽谷嘗て熊澤伯繼傳を作りて其人材を稱揚せり、東湖に就いては小補評して曰く、其人辯舌爽に議論甚だ密、學意は熊澤菴山、湯淺常山、杯にて、程、朱流の究理を嫌ひ、専ら事實に心懸けたる様子なりと、藤田父子の學風、以て

知るべし、然れども直に以て陽明學派中に列するは大早計なり、寧ろ水戸學派の人として論ずるを妥當なりとす、尙ほ頼山陽に就いて一言辯じ置かん、彼れ嘗て王陽明集を讀むの詩を作る、云く、

爲儒爲佛姑休論、吾喜文章多古聲、北地粗豪歷城險、盡輸講學老陽明、
然るに又朱晦庵の畫像に題して、云く、

韓岳驅馳虎嘯風、四書獨費畢生力、一張萬古科場發、絲數英雄墮此中、
彼れ頗る朱子を貶して陽明を稱せり、然れども單に文章家として之れを喜ぶといふに過ぎず、毫も其學のいかに關せず、嘗て中齋と交はり
を結べるも、王學の爲めに此に出でしにあらざるなり、其他貝原益軒の如き、二山義長の如き、大塚退野の如き、松崎伯圭の如き、古賀精里及び大橋訥庵の如き、皆初め姚江に尸祝し、後紫陽に歸せり、又岡田竹庵の如きも、初め姚江の學を喜び、後一變して佛門に歸せり、故に是等は皆陽明學派中に列するを得ざるなり、

陽明學は其本を言へば、明の陽明に出づと雖も、一たび日本に入りてよ

り忽ち日本化し、自ら日本的の性質を帯ぶるに至れり、若し其顯著なる事實を擧ぐれば、神道と合一するの傾向あり、擴充して之れを言へば、國家的精神を本とするの趨勢あり、藤樹已に此徵候を現はし、蕃山の如きは、學は儒をも學次佛をも學次理ゆたかに心廣くなりて、かりかされざるの吾神道を立つべきなりといひて、大に神道の根據たるべきを主張せり、大鹽中齋も亦深く伊勢の大廟を崇敬し、亂をなし、時靡に、天照皇太神宮と記せり、奥宮慥齋が神道と王學との一致を期せるが如き、亦吾人の注意を要する所なり、之れを要するに、陽明學が日本化せるは疑ふべからざる事實なり、神道と合一する傾向の如きは、唯、其顯著なる一徵候に過ぎざるなり、日本の陽明學は、其神道との關係を外にするも、自ら日本的趣味あること否定すべからず、蓋し日本人は、性單純を喜ぶ、然るに學としては、陽明學より單純なるはなし、易簡直截といふもの、尙に當れり、是を以て日本人の陽明學に接するや、其性其物と適合し、此れを以て彼れを迎へ、彼れを以て此れに容れ、相互融會して、一となり、突々たる

活氣を内に蓄へ、事あるに當りては發して電光の如く衆目を眩するに足るものあるなり、若し夫れ日本陽明派の人物を一瞥せば、思半に過ぎるものあらん、支那にありても陽明派の人往々奇節を顯はせり、然れども日本の陽明派は實に活潑なる事蹟を成し、赫奕たる痕迹を留め、その陽明派に優ることを遠しとなす、是を以て日本陽明派の史的、研究的、趣味少しとせざるなり、但、陽明派の人著書多からず、而して理論亦乏し、故に哲學として之れを觀れば、餘りに寡少に餘りに淺疎なるものなり、然れども其實行に資すべき者の多きは斷乎として疑ふべからず、陽明派の人論著甚だ少きも、彼等の行狀は著書に代はるべきもの、而して著宗よりも反りて人に教ふることを多しとす、知行一致が、彼等の主義なるが如く、彼等は其知る所を實行せり、故に彼等の行狀は、彼等の知る所を發現するものにて、實に彼等の論著を代表するに足るものなり、是故に、彼等の行狀は十分學者の研究を價するに足るなり、

然れども王學亦弊なしとせず、王學は主觀的に偏し、易し、主觀的に偏す

るが故に客觀的事實を輕侮し、動もすれば輒ち感情に驅られて、身を
 誤まるものあり、其故いかん。道德は主觀的には圓滿の境界に達し得べ
 きものなり、是故に王學者は、良知の工夫によりて主觀的に圓滿なる
 道德を實現せんことを期し、單に此一途に奔趨せり、是故に主觀的に之
 れを言へば、實に優美なるものあり、藤樹の如きは言ふまでもなく、執齋
 と雖も、東里と雖も、其心境の淨潔にして、純粹なる中々に侮るべからざ
 るものあり、其他の王學者と雖も、文明の智識に於ては侮り得べきも、唯
 其心徳の一點に於ては、永く後人の尊敬を受くるに足るものあり、然れ
 ども、道德は單に主觀的にのみ完全を求むべきにあらず、又客觀的に完
 全ならざるべからず、客觀的に完全ならんと欲せば、客觀的智識を開發
 するに若くはなし、凡そ客觀的智識は、皆吾人に、吾人が如何に境遇若く
 は時勢に應じて身を處すべきやを、教ふるものなり、而して其主觀的の道
 徳をして進歩せしむるもの亦客觀的智識に外ならざるなり、主觀的に
 は善なりとするも、其善を行爲に實現するには、其境遇と時勢とを知ら

ざるべからず然るに境遇と時勢とは變じて止まざるものなり是故に客觀的智識を要す客觀的智識によりて其善を實現する方、法を改良するを得是を以て道徳も進歩せざるを得ざるなり是故に道徳を實行せんには主觀的の工夫と客觀的の智識と併有せざるべからず即ち心法と學術と兩者を要す苟も其一を缺かば是れ烏の偏翼を失ふに異ならざるなり然るに王學者は主觀的の一方に偏す故に客觀的智識を拒絕し道徳をして進歩せしむる所以を知らず吾人の王學に於て到底左袒すること能はざるもの此にありて存するなり

然りと雖も短處の存する處即ち長處の存する處王學者が客觀的智識を求めずして主觀的の一方に偏するは非なりと雖も是れ亦其決心をなすに適切なる所以なり彼等主觀的に我れ我心胸を願れば一點の汚染なし我れ正道を蹈み正義に由れり我れ何をか畏れん我れ一切の不善を排し不義を斥けて我道徳を實行せんのみと此の如く思惟して決心するなり是を以て時に境遇と時勢とを顧みずして拔山鬪海の舉に

出づることなしとせず、濫井、太室曰く「信而守之、行而勿違、莫過于陽明
 家、關、齋、次之、徂、徠、次之、倚、而不、憾、排、而不、校、者、唯、羅、山、之、徒、乎、讀、書、會、意、卷、中
 と、陽明派の實行に於て他の學派に優る者あるは事實なり、今や倫理學
 の研究、漸く興らんとす、然れども倫理の説たる、或は利己といひ、或は利
 他といひ、或は利用といひ、或は完成といひ、交互錯雜して毫も一定せず、
 後生愈々學んで愈々迷ふの感なしとせず、是を以て倫理學に深しと稱する
 者も得道の一點に於ては古人に對して懸然たらざるを得ざる者あり、
 此の如くなれば學理の研究を要すると同時に心徳の鍊磨を要せずん
 ばならず、然るに心徳の鍊磨といふ事に關しては、王學も亦豈に後生に
 裨補なしとせんや、王學は禪の儒教と合一して胚胎せるものにて、禪と
 同じく東洋に特異なる一種の心法なり、此の如きの心法は柔道と相類
 す、柔道は腕力に應用せる心法なり、心法は精神界に於ける柔道なり、柔
 道は西洋になし、心法も亦西洋になし、全く西洋になしといふべからざ
 るも、兎に角我邦に於けるが如き心法はなしといふを得べし、西洋の倫

理は心徳の鍊磨を主とするものにあらずして知的探求を主とするものなり、換言すれば知的探求によりて道徳主義を確定し而して後實行せんとするものなり、此兩者は合一すべく、偏廢すべきにあざるなり、若し此兩者を合一せば、東洋道徳の長處を打ちて一塊となし、古今未曾有の偉大なる道徳を實現するを得べきなり、思ふに西洋の文明は、其初め、東洋より輸入せらる、而して其文明は漸次に蔓延して遂に米國に及び、米國を横切りて、其西岸に出で、遂に我邦と相接觸し、來たり、是に於てか、恰も電氣の消極と積極と相接觸するが如く、東洋の道徳俄然衝突の狀を呈す、蓋し將來の道徳を胚胎せんとする徵候に過ぎざるなり、

日本陽明學派之哲學終

人○生○不○滿○百○歲○豈○可○放○蕩○曠○日○而
不○惜○空○過○斯○生○耶○古○人○曰○天○地○有
萬○古○此○身○不○再○得○人○生○只○百○年○此
日○最○易○過○幸○生○其○間○者○不○可○不○知
有○生○之○樂○又○不○可○不○懷○虛○生○之○憂
此○言○可○時○省○

貝原益軒

附錄一

陽明學派系統

●● 中江 藤樹

中江 常省 | 岡田 季 誠(編辭藤樹全書)

熊澤 蕃山 | 大 江 勢 直 幹 俊 光

泉 仲 愛

中川 謙 叔

中村 叔 貫

加世 季 弘

清水 季 格(著集義和書顯非駿番山說)

●● 北島 雪山 | 細井 廣澤

●● 三輪 執齋 | 川田 雄 琴(又學于梁田說)

●● 中根 東里

附錄一

三宅 石庵 — 三宅 春樓

中井 贊庵 — 中井 竹山 (程朱學)
富永 仲基 (破儒)

佐藤 一齋

佐久間 象山 — 吉田 松陰

河田 藻海 — 小林 寒翠

池田 草庵 — 加藤 弘之 (唯進化論)

與宮 體齋

竹村 悔齋 — 高杉 東行

山田 方谷 — 三島 中洲

大橋 訥庵 (初學王學後歸朱子)

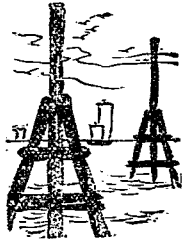
吉村 秋陽 — 吉村 斐山

東 澤瀉 (文學子秋陽)

中島 操存齋

〓 大 鹽 中 齋 〓
 ├ 宇 津 木 靜 區
 └ 林 良 齋
 〓 春 日 潛 庵 〓
 └ 末 廣 鐵 瀨
 〓 梁 川 星 巖 〓

└ 柳 澤 芝 陵





附錄二

陽明學派生卒年表 (西曆による)

中江藤樹	生	一六〇八	卒	一六七八
熊澤蕃山		一六一九		一六九一
北島雪山		一六三七		一六九七
三重松庵		?		?
中江常省		一六四六		一七〇九
細井廣澤		一六五八		一七三五
三宅石庵		一六六五		一七三〇
三輪執齋		一六六九		一七四四
川田雄琴		?		?
中根東里		一六九四		一七六五

林	子平	一七三二	一七九三
佐藤	一齋	一七七二	一八五九
竹村	悔齋	?	一八二九
梁川	星巖	一七八九	一八五八
大鹽	中齋	一七九四	一八三七
吉村	秋陽	一七九七	一八六六
山田	方谷	一八〇五	一八七七
宇津木	靜區	一八〇九	一八三七
横井	小楠	一八〇九	一八六九
奥宮	慥齋	一八一	一八八二
佐久間	象山	一八一	一八六四
眞木	保臣	一八一	一八六四
春日	潜庵	一八一	一八七八
池田	草庵	一八一	一八七八

林 頁齋	?	一八四九
鍋島 閑叟	一八一四	一八七一
吉村 斐山	一八一二	一八八二
柳澤 芝陵	一八一六	一八四五
中島 操存齋	一八二二	一八六四
金子 得所	一八二三	一八六六
西鄉 南洲	一八二六	一八七七
河井 繼之助	一八二七	一八六四
吉田 松陰	一八三〇	一八五九
高杉 東行	?	一八六七
東 澤瀉	一八三二	一八九一
雲井 龍雄	一八四四	一八七〇





補正

三一頁

翁問答五卷[△]とあり、然れども慶安年間の刊行本今尙ほ世に存す、上下二卷、各分ちて本末二卷となす、故に合して四卷あり、然れども此書得やすからず、廣く坊間に流布するものは、天保二年の刊行本にして、凡そ五卷あり、藤樹全書にも此書を收載せり、

二三〇頁

蕃山を以て陽明學派に屬すとせり、然るに古賀精里の讀熊澤了介傳の文を見るに云く、問其學則非朱非陸、非王非禪、自成一家、精里初集抄卷二ど、是れ未だ蕃山の學を究め得たる者の言にあらず、蕃山本と一家の學ある者にあらず、曾て江西書院に學び得たる陽明學の外、唯事功上多少獨得の見解あるに過ぎざるなり、

二四九頁

熊澤了介先生事跡考を擧ぐ、此書は内藤恥叟氏の日本文庫第一編に收

載せり、清水氏は備前の人、臥遊老樵と號す、文化十一年武元君立始めて此書を上木せり、

二五二頁

蕃山關係書類の末に尙ほ左の書類を増補せん、

明良洪範「卷之七」眞田増興述

江戸文學志畧内藤耻叟著

蕃山仁齋は陽明學に非ず吉田東伍〇世界之日本第六號にあり

熊澤蕃山と其著書幸田成文〇世界之日本第十一號にあり

二五九頁

三重松菴が事、多く史傳に見えず、但、紹述先生文集「卷之十四」に三重松菴墓誌あり、云く、延寶二年三月五日生、享保十九年六月十二日没、生卒皆在甲寅歲、翁夙好學、初信新建王氏之旨、後兼從先子學、枕籍經傳、志存古道、旁及百氏、探其根與、不貪榮利、泊如也、求之于今世、亦不多見之人也、以て其人となりを知るべきなり、

三六九頁

初學課業次第を擧ぐ、此書天保三年を以て印行する所に係る、木の活字本なり、内藤恥叟氏又之れを日本文庫第二編中に收載せり、

五二二頁

中齋關係書類中尙ほ咬菜秘記を加へん、此書は安藤太郎氏の秘本にして、氏の父が坂本銚之助より聞いて筆記せしものなり、舊幕府第九號以下に見ゆ、木村芥舟の笑鷗樓筆談も亦舊幕府第九號以下に收載せり、

五五一頁

河井繼之助を附載す、近頃今泉鐸次郎氏其傳記を作り、題して、河井繼之助といふ、新潟東北日報社の發行に係る、

五九〇頁

古本大學略解は明治五年を以て之れを發行し、已に單行本として世に行はる、

六一二頁

松陰關係書類の中に殉難録稿〔卷之四〕を加へん、高杉東行の事蹟、亦殉難録稿〔卷之十三〕に詳なり、

六一七頁

眞木和泉の事蹟、亦殉難録稿〔卷之二十五〕に見ゆ、

六三七頁

三重松菴の生卒の年を擧げず、今、紹述先生文集〔卷之十四〕によりて之れを考ふるに、生は一六七〇卒は一七三四。

井上異軒著述目錄

異軒論文初集

一冊 定價四十五錢

目次―歴史哲學に關する余が見解―日本民族思潮の傾向―老子の學の淵源―日本文學の過去及び將來―新體詩論―國字改良論―宗教の將來に關する意見

同一集

目次―利己主義と功利主義とを論ず―獨立自尊主義の道德を論ず―武士道を論じ、併て「瘠我慢説」に及ぶ―認識と實在との關係―小品五篇

增訂勅語衍義第二十七版

一冊 定價四十錢

教育と宗教の衝突第三版

一冊 定價三十錢

菅公小傳再版

一冊 定價三十五錢

目次―叙論―菅公の祖先―菅公の時代―菅公の事蹟―菅公の夫人及び子孫―菅公の著述―文藻―學問及び技藝―史的評論―菅公關

係書類

異軒詩鈔

二冊 定價四十錢

釋迦種族論

一冊 定價四十錢

日本陽明學派之哲學三版

一冊 定價壹圓四十錢

目次—敘論—中江藤樹—熊澤蕃山—北島雪山—三重松菴—三宅石

庵—三輪執齋—川田雄琴—中根東里—林子平—佐藤一齋—梁川星

巖—大鹽中齋—宇津木靜區—林良齋—吉村秋陽—山田方谷—橫井

小楠—奧宮愷齋—佐久間象山—春日潛庵—池田草庵—柳澤芝陵—

西鄉南洲—吉田松陰—東澤瀉—真木保臣—鍋島閑叟等—結論—附

錄—陽明學派系統—附錄二陽明學派生卒年表

合著書類目錄

哲學字彙

一冊 定價壹圓

倫理教科書

五冊 定價壹圓卅錢

編輯書類目錄

哲學叢書

第一卷第一集

目次―緒言(文學博士井上哲次郎)―倫理法の必然的基礎(文學士吉田熊次)―實行倫理と宗教(文學士紀平正美)―哲學評論(文學博士井上哲次郎)―新刊批評(同上)

第一卷第二集

目次―認識と實在との關係(文學博士井上哲次郎)―ロツテュの哲學(文學士西晋一郎)―哲學評論(文學博士井上哲次郎)―同上(文學士野田義夫)新刊批評(同上)

第一卷第二集

目次―哲學の科學及び宗教に對する關係(文學士虎石惠實)―認識と實踐、實在觀念と理想觀念(文學士森内政昌)―二程子の哲學(文學

土宇野哲人―哲學評論文學博士井上哲次郎―同上文學士野田義夫―新刊批評文學博士井上哲次郎

關係書類目錄

井上博士講論集第一編 佐村八郎編纂 定價二十錢

目次―人種言語及宗教等の比較に依りて日本人の位置を論ず―東西文化の差異を論ず

同第二編同上 定價二十錢

目次―歐洲哲學の近況―王陽明の學を論ず―大鹽平八郎の哲學を論ず―文學と教育の關係―國民英學會に於て―教育上に於ける迷信の害

勅語衍義考證 三石寅吉編次 定價三十錢

明治三十三年十月十日印刷
 明治三十三年十月十三日發行
 明治三十三年十二月廿九日再版
 明治三十四年四月十五日三版

〔聯明學派之哲學與附一〕

定價 金壹圓六拾錢

著述者 井上哲次

東京市神田區裏神保町九番地



發行者 合資會社 富山房

合資會社富山房社長

代表者 坂本嘉治 馬

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷者 青木弘

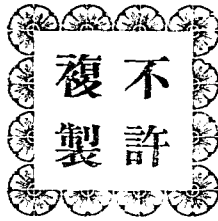
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所 株式會社 秀英 舍

發兌書肆

合資會社 富山房

電話「特」本局一〇三六番 電報略號(ヤマフ)



不許複製

